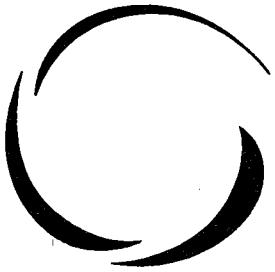
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

宝珠山 昇
オーラルヒストリー

元防衛施設庁長官

〈上巻〉



GRIPS

政策研究院

政策研究大学院大学

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

宝珠山 昇 オーラルヒストリー 上巻

目次

第1回

故郷・大分県の山村の思い出……7
早稲田大学時代の思い出……12
公務員試験を受験……16
入省面接での私学出身の悲哀……19
防衛庁初の私大卒採用……23
初仕事は、「省昇格」法案……25
防衛庁入庁後のくらしぶり……29
人事第一課で「人事ピラミッド」について勉強……30
経済企画庁へ出向……33

第2回

防衛局計画官付に異動……43
内局と幕僚監部……45
海原治氏に対する庁内の評判……49
防衛庁部員の心得……51
「FX」は長期の商権争い……54
官房長を離任してからの海原氏……55
防衛庁部員に昇格……56
現場視察の思い出——九十日間の遠洋航海……57
計画官付時代に過去の資料をフォロー……60
オペレーションズ・リサーチの担当で学んだこと……61
「統合作戦能力の検討作業」に着手……66

第3回

OR研究についての補足説明……78
「陸上所要防衛力の一試算」……82
久保氏の「基盤的防衛力構想」と制服組の反応……87
「基盤的防衛力構想」への海・空の反応……89
四次防「防衛課概案」と沖縄返還……92
四次防策定における中曽根長官の影響……97
中曽根長官の評価……99
PPBS米国出張とその成果……101

第 4 回
人事第一課――幹部自衛官の人事……108
四次防と人事一課の関わり……114
人事局での上司、同僚……116
四次防成立までの経緯とその感想……117
四次防凍結と契約問題……119
「TCR」を担当……124
東京螺子事件……127
装備局航空機課……128
装備品の契約方法……129
直接関わらなかった第一回『防衛白書』……132
三島事件……133
ニクソン・ショック……134
空中給油装置問題……135

第 5 回
防衛局防衛課時代――ポスト四次防を担当……143
長期計画立案のためのN研究会……146
N研の成果物・四次防以後の主要問題を整理……148
「シーレーン秘密協定」問題……149
「防衛を考える会」……150
ポスト四次防の策定過程……151
大臣室の「フリートーキング」……155
「防衛計画の大綱」の策定……160
これまでの防衛構想との比較とその資料説明……163
政治の責任を強調……167

第 6 回
「防衛計画の大綱」(続)……176
坂田長官時代の『防衛白書』……179
「防衛計画の大綱」と予算……180
防衛費一%枠了解の背景……184
「大綱」の防衛局試案……188
防衛局案の「随時見直し条項」……191
総合的な危機管理への対応……192
日米防衛協力小委員会……196
兵力の算定などにORを積極活用……197
「久保発言」、「ミグ25」問題等……197
在韓米軍撤退問題と「大綱」との関係……199
「大綱」決定後の主要テーマ……201

宝珠山 昇　略歴

年		月	略歴
1937	昭和12	1月	大分県下毛郡山国町にて出生
1959	34	3月	大分県立中津東高等学校卒業
1959	34	4月	早稲田大学政治経済学部経済学科入学
1963	38	3月	早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
1963	38	4月	防衛庁長官官房総務課
1963	38	4月	防衛庁法制調査官付（兼）長官官房総務課
1964	39	5月	防衛庁人事局人事第1課
1965	40	4月	防衛庁人事局人事第1課（兼）人事局第2課
1965	40	9月	経済企画庁経済研究所国民所得部国民支出課
1967	42	11月	防衛庁防衛局計画官付（防衛庁事務官）
1968	43	4月	防衛庁部員
1968	43	6月	防衛庁防衛局防衛課
1969	44	4月	（兼）経理局会計課
1970	45	2月	（併）大蔵省主計局付
1970	45	4月	（解）経理局会計課、大蔵省主計局付
1970	45	4月	防衛庁人事教育局人事第1課
1972	47	7月	防衛庁装備局航空機課
1974	49	6月	防衛庁防衛局防衛課
1978	53	4月	防衛庁防衛局計画官付システム分析室長（兼）防衛局防衛課
1978	53	6月	防衛庁調達実施本部契約第4課長
1979	54	11月	防衛庁防衛局調査第2課長
1980	55	12月	防衛庁防衛局調査第2課長（兼）内閣官房内閣審議官
1981	56	2月	防衛庁防衛局計画官
1983	58	7月	防衛庁人事教育局人事第3課長
1983	58	7月	（解）内閣官房内閣審議官
1984	59	7月	防衛庁人事局人事第3課長
1985	60	1月	防衛庁防衛局防衛課長（併）国防会議事務局参事官
1986	61	6月	（兼）防衛研究所企画室長
1986	61	6月	（解）国防会議事務局参事官
1986	61	7月	（併）内閣審議官（内閣官房内閣安全保障室）
1987	62	6月	長官官房防衛審議官（兼）防衛局防衛課長
1987	62	10月	（解）防衛局防衛課長、（解）防衛研究所企画室長、（解）内閣審議官
1990	平成2	7月	防衛庁参事官
1991	3	3月	（併）内閣審議官（内閣官房内閣安全保障室）
1991	3	10月	（解）内閣官房内閣安全保障室、防衛庁経理局長
1993	5	6月	防衛庁長官官房長
1994	6	7月	防衛施設庁長官
1995	7	8月	防衛施設庁長官辞職

出典：本オーラルヒストリーより作成

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第１回

開催日　2004年2月19日（木）
開始時刻　14：00
終了時刻　16：15
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（政策研究大学院大学 元助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

■故郷・大分県の山村の思い出

伊藤　きょうは、お若いときのお話を伺って、防衛庁にお入りになった時代までいければいいなと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

　先生は、昭和十二年に大分県のお生まれだということですが、大分県のどちらですか。

宝珠山　どういったらわかりますでしょうか、耶馬渓の奥のほうなんですが。

伊藤　郡でいいますと？

宝珠山　いまは、（下毛郡）山国町といっております。

伊藤　じゃ、本当に農村ですか。

宝珠山　農村です。農村というよりも、山奥の農村です。

伊藤　山村ですか。

宝珠山　山村です。

伊藤　おうちは、そこの有力な家ですか。

宝珠山　有力であるかどうかは別にしまして、私が生まれて五歳のちょっと前に親父を亡くしまして、旧民法による家督相続を受けました（笑）。

伊藤　やっぱり女戸主ではなくて？

宝珠山　それはないんだと思いますね。長男でもありましたから、当然なんでしょうが。

伊藤　じゃ、ずいぶん早くから戸主になっておられたわけですね。

宝珠山　そうなんです。小作を何軒か抱えておりますので、いまになって思い出すんですが、非常に大事に育てられたという記憶はございます。

伊藤　地主さんのボンボンなんだ（笑）。

宝珠山　いやいや。

伊藤　早稲田にお入りになるまでは、どういうことなんですか。

宝珠山　若干長くなりますが、いま申しあげたように古い農村の長男に生まれて、親父が早く死んだために家督相続で戸主になるということもあったのだと思いますが、小学校に入り……。

伊藤　当時は町ですか、村ですか。

宝珠山　当時は合併前でしたから、槻木（つきのき）という村でした。小さな、同級生が三十何人かですね。

伊藤　村立小学校。

宝珠山　そうです、そうです。ただ、そのときの名前が小学校であったかどうか、尋常何とか小学校とついていたかも。

伊藤　じゃ、尋常小学校ですよ。

宝珠山　そんなのが、看板に難しい字で書かれていたのを記憶しております。

伊藤　当時は、尋常小学校から尋常高等小学校か、高等小学校だったんです。

宝珠山　尋常高等小学校の高等部に先輩が行っていたというのは……。

伊藤　じゃ、やっぱり尋常高等小学校ですよ。高等科があれば、尋常高等小学校。

宝珠山　ありまして、そこに入りました。

伊藤　当時は、小学校六年生で高等科二年。

宝珠山　そうだと思います。芋畑がありましたよ。運動場がもう芋畑になっておりましたね。

伊藤　それは、何でですか。

宝珠山　戦争のためでしょうね。それから、銃剣道をやっていたのを覚えています。高等科の生徒ですか、学生ですか。

伊藤　生徒ですよ、あれは。

宝珠山　そんなのは記憶しております。

伊藤　小学校は、そこでずっと？

宝珠山　はい、それで私は十歳前後のときに大病を患いまして、いま聞きますと腎臓のようなんですが、死にかけていたようですけど奇蹟的に、助かりましたね。戦後の、若干食糧事情の悪い……食糧事情が悪いといっても、農家ですから食べ物に苦労することはなかったように思っております。けっこう贅沢にというか、普通に生活できていたんですが、なにせ医者といっても薬もないぐらいの時代じゃないでしょうか。とにかく三年生から四年生の間、一年近くブランクがありますね。

伊藤　それは、入院ですか。

宝珠山　入院するような医者はないんですね。

伊藤　自宅療養？

宝珠山　診療所も……。

伊藤　いや、診療所は多分、入院できないですね。

宝珠山　そうなんです。薬をもらっていたようには思っていますけれども。

伊藤　よく治りましたね。

宝珠山　そうなんですよね、いま考えますと。

伊藤　いま、影響していません？

宝珠山　防衛庁に入るときにも、試験官というか医者に行って話しましたけど、「もう大丈夫ですね」といわれて、合格になりましたからね。

伊藤　よかったですねえ（笑）。

宝珠山　もちろん、何十年とたった後ではありますけれども。

伊藤　別段、それで学年が遅れたわけではないんですか。

宝珠山　あとから受持ちの先生に聞いたら、どうしようかと迷ったらしいですけれども、「宝珠山なら、ついていけるだろう」ということで、そのまま同級生と上がっていきましたけどね。しかし、数学などで分数か仮分数のあたりはやってないんですよね。

佐道　空白があるわけですね。

宝珠山　空白が完全にあるんですね。そんなのを思い出します。それでも順調にいきまして……。

伊藤　そうすると、小学校のときに終戦ですよね。

宝珠山　そうです、小学校二年じゃないでしょうか。十八年に入っていますから。

佐道　十二年のお生まれということは、戦争が始まったときのご記憶は？

宝珠山　それは、ありませんね。

伊藤　そんなものない。それは無理だよ（笑）。

宝珠山　それ以前の記憶というのは、親父が死んで、お棺に入れる前に寝せられていますね。そこで騒いでいたのは覚えていますよ。寝ているだけの感じなんですね、四歳か五歳ぐらいですから。あとで聞いたら、周辺が「あのとき、騒ぎやがって」とかいっていますけれども、しかし子どもとしてはしようがないです。死というものがわからないから。

伊藤　当時、その山村ではもちろん電気はあった？

宝珠山　私のところは、電気は来ていませんでした。

伊藤　じゃ、ランプ？

宝珠山　ランプです。私が中学の終わり頃に、電気が来たぐらいですね。

伊藤　そうすると、相当山奥なんですね。

宝珠山　そうです。

伊藤　小学校を出たら、だいたいどうするんですか。

宝珠山　新制中学のほうにまいりました。

伊藤　それ、小学校と一緒になって新制中学？

宝珠山　一緒ではありませんが……。

伊藤　別に中学ができたんですか。

宝珠山　当時、私どものところは金山の出口か何かがありまして、そこに兵舎でわかりますか、一階建の。それを改造して新制中学

をつくっておりました。だから、広さは十分なものでありました。そこに教諭資格を持たない代用教員といっていいんですか、そういう方がお見えになりましたのをよく記憶しております。いまでも一人の先生、受け持ちの先生はいま町長をしております。この方も、お父さんが亡くなられたとかいうことで広島高師を中退されまして、英語の先生で見えました。英語の教科書は、いまでもよく覚えていますが、『ジャック・アンド・ベティ』というやつで、あれで当時、モノクロの写真ですけれどもワシントンやニューヨークだったと思いますが、刺激をされましたね。英語と数学……算数だったかな、非常に楽しく勉強しました。

伊藤　新制中学は、三年ですよね。

宝珠山　そうです。

伊藤　そこから先は、どうなさるおつもりだったんですか。

宝珠山　私の場合、若干特殊かと思うんですが、家督相続を受けているということと、田舎ということで、高等学校に行ったりして戻って来ないのは困るというのが背景に――これは後ほどわかるんですが――ありまして、先生が「おまえ、受けろ」というから受験したんですが、合格はしたんですけれども……。

伊藤　それは、どこですか。

宝珠山　中津です。

伊藤　中津が近いんですか。

宝珠山　中津が、昔は学区がありますね。学区で、しかし中津まで通学はできないんです。下宿に入る。

伊藤　寄宿舎に入るわけですね。

宝珠山　はい。そういうこともあって金もかかるわけですね。しかし、金がなかったとは思いませんけれども、やってもらえない状況に。それで担任の先生と話されたようで、条件として計理学校に一年だけ行きました。

伊藤　ちょっと待ってください。

宝珠山　高等学校に合格して、三年間の高等学校には行かせなかったんですが、一年制の私立の計理学校がありまして。

伊藤　それは、どこにあったんですか。

宝珠山　中津です。

伊藤　やっぱり中津ですか。じゃ、妥協の産物ですね（笑）。

宝珠山　そうなんですね。それで、一年……一年といっても十ヵ月かそこらだと思いますけれども。

伊藤　じゃ、経理をおやりになったわけですね。

宝珠山　そうです。大変優秀な成績だったんですよ。

伊藤　後で役に立ったんじゃないですか（笑）。

宝珠山　いやあ、役に立ったとは……。後ほどまた出てくるかもしれませんが（笑）。しかし、おもしろい先生がおられまして、それ自体は楽しい思い出でしたね。

伊藤　お母さまが考えていたのは、そこを出て、家に戻って来て百姓をやれと。

宝珠山　そう、百姓をやったんです。二年ほど。

伊藤　実際にやったんですか。

宝珠山　はい。

伊藤　へえ。百姓って、具体的には何ですか。田んぼですか、畑ですか。

宝珠山　田んぼが一町歩ぐらいと、山林があるんです。当時、山林はすごい収入源ですね、日本全体が。

伊藤　木を伐って出すわけですね。

宝珠山　はい。その後、東南アジアから入るようになりまして衰退しますが、当時はおそらくあの付近はすごくよかったと思います。九州のあのあたり、雨が結構ありますので成長がいいわけですね。

伊藤　やっぱり杉材ですか。

宝珠山　杉材です。あと、炭焼がありましたが、そちらのほうへ

は関係しませんでした。

伊藤　杉は、伐ったらまた植林するわけですか。

宝珠山　そうですね。伐ったあとの植林と、あとの「根ざらい」といっていましたけど草刈りですね。それを若干やりました。

伊藤　じゃ、本当に二年間、労働をおやりになったわけですね。

宝珠山　まあ、完全にやったわけでもないんですが。それでも諦めきれませんでしたから、通信教育を受けました。

伊藤　どこのですか。

宝珠山　大分の上野丘（高等学校）の通信教育です。

伊藤　高等学校の？

宝珠山　高等学校の。あれが、できて間もなかったと思いますがね。いま通信制になっています。定時制通信制ですか。

伊藤　そうです。

宝珠山　その、まだ通信制だけの時代でした。

伊藤　だけど、通信制はスクーリングもあるんでしょう？

宝珠山　スクーリングがあるので、大分まで行ったり、夏休みには海水浴場で一緒に、先生が同じ通信制の生徒を集めてというようなのがありましたね。しかし、全部には通えませんでしたし、高等学校のほうでセットする日程になかなか仕事の都合で合わない。したがってスクーリングもうまくいかないで、十単位か十五単位取ったですかね。

伊藤　卒業は、なさったんですか。

宝珠山　私の当初の計画では、三年で卒業できると思っていたんですが、体育から何かやってみますと、なかなか。いまでいう大検なんですけど、体育の試験を受けましたが、バスケットとか何とか幾つか選択してやらされるわけですけど、日頃練習なんかしているわけじゃないですから全然だめなんですね。

佐道　そうですよね。

宝珠山　これじゃ、とても卒業できそうにないなと。卒業できそうにないというか、高校卒業資格を取れそうにないなと思いましてね。それで、反対はあるけれども、中津に行って就職口を見つけましてね。そのときに経理が役立つんです。

伊藤　今度、本当に仕事に就いたんですか。

宝珠山　そうです。経理の仕事ですと、比較的楽ですね。経理学校の校長が地元のそういう人たちと関係がありますから、幸い私、成績がよかったものですから、行って相談したら紹介してくれた。そこで、なんとか食っていけると。

伊藤　会社？

宝珠山　会社の経理。小さいところですが、十数人いましたかね。

伊藤　何の会社ですか。

宝珠山　製材所です。

伊藤　あの辺は、林業なんですかね。

宝珠山　ええ。当時は、製材所は県会議員とか何とかいっぱい出ていました。要するに、富裕層ですか。

伊藤　山持ちはね。

宝珠山　山持ちというか、山持ちを相手にした製材ですから。

伊藤　それは山を持っている者も、儲かったでしょうしね。

宝珠山　もちろんそうです。それを製品にして、北九州とかあちこちから引き合いがあったのを記憶しております。北海道もやっていたのを覚えていますね。

佐道　後継ぎを、よく出して。

宝珠山　だから、出たんです。学費は要らんということで、経理の仕事を見つけて出たんです。

伊藤　それは、何歳ですか。

宝珠山　十八歳、みんなが高校を卒業するときです。だから、私の中学の同級生は大学受験で、浪人しているのもいましたね。

佐道　そういうのを、ご覧になっていたわけですよね。

宝珠山　すぐ隣というわけではありませんが、小さい市ですからね。

伊藤　いまのは、中津の話ですね。

宝珠山　そうです。まだ中津から出ていません。

伊藤　じゃ、それをずっとやっていようという気ではあったんですか。

宝珠山　いやいや、腹の中では大学に行く目的がありますから。

伊藤　だけど、高等学校を卒業してないとだめでしょう？

宝珠山　だめですから、経理に入りまして、夜間高校に入ったんです。

伊藤　それは、中津のですか。

宝珠山　中津に。中津に唯一、夜間高校がありましてね。しかし、それは商業課程と工業課程しかないんです。で、商業課程に入ったんです。実務のほうで経理をやりながら商業ですから、これは楽ですね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　ある部分は、先生よりも詳しいぐらいに（笑）。とにかく、そこで卒業証書だけは取らなきゃどうしようもないということで、通信教育で取った単位は活きるんです。それで短縮できるかと思ったけど、なかなかうまくいきませんでね。結局、四年間そこで過ごしました。

伊藤　じゃ、仕事をしながら？

宝珠山　そうです。最後のほうは失業保険でやりましたけどね。六ヵ月あったかな。

伊藤　それで今度、大学を目指すわけですか。

宝珠山　はい。だからといって、大学の試験に受かるかどうかというのは、これはクエスチョンですよね。大学受験の勉強を何でやったかというと、当時、旺文社というのがありまして、通信添削をやっていましたね。よく覚えているのは、『螢雪時代』か何かの、ありましたね。もっぱらそれでやりました。

伊藤　それは、中津に自分で住まいを？

宝珠山　下宿というか住まいを借りて。そんなことをやりながら卒業資格をとって、進学しようと。合格できれば進学しようと、できるかどうかわかりませんが。

伊藤　その段階では、親は？

宝珠山　もう諦めていますよ。諦めていて……説得しようがないですね。

伊藤　そうすると、家は誰か別な弟さんか何かが継いで？

宝珠山　いま弟が継いでいますが、弟も結局、大学を出て学校の教師になって、近くというか中津に家を構えて世話をするぐらいになっています。

佐道　そうすると、山林のほうはまだ持っておられるんですか。

宝珠山　残っていますね。

伊藤　残っててもいまはだめでしょう。

宝珠山　だめです。だめですけれども、食うには困らないんですよね。ただ、間伐といいますか、間引かなきゃいけないわけですけれども。

伊藤　結局、労働力が要るということですね。

宝珠山　はい、労働力。労働力がなかなか調達し難いようで。

伊藤　労賃も高いし。

宝珠山　そうなんです。労賃をかけるだけの価値がなくなっているということなんです。

伊藤　それで、いま山は荒れているんですね。

宝珠山　そうです、そうです。話がそっちに飛んじゃうと大変なんですが、いまは何百町歩か荒らされています。戦後のときに伐って、植林はしたんですけれども下刈りがうまくいかなくて、杉ですと小さいときには弱いんですかね。それで、荒れ放題になっているところが。

伊藤　そうすると、やっぱり雑木林になりますか。

宝珠山　一挙に雑木林にならないんですね。

伊藤　ならないんですか。

宝珠山　はい。すぐですとなるんですけれども、カヤってわかりますか、ススキの穂が出る。どうも、あのあたりがはびこるんですね。そうすると、他の木が根づかないんじゃないかと。これは、私の……。

伊藤　そうすると、禿げ山になっちゃうんですか。

宝珠山　禿げ山というか、草刈り場みたいなことになっている部分がかなりありますね。そこにいま、農林省か何かが道路をつくってやっていますから、こんなのは無駄だと思うんですけどね。

伊藤　本当にそうですねえ。

宝珠山　しかも、町道とかよりも立派な厚みと広さの、驚きますね（笑）。あれをやっていると赤字になりますよ。

伊藤　まあ、そうですね。あれは、農林省の仕業ですからね。

宝珠山　林野庁とね。あれは、ひどいなと思います。

伊藤　補助事業ですから。

宝珠山　話は飛びますが、そういうことで通信教育のときに読んだ中で、コネがなくてもうまくいきそうだというのが公務員試験。しかも、公平な人事だという宣伝をよく受けておりましてね。高等学校を出るときも受けました。うまく合格しまして、大学に行けるかどうかもわかりませんから就職試験にも行きました。二つかな、合格通知を受けていたんですが……。

伊藤　それは、就職のほうですか。

宝珠山　そうです。

伊藤　会社？

宝珠山　いや、会社じゃありません。公務員試験ですから。

伊藤　公務員試験ですか！　中級？

宝珠山　初級でしょう。あのとき何といったか。

伊藤　中級ぐらいじゃないですか。

宝珠山　中級じゃないです、高等学校出ですから。門司の税関と、大分の地方検察庁かな、合格したと思います。門司は確実に合格したんですが、地方検察庁に行ったときに「将来、何になりたいか」と聞かれて、「公認会計士ですかね」とかいったら怪訝な顔をしましてね。就職するといっているのにね（笑）。それは、明確に覚えています。そこから合格通知が来たかどうかわかりませんけれども、試験を受けたことだけは記憶しております。

伊藤　大学は、何で早稲田なんですか。

宝珠山　それなんですが、あれは何でだったかな……。高校時代に、商業なんていうのはあんまりおもしろくないんですよ。しかも一年専門的にやっていますから、重複の部分がありますしね。それからおもしろい先生がいて、『共産党宣言』とか、そういうのを読んでいましたよ。早稲田だったか、國學院だったかわかりませんが（出身の）先生がいて、教科とは全然別の西洋哲学史とか、いろんなのを読んだりしておりました中で……。

伊藤　いい先生がいたんですね。

宝珠山　ええ。九州大学出の先生と、東大、慶応、國學院と、東京教育大学……そういう人が何人かおられました。そういう人は、（私の）年齢も進んでいますからある意味でお兄さんぐらいの感じなんですね。他の生徒よりも上ですし。だから、私のほうが教えるようなことが結構あるわけですよ。新制大学を出て来たって、そんなにわかるわけないですからね（笑）。

伊藤　まあ、そうですね。

■ 早稲田大学時代の思い出

宝珠山　やっぱり体験のほうが貴重な部分がありますね。理解力も、体験と合わせてやっている部門は私は違うと理解しているんですが、その中で早稲田の講義録を読んだのを覚えていますよ。その頃から、早稲田というのが一つありました。

もう一つは、中津ですから福沢諭吉の慶応があるんです。どっちに行くかといったら、「おまえ、慶応を受けろ」という人はいるわけですよ、周辺には。

伊藤　多分、そうでしょうね。

宝珠山　しかし、そこには夜間部がないんです。

伊藤　夜間部に行こうと思っていたわけですね。

宝珠山　夜間部しか行けませんですよ、だって。

伊藤　もう家からの支援は期待できない。

宝珠山　それを期待したら、「帰ってこい」になっちゃいますからね。ですから、アルバイトしながら行くという覚悟ですから。早稲田にはご存じのとおり夜間部がありますので、それで受けましてね。商業学校ですから一般普通科の科目を学んでないですから。当時、国立は八科目受けなきゃいけなかったかと思うんですが、とても数科目では稼ぎきれませんので、私立学校しかなかったです。

伊藤　私立は、四科目ぐらいですか。

宝珠山　英語と国語と社会だったように思いますけどね。私、三科目で受けたんじゃないかと思うんですが。主力になる英語が配点は高いというのは承知しているんですけど、商業学校ですから英語の授業はそんなにやっていませんから、ハンディはありました。

伊藤　だって、商業英語をやるでしょう。

宝珠山　そんな英語じゃかないませんわね、受験英語は。それでも英語で、さっきいった通信添削で受けていたのと似たような問題が出たのが助かったんじゃないかと思っていますがね。若干早めに上京しまして……通信添削じゃないかもしれません。早稲田のところに予備校がありまして、そこで直前の模試を受けた中に同じ問題があったんですよね。

伊藤・佐道　エーッ。

宝珠山　同じ問題じゃない、ほぼ同じ問題ですよ。あれで助かったと思います。それでなければ、合格しなかったでしょうね。

伊藤　東京には、知り合いがあったんですか。

宝珠山　いや、ありません、ありません。とにかく出てきたんです。

伊藤　そういうときは、どういうところに泊まるんですか。

宝珠山　どうだったか覚えてないですけど何かの関係で、いまでも交際がありますけど、学生援護会かな。

伊藤　学徒援護会じゃないですか。

宝珠山　学徒援護会かな？　あれが、『螢雪時代』か何かの案内の中に入っていたのを伝で行きましたよ。それで、早稲田を中心に受けるということで、滑り止めも二つぐらい受けましたけれども。そんなことで、就職先の合格の一つはあるけど、確か十月か十一月にお断りして上京して来ました、早めに。

伊藤　それが、失業保険ということですか。

宝珠山　そうですね、失業保険を取りながら。しかし、失業保険も現地に行かなきゃだめですから、全部は取れなかったんじゃないかと思います。

伊藤　多分そうでしょうね。汽車賃のほうが高かったりして（笑）。

佐道　その汽車賃なんかは、実家のほうで出してもらったんですか。

宝珠山　貯めてたんでしょうね。

佐道　じゃ、すべてのことを大学に行くために準備を。

宝珠山　結果的にはそうなりましたですね。だから、就職合格通知をいただいたのは、「もったいないな」といわれたのを覚えていますけれども。

伊藤　何の合格通知？

宝珠山　合格しているものですからね。みんなが就職するのにまだ苦労している時期に、ポンポンと蹴って行くわけですから。卒業式には答辞を読むことになっていたんですが、出られなかったです。全日制と合わせて四、五百名ですかね。その中で答辞を読むものだから、「おまえ、帰ってこい」といっても、そのために

帰ってくるのに金をくれるわけじゃないですからね。

佐道　そうですよね。

宝珠山　だから、出ませんでしたけれども。そういうことで、二月か一月だったか正確ではありませんが、かなり寒いときに高田馬場に着きました。

伊藤　すぐ合格なさったわけですか。

宝珠山　それで、なんとか合格したんですね。

伊藤　それは、政治経済学部ですか。

宝珠山　当時、第二政治経済学部というのがありました。

伊藤　それは、夜間のほうですね。

宝珠山　夜間です。第一が昼間でしたね。途中で統合するんですけれども、もう私どもが卒業してですから、いまから二十年ぐらい前ですかね。それで入りまして、見ていますとこれまたおもしろくないし……。

伊藤　え？

宝珠山　大した授業をするわけじゃないんですね（笑）。で、転部試験があるので、二年目のときに第一部に移りました。だから、卒業は第一になったんです。

伊藤　わかりますけど、だって働きながらじゃないんですか。

宝珠山　家庭教師をやりましたから。

伊藤　それでやれたんですか。

宝珠山　結果的にやってこれたというか、学徒援護会の川上さんという方……学徒援護会だったかどうか、学生協会だったと記憶……。

伊藤　日本学生協会というのもありましたね。

宝珠山　学生協会のほうです。その会長が川上（勝晤）さんという方で、その人の住まいに入っちゃったんです。そこで、飯も食えたんです。その子どもさんの教育をやったんです、家庭教師。

伊藤　それで、一部に行けたわけですか。

宝珠山　家庭教師ですから、夜やってもいいわけでしょう。午後でもいいし、自分の比較的任意な時でやれるということと、出席も当時それほどやかましくないから代返も使ったように思いますがね。代返を請け負いあったりして。

伊藤　第一と第二は、そんなに違いましたか。

宝珠山　違わないですよ、同じ先生がやるんだから（笑）。全然違わないです。

佐道　学生はでも、ちょっと違ったんじゃないですか。

宝珠山　学生は、おっしゃるとおり違います。

伊藤　やっぱり優秀なんですか。

宝珠山　まあ、そういっていいと思いますね。第二部のほうは体育系がかなりいましたから、そっちのほうで優秀なんだと思います。オリンピックの候補ですとか。

伊藤　政治経済ではなくてね（笑）。

宝珠山　そうそう、そうなんです。

佐道　お入りになったときに、もう二十二歳ぐらいですよね。

宝珠山　そうなんですよ。

佐道　他の人が卒業するぐらいの。

宝珠山　その通りです。

伊藤　じゃ、もうおじさんになっているわけだ。

宝珠山　そうですね。

佐道　大学に、ときどきそういう方がいらっしゃいましたけど、どうだったですか。

伊藤　居心地はいいんでしょう？

宝珠山　それはそうですよね。

伊藤　だって、まだ若僧。

佐道　みんな子どもに見えたんじゃないですか。

宝珠山　それはそうですね。私と同じぐらいの人が、二部には一人か二人はいたように思いますね。しかし、かなりの部分が体育

系でした。

佐道　一部だと、あまり？

宝珠山　それはないですね。

伊藤　じゃ、気分はいいですわね。

宝珠山　気分がいいというか、しかし遅れていますから若干差もあって、つきあいにくいという面もあります。

伊藤　だけど、大学まで目指すのはわかったんですが、大学から先のことをずっと前から考えておられました？

宝珠山　いや、大学に行ってどうするかというのはあるんですが、そのときの一つは、公務員試験でうまくいけばというのがありますね。もう一つは弁護士というのがあるんですが、政治経済学部には法学系はないんですよね。若干ありますけど、それだけでは難しいんです。もう一つは公認会計士なんです。公認会計士も、商業系の商科なんです。だから、商科を受ければよかったのかと思ったんですけれども、商科も受けたかもしれませんですが合格しなかったんですよ。商科は、第一部を受けたと思います。

佐道　政経を受けられたのは、公務員試験のことが頭にあったから？

宝珠山　いえいえ、そんなことはないです。いまでいう合格できる偏差値がありますでしょう。あれを早稲田ゼミナールの模試で、「ここなら受かりそうだ」というのがだいたい出てきて、それで選んだんですよ。

佐道　しかし、早稲田の政経はいちばん高いほうじゃないんですか。

宝珠山　二部ですから。両方受けましたよ。受けましたけど、一部は落ちました。商学部も、一部を受けて落ちましたね。他の、早稲田じゃないところは合格しました。はっきりいったら、それは滑り止めとして考えていたんですが。大学名をいっていいのかどうか知りませんが、中央大学商学部は合格したんです。こっちに行っていれば、いまはこんなことではなくて、おそらく公認会計士のほうに進んだんだろうと思いますがね。

伊藤　会計士さんになっていたかな。

佐道　そうですね。

宝珠山　しかし、いまはどうかはわかりませんが、当時ネームバリューとしては早稲田のほうがいいんですよ。

伊藤　それは、そうですよ。

宝珠山　それから転部の可能性があるということを考えて、「一年後には一部に行くんだ」というつもりで。一年間勉強すれば追いつくんですよね――と考えられるんです。それで、可能性を考えて。

伊藤　転部は、うまくいったわけですね。

宝珠山　結果的に。いかなきゃいかないで、考えなければいけなかったんですが、そこまで幸運に来たわけです。

伊藤　そこから先は、さっきおっしゃったように公務員試験がいちばん狙いではありますわね。

宝珠山　ちょっとその前に、授業もおもしろくなくて、学術系のサークル活動をやっていました。

伊藤　何ですか。

宝珠山　政治経済攻究会といって非常に古い（サークル）ですが、その中で六〇年安保に巻き込まれるんですよ。

伊藤　まあ、時期的にそうですわね。

佐道　そうか、三十四年にお入りになったわけですものね。

宝珠山　はい。クラスでクラス委員にさせられまして、サークルでは幹事にさせられました。最後は幹事長になるんですが、その中でずいぶん誘いがありましたけど、最初はデモにも行きましたよ。上級生の闘士などから誘われて行きましたけれども、どうも実社会の経験をしてきたというのがありますので、途中で引きまして。クラスでも、いろいろ突き上げられましたけど個人行動にしまして、クラスまとまってデモに行くというのは全部塞ぎました。

サークルもそうしました。狭いところですが同じ部室に、建設者同盟の部員がいるんですよ。それともうひとつはデザイン研究会というのがありまして、この三つが一つの部室を住所にしているわけですね。いまは広くなって、いいところにいるようですけれども。デザイン研究会というのはノンポリだったと思いますが、建設者同盟は左のほうなわけですよ。

佐道　名前からしてそうですね。

伊藤　昔からの伝統ある名前じゃないですか。

宝珠山　浅沼稲次郎さんもそうじゃないですかね。

伊藤　浅沼さん、そうですよ。

■公務員試験を受験

宝珠山　鈴木（茂三郎）さんもそうじゃないのかな……鈴木さんは違うかもしれませんが、浅沼さんはそうだったんです。それで、あの方は亡くなるわけですよね。その頃、政治向きには入りませんでしたけれども、公務員試験を受ける方向に変わりはじましたね。それはしかし、政治経済攻究会の幹事長をやっている時代ですから、三年ぐらいですね。

もうひとつの理由は、一般会社に行きますと年齢制限でアウトなんです。一年や二年の浪人のカウントは、当然するんですけど、フルに遅れていますのでお断りのところが多かったですね。当時は、いまよりももっと厳しかったかもしれません。それを抜けられるというのは、公務員試験は「大学卒業後何年」という受験資格なんですよ。それと、人事院に行って五人推薦して一人採るとかいうことですから、コネがなくても行けるなというのがありまして、受けることにしたんです。しかし、何をやっていいかわからなかったですね。

伊藤　ちゃんとそういう指導をするところはなかったですか。

宝珠山　いや、まったくありません。本屋に行って、試験問題集を二冊か買って来ました。あれをどのぐらいやったかな、一、二回やりましたね。それで受けましたけどね。

佐道　よく、同じように試験を受ける人間が集まって、グループで勉強会をやったりということがあると聞くんですが、それはなかったんですか。

宝珠山　私、後にそれを聞きはしますけれども、その当時はまったくありませんでした。弁護士を狙うサークルはありました。それから、公認会計士を狙うのもありました。そこに行ってみましたけれども商科系統ばっかりですし、法律系統ばっかりですから、政治経済というのはちょっと広過ぎる。政策部門で合わない、入っていけませんでしたね。幹事長をやっていましたから、そういう連中というか指導者と意見を交換する機会がありましたけど、そこには行きませんでした。そういう中でも、公務員試験を受けるというサークルはありませんでしたね。

伊藤　仲間の中で、公務員試験を受ける人たちはいたんですか。

宝珠山　私と、結果的に知ったのはあと二人ですね。

伊藤　結果的ですか。

宝珠山　はい。受けるということさえ、知りませんでした。

佐道　ご存じの方ですか。

宝珠山　後から知ったんです。

佐道　いやいや、その受けた方々は、前からご存じの？

宝珠山　前からというか、クラスの人でしたね。

伊藤　それでもわからなかったんですね。

宝珠山　ええ、そうです。それで、私が合格発表を見に行く前に見て、「おまえ、合格してるぞ」と連絡してくれたのを覚えていますよ。

伊藤　名前で合格発表があるんですか。

宝珠山　そうですね。

佐道　先生のお名前はめずらしいから。

宝珠山　まあ、それもありますでしょうけどね。しかし、彼は合格してなかったんですよ。もう一人は、合格していました。

伊藤　試験の手応えは、どうでしたか。

宝珠山　試験の手応えというか……。

伊藤　イケたかなという？

宝珠山　いや、それはまったくわかりません。だって、模試を受けたわけでもありませんしね。数ヵ月前ぐらいから……本は読みましたよ。関係するであろう法律系統とか、憲法系統とかをあらためて読み直しはしましたけれども、あの質問形式に慣れて……択一ですよ。四択ですかね。

伊藤　全部そうなんですか。

宝珠山　いや、論文はありました。論文はありましたけど、択一がまず一次にありますから。書くほうになってくれば、それは何とかなるでしょう。得意な分野に持っていけばいい話ですけれども、択一は選択しようがないわけですね。

伊藤　それはそうですね、限られた時間でやるわけですから。

宝珠山　そうです、そうです。それに慣れるのに数ヵ月かかったと思います。けれども、受けてまったく自信はありませんでした。しかし、合格をしたということ。

伊藤　僕は、公務員試験を受けた経験がないのでわかりませんが、どういうところで受けるんですか。

宝珠山　受けたのは、文京区に文化大学とかありますか。

伊藤　文京大学か？

佐道　文京大学というのは、確か……。

宝珠山　夏の暑いときに、東洋大学構内で汗だくで受けました。当時、夏休みだったですね。

伊藤　それは、四年生のときですか。

宝珠山　四年です。もうランニング一つになりたいぐらいな、冷房も入れてくれなかったんですね、当時は。

伊藤　当時はないですよね。

宝珠山　ほんと汗だくで、答案用紙が汗で濡れるような感じで、あれを二日かかって受けましたね。

伊藤　科目は？

宝珠山　経済で受けましたけど、科目選択はなかったと思います。

伊藤　たとえば、憲法とか？

宝珠山　それはあります。だから、全部ですよ。

伊藤　一緒に出るわけですか。

宝珠山　一緒に出るやつの中で、確か自分の得意な部門を選ぶんじゃないでしょうか。もっとも経済系統と法律系統は違うと思いますし、同じ憲法の問題でも、経済系統のほうが法律と比較すれば易しいと思いますが、憲法もありますし、民法もあったと思います。法律は法律でまた、もう少し難しいほうだと思います。ただし、今度は経済は易しいということじゃないかと、私は理解しておりますが。

伊藤　その頃は、上級試験に合格率というのはどのぐらいだったんですか。

宝珠山　私が聞いたところでは、二十五分の一だったと聞いています。

佐道　相当難関ですよね。

宝珠山　難関だと思いますし、早稲田みたいなところからはほとんど受ける人も少ないし、合格できなかったんじゃないでしょうか。

伊藤　だいたい東大とか？

宝珠山　東大、京大、旧帝国大学系が圧倒的でしたね。

伊藤　じゃ、早稲田とか慶応なんかは少ない？

宝珠山　当時、早稲田、慶応は少ないです。その後です、伸びてくるのは。

佐道　東大とか京大とか伝統のあるところだと、かつての経験も

語り継がれるでしょうし、情報もあるんでしょうし、試験官の情報とかも入りますからね。

宝珠山　授業自体が、その先生が出題する可能性があるわけですからね。

佐道　そうですよね。

伊藤　じゃ、夏休み終わったらすぐ発表ぐらいになるんですか。

宝珠山　あれは、十月じゃないかな。九月か十月。

伊藤　最初に学術のやつがあって、それから論文試験があって……。

宝珠山　面接があるんです。

伊藤　それから面接でしょう？

宝珠山　はい、そうです。論文と面接は、日が違うかもしれませんが第二次試験だったと思います。

佐道　二次になると、もうずいぶん絞られているわけですね。

宝珠山　二次は、おそらく二倍か二・五倍ぐらいに絞ったんじゃないでしょうか。それから、当時はグループ討議させられましたね。

佐道　何かテーマを与えられて？

宝珠山　ええ。官房長になってからわかるんですが、人事課長が各省から出て来てやっているんですよ。人事課長か、人事課の参事官ぐらいですかね。議長役をやりながら採点。後ろに何人かいたと思いますけど。

伊藤　それは、おもしろかったですか。

宝珠山　大したことないな、という感じは受けました。その段階になると、「行ける可能性が出てきたな」というのはありましたね。

伊藤　やっぱりさっきおっしゃった実務経験があるというのが、相当自信の源じゃないですか。

宝珠山　経済ですと、なおさらですね。

佐道　経験が全然違いますしね。

宝珠山　ちょっと話が飛びますが、防衛庁に入ってから三年目かに経済企画庁に行くんです、二年間ですね。課長なんかに、企業の経理についてレクチャーできますよ。

伊藤　あ、そうですか。

宝珠山　その中から統計をとってくるわけですけど、統計の裏側が見えるわけですよ（笑）。

佐道　そういう方がいると……（笑）。

宝珠山　国勢調査とか何とか企業に調査が来ている、それに回答を全部書いていますからね、何年かにわたって。それから、論理的に合うようにつくっていく面もありますしね。だから統計士が来てじっと見てて、「あ、これはよくできてます」といって、持って帰るんですよ（笑）。それは、ずっと勉強して整合性があるように書いてあるわけですからね、他の中小企業のおっさんが書いたのとはペーパーが違いますよ。

佐道　そうですよねえ。

宝珠山　そういうのをデータにしているのが、「法人企業統計」ですからね。

伊藤　それで上級職を通って、そこから先はどうなるんですか。

宝珠山　後でわかることなんですが、いまおっしゃった東大とかそういうところですと、もう一次試験の終わる頃から先輩、後輩の関係で、いいところは全部ツバがついているというのがわかりました。もちろんその後、官房長になったらもっとわかるわけですけれども。その当時、私どもは、そんなことは何にも知らないわけですよ。

　だから、合格通知が来て「これ、どうしようかな」と。どうしようかというのは、書いてあることは、「人事院のほうで、各省庁から要請があったら五倍推薦します」と。その中に入っていれば連絡があるぐらいの感じで、「待ってりゃいいんだろう」というぐらいの感じなわけですよ。しかし、実際にはもう働きかけて全部つまんでいるわけですね。全部じゃないでしょうけれども、優秀なところは全部、各省とりあいの世界です。それは、企業だ

って同じだと思いますけれども。

その過程を放っておいて、幾つかの省庁から案内が来ました。郵政、防衛庁が来ましたね。いまはどうか知りませんが、当時あんまり人気のないところらしく、「うちに応募しませんか」という案内が来ましたね。それから、動いたんです。回りましてね、経済だからといってあちこち動きましたけど、もう行ったときには非常に冷たいものでした。

伊藤　あ、そんなものですか。

宝珠山　はい。人事課長（担当者？）に会っても、決して「決まってる」なんていいませんよ。しかし、経済企画庁だったと思う。「うちは数人しか採りませんし、あなたより成績優秀な人が志望しておりますので、おいでになっても」と、採らないということをちゃんと教えてくれたところもありました。あるところに行きましたら、「私立学校はね」というんですね。

伊藤　エーッ。ずいぶん露骨ですね。

宝珠山　いや、でもいってくれてありがたいんですよ。「私立学校はね」といいながら、「誰か官界に先輩がいませんか。その人の意見を聞いてみてください」と、間接拒絶ですよ。んな人を訪ねて何回か行きまして、二回か三回紹介をいただいて――私が知ってるということじゃないですよ。紹介で行きましたけど、その方は上級職じゃないわけですよ。たたき上げのほうなんですね。だからずいぶん冷たいもので、全然役に立ちませんでした。

伊藤　やっぱりキャリアとノンキャリアは、全然異質なものですね。

■入省面接での私学出身の悲哀

宝珠山　それはもう全然違います。伝統官庁ほどそうですね。

佐道　経企庁とかは、「応募してみませんか」という案内が来たところではあるんですか。

宝珠山　来たと思います。

佐道　それで行かれて？

宝珠山　そうですね。でも、そういってくれてありがたいんですよ。

伊藤　一応声をかけたという感じなのかな。

宝珠山　といいますのは、面接日はダブりますから、どこを選ぶかを考えなきゃいけないんですね。二ヵ所出しておいて、合格しないところに行って、受けたら通るかもしれないところとだぶったときに困りますから、親切に教えてくれたほうが。

伊藤　全部、日が同じなわけじゃないんでしょう？

宝珠山　全部同じじゃないですけど、ほぼ同じなんですよ。だって各省庁、掛け持ちでやられたら困りますから。だから、たとえば、通産と大蔵は取り合うんですよ。同じにしますよね、いまでも。

佐道　いま、取り合いだそうですからね。

宝珠山　それで、合格者を全部部屋に拘束して、向こうの面接に間にあわないようにしちゃうわけです。だから、解放される人は採らないということでもあるんですね。

佐道　そうか。昔は、内務省と大蔵省がちょっとずれていたりとか聞きましたけど、そういうのがあるんですね。

宝珠山　いまでも同じようなことをやっているはずです、人事院がいろいろいうんでしょうけれども。しかし、その前に実際は先輩・後輩の関係が強いですから、ほとんど決め切っているんだと思いますがね。あやしいのを若干バッファーで置いておけば、合格通知を出しても来ないというのなら、それならそれで人事管理できる範囲にしているんだと思いますがね。

伊藤　それじゃ結局、防衛庁ということなんですか。

宝珠山　それで幾つか回りましたけれども、いまいったようなことでイエス的な返事はないんです。防衛庁が最後だったと思いますが、行きますとだいぶ待たされて、後に代議士になったりする堀田（政孝）さんという方がおられましてね。総務課長で、当時

の防衛庁の人事課長（いまは秘書課長）なんですが、会ってくれましてね。

いろいろお話をしている過程で、「防衛庁は、私学でも採るんですか」と。他のところに行ったら、ノーに近いことをいわれますのでね。「私学で入った人がいますか」と聞いたら、「ない」というんですね。「じゃ、採らないということですか」とお聞きしましたら、「人物なら採る」というんですね。人物なら採るといったって、こっちが人物を評価するわけではありませんからねえ（笑）。「そんな抽象的なことでは困りますが」といったら、「面接試験を受けてみるより、しようがないな」という感じなんですね。とにかく可能性ゼロじゃないという示唆と受け止めまして、それで参りました。

あとは農林省に行きました。しかし、合格しませんでしたね。もう何十年か前の話だから、「農林省」といってもいいんだと思いますけれども。

伊藤　それは、面接ですか。

宝珠山　面接です。面接で軽くあしらわれたのを覚えています。人事としては、とにかく五倍の範囲内で来るのは拒めないんだろうと思います。しかし、二十人か何かの採用計画があるわけで、前のほうは詰まっているんだと思いますよ。だから、その中に入らなかったというだけで。まあ、結果的には入らなくてよかったです。

伊藤　防衛庁ということについては、別に？

宝珠山　初めからはないです。初めからないというのは、官庁の採用計画の中に、防衛庁だけは法律・経済というのは区分なしに採用予定人数が入っているんです。他のところは、経済何人、法律何人となっているんですね。だから、一緒くたにして人数が書いてあったのを記憶していますので、参りまして、さっきみたいな「経済でも採るのか」とか、「私学でも採るのか」というようなことを聞いて、抽象的ですけど「人物なら採る」ということと、「面接試験を受けてみたらどうだ」といわれまして、それで参りました。後でわかることですが、面接試験のときに海原（治）さんが面接官でいたんです。

伊藤　突然、海原さん（笑）。

佐道　もう試験会場から帰りたくなるんじゃないですか（笑）。

宝珠山　いや、十何人ですよ。おそらく当時の官房長の加藤陽三さんという方が中心に座っていて、その何人かのところに海原さんがいたんです。加藤さんから穏やかな質問を幾つかいただきましたが、それは先ほど述べたような「親父がいつ死んだのか、何で死んだのか」というようなことで別に当たり障りのない話でしたが、海原さんが……。

その前に加藤さんから、「安保騒動のときに、あなたはどういう姿勢でしたか」というのは聞かれましたね。しかし、先ほど申し上げたようなことをお答えしたと思います。その後に海原さんが、「日本国民の大多数が防衛に反対しているのに、おまえは何で来るんだ」ということを質問されました。それに対して、「有史以来の敗戦、その後の悲惨な経験をしている国民が戦争に反対するのは、それはごく自然なことじゃないですか。しかし、国家（と言ったかどうかわかりませんけど）は、防衛力が必要だということについては明らかじゃありませんか。これからの防衛論議というのは、防衛力の質と量をどうするか。これをどう国民の下で管理するかという議論になっていくべきだと思います」という趣旨のことを答えました。

僕の場合には、加藤さんとそういう方が中心だったと思いますが、他の人よりも倍ぐらい時間が長かったらしいです（笑）。私はわかりませんよ。出てきたら、「ずいぶん長かったね」といわれましたね。入庁してから当時面接をしていた立ち会っていた課長に会ったら、「おまえ、海原さんにずいぶんきついことをいってたな。

それで合格したんだよ」というような感じでしたね（笑）。もうその方も亡くなられたので、名前は申しあげませんけれども。

伊藤　海原さんは、最初から出てくるんですね。それは、何月頃になるんですか。

宝珠山　十月かそこらじゃないでしょうかね。

伊藤　じゃ、発表があってじきですね。

宝珠山　ええ、そんなになかったです。おそらく人事院から合格通知を各省に流すんですね。それに基づいて各省が案内を出すから一週間後ぐらいじゃなかったかなと思います。それでやっていますから十月だったと思いますね。ただ、十一月かもしれません。

伊藤　ご自分の上級試験の成績というのは、わかるものですか。

宝珠山　自由に教えてくれますから。

伊藤　どこがですか。

宝珠山　人事院が、ちゃんと連絡してくれましたよ。

伊藤　あ、そうですか。

宝珠山　それは、各省とも知っていますよ。

佐道　聞かなくても教えてくれるんですか。

宝珠山　ええ、「何番です」というのは、わかっています。

伊藤・佐道　はあ。

宝珠山　何番というのがわかっているというのは、五倍まで推薦するわけですよ。ですから原則は、各省上のほうを採るんでしょうね。そういう方式らしいですから、順序はわかっています。

伊藤　何人中何位ということですか。

宝珠山　そうです。合格者が百人いたから、それを分母に何番ということになりますね。

伊藤　いいほうでしたか。

宝珠山　いや、いいほうじゃないです。下のほうでした。だから、五倍推薦されて予定数の中に入る可能性というのは低いわけですね。採用予定人数の五、六倍取っているんじゃないでしょうか。

伊藤　そうですか。上級試験に通ったら、どこかに引っ掛かるというわけじゃないんですね。

宝珠山　ありません、ありません。ただ、上級試験に通っているというのは、会社に行ったら強いんです。

伊藤　フーン、そういうメリットもあるんですか。それは知りませんでした。

宝珠山　それだけで、もうほとんど通っちゃうんですよね。

佐道　じゃ、もし採用されなくても、「そしたら、どこかの会社に行けばいいや」というお考えでしたか。

宝珠山　うん、それはありますね。会社も通っていましたから。通っているというか、だいたい行けそうだというのはありましたから。

伊藤　内定の内定みたいな形ですね。

宝珠山　そうですね、大学の就職部を通じて。怒られましたけどね。

伊藤　エ？

宝珠山　「私は防衛庁に行くんだ」というのを、確か年末に九州へ帰る前だから十二月ぐらいですけど、「おまえ、ここへ行くことにしたんじゃないか。断りに行け」といって（笑）。

伊藤　よくありましたよね。断りに行ったら、パッとお茶をかけられて（笑）。

宝珠山　いや、お茶をかけられるということはありませんでしたけど、「公務員試験に行くんだ」というようなことをいったら、「それなら、しようがないか」という感じで、両方とも通りましたけどね。

伊藤　そうですか、よかったですね。

佐道　八月に一次を受けられて、二次面接が十月ぐらい？

伊藤　九月か十月ですね。

佐道　というと、一次の発表があるまでの間は、結構しんどい時期ですね。

宝珠山　しんどいです。しかし、何をやっていいかわからないんですね。他の人たちは、ちゃんと教師がいるんですけど。だからその頃、おそらく卒論の準備にかかっていたんじゃないかと思います。

伊藤　そうかそうか、卒論もあるんだ。

佐道　いまはもう、必ずしも書かなくてもいいところが大部分になりましたけど。

伊藤　まあ、そうだけどね。

宝珠山　いや、卒論は書きました。

佐道　ちなみに、何についてお書きになったんですか。

宝珠山　設備投資の利子弾力性について書きました。

伊藤　なにか経営的な感じが。

宝珠山　経営的というか、経済運営ですね。

伊藤　まあ、そうでしょうけどね。

宝珠山　だから、後に経済企画庁に行っても強いんですよ。たまたまそうなんですけどね。

佐道　ゼミか何かにお入りになっておられたんですか。

宝珠山　ゼミナールで。その先生が、難しい数学を使ってやる先生でしたけどね。もう亡くなりましたけれども。

伊藤　数学は、お得意だったわけですか。

宝珠山　その先生はですね（笑）。私は、そういうわけでもないけれども。

伊藤　だって、計算が必要なことでしょう。

宝珠山　ありますけどね。しかし、うまく誤魔化したほうだと思います（笑）。

佐道　でも、その先生のゼミを選ばれたのは、おもしろそうだと思われたんじゃないですか。

宝珠山　まあしかし、おもしろそうだというか、入れる可能性があるゼミを選ばなければいけませんからね（笑）。全員入れないんですよ。二十人ぐらいしか選びませんから、人気のあるゼミに行きますと、必ずしも入れないという面がありましてね。

伊藤　私学というのは、かなり厳しいものですね。

宝珠山　だって比較的安い学費で、落ちていく人の学費を引き上げながらやっているわけですからね。ゼミナールとか、いい課目について行ける人は普通に行けるわけですけど、そうでない人たちは学費を出してくれているわけですよね。援助している形になるじゃありませんか。それが、私学経営だと思います。それから、受験料ですね。

佐道　政治の先生の授業は、あまりお受けにならなかったんですか。

宝珠山　政治はね、記憶しておりますのは吉村健蔵先生。それから、吉村正先生。この人たちのがおもしろかったですね。

伊藤　吉村正というのは、ここの学長のお父さんになるんですね。

宝珠山　あ、そうですか。吉村健蔵さんも、吉村正さんの愛弟子か何かなんですよね。

伊藤　内田？

宝珠山　内田さんは、ぐっと後のほうです。

伊藤　そういう政治の先生、おられましたか。

宝珠山　はい。いまもまだ健在だと思いますが、そのゼミからずいぶん代議士が出ているんですよ。衞藤征士郎先生などもそうです。

伊藤　先生は、政治なんてことは考えなかったですか。

宝珠山　いや、考えませんでしたというか、いろいろ聞いてみると金がかかるということだけで、もう。

伊藤　金がかかることは、間違いないですね（笑）。

宝珠山　とにかく、まず社会に出て稼がなきゃいけないというのが実情でしたね。

伊藤　とにかく自立して食っていくと。

宝珠山　そうですね。

伊藤　いままでだって、自立して食ってきたわけですからね。

宝珠山　まあそうですけれども、まだそれはアルバイトでしたからね。

伊藤　防衛庁が決まった後、卒業論文を書いてですか。

宝珠山　卒業論文は一月か二月が提出期限だったと思いますが、出しました。

伊藤　それで卒業して？

宝珠山　そうですね。

伊藤　防衛庁は、四月一日から登庁して来いということですか。

宝珠山　そうです。

伊藤　その前は、何もなしですか。

宝珠山　その前一回、食事会がありましたね。六本木の中華飯店だったのを覚えています。

伊藤　それは、新人だけ集めて？

宝珠山　ええ、人事関係者と入庁予定者ですね。

伊藤　どのぐらいいたんですか。

■防衛庁初の私大卒採用

宝珠山　私学から二人で、三人ですよ。

伊藤　私学は、もう一人いたんですか。

宝珠山　学習院の人がいました。しかし、その人は弁護士になるといって早々に辞めて行きました。合わなかったんでしょう。結果的に、二人になりました。

伊藤　もう一人は、どこの人ですか。

宝珠山　東京大学の法学部です。これはもう……。

伊藤　いやいや、私学の。

宝珠山　私学で辞めた人は、学習院です。

伊藤　私学から入った人は、先生と学習院の人だけなんですか。

宝珠山　学習院の人が辞めたから、結果的には一人です。それで、初めてだったんですね。

佐道　私学採用は？

宝珠山　はい。

伊藤　私学じゃありませんけど、よく地方の国立大学出身の人が、要するに上級職の連中みんなで話をしていて、「いや、東大のあの先生が……」とか、「一高のとき、どうだった」とか、そういう話をして盛り上がっていて、疎外感があるというようなことをよくいっていましたけどね。

宝珠山　その通りです。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。入った当時は、初めてですしね。それから、また海原さんを出して恐縮ですけど、海原さんに挨拶したときに「どこの大学だ」といわれて、「早稲田」といったら、ヒョッといった（そっぽを向く）ような感じですよ（笑）。正直な方でしたね。

伊藤　まあ、そうでしょうね。

宝珠山　やっぱり話も合いませんしね。とくに法科が強いですから、法律系統の思考法が強いですから。その中にまた、もうひとつ異色で経済で入りましたから。

伊藤　これは、大変なことですね。

宝珠山　でも、その後ずっと私が歩いたポストというのは、やはり経済であったからということと、政策発想なんです。

伊藤　やっぱり特殊性が活きるんですね。

宝珠山　活かせたんだと思います。それから、これは伊藤先生に申しあげることではありませんが、法律とくに行政法などを中心にしてきた人は法律解釈と執行なんですね。法律の決められた枠の中で思考するんです。だから憲法解釈、九条がまさにそうだと私は思うんですが。経済というのは真実を表しているかどうかは別にして、人々の行動をサンプルであれ何であれ統計データでとって、これを実体として分析する。すなわち、実体があってどう

進むか、どうするのがいいかを考える科学なんですね。とくに近代経済学は、そうなんです。

先ほど申しあげた利子弾力性というのは、利子というのはひとつのハンドルなんですね。上げる、下げる。上げて、どういう系統でどんな影響が何ヵ月後にどれだけ出るかというような政策のコアの一つになるわけですが、そういう発想なわけで、利子を上げるのがいいかどうかということじゃないんですね。上げた結果、国富にどう影響を与えるかというものを考える枠組みのほうですね。そのアプローチというのは、よかれあしかれ身についていたんだと思います。私がこれまで来たのは、これを防衛にアプライしただけなんですね。したがって、国会答弁に書くときには今までの法解釈に従がわなくてはいけませんけれども、政策にあたる時というのは経済学的にアプローチというか、活かされました。そういうことで若干、かなり異質な部分でありますね。

伊藤　前に文部省のお役人の方で、理科を出た人がいたんですね。やっぱりお話を伺って、非常に発想がユニークでおもしろいかったです。

宝珠山　でしょうね。

伊藤　ただ、周りが全部法科ですから、彼は一所懸命いろいろなことをやっても、なかなか通用しない部分があるんですね。

宝珠山　そう。それで、なかなか理解してもらえないんですよね。

伊藤　だから、非常に苦労したというお話を伺いました。

宝珠山　それから私、課長ぐらいになって法科を出てくる連中に申しあげたのは、「防衛庁の上級職は、執行者じゃないよ。立法府と行政府の間にあって、防衛政策の立案をするところだ。最も遅れているから、法律がどうであるかを超えて物事を考えるのがおまえたちの仕事だ。ただし、地方に局長とか部長で出てそれをやれとはいわないけれども、内部部局にいるときはそういう人間になれ」といってきたんですが、なかなか乗り越えられませんね。

伊藤　内局というのは結局、政策官庁なわけでしょう。

宝珠山　私は、それをいっていたんです。「政策官庁たれ。それが、今までのやり方は全部、法解釈指向が強いじゃないか」ということは、申しあげました。もう一つは、財政枠で物事を考える思考法が非常に発達しておりますのが官庁ですね。予算枠といったほうが、もっと解りやすいと思いますが。

伊藤　非常に硬い枠ですよね。

宝珠山　そうなんです。その中で政策を判断するというのは、伝統的なレールをよく走っているところはいいんだと思いますが、戦後の防衛庁というべきでしょうが、防衛庁みたいに国際社会が激変していく中で日本の生き方をたずねるというところでは、法律的発想――法律解釈的発想というべきだと思いますが――は、国にとってはプラスにならない。理科でもいい、文科系でもいいと思いましたね。そういう点でいきますと、いままでヒヤリングされた先輩の方で、夏目（晴雄）さんも、伊藤（圭一）さんも、ちょっとそのあたりからははずれた人たちなんですね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　もう申しあげることもないと思いますが。海原さんはどうかというと、海原さんは実戦の中で痛めつけられていたというのが――痛めつけられたというのかわかりませんが、そういう言いかたが悪ければ、実際経験を持っている……。

伊藤　実際の軍隊で痛めつけられたほうですからね。

宝珠山　はい。その中で、法律ではない体験を踏まえた政策的発想というのがあった方じゃないかなと、私は理解しております。

伊藤　私ね、実は宝珠山さんの経歴だけ見ますと、スーッと歩いてきて来られた方だとしか見えないんですね。ですから、お役人らしいお役人かなと（笑）。

宝珠山　いや、そうだと思いますよ。

伊藤　それにしては、ちょっと後が違うんじゃないかと思ったの

で、変だなと思ったんですが、いまのお話を伺って本当に腑に落ちましたよ。

それで、防衛庁に入られていちばん最初は、どういう辞令をいただくんでしょうか。

宝珠山　「防衛庁事務官に任命する。長官官房総務課付を命ずる」だったですかね。で、研修に入るんです。

伊藤　ははぁ、総務課に付けさせる？

宝珠山　ここは、いまでいう秘書課なんです。当時の。

伊藤　新人は、全部そこに集められるわけですね。

宝珠山　そうです、そうです。

伊藤　研修は、どこでやるんですか。

宝珠山　人事院の合同研修がありました。それからあとは各所、各地でやりました。これは、私ども三人だけでなくて技術研究本部の研究者が二十人ぐらいいるんじゃないですか。

伊藤　そっちのほうが多いじゃないですか。

宝珠山　もちろん多いです。それはもう大研究所ですから。

伊藤　一緒に研修をやるわけですか。

宝珠山　そうなんです。全部一緒じゃありませんが、総論部分は一緒ですね。それからあと、陸・海・空で何人かいたかもしれません。自衛官じゃありませんよ。三十人ぐらいの研修ですね。

伊藤　どういう研修なんですか。

宝珠山　いま思い出すと、覚えていることはほとんどありませんけれども、当時、防衛研修所というのがありまして、ここでの研修は防衛学ですね。

伊藤　非常に初歩的なことですね。

宝珠山　そうです。日米安保体制がどうだとか、日米安保条約も解説していたように思います。それから、一般的なやつは人生訓みたいなことを、官房長が出てきたり、総務課長――いまでいう秘書課長が出てきたりして、それから役所の仕組みとかいったものを講義してくれました。

佐道　宿舎か何かに泊まって？

宝珠山　いえ。宿舎に泊まるのは、現地研修で出張した時です。北海道に行って……。

伊藤　部隊に行くわけですか。

宝珠山　部隊の研修とかはありますね。それから幹部学校の、自衛官の制服がはじめて行く学校に行くというようなことがありました。

伊藤　それが、だいたい二ヵ月ぐらいあるわけですね。

宝珠山　三ヵ月ありました。

伊藤　だけど先生、これ、三十八年六月に法制調査官付になりますね。

宝珠山　じゃ、二ヵ月です。後の法規課ですね。

伊藤　法規課ですか。

宝珠山　法制調査官自体が、法規課が合理化で法制調査官になった。「官」であるだけで、これは法規課なんです。

伊藤　兼長官官房総務課と書いてあります。

宝珠山　このときに調査官付ですけれども、まだ研修を受けているんじゃないかと思います。だから、研修が連続じゃなくて、実務に戻って、またしばらくしてというのが。

伊藤　いちばん最初の実務は、何をやったんですか。

■初仕事は、「省昇格」法案

宝珠山　法制調査官付になってからですか。法律の立案というか、法律の訓令などを審査する作業に関わらされましたね。

伊藤　それは、実際のことですか。

宝珠山　そうです。実際流れているものを審査するんですが、審査の下ごしらえですね。そのとき、そこに行って、探しても審査

基準がないんです。で、防衛庁では部員というんですが、頭の中にあるんですよ。これじゃ困るなというので、私ここにいたときに『審査心得』かな、審査の手引きをつくりました。それが、最初の成果物です。

伊藤　へえ、入所早々じゃないですか。

佐道　それまでは、そういうものをつくろうという発想がなかったわけですか。

宝珠山　でしょうねえ。どこかのはありましたよ。だけど、防衛庁のがないんですよ。防衛庁というか、法制調査官付とか、防衛庁内局向けとか。内局が持つということは、各幕に周知することになるわけですね。だから、陸・海・空が持ってくるのを審査していても、ばらばらなわけですよ。これはおかしいなということを思うわけですね。で、他の省庁の例などを参考にしながら、防衛庁用の手引きをつくりました。

伊藤　他の省庁のものは、あるんですか。

宝珠山　ええ、それは広く、おそらく『法制執務提要』とかいって林修三さんあたりが書いたものはあるんです。しかし、これはちょっと高度というか、まさに法律用なんですね。ここで欲しいのは……。

伊藤　もうひとつ下の段階ですね。

宝珠山　もうひとつ下の、やや特殊――といっていいでしょうか――の組織である防衛庁で、かつ各ユニフォームの、必ずしも法律に精通してない方でも起案に携われる、役に立つような。かつ、法制調査官がそれにかなっていれば判子を押してくれるようなものが欲しいわけですね。

佐道　自衛隊は陸・海・空とあって、陸・海・空の中の組織もそれぞれが微妙に違いますね。組織の名前は、同じ仕事をしていても……。

宝珠山　表現が違う。

佐道　表現が違って、防衛部とか監理部とか、いろいろ違いがありますね。その共通のものの基準をつくるのは、きっと面倒というか手間がかかったんじゃないですか。

宝珠山　その言葉の定義まではいきませんでしたけどね。しかし、その後も各陸・海・空といっていいと思いますが、それぞれでやっているのをまとめる作業というのは、この後ずっと続いていきます。

伊藤　いまのお話は、昭和三十八年六月に調査官付になって、翌年まで同じなんですね。

宝珠山　そうです、そうです。

伊藤　その間に、いろいろおやりになったということですね。

宝珠山　そういうことです。

伊藤　調査官付というのは、何人ぐらいいるものなんですか。

宝珠山　課長補佐が五人いました。

伊藤　調査官の下が、課長補佐なんですか。

宝珠山　課長補佐ですが、防衛庁では部員といいます。事務官が私、見習いといいましたけれども。

佐道　部員でないんですか。

宝珠山　そうです。ただし、身分は事務官です。見習いといって優遇されて、政策立案とかに携われる。それから単なるサポート、お茶をくんだり、下書きをさせられたり、タイプをしたりという人が三人いましたから、十人ですか。

佐道　先生を含めて部員の方は、みんなキャリアでいらっしゃるわけですね。

宝珠山　そうです。その中で防衛庁出身のキャリアが一人、防衛施設庁出身が一人。防衛施設庁というよりも調達庁出身なんですね。というのは、三十七年に防衛施設庁ができるんです。だから、私は防衛施設庁を含めた採用の一期生なんです。

伊藤　あ、そうなんですか。

宝珠山　キャリアとしては。

佐道　防衛庁自体としては二十九年にできるわけですけれども、採用は直接何代目になるわけですか。

宝珠山　九期、二十一人目か二十二人目です。

佐道　だいたい毎年、三人程度ぐらい？

宝珠山　その当時はですね。それから、途中で抜けている人がいるんです。だから、数の数え方が二十三なのか、二十四なのか、二十五なのか、ちょっと正確ではありませんが。その中で法制調査官付にいるときに、省昇格法案をやらされるんです。これ、楽しかったですね。書くわけではありませんよ。しかし、法制局審査に連れて行ってくれるんです。

伊藤　それは誰が連れて行くんですか。部員ですか。

宝珠山　法制調査官が。

伊藤　「見にこい」ということですか。

宝珠山　見にこいじゃなくて、行って座らせて何をやらされるかと思っていたら、「おまえ、読め」というんですよ。一条ずつ読まされるんです。

伊藤　案文をですか。

宝珠山　はい。もちろん配ってありますよ。読んで、何人かの法制局側の人がいて議論する、それを聞いているということなんですね。

佐道　「防衛省設置法」というんですか。

宝珠山　行ったときには「〇〇省」でした。〇〇は何を入れるかというのは、私どもは「国防省がいい」とかいっていましたけど、「防衛省じゃないか」とか、いろいろ議論はしていますが、とにかくその部分は政治に任せるとして、省にする法案をつくれということで、特命で。井口（孝文）さんという方なんですが、まだ存命ですけれども受けて来られて、いま言った五人の部員の中の二人ぐらいと、私と、三人か四人で出掛けて行ってやりました。

伊藤　それはもちろん、長官の命令で行くわけでしょうね。

宝珠山　ン……井口さんは、「次官にいわれたから、おまえ達、手伝え」と言われていましたけど、おそらく上の了解は得ていると思います。

伊藤　それなしでやるわけはないですからね。

佐道　井口さんが、法制調査官？

宝珠山　そうなんです。

伊藤　そうですか。そういうこともあったわけですね。

宝珠山　はい、だから「国防省法案」はいちばん最初のときから。

伊藤　まだ今日、なお達成できませんが。

宝珠山　そうです、そうです。そのときに、「これは、何で省にしなきゃいけないのか」というのを、いろいろ書かされるわけですけど、いくら書いたって大した差がないんですよね、庁が省になってどうだというのは。それに対して、その上にいた麻生茂さんという防衛庁の法制局長官といわれた人ですが、法制局に行きましても防衛問題については、「麻生さんは、どういっているかね」と、向こうのほうが気にして聞いてくれるぐらいに大変な権威のある方でしたが。

伊藤　それは、防衛庁の？

宝珠山　はい、一つ上の法制参事官といっていましたが、元々の「自衛隊法」等をつくった方です。

伊藤　結局、その議論はどうなったんですか。

宝珠山　だから、法案はつくりましたでしょう。金庫に入れちゃったんです。で、ずっと眠っていたんですね。

伊藤　それは、政治的な問題ですか。

宝珠山　と思います。そこらあたりについてはわかりませんけれども、金庫に入ったものの閣議決定はされるところまでは行きました。当時はワープロとかありませんから、ひとつひとつ書いたというかタイプを打って、読み合わせをするわけですよ。間違い

があっちゃいけないから。それを最後までやったのは、覚えていますね。

佐道　麻生さんには、お会いになってお話を伺ったりとかされたんですか。

宝珠山　それは、しょっちゅう指導を受けていました。

佐道　麻生さんは、昇格問題はどういうふうに話をしておられましたか。

宝珠山　その点が、言葉でそのまま覚えていないんですけれども、「国の姿勢として省昇格の必要があるんだ」ということを書いてきて、「おまえ、清書しろ」といわれたのを覚えています。

佐道　国の姿勢ですか。

宝珠山　国の姿勢だと思います。「国防の姿勢を確立する」とかいうようなことを、汚いわかりにくい字で書いてくるんですよ。皆さん読めないんですよ。ヒゲをいっぱい付けてですね（笑）。それをまず私、だいたい読みくだして、「これでいいですか」ということなんですね。

佐道　麻生さんの字の判読係もされたわけですね。

宝珠山　これはしかし、大変なんですよね（笑）。当時の人については、いまでも語り種なんですがね、わからないといって。だから私も部下に落とすときに、わからない字を書くようにしたんですよ。これで、能力がわかるんです。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。判読力は、能力がないとだめです。継続的にというか体系的にウォッチしていますと、難しい字も判読できますしね。それから理解している度合いですか。

伊藤　内容が推測できれば、字を読めますからね。

宝珠山　そうなんですよ。後のほうから読んでいって、文章トータルの流れとか、その中で読む訓練を受けました。

伊藤　僕ら歴史家が、草書を読むようなものです（笑）。あれも同じですよ。

宝珠山　そうかもしれません。そういうことで鍛えられた面はありましたね。

佐道　先生が、この問題に参加されたときに……。

宝珠山　この問題というのは？

佐道　省昇格問題の法案づくりですね。そのときには、基本的なラインは決まっていたんですか。それとも、基本的なラインづくりのところから？

宝珠山　基本的なラインづくりということでいきますと、井口さんがいっていたのは、「とにかくその議論をやっていると、まとまりっこない。したがって、自治庁が自治省になったときに――名前が省になるだけなんですね、若干他にあると思いますが――それと同じでいいんだ」ということを、指示として出されましたね。どこかで受けたんでしょう。

しかし、「省になることによって、どこが変わらなきゃいけないのか」ということで、内閣総理大臣の指揮権などは変わらないでしょうと。それから、「内閣総理大臣」と書いてある部分が、内閣の長としての内閣総理大臣と、総理府の長としての内閣総理大臣、すなわち新しい防衛省の大臣が所管すべき部分とがある。これを読み分けるというのが上のほうで議論になったのは、覚えていますね。あとはもう、「〇〇庁」のところを「省」に変えていく、それから他の法案の中で引用がありますね。それらを拾って附則で書いていくわけですけれども、そんなかなり技術的な問題ではありました。

佐道　この当時、池田内閣ですけれども、自民党の中でも国防部会を中心に省昇格という問題を盛んに議論をしていて、総務部会で「省昇格させよう」という決議をしたりとかいうことが、ちょうど同じ時期でありました。そういう先生方の声は、聞こえてきたりしましたか。

宝珠山　それは、当時の私の耳に入ったことはありません。おそらく、それはここでいちばん上の先任部員と課長の仕事なんですね。法制調査官ですが、私どもは課長と読んでいましたけれども。

伊藤　やっぱり「課長」と呼んでいたんですか。

宝珠山　はい、「課長」と呼んでいました。課長なので。

伊藤　実際はね。

宝珠山　実際の仕事は課長ですから、「課長」と呼んでいました。

佐道　この省昇格問題について断片的に残っている資料の中に、この時期よりちょっと前なんですが、防衛庁を省へ昇格させると。岸内閣の頃からあった議論らしいんですけれども、そのときに「もうちょっと抜本的に組織を見直そう」という声があって、保科善四郎さんと、前に政務次官をやられた前田正男さんという方と、このときは亡くなっていますけれども服部卓四郎さんと、お三方が組織の案を出されているんですけれども、そういうのはご覧になったことは？

宝珠山　見たことはありません。いまいわれた方の名前は、聞いたことはありますけれども、お会いしたこともありませんし、降りて来たときには先ほど申しあげたように課長のところか、先任部員のところかで全部スクリーンされて、枠ができた中での仕事であったんですね。

伊藤　でもしかし、これは経験としては非常におもしろいですね。

宝珠山　はい。法科を出てないけれども、法律の解釈と立法をここでトレーニングしてくれたんですね。

佐道　ずいぶんトレーニングされましたね。

伊藤　多分、そうでしょうね。

宝珠山　だから、私と同期に入った法律出よりも立法は詳しくなりましたね。立案技術とか、他の部員が書いてきたのも、課長補佐が書いてきたのも、「ここは、違いますよ」ということをやりましたね（笑）。それをやっておかないと、海原さんのところに行ったときだめなんですよ。字が違っていたら、ガンとやられるでしょう（笑）。そういう機能……本来そうじゃないと思うんですけれども、たまたま起案の手引きなどをつくると、だんだん見る目が肥えてくるわけですね。それはありました。

佐道　一所懸命やられて、一応法案のところまでいって、それが何故かわからないけど金庫に入りっ放しになっちゃったと。これは、どうしてなんだろうと？

宝珠山　それは、ありますね。ありますけれども、その後、最近になるまで結局、内部というか政党の内部に表に出せない理由があるというのは、徐々に明らかになってくるんですね。憲法問題、すなわち井口さんがいった、「その議論をしているときりがないから、とにかく法案をつくれ」という意味が、後になったらわかります。憲法との絡みとか、指揮権の問題とか、いろいろ憲法絡みで論議をすれば、百年かかっても決着つかない問題に行き着くんだと思いますが。それは、政治家がどこかで決断する以外にない問題なんです。

伊藤　要するに、ここの解釈だけやっていたらだめなんですね。

宝珠山　そうなんです。政策で判断するところを議論で決着させようと、自らは責任を回避しようとされては、決着しない問題ですね。

佐道　方法すらきちんとつくらなかったわけですから、本当に問題ですね。

宝珠山　そうなんです。そういうのを、保科さんなどは考えていたんだと思います。

■防衛庁入庁後のくらしぶり

伊藤　防衛庁に入られて月給を貰って、変な話ですけど生活はいかがでございましたか。まあまあ何とかやっていけると？

宝珠山　いや……安いですね。すごく安い。碑文谷に寮がありまして、そこに入っていましたから。

佐道　寮で？

宝珠山　はい、四畳半でしたけどね。

伊藤　当時は、公務員の給料は相当低かったんですか。

宝珠山　低かったと思いますよ。

伊藤　いまでこそ、「公務員はいい」とかいっていますけど。

宝珠山　いや、そんなことないです。

伊藤　当時は、「公務員は非常に待遇が悪い」と一般にいわれておりましたけど。

宝珠山　だから、私がそれを知っていたら志願しなかったんだと思うんですよ（笑）。

佐道　公務員宿舎という？

宝珠山　宿舎じゃないんですよ、まだ独身ですから。寮ですよ。食事もないし、とにかく寝泊まりできるだけ。

伊藤　それは、防衛庁のものですか。

宝珠山　そうです。

佐道　防衛庁の方々は、その寮には全体で何人ぐらいいらっしゃったんですか。

宝珠山　どのぐらいだったですかね。二階建で十家族ぐらい入っていたんじゃないでしょうか。

伊藤　家族ですか。

宝珠山　家族も入ってるんですよ。

伊藤　それは、ちょっと広いところですか。

宝珠山　いやいや、広くないんですよ。

伊藤　いま、四畳半とおっしゃったじゃないですか。

宝珠山　そうなんですよ。

佐道　四畳半と、家族が暮らせるような少し……？

宝珠山　炊事場は共同。朝、顔を洗うのも、炊事するのも、時間差をおいてやっているんでしょうかね。

伊藤　じゃ、やはり生活的にはそんなに楽になったわけじゃないんですね。

宝珠山　生活的には楽ですよ。夜中に帰って寝るだけですから。

伊藤　それは、そうでしょうけど。

宝珠山　しかし、家族の方はそうでもなかったと思いますね。

伊藤　先生は、まだご結婚なさってないでしょう？

宝珠山　もちろんしていません。

伊藤　もちろんということはないでしょう（笑）。

佐道　早々に結婚される方もいらっしゃいますし。されていても、おかしい年ではないですね。

宝珠山　その点は、その通りですね。

■人事第一課で「人事ピラミッド」について勉強

伊藤　それで、一年たって人事第一課に行かれますね。これは、人事としてはどうなんですか。つまり、他じゃなくて人事局に行かれるというのは。何か中枢部にいるような感じがしますけど。

宝珠山　そのときの人事局の課長が、採用のときの面接官でいたんですね。

伊藤　気にいられたんですかね。

宝珠山　そのあたりはわかりませんけれども、面倒をみてくれたことは確かです。

伊藤　だけど、これは将来的にみてもいいポストでしょう？

宝珠山　と思います。といいますのは、そこでやらされた仕事が「人事ピラミッド」ということですが、軍隊の組織の人事的なあり方を勉強する機会があったんですね。

伊藤　要するに、部隊のほうもあるんですか。

宝珠山　人事一課は、部隊の幹部人事を担当するところですから。「防大の人員が何人であったら、どんなピラミッドがあるべきか」ということになるんですね。だって、トップは一人しかいませんからね。

伊藤　だんだん上のほうは、こう（小さく）なる。

宝珠山　そうなんですよ。ピラミッドでなくて、こんなことになりかねないわけでしょう。それは、軍隊としてはこんなもの成り立たないわけですから、ここを切るのをどうするかということですね。

佐道　諸外国の例とかを、ずっと調査をされて？

宝珠山　そうですね。入ったときにそういうのを勉強していって、行き当たったのは確か米国の例だったと思いますが、分厚い。米国における人事管理で、軍隊組織を構成するのはどういう定年制をやっているかということを勉強する機会がありました。

伊藤　戦前の日本の軍隊は、大佐ぐらいのところでガーンと減らして。

宝珠山　しかもこれ、徴兵制ですからね。

伊藤　下のほうはですね。

宝珠山　はい。ですから、まだやりやすかったんだと思いますが、それとやっぱり増強過程ですよね。

伊藤　しかし、ずっと何年も先のことを考えないといけないわけでしょう。

宝珠山　そうなんです。ですから、確か三十年ぐらいのタームで考えることになっているわけです。

伊藤　だから、不確定要素がありますよね。全体の人員が増えれば、今度は幹部が不足するという問題が生じますね。

宝珠山　そうです。そこで、「いちばん下のトータルワークを何人にして」という計算式が出てくるんですね。それを全部やったわけではありませんが、そういう勉強をする機会がありました。

佐道　陸・海・空それぞれの、制服組なら制服組のそういうものについての考え方というのも、またあるんじゃないですか。

宝珠山　ですから、それは私がどうこうということより私もそれを勉強するとともに、海上自衛隊は海軍の船を中心とする編成組織のあり方がひとつ特殊要因としてありますね。航空は非常に技術者の多い、ある意味で頭のほうにかなり力点がないと困る。昔の徴兵で入ってくるような人では、修理にしましても賄えない技術者がたくさんいる世界ですよね。陸のほうは旧軍的なものという、その中でのピラミッドの形成の仕方……。

伊藤　これは、全然違いますよね。

宝珠山　違いますね。そういう特徴というのも、これは私というより今度は向こうに求めてディスカッションするという、おそらくそれは部員の仕事なんですけれども、私は隣にいる部員が「おまえ、やってみろ」ということでやらせてくれました。

伊藤　いい経験をさせてくれたものですね。

宝珠山　ええ。それは、旧陸士の人が二人いたおかげなんだと思います。要するに、旧陸士なので、幹部となるソースをいかに教育するかということを心得ていてくれたのかなと、いま思えばわかりますね。だから、人事というのは長い目で見て非常に役立ちます。後年いろいろ改革を手掛けるわけですが、このときさせられた勉強が役立ちました。

伊藤　この第一課と第二課は、どういう構成になっていますか。

宝珠山　第一課が、幹部人事を直接やるんです。

伊藤　具体的なことをやるんですか。

宝珠山　そうです。誰を海幕長にするか、その発令業務までやります。それから、人の勤評を見て選考までやる。私が入ったとき、初めのときやったわけではありませんが、そこまでやります。

伊藤　下調べぐらいはやるわけですか。

宝珠山　そうです。全部カードをつくって。

伊藤　個人カードがあるわけですね。

宝珠山　もちろんございます。

佐道　人事情報といいますか、どこにどういう人がいてと、すごく詳しくなられたわけですね。

宝珠山　でも、入ったときはそこまでは見せてくれませんよ。しかし、そういうことをやっているのを傍で見ていられるということと、基準ですよね。どういう視点で昇任人事をやるかで、たとえば点数だけで全部やっちゃったら偏るかもしれませんね。それから部隊の組成としては、陸でいうなら戦車兵について一つのピラミッド、砲兵について……とあるわけなんです。海上自衛隊では経補で、補給部門というのは一つの重要なポイントというか職種なわけです。それから、航空があります。艦艇があります。艦艇の中でも機雷もありますし、そういう職種構成ですね。それから、軍隊の人間の質というのはやっぱり職域ごとなんです。これ、全部番号をふられているわけですね。

　それのバランスというのが考えられなきゃいけないし、途中で消えるようなことがあれば、どこかから持ってくることを考えなければいけない。その基礎になるものが、人事ピラミッドの理論的基礎なわけです。これを個別人事に当てはめていく。下のほうではなく幹部人事をやるのが人事一課なんです。もちろん、全部やりきれませんから尉官ですか、一、二、三尉といっておりますが。それから三佐ぐらいまでは基準です。「職域についての配慮をしろ」という基準まで出すところですけれども、そこまではやりますね。

伊藤　あと、具体的なところは各幕でやるんですか。

宝珠山　そうです。たとえば三佐以下になりますと、示された昇任基準で何名までという作業をして、優秀な人を採っていくわけですね。で、昇任する形になる。

伊藤　それは、階級の問題もそうですけれども、要するに付ける部署とある程度リンクしているでしょう。

宝珠山　その通りです。

伊藤　そうすると、複雑な組み合わせになりますよね。

宝珠山　数が多いですから、各幕でやらざるを得ませんし、やらなきゃなりません。上のほうは直接。

伊藤　そうすると、二佐から上は？

宝珠山　二佐は若干口出しをするかと思いますが、一佐から上は固有名詞です。

伊藤　それは、入省して二年目、三年目ぐらいのところでも？

宝珠山　いやいや、やっているところがそこ（人事第一課）なんですが、それを私がやったわけではありません、そのときに……。

伊藤　そうすると、具体的に宝珠山先生は何をなさるんですか。

宝珠山　勉強したのは一年ぐらいですからね。「人事ピラミッド」という軍隊における人事の基礎的な部分をやる機会がありました。もうひとつは服制、礼式についてやりました。どういう制服にするかというときの改定期にありましたので、これをやりました。それから礼式。いまイラクなどに行っていますが、軍隊の礼式というのがありますし、海軍が外に行きますと外に対して礼砲を何発撃つかとか、そういう細かい国際基準をもとにした礼式があるわけです。

伊藤　国際儀礼ですね。

宝珠山　そうなんです、そういうのをやりました。やりましたというのは、まとめる作業などを手掛けました。

伊藤　そうすると、さっきおっしゃったようなことは脇で見ているということですね。

宝珠山　そうです。話が飛んで申しわけないですが、後年人事一課の部員になりますので、そこでの体験を一緒くたにしている部分がありますが。

伊藤　でも、それは見ておられた？

宝珠山　それは、そうです。

伊藤　「ああ、こんなことをやってるな」というのはわかるわけですね。

宝珠山　それはもう隣にいますのでね。会話しているのを聞いていればいい話ですし。

伊藤　翌年に、人事局の人事第二課も兼務になるんですね。この第二課というのは、何になるんですか。

宝珠山　人事第二課というのは、募集をやるところなんです。募集と曹の人事。

伊藤　下士官ですね。

宝珠山　はい。下士官の人事の基準をつくるところまでで、主力は募集でした。

伊藤　このときは、募集はいかがでございました？

宝珠山　厳しい時なんですよ（笑）。それで、引き込まれたんだと思うんです。

伊藤　高度成長の時代にかかっているわけでしょう。

宝珠山　そうなんです。だから、このとき行ったときに外部委託しましてね。

伊藤　外部委託までしていたんですか。

宝珠山　いや、外部委託で「どうすれば募集がうまくいくか」という委託費をとったみたいで――私がとったんじゃないですよ。とって調査したレポートがあるんですね。「おまえ、ちょっとこれ、まとめてくれ」といわれたのを覚えています。そういう要員として引っ張られたのかもしれません、わかりません。

伊藤　当時、集めるのは大変だったでしょうね。

宝珠山　そうなんですよ。だから、上野駅あたりでポン引きをやるとか何とかいわれていた時代なんですね。

伊藤　「浮浪者を集めているんじゃないか」というようなことをいわれて。そのときの隊員は、もしかしたら質が悪いかなという気がしますけどね。

宝珠山　悪いですよ。それは全体悪いですね。しようがないですね。

伊藤　まあ、そうですね。経済で動いているわけですから。じゃ、両方兼ねていた時期が半年ぐらい。

宝珠山　兼ねているといっても、人事一課の仕事みたいなのが終わりますと、人事二課のほうに仕事では来ていましたね。何ヵ月いたかよく覚えておりませんけど。

伊藤　数ヵ月ですよ、五ヵ月ぐらい。

■ 経済企画庁へ出向

宝珠山　そこから、経済企画庁に出ていきますので。

伊藤　これ、何で経済企画庁なんですか。

宝珠山　それはわかりません。わかりませんが……。

伊藤　後年、わかるようなことはないんですか。

宝珠山　加藤さんと話したときに、加藤さんは官房長なんですが経済だということを知っていまして、最初に私を法規課に持って行ったのも加藤さんじゃないかと思うんです。

伊藤　少し勉強させてやろうと。

宝珠山　法律のほうもですね。そのあと経済企画庁に行くのはどうかというのは、そのときにいったかどうかわかりませんが、「他省庁で武者修行をする時期があるんだけど、どこか希望があるかね」ということを聞かれたのは、あると思いますね。

伊藤　選択肢があったんですか。

宝珠山　いや、それはわかりません。わかりませんけど先輩が行っていたのは、いまの経済産業省（通産省）から運輸省、大蔵省はないかな……それから外務省ですか。

伊藤　これは、交流人事ということですか。

宝珠山　当時は交流人事までいってないんですが、実態的には交

流です。各省庁から上のほうは来ていますから。下のほうは交流にはなりませんが（笑）、研修なんでしょうね。

佐道　先生の前に入られた方も、皆さんこうやって外に一度出られたわけですか。

宝珠山　はい、必ず出していました。

伊藤　これはしかし、いい勉強になることはなるんでしょうね。

宝珠山　行ったところによりますね。行ったところで理解者がいれば、ということはありますけれども、作業員として使われる面もありますし、「どうせ使ったって役に立たねえから、放っておけ」といわれるところもあるようですから。

伊藤　放っておかれたら、たまらないですね。

宝珠山　うん、その人たちは後年、伸びが止まりますね。だから、食いついていくぐらいの意欲を持って出て行ったのが、育っている。帰ってきて人事考課を見るとわかりますね。そのときはわかりませんよ。

佐道　いまは、キャリアで入って来られた方はとくに外国の大学に研修に行ったりとかいうこともありますけれども、防衛庁なんかも最近はそういうふうに行っていらっしゃる方々がいるんですか。

宝珠山　これは、また後ほど話すことのほうがいいかもしれませんが、十数年前に防衛庁で、「おまえ、何を強化するのが必要だと思うか」と聞かれたことがあるんです。「それは情報でしょう。情報を強化するといったって、短期間にできる話じゃありません。これは結局は人の質と、長い期間が必要です」ということを主張するわけですが、そのことを申しあげて、「じゃ、誰にやってもらうか」ということになるんですが、しかし日本にはもうそういう人たちが残ってないんですよね。

伊藤　そうですね。伝統が完全に切れちゃっているんです。

宝珠山　そうなんです。そこで、教師を米国に頼るしかないと。

伊藤　そうですね。

宝珠山　米国に頼るということになりますと、日本語では話にならないわけです。秘密のところには絶対入れてくれませんが、できるなら外で飲みながらでもいいから、言葉とともに盗むぐらいの気持ちを持ってもらうぐらいの人を育成する以外にないんですね。あと分析技術なんていうのは、またやりようがあると思いますが。そういう中で、そのソースをつくるために外国旅費を取ること、留学旅費を取ることをやっていったんです。十余年かかって、いま情報本部がようやくできました。この立ち上げの時期からというのは、私がそういったからかどうかはわかりませんけれども、上の人が聞いていたことも確かでありまして、やがてそういうのが動き始めたのがあります。

　それは、当時の（米国の）国防情報局長（ＤＩＡ長官）などにお願いしました。インディアンでしたけど、非常に好意的にずっとやってくれて、伝統が続いています。それで、ようやくできるようになったんですが、私どものときには人数も少ないんですが、そういう発想自体がなかったんだと思います。

伊藤　いま四時前ですが、もう少し延びてもよろしゅうございますか。

宝珠山　私は、構いませんが。

伊藤　一応、経済企画庁に二年間あまり行かれて防衛局に戻られる。私、この次は防衛局のところからお話を伺ったほうがいいかなと思いまして、できれば経済企画庁でのご経験を伺っておきたいと思います。

　経済企画庁の経済研究所国民所得部国民支出課というところに行かれるわけですね。これは、具体的にどういうことをやられるわけですか。

宝珠山　これは、国民所得統計の中の国民支出、消費、政府支出の推計をやる非常に実務的なところでした。政策なしのところです。

伊藤　要するに、調査なんですね。

宝珠山　調査というよりも、統計の作成ですね。

佐道　一日中、数字を睨んでいるような。

宝珠山　そうなんです。当時は手回しのコンピュータでやっていましたので、「こんなことを毎日やったのではかなわんな」と思ってね（笑）。適宜つきあっていましたけど、そのときに行って間もない頃だったと思いますが、日立の大型コンピュータが入りましてね。

伊藤　本当に大きなやつでしょう。

宝珠山　そうですよ。この部屋の二、三倍あるところにダーッと並んでいましたよ。そこだけ冷房がきいてるんですよ、こっちは汗だくなのにね（笑）。しかし、これはプログラムからやらなきゃいけないんですよ。で、「おまえ、研修を受けるか」というから、「それは受けます。こんなのをやってるよりも」ということで。

伊藤　じゃ、プログラミングを？

宝珠山　プログラミングを、フォートランの勉強に行きましたよ。

伊藤　へえ。それは、どこで勉強するんですか。

宝珠山　日立でしたから、どこへ行ったかなあ。

伊藤　日立に行ってやったわけですか。

宝珠山　ええ、日立の機械が入っているから。研修ですから、教育も一緒に受託しているんだと思うんですよ。一クラス五十人ぐらいいたけど、マスターしたのは、極く少数ですよ。

伊藤　そんなものですか。

宝珠山　みんな途中でアウトですから。

伊藤　それは、防衛庁だけではないんでしょう？

宝珠山　いやいや、経済企画庁からの。日立のコンピュータが入って、それを使う……。数学者はいますよ、できる人が。それは研修は必要ないかもしれませんが、その人も行ってましたね。ともかく私も受けるということで、ずいぶん分厚いテキストだったですよ。二進法からだんだんやり始めますと、みんなもう飽きちゃうんですね。あの研修がよかったかどうかわかりませんが、とにかく私は最後までついて行ったんですよ。「とにかく自分のやっている仕事だけはこれでやろう」と思って、取り組みました。

　これをやったから、あとは楽でした。一週間のうち一日も要らないんですよ。下のほうにデータだけ集めさせて、チェックをしたかもしれません。

伊藤　プログラムをつくっておいて？

宝珠山　プログラムをつくっておいて、データを下に集めさせて、あとはパンチカードでしたからパンチさせる。

伊藤　あ、そうだ、パンチがある。

宝珠山　パンチカードのテストを、あれは二回打つことによってチェックしていましたね。ダブルで間違う確率はどうだこうだ、というようなことから来ているんだと思うんです。あとはもうないので、いろいろなことを勉強するというか、

伊藤　その研修は、どのぐらい時間がかかったんですか。

宝珠山　どのぐらい行きましたかね。

伊藤　結構、時間がかかったんでしょう。

宝珠山　何時間かずつ、一週間か二週間行かされました。二週間ぐらい行っているんじゃないかと思うんです。

伊藤　たったそのぐらいのものですか。

宝珠山　いや、その程度しかやってくれないんですよ。

伊藤　でも、プログラムを組むところまでは？

宝珠山　勉強してからプログラムを組み上げるまでは、もっとかかっています。

伊藤　そうでしょうね。

宝珠山　でも、一ヵ月もあればできますよ。電車の中で書いたりしましたから。

佐道　経済企画庁もそうやって大枚の機械を入れて研修して、最後までついて行ったのは先生とあと数人ぐらいで……。

宝珠山　まだ何人かいるかもしれませんが、かなりプロに近い。計算機室の人たちは、それは合格します。合格するというか、やらないと。

佐道　しないと困りますよね。でも、先生は後でまた防衛庁に戻られるわけだから、経企庁はいったい何を（笑）。

宝珠山　いやいや、そんなことといわないでください（笑）。

伊藤　経企庁に行って、ずいぶん儲かったじゃないですか。

宝珠山　そのプログラムはずっと、いまでも残っている……もちろん改訂されて計算式が変わっていますが、引き継いでいっていますから。

佐道　残った時間は、自分の好きな勉強を？

宝珠山　そうですね。だから『東洋経済』でしたか、「書いてくれ」とかいうのは適当にやれますわね。

伊藤　何を書くんですか。

宝珠山　経済予測ですよ。それから景気の予測を書いて、大きく出たこともありますよ。

伊藤　ちょっと待ってくださいよ、でも（笑）。

宝珠山　ひまですからね。「書いてくれ」というから出しますと、編集長が「とにかく載せさせてください」とかいった時期もありましたね。

佐道　本名でお出しになって？

宝珠山　本名だったと思います。課長に聞いたら、「いいよ」というようなことをいっていました。企画庁事務次官になった赤羽（隆夫）さんですけどね。

佐道　ご自身も書いておられたんじゃないですか。

宝珠山　あれ、全部自分で書いていますから、僕らが書いて「悪い」とはいえないじゃないですか（笑）。

佐道　そうですよねえ。

伊藤　原稿料を稼いで、けしからんとか。

宝珠山　原稿料って大したことなかったですよ、あれ。といいますのは、在庫変動が景気変動と直結している時期で、在庫が積み上がってくる。景気がいいわけですから、あと落ちるかもしれないというので私の担当していた在庫統計を注目していた。統計の分析の中でも、在庫統計というのはいちばん難しいんですよ。

伊藤　そのデータの元は、どうなんですか。

宝珠山　法人企業統計です。いまはもう少し早くなっているかもしれませんが、当時三ヵ月ぐらい遅れて来る。速報が出る、確報が出ると繰り返しているわけですね。で、私どもが処理したのを、今度は研究所のほうで分析している者がまた使っていろいろやっているわけですけれども、しかし元データから分析している私のほうがはるかに強いですよ、それは。

伊藤　そうですね。

佐道　先生にしたら、古巣に戻ったというか。

宝珠山　ちょっと前のね（笑）。さっきも話したんですが実務で、非常に小さいところですけれども、しかし企業は企業なわけですよ。それらを通じて企業行動というのが若干、机上でやっている人よりも詳しいですよね。

佐道　結構、居心地よかったんじゃないですか。

宝珠山　やることないですね、コンピュータ化しちゃったら。あと、僕は「他のところもやってあげるよ」といったんですよ。そうしたら、彼らの仕事がなくなるんですよ。

伊藤　あ、そうですね。

宝珠山　反発を食いましてね（笑）。おもしろいものですよ。だから消費統計なんていうのは簡単ですよ、在庫統計なんかと比較しますとね。「（コンピュータ化を手伝っても）いいですよ」といってやるんですけど、課長は「やれ」というんですよ。それをや

っちゃえば、「おまえたちは、あとは分析をやればいいじゃないか」と、課長はいうわけですけど、そうはいかないんですね。

佐道　赤羽さんが課長でいらっしゃったというお話ですが、そうすると経企庁のことはよくわからないんですが、結構、経企庁の中では非常に有力なポジションだったんですね。

宝珠山　でしょうねえ。当時から赤羽さんは嘱望されていましたね。また、私に目をかけてくれた面もあると思います。

佐道　「もう、戻るなよ」とかいわれませんでしたか？

宝珠山　いや、それは部長が後藤さんという方でしたけど、「残ってくれないか」というのは、後年戻るときにいわれました。

伊藤　その気はなかったですか。

宝珠山　いや、もう……（笑）。

佐道　要するに、防衛庁にと。

宝珠山　ええ。それと、やっぱり政策のほうが楽しいですよね。提示された計画官付というのは、いまは計画課になって長期をやっていますけれども、当時からここはいいポストなんですよ。

伊藤　経済企画庁での経験というのは、ここでも活かされたわけですか。それは、活かせない？

宝珠山　……あんまり活かせないですねえ。

佐道　だけど、計画官付というところに戻って来られるということは、経企庁での仕事振りも防衛庁のほうに反映しているということになりますね。

宝珠山　あとから聞いたら、そういっていました。

伊藤　やっぱり状況がわかるんですね。

宝珠山　それは人事同士、全部やりますから（笑）。入ってから四年半たちますかね。この間で、だいたい評価は終わります。

伊藤　そうですか。

宝珠山　それだけ集めるんです、いろいろな人の。

伊藤　それは、やっぱり人事ですか。

宝珠山　はい。人事というか。

伊藤　人事局？

宝珠山　人事局というよりも、キャリア人事を担当している実質的な人々が集める。ここ(計画官室)にいたのが、後ほどもう亡くなりましたが西廣（整輝）さんなんです。実質的に取り仕切っていたのが。だから、呼んでくれたんだと思います。私が直接そういうことを知っているわけではありませんが、「あいつならいいだろう」ということで。

佐道　それまで、西廣さんと接点はあったんですか。

宝珠山　いや、それはありません。見習い会というのがありますから、数十人で酒を飲むときにはありますけれども、それ以外はありません。

伊藤　自ずから、人の評価というのは決まるということですか。

宝珠山　ですから約五年間としますと、直接の上司――課長補佐でもいいですが、それから課長、部長クラス、もっと遠いところも見ている。各職場で三人ぐらいにしますと、十人ぐらいの人の評価が出てくるんですね。それはプラスもあるでしょうし、マイナスもあるでしょう。いろいろ言うんでしょうが、それを集めると「将来、こいつはどこのあたりに向くか」というのは出てくるように思いますね。もちろん、その後ミスがあると途中で逸れますけれども。

伊藤　まあ、そうでしょうね。やっぱりそれは能力と、人柄もあるでしょう？

宝珠山　防衛庁の場合には、人柄は抜きにできませんね。それは、ユニフォームを束ねていかなければいけませんから。束ねるという言い方がいいかどうかわかりませんが、うまく協力を得なければ仕事はできないですね。自分の思い込み通りにいくわけではありません。それぞれ言い分があるわけですから、言い分と法的な枠組みと、それから政策的な枠組みと、うまく説得をする分野で

すね。強行できない分野がないわけではありませんけれども、多くは説得を通じてやる行政の世界、法律の執行ではないんですよね。税務署で税法に基づいて「こうだよ」と、どうにもならないという世界じゃないんですね。内局長官の政策と法律の枠組みの中で執行しようとする行政の、あまり権限がなくて説得をしなければならない。相手は大きな武力集団という関係者を相手にするということなんですね。だから、人柄というか、人の質というものは大きく関係があると思います。

伊藤　わかりました。他に経済企画庁のときの思い出として、お話しいただいておいたほうがいいようなことはございますでしょうか。

宝珠山　防衛とは関係がありませんが、このときに行ったときに国民所得統計のあり方を国連方式にって、ＳＮＡ方式と言っていたと思いますけれども、これに切り換えるという時期がありまして、従来のルーティンの仕事と、その部分の統計の方式を切り換える作業が並行的に流れておりましたので、ロードが山をなしていた時期がありました。

伊藤　じゃ、かなり忙しかったということですか。

宝珠山　まあ、忙しいと言ったって大したことないんですけれども、普通に比べると、その切り換え時期ですから制度を切り換えるみたいなものですので。おそらく赤羽さんが来られたのも、そのためじゃないかと私は思います。

伊藤　統計のとりかたが変わるわけですか。

宝珠山　国内方式から国連方式……。

伊藤　国際的に通用する共通のインデックスにするわけですね。

宝珠山　そういうことですね。そういうやり方にするというものでした。

伊藤　その基礎になるデータは？

宝珠山　いままでは、さっきいった法人企業統計からデータを取ってきていたんだけれども、これでいいのか、他にないのか、あるとすればどんなものがあって、どういう利点があるのかということを比較することになりましょうか、一例としていえば。実態的に大きく変わったとは思いませんけれども、そういうことをやらざるを得なかった。

伊藤　それは、チームでやるんですか。

宝珠山　チームというよりも、国民支出の中でも消費グループ、在庫投資グループ、設備投資グループとありまして、私は在庫と設備の両方やったかと思います。投資グループ、難しい部分なんですが。それから政府支出。政府支出は、これは予算をみるよりしようがありませんので。輸出入がありますかね、そういうグループ。それから別の所得部門というのがあるんですが、それを分けて。

伊藤　統計の数というのは、かなり多いんでしょう？

宝珠山　扱う数ですか。すごくたくさんありますよね。その中から選択するということと、チェックとして使う部分もあったかと思いますけれども。おそらく私が（防衛庁に）戻ってくるのが十一月になったのも、若干それが関係していたかと思うんです。普通ですと、七月には戻ったんじゃないかと思うんです。夏の異動……

伊藤　その切り換えの問題ですか。

宝珠山　あったと思うんです。

伊藤　わかりました。大変おもしろいお話を、ありがとうございました。次回からいよいよ本番で防衛問題に入りますので、ひとつよろしくお願いいたします。今度は、質問要綱をつくりましょうね。

佐道　はい、簡単なやつをつくって、前もってお送りいたしますので。

伊藤　次回は、三月十六日の午後三時から五時ということで、よろしくお願いいたします。

〈終了〉

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第２回

開催日　2004年3月16日（火）
開始時刻　15：00
終了時刻　17：20
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（政策研究大学院大学 元助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

第2回 インタビュー質問項目

2004年3月16日

1

昭和四十二年（一九六七年）十一月、防衛庁防衛局計画官付となられます。当時の計画官は高橋定夫氏（後に調達実施本部長）でした。どのような方か、ご印象などお願いします。また、計画官の下には、部員として伊藤参午氏（後に防衛研究所長）、西廣整輝氏（後に次官）、山下雅巳氏がおられました。そうそうたる方々ですが、それぞれのご印象や計画官室の雰囲気などはいかがだったでしょうか。

2

計画官は長期計画を検討するところだと思いますが、当時は三次防も主要項目の策定まで終わっていた時期でした。計画官室の最重要な仕事はなんだったのでしょうか。また、先生ご自身はどのような業務をご担当になったのでしょうか。

3

先生が防衛庁にもどられた四十二年には、七月末に次官確実と言われていた海原氏が官房長から国防会議に転出し、海原氏と近かった有吉久雄防衛審議官も防衛研修所長に異動になるなど、庁内にかなり波紋を生んだ人事の後でした。こういったことは戻られて何かお感じになったことはございますか。

4

四十三年四月から防衛庁部員になられ、六月には防衛課に移られています。伊藤参午氏と西廣整輝氏も防衛課の所属となっていますが、これは計画官室がなくなったということでしょうか。

5

当時の防衛局長は宍戸基男氏、防衛課課長は今泉正隆氏、防衛課には伊藤、西廣氏の他にも池田久克氏、児玉良雄氏などおられました。計画官室から防衛課に移られてのご印象などお願いします。

6

防衛課に移られてからの先生の直接のご担当はどういった業務だったのでしょうか。四十三年十一月に増田課甲子七長官から有田喜一長官に替わり、次期長期防衛計画も準備に入っていますが、これに関係されたのでしょうか。

7

四十四年四月、経理局会計課を兼任されていますが、これはどういったことなのでしょうか。予算を担当されたということでしょうか。

8

防衛局防衛課と大蔵省出身の局長（佐々木達夫氏）、会計課長（星野孝俊氏）がいる会計課ではかなり雰囲気など違うのではないかと思いますがいかがでしたか。ちなみに、当時の経理局には後に金融担当相などになられた柳沢伯夫氏もおられたと思いますが、同氏のご印象はいかがでしたか。

10

四十五年一月には中曽根康弘氏が防衛庁長官に就任しました。中曽根氏は自ら望んで防衛庁長官に就任されたといわれ、自主防衛論や非核中級国家論、専守防衛などを唱えたのをはじめ自衛隊員との対話などさまざまなパフォーマンスも行いました。中曽根氏の長官就任について防衛庁内はどのように受け止めていたのでしょうか。先生ご自身は中曽根長官についてはどのようなご印象を持たれたのでしょうか。

※今回は以上のような問題を中心にお願いします。

（開始前）

伊藤　前回は、大変充実したお話を本当にありがとうございました。読み直してみて、とても面白かったです。

宝珠山　前回は、私事が多いから気楽でしたけど（笑）。

伊藤　ここから先だって、だいたい皆さんおっしゃっている話と重なるところが多いんですね。

宝珠山　多分そうだと思います。

伊藤　この間いただいた資料を読ませていただいて、いろいろなことがよくわかりました。

宝珠山　佐道先生から大変なご労作をいただきまして、詳細に読んだということではございませんけれども、とにかく大急ぎで読ませていただきました。ありがとうございました。ああいう関心をお持ちの方がいらっしゃるというだけで、大変うれしいです。

伊藤　本当に戦後、日本の防衛政策についての初めてのまとまった研究だと思うんです。それだって、さっき（始まる前に）お話ししたようにマル秘の史料がいろいろ手に入ったからできたことでありまして、やっぱり防衛庁なら防衛庁が努力していろいろなことをやったことを、自分で記録をなくしてまとめられないという状況は実に情けない。胸を張って、「われわれは、こうやってきたんだぞ」と言える……。

宝珠山　そうなんです。ある時期からは、そう言えるんです（笑）。

伊藤　それをやれないというのは、本当に情けない役所だと逆に思いますね。

宝珠山　だから、話が飛んで恐縮ですけれども、さっきおっしゃった史料室というか庁史室をつくりました時も、渡邉昭夫さんに主催していただいて詳細に編纂していただくことはできないか、というようなことを検討したことがあるんです。やっぱり部外の目で、ずっと一貫して確立した視点で編集する。

伊藤　それはそうですよね。

宝珠山　ただあったことを、ちょこちょこっと日誌風にまとめるということではなくて、体系立ててできないかなということをやったんですが、これ（予算）がなかなか取れなくなっちゃって、ちゃちなもの。しかも、それも発刊するに至らずに『朝雲（新聞）』に掲載しただけで終わったんです。『朝雲』に掲載する時も、「全部はいやだ」とか何とかいうのがありまして、若干トラブったことがあるんですが、とにかくこの時代になって草創期のことをできる範囲で出そうということで、『朝雲』に出したんです。

伊藤　それはようございました。本当にあの頃、わからないんですから、もうね。

宝珠山　だから、あの時の資料を含めてもう一度整理すると、このあたり（昭和四十年代）まではもっと深まるんです。

伊藤　そうだと思いますけどね。なにせ、元になるデータがないものですから。

宝珠山　それはしかし、誰かが処分したのかな。

伊藤　あるいは、編纂に関わった人が持って行っているのかもしれませんね。よくあるんです。歴史の編纂をやりますと、編纂した人が自分が使った史料に対して愛着ができてきまして、自分のもののような感じで。

宝珠山　持って行く。

伊藤　ええ。役所の中で必ずしも仕事ができないからというので、自分の家に持って帰って仕事をして、そのうち自分のものになっちゃうという。

佐道　庁史室の関係ですと、渡邉昭夫先生の関係でうかがったら、最初の頃にいらっしゃった渡壁さん、それからその後を引き継がれた澤田さん、こういう方々が「ない」とおっしゃるんです。『十年史』を集めたときの史料も、できた段階で一度、元のところに戻したという言い方をされているんですね。

宝珠山　そうですか。戻したら、それはあり得ますね。

伊藤　戻したといったって、計画官のところになんか戻りようがないじゃないですか。

宝珠山　いやいや、後ほど説明しますが、それは全部継承していますから。

伊藤　防衛課にですか。

宝珠山　はい。

佐道　とにかく後はどうなったか、また同じように……。

宝珠山　それはあると思います。それは、処分するはずはありません。

伊藤　おそらく編纂するといっても、各部署が資料を出さないというのは、普通どこでもよくあるんです。県史の編纂なんかやっても同じですよ。総務は出すけれども財政関係は出さないとか、セクショナリズムですから。「ないよ」と。面倒くさいんですよ。

宝珠山　あるもないも、あることを知らない人がいるんだと思います。

伊藤　まあ、それはありますね。

宝珠山　しかし、眠っているロッカーの中にあります。それはあると思います。

■防衛局計画官付に異動

伊藤　早速ですが、昭和四十二年に防衛局の計画官付になられますね。計画官の問題については、配っていただきました資料でだいたい成り行きがわかったんですが、当時、計画官は高橋定夫さんですね。「付」というのは、何なんですか。

宝珠山　これは発令の様式だと思いますが、課ですと勤務で発令されるんです。たとえば、「防衛課勤務を命ずる」と。ところが官ですと、官に勤務はないわけですから「付」という。

伊藤　ああ、そうですか。それで「付」になるんですか。

宝珠山　はい。ですから、私が入った時も法制調査官付なんですね。実務は、法規課業務なんです。なぜ官になったかというのは、これは行政改革の関係で……。

伊藤　課を減らしたんですね。

宝珠山　「一課減らせ」と言われると、仕事の内容はなかなか減らせないから、たとえば法規課（業務）を削れなんて役所はないですね。そうすると、「法制調査官」として、実態は同じものを残す。こういうことを言っていいのかどうかわかりませんが、（行政改革の）実態は各省庁とも同じだと思います。

伊藤　そうです、そうです。

宝珠山　それで出来た「官」なんです。

伊藤　計画官の下に部員として、伊藤（参午）さん、西廣（整輝）さん、山下（雅巳）さんという方がおられると。そうすると、計画官の下に部員というのがいるわけですね。

宝珠山　はい、そうですね。

伊藤　宝珠山さんの場合は、部員ではない？

宝珠山　まだ部員になる資格がない時、防衛庁事務官のままで、仕事は部員の仕事を引き継ぎました。

伊藤　そうなんですか。

宝珠山　はい。だから、前任者は池田久克さんです。

伊藤　それは、部員なんですね。

宝珠山　はい。池田久克部員が当時の防衛局第一課のほうに移りまして、空いたところに私が入ったんです。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。若干逆上りますけれども、防衛局の中で第一課というのが年度計画と、年度の運用をやっていたわけです。だから、事件があったりすると徹夜になって働かなきゃならんというような状況があるわけですね。事件というのは、災害派遣等でござい

ますけれども、地震でもいい、台風でもいい（その時の対応を担当している）わけですから。それと、年度の計画もやっているということで、大変忙しい課であったわけです。

計画官というのは中長期の計画をやるようになっていたわけです。三次防というのは、ここ「基盤的防衛力構想」の原型に書いてある伊藤参午が航空の担当、西廣整輝が海の担当、池田久克が陸上の担当、山下雅巳が研究開発とオペレーションズ・リサーチ（ＯＲ）の分担でやって、私が来る前に主要項目というのを閣議で決定し、これは「秘」になるのかもしれませんけれども、「主要項目」を決めるにあたっての詳細な数値の入った年度別計画が極秘文書であるんです。その原稿までつくったところで、池田は第一課のほうに航空の年度担当で転任しております。その後に私は入った。

私はここに入りまして、まだ部員の資格はありませんで翌年の四月一日で部員に発令されるわけですが、事務官のままで部員の仕事を引き継ぎました。引き継いだのは、陸上の中長期計画と、山下雅巳氏が持っていたオペレーションズ・リサーチ、研究開発というのを引き継ぎまして、山下氏がその時は何を引き継いだのかな……先任部員の伊藤参午さんが航空を担当していたが、その後の航空の担当になったと思います。

伊藤　じゃ、少し異動があったわけですね。

宝珠山　そういうことです。その異動含みで私が入って来た。長期計画は、三年ぐらいの作業期間があるわけですが、それを一通り終わりますと一段落したということで人事が行われるわけですが、その時期にちょうど当ったということになりましょうか。

伊藤　この高橋さんという方は、後で調達実施本部長になられますが、どんな感じの方でございますか。

宝珠山　高橋さんは「三次防」はやっておりません。「三次防」を実際にこの伊藤参午、西廣整輝、池田久克、山下（雅巳）等を使って作ったのは、玉木清司さんです。彼は、もうその時には「主要項目」を終わっていますから転任しているわけですね。その後に高橋氏は来ていますから、何も「三次防」実務はないんですね。

伊藤　じゃ、上の方という感じなんですか。

宝珠山　ええ、当時ですね。ある意味で、休暇の期間なんです。といいますのは、計画官というのは五年ごとしか作業がないわけです、実務的には、五年の前半は準備のフォローの時期です。だから、季節労務者というんですが（笑）。

伊藤　ちょうど一段落したところですね。

宝珠山　のところに、高橋氏は来たということだと思います。高橋氏は松野頼三長官の秘書官をやっていたので、それを終えて回ってきたということだと思います。

伊藤　あ、そうなんですか。

宝珠山　防衛には大変熱心な方でありました。

伊藤　それは、高橋さんのことですか。

宝珠山　はい。三次防が終わって、「次の五ヵ年計画を担当するんだ」という意気に燃えて、ご着任されております。実際には、そういうことをやることなくに替わりますけど。

伊藤　また転任ですか。

宝珠山　転任というか、計画官室と防衛課が一体になりますので、今泉（正隆）さんのところに課長職は行きますから。

伊藤　そういうことですか。

宝珠山　非常に張り切って、三次防で提起された問題点をどう解決して取り組むかということを、いろいろやられておりました。

伊藤　これはもう伊藤（参午）さんたちで、だいたい三次防の骨格が固まっていて？

宝珠山　もうこれは、決定済みで手をつけられない、修正はできない状態です。ですから私どもが行った時は、次の四次防に向け

ての準備期ですね。種をまくというか、まだ種をまくにも至らないかもしれません。

伊藤　じゃ、先生にとってはちょっと休暇みたいなあれですか。

宝珠山　休暇というか、私はまだこのとき入庁して四年半なんです、防衛庁に入って。だから、まだ仕入れの時期ですね。だから、非常にいいポストではありました。

伊藤　勉強するのに？

宝珠山　はい。いきなり計画が進んでいる中に行ったら、主導権ないですよ。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　今までの流れの中に入るという形ですね。ここはまだ、三次防は終わりましたけれども、四次防をつくる土台となるものでありますが、ここ（三次防）で提起されたいろいろな問題を抱えて、次どうするかというのは自分で考えるし、考えるための材料とか、そういうのを仕入れる時期であったと思います。

この時までに、法制調査官付から人事一課、人事二課と動くわけですけど、防衛らしいことはないですね。法規にしましても、それは佐道先生がおっしゃるように特殊な用語はありますよ。しかし、法律は法律ですしね。文部省であっても外務省であっても同じだと思います。人事といったって、仕事はありますけど、これはどこでも通じる人事ですね。経済企画庁に行ったら、国民経済計算なんですけれども、これはもっと一般的なことですね。

ここに来て初めて、防衛らしいものに接するんです。同時に、今は『防衛白書』など、善悪は別にしましてソ連（軍）の配置とか、米国（軍）の配置とか、中国の軍事配置とか、持っている飛行機の性能とか、できる限りバラすというかオープンにやっています。これは、私どもがそういうことにしようということで、そうすることが国民の理解を高める道だという心構えで、「できるだけ出そう」ということで『防衛白書』につながって行き、公表されていますが、当時は人事一課にいたって中国のことなんか、ソ連のことなんか、とんとわからないです、軍事配置は。「極秘」の判を押したものを持って来まして見せるぐらいなんです。「よこせ」といったって、だめなんですよ（笑）。そういうところでしたが、もうここは堂々と……。

伊藤　何でもデータを要求できるわけですか。

宝珠山　要求できる。持って来なきゃ「おかしいじゃないか」と言えるし、「つくって来て」「調べて来て」ということは、事務官の権限じゃありませんよ、計画官の権限、計画をまとめる立場の権限として要求できるわけですね。そういうことで、ここはまだ仕入れ期なんですが、非常にいいポストをいただいたと思います。

といいますのは、役人というのは法律に強いか、人事に強いか、数字に強いかということがあるわけですが、人事と法律をひと通りやって、数字は場所は違いますけど経企庁でやって、ここで（防衛の）数字の実体の部分に触れることができるということで、いま思えば非常によかったと思っています。

伊藤　非常に新鮮な気持ちなわけですね。

宝珠山　そうですね。おそらく防衛庁に入って、最も防衛庁らしいことを感じられた課だと思います。私の同期などはここを経由していませんから、こういう感じを持たないんじゃないですかね。今たくさん入って来る人たちは、防衛課を経験することなしに卒業していくということがあるんじゃないでしょうか。

伊藤　やっぱり防衛課を経由しなければ、本当の政策官庁としての防衛官僚にはなれないと？

宝珠山　基礎ができないですねえ。

■内局と幕僚監部

伊藤　この計画官室というのは、どんな雰囲気のところですか。

だって航空だ、陸上だといったって、みんなお互いに関係があるわけでしょう。

宝珠山　ええ、これは内局の組織というものについて若干、触れたほうがよろしいかと思うんですが、経営学の系統でいいますとライン・アンド・スタッフで、内局自体がスタッフ機構なんですね。したがって、ラインにあたるところが――いちばん最後は部隊ですけれども、その中間に幕僚監部というのがあるわけですが、当時は第三部が窓口で、三部の業計班があるわけですが、ここは幕僚幹部の中で中期、長期（等の計画）を扱うところなわけですね。ここを窓口にして、弾薬ですと武器課だったかと思うんですが、そういうところに発注するんですね。募集や要員ですと、そこを通じて当時第一部ですが、そこに人事資料をつくらせるという形で、全部を計画官のところに集約できる形なんですね。私は陸だけでしたけれども、各部員が自分で企画しながら、あるいは相談しながらデータを積み上げていったところです。

伊藤　計画官室というのは一種、会議みたいなのがあるんですか。

宝珠山　計画官室で会議というのは、高橋さんは自分の勉強もあって時々会議はしておりましたけれども、計画官室の中ですり合わせの会議というのは、当時はあまりない……。

伊藤　ないんですか。

宝珠山　はい。すり合わせをやるところは、局の審議です。そこで部員が案をつくりまして、中で先任部員というのがいますが、この時は伊藤参午さん、あるいは西廣（整輝）さんになるわけですけれども、指導を受けたりしまして、「いつ、局長のところに説明しましょう」ということで、そこに先任部員とか課長とかが出てきて、部員が説明をして叩かれる、また持って帰って修正をする、という過程になりますか。

伊藤　防衛局全体の中の？

宝珠山　防衛局全体ではありません。局長のところに計画官が出席し、それから当時は年度担当が出席していたかもしれません。

伊藤　防衛課長は？

宝珠山　防衛課長も、大変忙しいので、出れればということになります。それで、主として部員が提案をして審議を受ける。そういうのを積み上げていくことになります。

伊藤　今度は、四次防に向けての準備ということは、部員なり部員に代わるような先生のような方が個々におやりになるわけですか。

宝珠山　当時は、まだ長官が「四次防をつくれ」ということを指示する段階ではないわけです。しかし、過去一次防、二次防、三次防と三回やってきた経験から言いましても、少なくとも中期計画は必要だという認識は一般化していて、どこでやるかといえば、それは計画官室だというのは完全なコンセンサスでありますから、行かされる私どもも、年度のことではないと。三次防でできるといっている実態を踏まえて、その上に何を積み上げていくかを考えるということは、無意識に学んでいたと思います。

佐道　この長期計画に関して、とくに松野前長官なんかもそうだったと思いますが、二次防、三次防も五年計画でやっているところを、たとえば三年ぐらいの中間的なローリング方式でやろうというようなことが言われていたと思いますが、計画官室の中でローリング方式を導入してやるということについては、何かご議論をされていたのでしょうか。

宝珠山　これは、後に説明したほうがいいかもしれませんが、計画方式としては一年ローリングとか、三年ローリングとかといろいろあるわけです。

伊藤　一年ローリングというのは、毎年じゃないですか。

宝珠山　はい、米国は一年ローリングなんです。

伊藤　一応、五年なら五年の計画をつくっておいて？

宝珠山　五年の計画を毎年つくっていくんです。

伊藤　あ、ずらしていくわけですね。

宝珠山　はい。それだけの能力を米国は持っているんですね、マンパワーを。しかし、今おっしゃった一年ローリングというのは、日本では「とてもそれ、できないよ」と。だって毎年国防会議で、海原さんがいたからかもしれませんけれども（笑）、主要項目と大綱とを作らせられるわけですね。これを毎年やられたら、かなわんです。それは、当時は、毎年そんなことをする折衝力がなかったということじゃないかと思います。

そこで出てくるのが三年ローリング。五年計画を持っていて、三年は非常に硬くしておくというもので、三年たったら、また三年足して五年……とやっていこうというのが三年ローリングなんですね。これ、二年だっていいですよ。二年だったら、四年というのがあるかどうか知りませんけど、政治家は四というのはあんまり好きじゃないですからね。「死」ということでしょうか。だから、それは外向けに二年ローリングで決めるか、三年ローリングで決めるか、五年固定でするかというのはあるんです。

伊藤　議論としてはあったわけですか。

宝珠山　それはあります。しかし、それはここで、いまこの時期に決める必要はないですね。少なくとも五ヵ年計画を持っておけば、上（国防会議議員など）のほうが「三年までは硬く決めよう。あとの二年はソフトにしよう」というのは、最後の決着段階なんですね。ですから、化粧の世界であって、素顔は五年か六年は常に持っているんです。実体的にいいますと十年持っているんですよ、計画官は。オーソライズしてない部分が五年分くらいあるということなんですね。

それから何年ローリングという場合も、オーソライズの期間に着目した計画方式なんです。だから計画官室の中で、とくにまだ何が……四次防は作られるかどうかさえ、当時は計画体系がないわけですから……。あれは、七六年大綱をつくった後で、私どもが防衛計画の体系化を計ったんです。これは後にお話しさしあげたいと思いますけれども……、ないわけです。四次防を作るということを、予告さえされてないんです。今は、計画体系によって、常に予告されているわけですね。

しかし、そういう時期ですから、とにかく十年ぐらいを頭において、前の五年ぐらいを四次防にする可能性があるだろうということを思って作業に入る時期です。作業に入るというか、私どもの頭の中にあるということになるかと思います。

伊藤　そういう場合は、前任者からの引き継ぎというのはかなり大きな意味を持つんですか。

宝珠山　ただ、私が行きましたときは、池田久克部員はFXの担当にすぐ移ったんです。数週してだったかと思うんですが、海外へ調査団で出て行くんですね。そういうことで、密接に池田部員から説明を聞くという時間はなかったです。したがって、誰から聞いたかといいますと、陸幕の中に三次防をずっと担当してきた人たちがおられて、その人たちが経過を要約して説明をしてくれました。

伊藤　これ、部員の下に人がまだついているんですね。

宝珠山　いやいや、幕僚監部の。

伊藤　幕僚監部のほうですか。

宝珠山　はい。部員の手伝いをするのは、幕僚監部の自衛官です。課長補佐ですと、係長がいるイメージですね。しかし、防衛庁の部員というのは部員なんですね。個人なんです。

伊藤　スタッフですね。

宝珠山　そうだと思います。しかし、これは大変な権限があるんです。課長よりも普通、強いと私は思っています。各幕僚監部のすべての課を――直接ではありませんよ。陸の場合には三部の業計班なりを通じて、必要なのを全部つくらせることができるわけです。

伊藤　だけど、個人でそういう権限を持ったら、その人が突然病

死したら大変なことになりますね。

宝珠山　それは、ありますね。

伊藤　つまり、その人の頭の中にしか物がない。書類はあるでしょうが。

宝珠山　それはございますね。

伊藤　非常に危険な組織のような気もしますけど。

宝珠山　一時期、二人で主と補ということで組み合わせることを相談したことはありますが、これはうまくいかないと言っていました。

伊藤　やっぱりそうでしょうね。

宝珠山　はい。ほぼ似たような、二年ぐらいの年次をおいてこっちが主（担当）で、他方が副（担当）ということを、やったことがあるかもしれませんけれども、これはうまくいかないです。

佐道　防衛庁の組織の問題ですが、参事官制度ということ自体が、よその省庁の参事官と全然違いますね。

宝珠山　（当時は）防衛庁参事官ですね。

佐道　防衛庁という組織は、本当によその組織とかなり違う組織体系になっていると思うんですが、たとえば課の中でも課長がいらっしゃって、あとは皆さん部員で、もちろん先任部員という形になりますけれども、課長補佐――首席事務官でも何でもいいですが――という形で、「よその省庁に合わせよう」みたいな動きというか意見は出なかったんでしょうか。

宝珠山　何度か出たと思いますけれども仕事の内容が……、今いった部員というのは年次的には他の省庁では課長補佐、係長であったり、課長補佐だったりするわけですけれども、仕事のやり方、内容は違うんですね。係長をつけるといったら、今度は陸・海・空と必要になり、かつ陸のことが全部わかる人などいないですから（笑）。弾薬もわからなきゃいかんし、航空機もわからなきゃいかんということになってきちゃうと、これは係長の分担ということにならない。また、定員をとれない数になりますね。したがって実態としては、先ほど申しあげたように陸上幕僚監部の二佐、三佐クラスの働き盛りが係長役なんですね、部員の。

佐道　部員で係長。

伊藤　実態は、そこのスタッフなんですね。いや、わかりました。それでなかったら、たとえば僕は大蔵の主計官のことを考えていたんですけど、主計官は主計官の下にいるじゃないですか。

宝珠山　主計官補佐がいますね。

伊藤　そういうのがなかったら、主計官はやっていけないと。

宝珠山　と思います。さらに主計官補佐だってやって行けないんですね。あそこで知恵を出しているわけじゃないですから。あれは、持って来たのを切るだけなんです。財政枠に合わせて。

伊藤　だけど、相手のこともよく理解してないと。

宝珠山　それはありますけど、相手のことを理解するということで言えば、私どもは部員を今度は理解させる側がいるわけですね。

伊藤　そうですか。後でまた大蔵省の話が出てきたときに（笑）。

宝珠山　部員と幕僚監部の、部長じゃないですよ。部長じゃない班員ですよね。班長以下は……。

伊藤　じゃ、その人たちが部員に理解させようということですね。

宝珠山　そう。自分の意見を通すようにしようと持ってくる。それを見破りながら、いかにやるかということ。

伊藤　いい知恵も、ちゃんと引っ張ってということですね。

宝珠山　そうですね。向こうもまた、どういうことをやりたいと考えて、それに向けたハンドルを切った資料をつくってくるとか、どうしてもだめな部分は、「これこれでだめだ」という理由をきちっと説明すれば、それで通るという世界ですね。だから、この前申しあげたと思いますが、権限がなくて、やっぱり説得の関係ですね。非常に人間関係によると思います。強権的にやってうまくいった人は、いないですね。

伊藤　権限があるわけですから、強権的にやろうと思えばできないことはないわけですね。

宝珠山　それはできないことはないですけど、上のほうに上がっていった時に、幕僚長が「これはだめだ」といったら、これはもう部員は大恥ですからね。参事官会議の前に行って、幕僚長と取引できればいいですけど、幕僚長に対して振り付けるほどの権限があるわけじゃないですから。幕僚長が、参事官会議あるいは長官のところに行って、絶対ノーとはいわないところまでは説得しておかないと、それのやれない部員は取り替えます。事前に上がってきますけどね。

伊藤　部隊に行って、実施の仕事とは全然違いますね。

宝珠山　違います。実行作業じゃありませんよ、ラインの作業じゃありません。内局の仕事というのは、大部分が計画ですよね。

伊藤　そうですね。

宝珠山　ですから、現場のことをどの程度かは別として、間接的になるべく広く、公平に掴むということが必要だと思います。

佐道　それにしても、先生は自主的に事務官で部員の仕事をしておられたわけですけれども、事務官から部員になられるというのは、かなり大きな違いになるわけですね。

宝珠山　給料が上がりますね（笑）。

伊藤　金の面では、そんなに違わないでしょう。だって、現実にとくに……。

宝珠山　それは、違います。事務官の間は、残業手当てなんです。

伊藤　部員は、だめですか。

宝珠山　部員は二十四時間勤務ということで、自衛官と同じ給与体系に入るんです。

佐道　あ、そうなんですか。

伊藤　僕らも残業手当てはなしです（笑）。二十四時間勤務ですから。

宝珠山　それは事情はわかりませんが、部員は災害派遣などで徹夜をしようと何をしようと、給料が増えることはないんです。

伊藤　手当てもなしですか。

宝珠山　残業手当はありません。

■海原治氏に対する庁内の評判

伊藤　話が変わりますが、さっき海原さんの名前が出てきましたが、皆さん「カイバラさん」とおっしゃっていましたか、「カイハラさん」といっていましたか。

宝珠山　「カイバラさん」でしょうね。

伊藤　先生が防衛局に行かれる前に、海原さんは官房長から国防会議の事務局長に行かれるわけですね。これは、相当大きな決断だったと思うんですね。

宝珠山　私はちょうどその頃、今の財務省の建物にいましたから、わからないというのが実際です。

伊藤　でも、行ってみたらいろんな話を聞くじゃないですか。

宝珠山　それは、当時から漏れ聞いておりましたね。しかし、私の理解する限り、海原さんと有吉（久雄）さんは近過ぎますね。個人的に近すぎるという面があるんじゃないでしょうか。それと、やっぱり部下であることを堂々と宣言もしていた方だと思います。その点、堀田（政孝）さんとはちょっと違うんだと思うんです。堀田さんは、もう亡くなりましたが。私どものところに聞こえてくるのは、内局の人たちにしろ、ユニフォームの人たちにしろ、海原さんはあまりにも人気がなかったですね。

伊藤　内局でもですか。でも、海原派みたいな……。

宝珠山　海原派というのは、有吉さんに、伊藤（圭一）さんと夏目（晴雄）さんが入るんですかねえ。そのあと、西廣さんぐらいじゃないですか。

伊藤　西廣さんもそうですか。

宝珠山　多分私は、その中間ぐらいまでにはいたと思いますが。

佐道　いわゆる海原学校という言い方をされているのは？

宝珠山　おそらくそのあたりまでですよ。池田氏も、あまり良くはなかったですよね。

伊藤　先生になると、もうこんなに離れちゃっているわけですね。

宝珠山　そうです。池田さんは中曾根さんの秘書官もやったりしておりますから、これは全然よくなかったと思いますし、その他で支持者というのはまずないんじゃないでしょうか。一期生は、もう全然だめ（不支持）ですね。

伊藤　幕僚監部のほうもだめですか。

宝珠山　幕僚監部のほうは、もっとだめですね。私どもが接するクラスですから、上のほうじゃありませんけど、一佐から二佐クラスのいちばん……。

伊藤　でも、いちばん大事なところじゃないですか。

宝珠山　そうなんですよ。そのあたりに、人気はなかったですね。

伊藤　でも、あの人は「陸原」なんて言われて、陸にはよかったんじゃないかなと思ったんですけど。

宝珠山　しかし弾薬のことなんか、陸をぶっ叩いていましたからね。

伊藤　弾薬をもっと増やせということですか。

宝珠山　「増やせ」というんだけど、そんなに先生、「増やせ」といってすぐ増やせるものじゃないんですよ。片方で予算を切ってくるわけですから、予算を押さえているわけですからね。弾薬ばっかり買ったって、火砲がなきゃだめですからね。

伊藤　まあ、それはそうですけどね。

宝珠山　話が飛びますけど、四十分とか五十分、火砲を撃ち続けるなんてことはできないですよ。銃身が焼けちゃって、ポロッと（曲がる）なっちゃうんです。だから、冷やす必要がある。冷やさないとだめなんです。日本はあんまり実弾演習をやらないから、古い銃身で撃っていますけど、米国などは予備部品で銃身を一緒に持っていくんです、訓練でも。

伊藤　予備を？

宝珠山　ええ、取り替えないと撃てなくなる。危なくなるんですね、焼けちゃって。

伊藤　逆に危険。

宝珠山　はい。ですから、弾薬だけつくればいいというものではないんです。弾薬を一定量取ったら、銃身をどうするかというところまで考えなきゃいけない話なんですね。それから、弾薬のメーカーは小さいところですから、ボンと一挙に多量に作るなんていったら人の養成から考えなきゃいけないんです。あの当時でも――今はちょっと違うと思いますが、小さいところは旧軍時代の技術と人で細々と手工業的にやっているところなんですね。

それから、私が四次防の「防衛課概案」という中で、ここ（「陸自関係計画の問題点と整理の方向」「弾薬の備蓄目標」）にも出しましたけれども、内容はこの資料には書いてありませんが、「そういうことを考慮すると、このあたりが限度だ」ということを申しあげたんです。

伊藤　弾薬の劣化という問題もあるんでしょう？　あんまりないんですか。

宝珠山　劣化はありますけれども、劣化を心配するような時期じゃないと思います。劣化するということが明らかであれば、それは訓練で撃ってしまえばいい話なんですが、訓練を節約して備蓄に回そうという時期ですね。弾薬が力の大きな根源であるというのは、誰かにいわれなくてもよくわかっている話なわけですが、なかなか簡単には増やせない。

伊藤　海原さんは、旧陸軍はいかに弾薬の備蓄が足りなかったかということを。

宝珠山　言われていましたね。いろいろ書いておられます。

伊藤　繰り返し、われわれもずいぶん聞かされました。

宝珠山　しかし、当時もそうだと思いますが、四十分か六十分か覚えておりませんけれども、そういう時間、撃ち続けるということはないです。（砲身が）焼けちゃうんですから。一定時間撃ちますと、真っ赤になるそうです。当時の鋼材の能力は。今はよくなっているかもしれません。ただしかし、海上の護衛艦が積んでいる二十ミリ機関砲でも一分間に千二百発とかいいますけれども、ガガッと撃って止めるんですね。止めなきゃだめですし、そんなに続けて撃ったってしようがない話ですね。だから、それには耐える。何秒間かあれば、また冷やしてというようなことはあると思いますが、あれには銃身の補充がなされるように、予備品を持つようになっているはずです。

伊藤　戦闘の場面の映像なんか見ていると、ダダーッと撃っていますよね。

宝珠山　はい。ですから、あれはおそらく伊藤先生が見ていて、いろいろなところがバラバラに撃っているのが、聞いているほうには全部来るんだと思いますが。

伊藤　全部が撃っているわけじゃないんですね。

宝珠山　全部が連続して撃つというのは、限界があります。

伊藤　海原さんは、次官にならずに事務局長に追いやられたということでは、やっぱり？

宝珠山　そうですね。庁内の雰囲気からすると、私は順当なんだと思っておりました、若いからよくはわかりませんが。

伊藤　でもまあ皆さん、だいたいそんな雰囲気だったんですかね。

宝珠山　スタッフとしては非常に優秀な方なんでしょうけれども、二十数万をまとめていくポストとしては、やっぱりふさわしくないと見られていたと思います。

■ 防衛庁部員の心得

伊藤　前に宝珠山先生、「人柄が大事だ」というお話がございましたけど。

宝珠山　上に立っていくに従って、部員の間というのは個性もあるし、幕僚監部との取引といいますか人間関係が大事だということがありますが、その上に立って課長以上になりますと、各部員の能力をいかにうまく使っていくかということであって、自分だけではできないですね。もうひとつは人柄というよりも、だいたい課長クラスになると四十代を過ぎるんですね。これは体力的にも、頭脳の回転的にも限界にくるんじゃないかと私は見ております。本当に仕事ができるのは、部員の時代。

　海原さんにしても、国防の基本方針とか、第二次防とかにタッチされておりますが、それはちょうど私どもが四次防や七六年防衛計画の大綱に関わった頃とほぼ同じ年齢なんですね。その後は、もう成長してないですよ（笑）。そういっちゃいけないかもしれませんが。

伊藤　役割が変わるということですね。

宝珠山　そうですね。役割が変わるというか、人をうまくまとめていけるかどうかですよね、人柄という面では。話がちょっと飛んで恐縮ですけれども。

伊藤　ですから、要求される能力が違うということじゃないですか。

宝珠山　と思います。とくに私がこの前申しあげたのは、部員という仕事が人間的にも非常に重要な時期、仕事的にも充実したことができる時期、それを個人でやることはできないくらい幅が広いものがあるというべきでしょうか、そうでないものもあるかもしれませんが、各幕僚監部のかなり年上の人と一緒にやり、まとめていかなきゃ……。

伊藤　これだって、まとめていく仕事ですよね。
宝珠山　そうなんです。
伊藤　さらにその上に立ったら、もっとまとめる能力がないといけませんね。
宝珠山　そういうことですね。だから、他の省庁比較というわけにはいきませんけれども、相手が武力を持った集団であるということからいって、権限でバッと言うやり方は良くない……結果的にそういう場面があるとしても。
伊藤　戦闘の場面ではそうなるでしょう。
宝珠山　そこに持っていくについてのプロセスというのは、やはり説得と、ある意味でシナリオを書いて、どうしても降りていただく時には参事官会議で幕僚長に一言いわせますが、「深追いはしません」というところまでは、話しを付けたり、相手の立場を理解しないといけないんですね。そういうことをやってくれるということになると、向こうも正直に本音を言うようになりますし、こっちも言えるということで、誤解なく進めるということがございます。しかし、私どもの何人かの人たちについて、たとえば「あの人には、本音を言えない」と、私どもに言うんです。そういう人は、はずさなきゃしようがないんです。立派な人であったとしても。
伊藤　それは、地位と役割の問題ですよね。
宝珠山　でもありますね。
伊藤　だから、部員としては非常にいい……。
宝珠山　というのは、ございますね。
伊藤　ただ、そこから上に行ったときに。
宝珠山　その人柄と、また上のは違うと思いますけれども。
伊藤　要求されることは違うんですね。
宝珠山　はい、それはございます。
伊藤　もっと上に行けば、さらに違うということですね。
宝珠山　そうだと思います。しかし、部員の頃の人柄というか、大体いちばん仕事をした時期というのは多くの人に見られておりますから、ずっと引き継がれていっているんじゃないでしょうか。
伊藤　だけど、逆に海原さんがあれだけ力をもったというのは、一体どういうことだったんだろうかなと私どもは思いますが、何かお考えがございますか。要するに、ある組織の中で、ある人が力を極端に持つという事例は時々ありますよね。
宝珠山　そうですねえ。防衛庁、不幸なスタートをしたんだと思うんですけれども、誰もやりたくない未知で困難なポストじゃなかったんでしょうか、防衛庁の内局というのは。
伊藤　そうですか。
宝珠山　はい。今も私は、そういう気があると思うんですが。各省庁というのは、大部分が法律の執行でいいんですね。権限を与えられているものを、かなり自由度をもって国民を……と言っていいんだと思うんですが、取り締まれるんですね。全部じゃないでしょうけど、税務署といい、警察ということを考えたとき、税務署なんてすごい権限と裁量権を与えられているところですよね、多分。
伊藤　多分ね。
宝珠山　今は若干争いが出るようになりましたけど、昔はもっと強いですね。警察もそうですね。そういうところで育った人たちが、防衛庁をつくったんですね。警察予備隊の下で。防衛庁に来て何をやらされたかというと、今泉さんでもそうですが、宍戸（基男）さんでもそうですが、みんな本部長をやったりしてこうやっていた（ふんぞり返っていた）人たちなんですよね。若い時も警務部長をやったりして。それでここ（防衛庁）に来ちゃったら、下働きですよ、部員で来ちゃったら。部員として来ると、自分でいろいろ書かなきゃいけないんですよ。そんなの、誰もやりたくないです。

話が飛びますけれども、外国に防衛駐在官というのを出すんです。一佐ぐらいを出すわけですね。連隊長をやった人が行きますと、駐在官は全部自分でやらなきゃいけないわけですよ。できなくなっている人がありますよね。それと同じ落差があるんです。連隊長――大隊長でもいいんですけれども、たくさんの部下の上に乗ってやっていたわけですね。自分で過去にやって来たことの延長線で、やっているわけですね。そうでない人もいると思いますが、大部分の人たちは自分で経験してきた職域を上がって行っているわけですね。防衛駐在官で行っちゃったら、一からやらなきゃいけないわけです。若干、その前例を踏襲するということはできるでしょうけれども、とにかく、ほとんど全部自分でやらなきゃならんことは確かです。電報の起案から、その決裁取りから、間違いを指摘されれば、直すということまで全部一人でやらなきゃいかん。連隊長だったら、そんなもの全部下が持って来たのに判子を押せばいい。これは、警察も同じですね。

そういう生活をして来てこっち（防衛庁）に来ちゃったら、すごい落差です。給料が上がるかというと、全然上がらないですね（笑）。何か待遇がよくなるかというと、ならないんです。誰も面倒みないというか、課長といったって部下に部員はいますよ、しかし、部員は部員でまた別の権限を持って動いているわけですから、古巣のようには、面倒をみてくれない。しかもその部員とて、ある意味で寄せ集めですよね、当時は。それは、しようがない、誰の責任でもないことです。そういうところに行きたい人はいなかったんじゃないでしょうか。「二年行ってこい」と言えば、それは行くでしょう。これは命令ですから。しかし、「帰してくれますね」ということじゃないでしょうか。

伊藤　だけど、だんだん制度が落ちついてくると、「じゃ、ここでやっていこうか」という人も少しずつ出てくるということですね。

宝珠山　しかし、海原さんの後任が育たなかったというのは、そういう人がいなかったということなんですよね。海原さんがあそこで五年も防衛局長をやっていますね。あれは、異常ですよ。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。ほとんどの人たちが受けなかったんだと思います。それから、今泉さんも警視総監で辞められたんですが、私は今泉さんにもお仕えしましたけれども、やっぱり残るつもりがない人だったと思います。

伊藤　海原さんは、残るつもりなんでしょう？

宝珠山　海原さんは残るつもりよりも、引き取り手がなかったんじゃないですかね。あまりにも優秀で、個性的で、海原さんを使おうという人がいなかったのではないでしょうか。

伊藤　いやいや、そう言われればもう。

宝珠山　わかりませんよ。

佐道　戻れなかったんですかね。

伊藤　多分そうですね。

宝珠山　おそらくあの個性を出すと、警察でも引き取らないんじゃないでしょうか。これは、もう私などはよくわかりませんけれども、私はそう見ています。そうやって残っていきますと、全てに精通してきますよ。二年ぐらい来た人、どう対抗しようもないですよ。

伊藤　やっと物事がわかった時に、もう。

宝珠山　そうです、替わっていくわけでしょう。警察に戻って二年やって帰ってくるとして……、たとえば久保さんのように勉強すれば別ですけれども、しかし久保さんの勉強は海原さんの勉強と違って、学者的勉強なわけですね。だから、これはこれで通用するかもしれませんけれども、しかしそういう人はまあ稀なんですね。稀というよりも、久保さんしかいなかったんじゃないでしょうか。丸山さんにしても、やってないですよ。有吉さんは、もうその時はいませんし、堀田さんもそれほど防衛の勉強はしてな

かったです。あの方は、残るつもりで来た方だと思いますけれども、早々にむしろ代議士になるための準備行動的な方をやられておりましたから。

佐道　海原さんの五年というのは確かに長いですよね、防衛局長。

宝珠山　長いです。当時の草創期の林敬三さんみたいに統幕議長を十年もやっているというのはあると思いますけれども、これは別にして長いと思います。長いけれども、長いが故に他の人の追随を許さない知識を持つことになるんですね。海原さんの軍隊における経験を加えますと、軍事問題でも旧軍の人たちも太刀打ちできない、頭の回転が違いますから、視野も違いますし。ということで、こういう事態になっていくんだと思いますが。

そうなりますと、大臣で一年間そこらで替わっていく、自分の身の心配をしている人たちにとっては、首を切ることなんてできません。だから、力を持っていたかどうかというよりも、残ったということじゃないでしょうか。海原さんを替えられるのは、増田甲子七さんですか。あの方、内務省の先輩か何かですね。そういうクラスの方が来て、初めてできたんじゃないでしょうか、と私は見ております。その他の党内基盤とか、そういうものについて必ずしも強くない人たちというのは、官庁の人事はいじれません。

伊藤　官庁の人事をいじったのは、たとえば田中角栄とか、そういう人たちですよね。

宝珠山　ですね。しかし、それはバサッと切るとか何とか言われなくて、うまく波風を立てず静かにやる話だと思いますね。

■「FX」は長期の商権争い

佐道　先生がいらっしゃらない時期だと思いますが、松野さんですね、とくに空幕長とか幕僚長の人事をいろいろ……。

宝珠山　口出したんですね。

佐道　というようなことが話題なったりということが？

宝珠山　あの時は、FX（次期主力戦闘機の選定）か何か絡むんですかね。

伊藤　そうですね。

宝珠山　それは私、挙証しろといったら困るんですが、FXは商戦なんです。ですから、それに付いている、ある権限を支持している人たちに動かされてやっている面があるんじゃないでしょうか。それは、後にもいろいろとあるわけですが、そういうのをちゃんと見分けながら公正にやらなきゃならんのが、また一つあるわけです。

伊藤　公正というのは難しいですよね。自分が「これがいい」と思ったら……。

宝珠山　戦闘機などでそれをやられちゃ、困るんですよね。

伊藤　「これが性能的にいい」と思っても、だけどこれについている人がいるわけじゃないですか。

宝珠山　そこのところをうまく切りわけなきゃいけないのが、ずっと付いて回っている話なんですね。

伊藤　だから、これは非常に難しい問題だなと思いますね。

宝珠山　それからFX商戦。これは長期にわたる商権なんですね。十年か十五年、あるいは二十年ぐらい生産需要がずっとあるわけですし、これに加えて、一回納入しますと修理需要が長い期間ついて来ますからね。

伊藤　大きいですね。

宝珠山　これは大きいというか、一回受注すれば非常に大きな商権を手にできるんですよね。

佐道　海原さんの問題については、FXだの何だの、河野派と佐藤派の暗闘とか、いろいろな商戦絡みの問題とか、海原さんご自身も怪文書を出されたり、そういうのが絡んでいるというようなルポがいろいろ出たりというのがあるんですけど。

宝珠山　怪文書は、たしか加藤陽三さんについても出ていたようですね。私はあんまり読んでいません。それには、直接は絡んではおりませんから。

伊藤　先生がおいでになった頃は、そういう風波は一応収まって？

宝珠山　ええ、三次防の主要項目が決まって既に半年過ぎていますので、それはもうほとんど聞いておりません。もう皆さんも「次の防」に向けてということで取り組んでいた時期が、計画官室時代なんですね。

■官房長を離任してからの海原氏

佐道　海原さんは国防会議に出られた後、それまでも雑誌とかいろいろなところで書いたりされているとは思うんですけれども、たくさん本をお出しになり始めますよね。

宝珠山　そうですね。

佐道　だいたい自衛隊批判といいますか、「こんなことやってていいのか」みたいなことを、どんどんお書きになる。ああいうのは、中にいらっしゃってどうなんですか。

宝珠山　あれは、私も被害者の一人だと思うんですが、本が出ると「おまえ、想定問答をつくれ」といわれるんですよ、質問と回答を。あれ、困るんですよ。全部内情を知ってますしね。つくって回したこともありますけど、出来がいいとか悪いとか、いろいろ言われまして（笑）。

伊藤　それは、誰に命じられるんですか。

宝珠山　誰が命じるんですかね。何回かありますが、国会答弁をする防衛局長とか、その他のところですね。海原さんの本の場合、防衛局長、防衛課長……、局長から直接ということもありますし、課長から来るということもありますし、とにかく「つくれ」という命令です。大臣が言ってきた場合もあるんでしょうね。直接私にじゃありませんよ。

伊藤　それは、議会での答弁のため？

宝珠山　そうです。国会に出て、たとえば予算委員会でつるし上げられないように。

伊藤　「海原は、こう言っているじゃないか」という？

宝珠山　それを、「俺は、聞かれたらどう答弁したらいいか。おまえ、回答をつくって持って来い」ということですね。

佐道　難しいですね。

伊藤　答えられないのもあるじゃないですか。

宝珠山　答えられないというわけにいかんですよ。その通りとも言えないし（笑）。

佐道　防衛局長、官房長まで務められた方が、「ここまで批判していいのか」というような形でお書きになられていますよね。

宝珠山　そうですねえ。最初の頃は国防会議事務局に行ってからでしたね。

佐道　そうです、事務局長時代だと思います。

宝珠山　あそこは、暇ですからね。

伊藤　あとは、もう評論家になりましたからね。

宝珠山　そうですね、評論家になったら、元幹部としての礼儀を若干逸脱している面はあるんじゃないでしょうかねえ。

佐道　『私の国防白書』ぐらいまでは、若干いろいろ変化をつけて書かれていますが、あとは大体みんな同じ内容の本が。

宝珠山　私は全部読んでいません。全部読んでいませんが、最初のやつだったんですかね、私が答弁を書かされたことは覚えていますよ。苦渋ですよ、それ。

伊藤　大変ですね（笑）。

佐道　「列島守備隊論」というのは、郷土防衛隊の構想とか、一体そういうことは可能なのかというような話でしたが。

宝珠山　まあ……。

■防衛庁部員に昇格

伊藤　計画官付になられて、実際は部員としての役割を果たされると。四十三年の四月から部員になられるわけですが、これは計画官の部員ですよね。

宝珠山　はい、この時はまだ計画官付のままです。

伊藤　それで、今度は六月に防衛課に移られるということは、計画官室が防衛課と一緒になるんですか。

宝珠山　その時の改編をご説明させていただければいいかと思います。それ以前はどういうことかといいますと、防衛局第一課と、第二課と、計画官の二課一官だったわけです。まとめますと実質的に三課なんですね。第一課というのは年度の業務計画ですが、何を買ってどこに配置する、部隊をどこで編成するといったことの年度の計画を全部取りまとめるところ。

伊藤　それは、長期計画に従ってですね。

宝珠山　そうですね。それから事があったときの運用です。もしも侵略があったらという計画もありますし、災害が起こったらどう対応するのか、どこで起こったらということまで含めていろいろと備えをしておき、起こったら、長官の命令になりますが指揮をする窓口でもあるわけです。長官に代わっての窓口ということになるわけです。この二つのことがあるが、いずれも非常に忙しい。とくに自衛隊がだんだんと成長して来ますと、運用も忙しい、年度計画も忙しいという状況にあるわけです。

情報を担当しているのが第二課、中長期計画を担当の計画官という三つの課があるわけですが、こういう中で、このままでは第一課に仕事が集中してやりきれない、どうするかというのが課題であったと理解しております。そこで、防衛局の改編をやったのが四十三年度なんですね……四十三年でよろしいですかね。

佐道　四十三年ですね。

宝珠山　もうひとつ運用課を増設できればいいですよ。しかし、三課ぐらいしか財源はないわけです。各省庁の中で、防衛庁の課の数は幾らだという枠があるわけですから、増やせはしない。そういう中で機能分けをして、とにかく運用課をつくろうということが目的になったものと思います。

運用課の財源として、計画官を潰すということになったわけですね。じゃ、その計画官がやっていた中長期計画をどこに持っていくか。そうしたら、第一課がやっている年度計画と中長期計画を一緒にして防衛課にしたらいいじゃないかと。第二課は情報ですから、これは変わらないということで三課の体制に再編するわけです。

伊藤　課を一つ増やすわけですか。

宝珠山　官を潰して課を増やす。名前は、今まで防衛局第一課と言っていたのを、防衛局防衛課にする。運用課、これは新しい名前ですね。これに調査課と。第二課を、情報の収集・分析という所掌内容は同じですが、名前を調査課にし、三課の体制にしたということです。

私は中長期を担当でしたから、部屋的には合体しますが仕事はそのまま持って行くということで、この二年半ぐらいの間というのは同じ仕事をやっております。

伊藤　そういうことですか。履歴書だけ見ていると、ここで変わったような感じがするんですね。

宝珠山　その通りですね。それは、あちこち局の削減があったりすると出てくるんですね。確か人事三課長の時もそうだと思うんです。仕事は同じなんですけど、上の名前が変わっちゃう。人事局と人事教育局、教育局がなくなって人事教育局になっちゃって、人事三課長がそのまま残るということはございます。それが、人事記録には出ています。

四十三年に部員になりますのは、部員になる資格が法的についてきたということです。

伊藤　それはどういう？　年限ですか。

宝珠山　これは確か入庁後、五年経過した時ですかね。六年目の四月一日だと思います。

伊藤　部員になると、さっきおっしゃったように超勤手当てはもちろんつかなくなると？

宝珠山　はい。適用される給与表が変わるんです。

伊藤　多少よくなるんですか。

宝珠山　人によりますけれども。

伊藤　じゃ、実収は減るんですか。あんまり変わらんでしょう？

宝珠山　残業をたくさんやって残業手当てをたくさん貰っていた人だったら、実収は減りますね。しかし、ほどほどの残業しかやってないとすれば増えます。防衛局なんか勤務していたら、確実に損です。働かされる、時間単位にしますと減少する。

伊藤　時給、一時間幾らだと。本当に忙しいものでございましたか。

宝珠山　きりがないぐらい仕事がありますからね。とくに若い時は、陸上自衛隊全般をとにかく間接的に吸収しなければ、次の計画をつくるということにはなかなかアイデアが出てこないですね。主導権を取るつもりではありませんけれども。

■現場視察の思い出――九十日間の遠洋航海

伊藤　やっぱり現場も見に行くんですか。

宝珠山　現場を見に行くといったって、それは出張旅費の範囲内で行きますので、せいぜい一年に一週間分も来ればいい方ですから。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。遠くに行っちゃったら、旅費の枠をたくさん使うので、一回くらいしか行けない。陸の場合には、北海道に行くと一通り見れるわけです。

伊藤　やっぱり現場を見るというのも、かなり大事なんじゃないですか。

宝珠山　大事ですけど、見るといったってサーッと通っていけばいいというわけではありませんからね。ある程度勉強してから、またスタッフと一緒に行って、「あのとき説明したのは、現物はこれですよ」とか、あるいは射撃をして見せてくれるとか、そういうのは経験しました。計画官付時代に付き合った皆さん、亡くなっちゃったですけど、それはございます。

それから話が前回に戻りますが、人事第一課にいた時に、遠洋航海に行きました。

伊藤・佐道　あ、そうですか。

宝珠山　はい。ハワイ・ホノルル、サンフランシスコ、シアトル、バンクーバーといったところ。あれは百日は行ってないと思いますけど、九十日ぐらい。

伊藤　どういう資格ですか。

宝珠山　護衛艦で「ありあけ」というんですけど、何トンあったかな。二〇五〇トンぐらいですかね。海上自衛隊は、幹部になる前に体験航海をさせるんですね。それと一緒に行きました。

伊藤　内局の人間も？

宝珠山　はい。私どもの時は、その制度があったんです。その後も、まだ何年か続きますけれども。

佐道　今は、ないわけですか。

宝珠山　今は、もう外国に行くのは飛行機で行ったほうが楽ですね。

伊藤　それは、行くのはそうでしょうけれども（笑）。

佐道　練習航海で行くというのが、大事なことじゃないですかね。

宝珠山　今は、多分やってないと思います。練習艦もない時代なんですが、私どもは同期が二人ですけれども、あと技術研究本部――艦艇技術者ですね。合わせて六人ぐらいシビリアンで乗り込

みました、新聞記者の他に。

伊藤　新聞記者も行くわけですか。

宝珠山　新聞記者も、『朝雲』なんかが毎年。

伊藤　一般紙は行かないんですか。

宝珠山　一般紙は、六十日もやってくれないんじゃないでしょうか。手を挙げてもいないと思います。それから、『海上自衛隊新聞』からも来ていたと思います。

伊藤　それぐらいの船だと、かなり揺れませんか。

宝珠山　揺れましたけど、私は酒に強いということかもしれませんが酔わなかったんですよ。楽しかったですねえ。

伊藤　それは、よかったですね。

佐道　羨ましいですよ。

宝珠山　日本海溝のところは揺れるんですね。ですから、出てからすぐがちょっときつかったですが、その後はほんと快適でした。何もやることないんですよ。皆さんが甲板掃除をやっているのもじっと見ときゃいいんですよ（笑）。で、四食食べられますしね。

伊藤　四食ですか。

佐道　ちょっと太るんじゃないですか（笑）。

伊藤　運動もしないし。

佐道　でも、狭い船の中で運動もあんまりできないですよね。

宝珠山　運動できないといっても、乗ってるだけでこうやって（揺れて）くれてますからねえ（笑）。

伊藤　ハッハッハ、自分が動かないで。

佐道　でもいいですねえ、何十日も。

宝珠山　私は初めての外国旅行なんですけれども、当時は貴重ですよね、なかなかそう勝手に行けない時代で……多分一緒に行った人たちは、新聞記者は知りませんがほとんど初めてですよ。

伊藤　アメリカの西海岸からカナダまで行ったわけですね。

宝珠山　カナダまで行きました。まさに遠洋という、海の上が長い航路なんですね。

伊藤　実際、陸地はハワイと西海岸ですね。

宝珠山　そうですね……ミッドウェーで一回。補給しなきゃだめなんですかね、私よくわかりませんけれどもミッドウェーで上陸しております。ただし、あれは何時間かぐらいですよ。船が補給している間、私どもは上陸する。ハワイは三泊ぐらいしたかもしれません。

伊藤　でも、サンフランシスコとか。

宝珠山　サンフランシスコも二日ぐらいですよ。シアトルは二日ぐらいじゃないでしょうか。バンクーバーも二日ぐらいですね。それから、ビクトリアというバンクーバーの向かい側にあるんですけれども、ここがやっぱり一日ぐらいです。本当に上陸日は少ない。

伊藤　でも、向こう側がいろいろ接待したり、そういうのはあるんでしょう？

佐道　パーティがあったりするわけですね。

宝珠山　あれは、こちら側の接待は船でやるんです。

伊藤　だいたいそうですね。

宝珠山　これ、安上がりですね（笑）。それから、私どもは何回かありましたけど、主として見習士官というか防衛大学校、一般大学校を出て幹部候補生学校を出た二年目の人たちと一緒に行動するわけですから、私たちはメインじゃないですね。メインゲストじゃあり得ないんですが。しかし、レストランに行って艦長が歌うのを聞いたりしたことはありますね（笑）。ああ、こういうものかと思ったのです。

伊藤　町の中をうろつくなんていうことは？

宝珠山　いや、それは自由なんですけど足が不自由なんですよね。歩いたのを覚えています。「日本の水兵は、よく歩く」という噂があることは、聞きました。いや、バスはあるんですよ。しかし、

そんなに間隔というか、頻繁にというものではないから。

伊藤　バスは、どこへ行ったって乗りにくいですよ。だって、どこからどこへ行くバスかわからないですから。

宝珠山　ただ、補給長とかそういう幹部で、過去に行った人が、いろいろ調べて、地図などはくれますけどね。ハワイはここら辺りに行くとどうだ、こうだというのはあります。

伊藤　そういう経験もなさいましたか。

宝珠山　そういうことで、海上自衛隊の運用の実態というのを、七十日ぐらいだったと思いますが経験したというのは、収穫ですね。

佐道　そうですね。

伊藤　北海道に行かれたときは、陸ですか、空ですか。

宝珠山　陸海空全部行きましたけれども、北海道へ最初に行きましたのは、初任研修のときに北海道に行っています。ですから、それは三十八年の五月に行っていますね。一週間ぐらいだと思いますが、ずっと回っております。

伊藤　いや、部員の頃は？

宝珠山　部員の頃は、それはあちこち行っています。

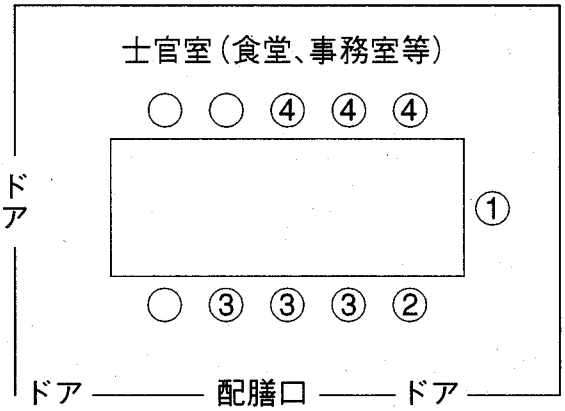
伊藤　やっぱり陸も行ったし？

宝珠山　計画官付の時代は陸の担当ですから、陸しか行けません。

佐道　遠洋航海とかで、海上自衛隊の考え方とか、ものの見方とか、どういうふうに運用するかというのは、実体験を含めていろいろとお知りになったわけですよね。

宝珠山　そうですね。このぐらいの部屋でしょうか、もっと狭いかもしれませんが、艦長がここ①に座っていて、僕の上の引率の部員がここ②にいて、私どもはここ③に座れるぐらいなわけですね。こっち④に幕僚長あたりが座っている（図参照）という形の中で飯を食うわけですが、そのときいろいろ話をするのを聞いているということはあります。

それから夜になりますと、当番制で艦橋に指揮官が上がるわけですね。そこの横に座っていて話をいろいろ聞いたりしたのは覚えています。まだ生きておられますけど、商船学校出身の方で、とにかく船に乗ることが趣味のような人が艦長でしてね。林誠一郎さんという方ですけれども、ついこの間まで船に乗っておられましたよ。あの年で、よく乗るなと。もう八十ぐらいになるんじゃないですかねえ。船に乗る人を教育するために乗っておられるようでしたけどね。だから、健康なのかもしれませんよ。しかし、去年ぐらいでしたか、「私ももう年をとって、年賀状を書くのもきつくなりましたので、これで失礼します」というのが来ましたけどね。



それほどに船が好きな方だったし、海が好きだということもあるんだと思いますけれども、そういう人の傍に行って、「艦長って、何をやるんですか」とか、「いま何をやっているんですか」ということを聞くわけですね（笑）。そうすると、飛行機は電波で監視などをやれますけれども、海の中は音波ですよね。水中の音速とか、「今こういうことをやっているんですよ」というようなことを教えてくれる。「音波は直進しません。塩分とか、温度とか、海底の地磁気などによって微妙に変化するので大変なんですよ」とか、それから「天測もなかなか熟練しないと、自分の位置を決めてみたらとんでもないところにいた、というようなことになるんだ」というようなことを。

伊藤　揺れるわけですからね。

宝珠山　そうですよ（笑）。原理的ないろいろ説明を聞きましたけど、全く覚えていません。「俺はとんでもない、陸の上に上っちゃったよ」というようなことになってるんですよ（笑）、実習生はですね。そういうのを繰り返して、だんだん熟練していって一人前になるんだと思いますけど、おそらく実習生の時はだめでしょうね。下士官のほうがしっかりしているんだと思いますけれども、しかし一通り実習生はやらされる。実習生というのは、やがて遠洋航海を終わって三尉になる人たちなわけですけど。

伊藤　任官するわけですね。

宝珠山　そうです、そうです。一通りそういうことを経験させられるようでした。

伊藤　そういう海の人と、空の人と、陸の人と、部員として主におつきあいになったのは陸かもしれませんけれども……。

宝珠山　この計画官付の時は、陸です。

伊藤　でも、後々でいろいろな形でおつきあいになって、陸・海・空で特色があるものですか。

宝珠山　私、それほどよくわかりませんねえ。私どもが知った当時付き合った人たちというのは、旧陸士出身といいましても入っただけというような人たちぐらいからです。新制大学あるいは防大という人たちが中心になりまして、旧軍出身の人たちは存じあげてはおりますけれども、当時直接、説得の相手という時代ではありませんでした。

伊藤　陸・海・空で違うな、というお感じを受けたことは、あんまりないということですか。

宝珠山　それほど感じませんがねえ。ただ、池田久克氏などは「〇〇は頑迷固陋なんとか」といって、海上自衛隊は「なかなか融通がきかない」というようなことは言っていましたね。自分（池田氏）が担当していた航空は……後にＦＳＸ（次期支援戦闘機）で担当するわけですが、「ちゃらんぽらん」というようなことは言っていましたね（笑）。

■計画官付時代に過去の資料をフォロー

宝珠山　計画官付となって、非常に有用であると思いましたことの一つは、制度調査委員会の研究成果をここの計画官室でフォローするというのが一つありました。

伊藤　フォローできるというのは、どういう意味ですか。

宝珠山　読もうと思えば、膨大な資料を全部読めますから。過去に何があって一次防から、二次防、三次防と来たか、というのを学ぶチャンスなんです。他にそんなに仕事がくるわけじゃありませんから。引き継ぎはありますよ。引き継ぎ的な作業はありますけれども、たまたま私は興味を持ったから、ロッカーを開けていろいろ出てくるやつを拾い読みすることで、防衛庁の成り立ちから私は勉強した最初じゃないかと。もちろん、西廣さんや池田さんは、やったかもしれません。けれども、伊藤さんも、海原さんも、夏目さんも計画官室の資料ではやってないと思います。

だからここに（「防衛研究臨時委員会」関係資料を提示）、その後の佐道さんが研究された流れの中の原点があると思って理解しております。この中からヒントを受けたものを、後年ずっと私の在職間、役立てました。よかったか悪かったといえば、私はいい方向だったと思っています。計画体系にしましても、これは文民統制と絡む話なんです。それから有事法制にしましても、今ようやく国民保護法案などが、提出まで行きましたけれども、この当時からの課題なんです。住民保護にしてもそうなんです。それらが全部、この時代に列記はされているんです。全てに回答は出されておりませんけど。問題は、全て列挙されている。その成果の一部を取り出して、急いでつくったものが一次防なんですね。とりあえず成果の一部が、一次防として表に出てくるということで

す。これはまだ表には出ておりませんが、秘文書で部内でやったという作業、これに接せられたのは非常に大きな成果だと思っています。

伊藤　つまり、自分のやっている仕事がどういうところに発して今日につながっているかということを、フォローされたということですね。

宝珠山　そういうポストに恵まれたということになりましょうか。

伊藤　でも、どのポストだってそういうことなんじゃないですか、逆にいえば。

宝珠山　でも、たとえば人事にいる時に、この資料を見ることなんかできませんから。

伊藤　それはそうかもしれません。でも、人事だったら人事でまた、過去の……。

宝珠山　それはありますね。しかし、防衛計画というのは人事を含み、装備を含み、施設を含み、訓練を含み、補給を含んでいる……。

伊藤　計画官庁の計画官庁たる所以みたいなところですね。

宝珠山　そうですね。そこでは統合なんです。私は陸担当ですが、制度調査委員会というのは統合なんです。陸・海・空一体を頭においているものだと私は理解しました。

伊藤　これは、一次防ができた時に一応任務は終わったという形になるんですか。

宝珠山　私の理解では、当初は六年計画でスタートしようとしていたようですが、内閣が弱いとか、社会党に配慮してという形でだんだん遅れていったと思うんです。で、ようやく岸さんの時になってなんとか芽が出て、出た時に残ってた三ヵ年だけ使ったと。もう過去の三年というのは、とにかく……。

伊藤　進んじゃっているわけですね。

宝珠山　進んじゃっているわけですから、その時、あるものは三年だったということで三年計画にしたと思うんです。しかし、一次防はご覧いただくとわかりますように、目標だけしか触れてないんです。だから、いつ切ったって同じなんですよ。だから、一次防は三年計画ではありますけれども、実体は六年計画といってもいい。私は五年の計画でスタートしていると見て、四次防までの二十年間を第一期だという定義をしているんですが。

伊藤　この防衛研究臨時委員会が、その後ずっと計画官室につながるわけですか。

宝珠山　そうです。

伊藤　制度的には、これは？

宝珠山　制度的にどうかというのは、わからないんです。わからないんですが、この防衛力整備の事務と、かなりの資料を保管し続けてきたのは、制度調査委員会の看板も掲げていた計画官室なんです。そういうところに行けたということが、非常に大きな成果だと。他のところだったら見れないです。

佐道　そうでしょうねえ。

■ オペレーションズ・リサーチの担当で学んだこと

宝珠山　それからもう一つが、オペレーションズ・リサーチの担当になったということがありますが。

伊藤　どの段階でですか。

宝珠山　山下雅巳さんがやっていたのを、引き継いだ段階です。この人が「オペレーションズ・リサーチは、将来の非常に重要な計画の手段になるものであるから、おまえ、勉強しろ」ということを言ってくれましてね。これでまた陸幕とは、別に引き継ぎをやる。これは、陸・海・空・統幕と四つのオペレーションズ・リサーチの専門家がいるんですが、これを……。

伊藤　もともといるんですか、ＯＲの専門家が？

宝珠山　そうです。数はその当時少なかったんですが、いまして「おまえ、引き継げ」ということで。引き継ぐといっても、仕事を受け持つだけですが。

伊藤　でも、ORを勉強なさったわけですか。

宝珠山　OR自体の勉強をするということではありませんが、ORのために当時、一億七、八千万円ぐらいの予算を取ってくる窓口担当になったわけです。これを陸・海・空・統幕でばらまいて、プログラム作成のために民間に委託すると。これは、秘密事項が結構ありますから、極秘の世界で模擬戦闘をやって結果を出すというようなものなわけですね。そういう手法をここで学ぶ機会があったというのが、非常に大きいんです。

伊藤　一種のシミュレーションをやるわけですね。

宝珠山　まさにシミュレーションです。その手法がまだ……。

伊藤　いろんな所与条件を変えて。

宝珠山　そうです、そうです。

伊藤　昔の兵器演習につながるんでしょうね、きっと。

宝珠山　はい、そうです。当時は昭和四十三年ですけれども、とにかくいろいろと議論がある中で、能力を客観的に評価する手法をこれでやってみようじゃないかということで着手するきっかけになります。その後、これが発展していって現在になっていますし、この発展の過程というのはコンピューターの発展と軌を一にしてきております。

伊藤　でも、相手方の力も判定しないといかんわけですね。

宝珠山　その通りです。ですから、これは陸・海・空・幕僚監部の中の情報部門から、相手が攻撃するとしたらどんな形で攻撃するかをつくってもらうわけですね。我が方は、持っている防御兵器――これは配置も含めてですが――をどう戦わせるかを……。

伊藤　向こうの航空能力とか、要するに上陸用の舟艇能力ですね。

宝珠山　はい。それから、海上交通破壊能力ですね。これらが代表的なものですけれども。

伊藤　その計算をやって。

宝珠山　それをコンピューターの中で戦闘させて、どのぐらい期間持つのか、持たない時はどうするのかなどをシミュレーションするんですがね。これが、弾が幾らあったら足りるのかとか、いろいろ思い込みによって一ヵ月戦えるという人もいるし、そんなに戦えないという人もいるけど、これは戦い方に関わる話なんです。しょっちゅう出ていって何でもバラバラ撃っちゃったら、すぐに終わりですよね（笑）。

伊藤　それはそうですね。

宝珠山　だから、海岸に一兵も揚げないなんていう作戦もないです。相手の強さ、攻撃の仕方によって、「これで来るならここ、下がってそこで待ち受けるということにすると一ヵ月持つ」とか、しかし、「ここで頑張ったんじゃとてもだめだから、もう少し下がるんだ」とか、これは「防衛期待度」という言い方で私どもは呼んでおります。今でもそうかもしれませんが、期待度をどうするかによっていろいろの戦い方があるわけです。そういうものを、オペレーションズといわれるように複数でやってみる。

伊藤　いろんな場面を想定するわけですね。

宝珠山　そうですね。非常に高いものから、中ぐらい、低いものとか。そういうのをモデルを開発するところから着手しました。この当時ですから、十年計画ぐらいつくっているんです。

伊藤　要するに、十年たった時に相手の能力がどれぐらい高まるかということも、想定しなければならないわけですね。

宝珠山　政策部門でどう考えるかというのがありますけれども、この当時取りかかるのは、そういうモデルをまずつくらないことには。

伊藤　あとは、入力すればいいわけですね。

宝珠山　データを変えればいい話ですね。そういうモデルをつく

ろうじゃないかということで取りかかっておりますが、これも一つの大きな成果でした。幸いに、経済企画庁にいたときコンピューターをやっていましたから（笑）、その辺りも、若干土地勘がある部門でもありました。まあ、そんなことで計画官付に引っ張ってくれたのかもしれませんけれども。

伊藤　そういう可能性はありますね。

佐道　モデルは、先生がおつくりになったわけですか。

宝珠山　いやいや、私はつくる能力なんかないですよ。それは、自衛官でもつくれません。ただ、フローチャートまではできますね。これを、たとえば日立の防衛をやってくれている、秘密を守ってくれる契約ができる人のところに委託するわけです。で、成果物を取る。分析はこっちでやるということになります。そういうことで、いろいろな議論がある。いろいろの議論を各々が勝手にやるんじゃなくて、客観的に、科学的にやる手法というのをここで学ぶわけです。

伊藤　わかりましたけど、陸・海・空合同でできるんですか。

宝珠山　陸・海・空で合同でできるというのは、ないです。何故なら、作戦場面は海と、空と、陸しかないんです。だから、これは統合というのはないんですよ。

伊藤　そうですか。たとえば、北海道なら北海道にある国が接近したと。そうすると、艦艇を攻撃する力は空軍にはないわけですか、航空自衛隊には。

宝珠山　いやいや、そういう意味なら統合はあります。それを統合的に指揮するのはどうかというのが、統合なんですね。作戦の現場の統合はないです。陸・海・空と海の中しかないです、四次元ですね。空中と、地上と……。

伊藤　あと潜水艦ですよね。

宝珠山　そうです、海の中です。海の中は浅いところはだめですけれども、潜水艦が動けるところが中心ですけれども。だから、潜水艦作戦のモデルがあり、空中戦のモデルがあり、海上戦と、おっしゃった上陸用舟艇が来るのを叩くのが海上と陸と航空で、おのおの手段は持っておりますから。量はともかく置きまして、一応の手段は持っている。海岸には地雷があるか、機雷をまけるかとか、そういうのがありますけどね。それらのデータを入れれば評価できるモデルをつくることから始めたということになります。

佐道　それはしかし、各幕僚監部の方々が意見を言って、「こういうふうな作戦で」ということで？

宝珠山　はい、ですから作戦は陸の場合でいいますと、第三部に作戦幕僚がいるわけですから、こういう攻撃を第二部のほうで情報幕僚がやると、それに対して戦い方を例示する、それをプログラムの中でやれるようにするということになりますね。これは、簡単といってはいけませんけど、彼らは専門的に幹部学校でやっていますから、比較的楽なわけです。それをコンピューターに馴染むというか、コンピューターの中で計算できるようにするというのはストレートには行けないから、オペレーションズ・リサーチ班が陸・海・空・統幕にありまして、この人たちがフローチャートに落としていく。で、コンピュータ言語は何であるか私は知りません。フォートランもあるでしょうし、ＣＯＢＯＬもあるでしょうが、そういうものでつくってくれるわけです。

伊藤　数式が出てくるわけですね。

宝珠山　まさにそうです、算式（ソフトウェア）ですよね。

伊藤　そこに必要な数値を入れて計算するわけですね。

宝珠山　はい、そうです。

佐道　ＯＲの陸・海・空と統幕ということですけれども、陸も海も空もそれぞれ別個の防衛に対する考え方を持っておられて、たとえば先ほど、上陸してくるのを海上自衛隊が叩くとかいう話も海上自衛隊の方にお聞きしたら、「海上自衛隊は、敵の船を攻撃するようにはつくられてはおりません。潜水艦はやりますけれど

も、そもそも五インチの大砲で撃ったって効きやしません」みたいな話になるんですよね。陸は陸で、「とにかく日本の本土をいかに防衛するか」と。海上自衛隊は、「アメリカ海軍とどう協力するか」みたいな話で、統幕なんかが出てくるのは、ガイドラインができてから統幕の意味がより多くなったみたいな話も出てきたりするんですけれども、各ばらばらなものが？

宝珠山　当時、ばらばらであるからどうするかというのが、ここで……。

伊藤　問題になったんですか。

宝珠山　問題意識として持ったわけです。まあ、山下さんから教えてもらったというほうがいいかもしれませんが、三次防の過程でも「統合の防衛構想があるか、ないか」というようなことをやっているわけですが、ないわけじゃないけど、言われるように表沙汰にならない（公表されない）だけなんです。だからこの当時からあるんです。話がちょっと飛びますが……。

伊藤　これ、作戦計画になるわけですね。

宝珠山　そうです。

伊藤　だから、まったく極秘の世界ですね。

宝珠山　そうです。作戦計画を、幹部学校ではこういう地図を広げましてね。（北海道の地図を広げる）これは、北海道の着上陸適地の地図なんです。ご覧になったことがあるかもしれません。これも陸の作戦なんですが、ここが稚内です。着上陸適地と合わせていただくと、これは適地が入っていませんがこう↖来る。これに対してどう反撃するか↗というのが、この地図だと思いますけれども。これも、情報幕僚がつくったものなんですね。

伊藤　空挺もあるわけですね。

宝珠山　はい。空挺もありますし、「戦闘経過図」という形で、いま詳細にご説明する能力はありませんけれども、こういうイメージのものをコンピューターに落としていくということになります。ここに書いてあるような「諸元」と言っておりますが、兵器の性能から何かを全部、それから距離ですかね、入れていくものようです。そういうモデルをつくることから始めました。これは、その後ずっと……。

伊藤　これは、部員としての仕事だったんですか。

宝珠山　部員の仕事ですよ。部員の仕事ですけど、まだ部員になっていませんけどね。

伊藤　でも、部員になってからもその仕事は続けたわけですね。

宝珠山　それはずっと。だから、計画官室から防衛課につながってもやりますが、主としてこれを手掛けた時は、まだ……。

伊藤　草創期ですか。

宝珠山　着任して間がないぐらいですね。山下さんという方が問題意識を与えてくれて、彼の三次防をやった経験を踏まえてです。しかも、研究開発を担当していましたから、長期的にものを見る目を持っていることになりますね。それでないと務まらないわけです。研究開発も長期的であり、さっきおっしゃった長期的な将来の兵器の発達を踏まえて、どういう戦闘があるかをある程度予測しながら、武器のあるべき性能を技術能力とあわせて計画するわけですね。したがって、非常に長い目で見る視点を教えてくれました。

伊藤　この段階だと、長いミサイルはまだないですね。

宝珠山　ですね。

伊藤　長距離ミサイルができると、まただいぶ……。

宝珠山　変わってくるでしょうね。変わってくるでしょうが、変わってくる時にどういうミサイルがあるのか、スピードがどうなのかということも研究開発の課題ですよね。

伊藤　そうですね。

佐道　こういうことを本格的におやりになった方というのは、防衛庁の中でもそういらっしゃらないんじゃないですか。

宝珠山　ORの専門家を除けば、多分いないと思います。西廣さんから、「陸・海・空や数値がわかるのは、おまえだけな。○○○の所に説明に行ってくれ」と、よく言われました。

佐道　先ほど「やっと有事法制も通って」という話で、そういうもののすべてのあれがここ（「防衛研究臨時委員会の研究方針（抜粋）」）にあってというお話でしたけれども、こういう戦略構想とか具体的なことを考えていきますと、まさに有事法制をどうするかとか、具体的な体制の整備の問題という話が出てまいりますね。このちょっと前にあった三矢研究問題の影響とか、ああいうのはどの程度あったんでしょうか。まだお感じにならないですか。

宝珠山　三矢研究が問題になった時、どこかで酒を飲んでたんですけどね。旧陸軍出身の方だったと思いますが、「あんな扱い方をされちゃ、困るんだよな」というような話をよく記憶しております。私どもにとっては素直に当然のことだと、まだ入庁して間がないですけれども白紙的に思いました。だって、自衛隊の使い方ですからね。

伊藤　そうですね。

宝珠山　私もこの前、申しあげたかもしれませんけれども、軍隊を非難するというのは一般的には誤りですね。軍隊の使い方が悪かったということについて批判するのはいいんですけど、東條（英機）さんを非難するまではいいですけれども、陸軍一般とか海軍一般を批判するというのは、私は間違いだと思うんです。

伊藤・佐道　そうですね。

宝珠山　やっぱり中立なんじゃないでしょうか、軍隊は。少なくとも中立であるべきですよね。ただ、使い方の部分というのが有事法制だと理解しています。

伊藤　使い方といいますけど、日本は軍隊だと認めていませんからね。

宝珠山　軍隊であるかどうかというよりも、実力部隊であることだけは確かなんです。その時は、「軍隊である」などという議論はしませんでしたけれども、「有事法制があるのはあたりまえなんじゃないか」ということは議論しておりましたから、有事法制は念頭にあります。部内では部外がどうであるかではなくて、防衛庁の将来あるべき姿を、防衛研究臨時委員会にしても具体的に制度調査委員会という機関で研究していたと思いますが……。

伊藤　ずっとありますね。

宝珠山　この「研究方針」の中をご覧いただきますと、呼び方はともかくとして考えていることは、橋本さんにいわせれば包括的有事法制のあり方ですよね。小泉さんにいわせればテロを含むものなんですね。テロとは言っておりませんけれども、間接侵略ともいっているし、読み込むことは容易なわけですよ。それらを陸・海・空じゃなくて、「日本の国軍がどう対応するのかということを研究しろ」と言っているわけですね。これが私は原点だと思います。

その後、萎んじゃって――萎まされたんだと思いますけれども、非常に限定された部門でごちょごちょやって来たように思います。なぜ廃れたかといえば、やっぱり出稼ぎで来て、すっと帰って、積み重ねが残らないからです。積み重ねができるようになったのは、西廣さんなどすなわち一期生――彼は二期生ですけれども――の人たちが成長していって中心になる時期、これが四次防から五次防なんです。その成果が、九七年防衛計画の大綱なんです。私が計画官室の時は、まだ入庁して五年生です。西廣さんとかは、もう十年選手ですね。いちばん働き盛りなんです。

伊藤　ずいぶんいろいろお話を伺いましたので、だいぶ時間がたったように思いますが、まだ五年なんですね（笑）。

宝珠山　この前のは、生まれた時からですから（笑）。

伊藤　いや、きょうのお話だって、ずいぶん長いじゃないですか。この前のお話は、ここに戻ってくるまでですからね。でも、もう

その間にだって……。

宝珠山　この前が、四年半ですね。

伊藤　ずいぶんおやりになって、きょうもまたお話を伺って、まだ五年目ですよね。

宝珠山　まだ仕入れの時期です。

佐道　でもこの仕入れは、先生にとって非常に貴重なものでしたね。

宝珠山　何度も申しあげますけど、その通りです。いい上司といいますか、前任者に恵まれたということは、おっしゃる通りです。

伊藤　やっぱり人事の人たちがよく見ていたということですかね。人事というか、幹部の人たちが。

宝珠山　……まあ、それは。

伊藤　今度、ご自分が人事のほうでまたおやりになると思いますけれども。

宝珠山　それで、このオペレーションズ・リサーチを幹部教育の中に取り入れろということでスタートするのが、システム分析室なんです。これはまた後日お話しする機会があるかもしれません。しかし、なかなか実っておりません。

■「統合作戦能力の検討作業」に着手

伊藤　私は三矢研究で、「とにかくこれはだめだ。防衛庁は何もやってないんだ」と思っておりました。

宝珠山　そんなことはないんです。表に出さないということと、研究しないということとは全然別です。だから、この時からずっと。

伊藤　三矢研究の問題があろうがなかろうが……。

宝珠山　はい、必要なものはやっているということですよ。それから佐道先生が、海上交通の保護が大綱の中に入っているとか、入ってないとか書かれておりますけれども、そんなのは関係ないんです。実質は、全部やっているんです。それを外に出す時に、どういう作文にするかという部分、これは課長以上ぐらいなんです。あるいは私どもというか先任部員クラスでいろいろ配慮して作る。担当部員等が、実質的なことは全部やっているわけですから。だからというか、有事法制をやるにしましてもどんなのが必要なのかというのは、作戦場面を何らかの形で係数化することがないとだめですよね。

伊藤　それはそうですね。

宝珠山　質だけではだめなんですね。質と量、それと配置、施設もありますし、それをコンピューターの中で出来ることはやろうじゃないかと。その当時のコンピューターの中でできることは限られていたわけですけれども、しかし旧陸軍がやっていたような将棋の駒でやるのとは、はるかに違うものができるということだけは、皆さんコンセンサスなわけですね。これをまとめまして、これ（「統合作戦能力の検討」作業実施について）は局長説明した資料なんですが、「今後、こういう計画でやります。オペレーションズ・リサーチに携わる人間を、これこれ予算要求します」という資料なんです。それをやって進んできておりまして、ようやく七六年大綱ができた翌年、「防衛諸計画」の訓令の中にこれを位置づけたんです。ちょっと話が飛びましたけど。

伊藤　それは、防衛局としてですか。

宝珠山　防衛庁として。

伊藤　担当は？

宝珠山　担当は、私が二回目に防衛局にいたとき（昭和五十二年四月）です。ちょっと話が飛びましたけれども……。

伊藤　芽はここにあるということですね。

宝珠山　ここで仕入れたものを一般化するのが、それからまた七、八年たってからですけれども。十年たちますかね。それが「防衛諸計画の体系」なんです。これは、防衛計画の大綱よりもはるかに実質があるんです。ここで、統幕僚会議の果たすべき役割とい

うのをぐんと増やすんです。

これは、制度調査委員会で狙っていた軍隊――軍隊と言っちゃいけませんか――自衛隊の運用というのを統合的視点からやるべきだと。運用は統合的視点からやるべきだと。それをやるとすれば、それは防衛局がやるか、統合幕僚会議がやるかですけれども、統合幕僚会議というのがあるわけですから、ここにきちっとした任務を与えようじゃないかということであれ（防衛諸計画の訓令）をつくったんです。今もずっと活きておりますけれども。

伊藤　それで、統幕がだんだん力を持つようになったわけですね。

宝珠山　そういうことをすることだけでは、……法律で、あれ（防衛諸計画の体系）は防衛庁長官命令ですから訓令ですけれども、任務を与えるだけではだめ（力を発揮できない）です。私どもがやりましたのは、統合幕僚会議事務局の増員です。一挙に増やしたって、これはだめなんですね。つまらんのが来たってしようがないですから。育った人を逐次入れていって、結局ステディーにやるしかないです、これは。所詮、ソフトウエアなんていうのは人間の質ですから。で、ようやく今の姿にまでなりつつあるんですね。

ただ、「防衛計画の大綱」は、化粧されたものなんです。ですから、綺麗に見えるかもしれませんが、綺麗でないという人もいるかもしれません。それは、女性の好みと同じですよね。女性なら男性の好みと同じで、好き嫌いはあるでしょうけれども、社会党が見てもケチをつけられにくいものにつくったわけね。だけど実質というのは「赤本」であり、また「防衛諸計画の体系」の中に込められているんです。これ（「赤本」）は「極秘」ですから、出ませんよ。

伊藤　戦前のやつは出ていますよね。

宝珠山　はい、まあそのぐらい経てば出るかもしれませんけれども。

伊藤　今の奴は、出るわけにはいかない（笑）。

宝珠山　とても恥ずかしくて出せないかもしれませんけど。

伊藤　いやいや。

宝珠山　ともかく、あることはあるわけです。

伊藤　そういうＯＲの場合に、米軍というのはファクターとして入ってきているんですか。

宝珠山　それがここ（「統合作戦能力の検討作業」の「研究の手順と範囲」）で、大きく分けて作戦のやり方として、連合作戦と独力作戦という形で二つに分けています。ここ（連合作戦）では米軍を考慮するわけですけれども、しかし実質的に米軍を考慮したら、ここ（日本）がやるとこないんですよ、米軍が強すぎて。

伊藤　あまりにも計画が大き過ぎるんですね。

宝珠山　ええ。これ（連合作戦）を持って来ますと、ここ（日本）はやら（戦力）なくてよくなっちゃうんです（笑）。それはそう米軍は強いですよ。今もそうだと思いますけど。

伊藤　今は、ますますそうじゃないですか。

宝珠山　だから、「防衛計画の大綱」も苦労したんです。なぜ「限定小規模」が入ったかというと、これ（米軍）との力のアンバランスが大き過ぎるから。だから米軍をポンと持って来ますと、すなわち、安保条約が機能する状況というのは、「侵略が起こらない」という主張をされたらお手上げなんです。大蔵省に行って説明しようと、外務省に行って説明しようと。「日本の防衛力はどうでもいいじゃないか。予算の範囲内で、好きなものを買っとけよ。それを使って訓練しときゃいいじゃないか」ということになるわけで、これは独立国の防衛力整備の理念にはならないんですよ。

伊藤　そうでしょうね。

宝珠山　そうすると、「この部分（日本の防衛力）が働く役割は、小さいけれどもあるんだよ」という説明を入れなきゃならないんですね。そこで出てきたのが、限定小規模なんです。だから、

「これだけのものを自己完結的に備えるということをやっておくことが、この（米軍）力を引き出す引金なり導火線になるんだ」という説明にしかならないんですね。だから、日米安保条約の安保体制を前面に出しますと、本当に楽です。

伊藤　やることがない？

宝珠山　ええ、それはもう。

伊藤　やることがないということはないでしょうけどね。

宝珠山　大蔵省がつけてくれる予算の中で、いちばんかっこいいものをやろうじゃないかと。ドロにまみれる普通科（歩兵）よりも飛行機乗りのほうがいいよ、船のほうがいいよ、船も大きいほうが楽だよと。だって、揺れませんからね。飛行機も速いほうがいいよと、こういうことになっちゃうわけです。どんな速さで、どういう能力を持った飛行機かの議論にはならないんですね。「じゃ、アメリカが持って来ないものをやりますか」とか、そんなことになっちゃうんですね。今まさに、そうなりかけているかも知れませんね。これは、属国の軍隊ですよ。そういうのを避けるために、あれ（限定小規模等）は入れたんです。苦労して入れているということなんです。

　じゃ、日米共同作戦になった時に限定小規模がないじゃないか、と佐道先生はかかれていますが、これは、当然なんです。何故かというと、一緒にやろうという研究なんですから。これは、「自衛隊が持っている力を、いま既に持っている既存の、あるいは持つことに決定している力を米軍の力と一緒にして、ある事態にどう対応するか」という研究ですから、この部分（日本の防衛力）がどうあるべきかという理念は問わない。今あるものを運用することの研究なんですから、米軍と組み合わせるだけの話。足りないところをどうするかといえば、米軍が持って来るか、後退するか、将来自分で持つ時の参考にするか、ということになる話なんです。ここ（防衛構想）では、「この日本が持つべき防衛力の理念をどう構築するか、一般の理解が得られるようなものを」ということですから、そこでORで言いだしていた限定小規模なんです、言葉の遊びではありません。

伊藤　私どもは忘れがちですけれども、こういうことをなさった時代というのは、まさに社会党が強い時代ですから、どんな法案をつくったって国会は通らない。

宝珠山　そうですね、何回か会期を経ないと。

伊藤　人員の増だということですよね。

宝珠山　そうです、そうです。大した定員増でもないのに、ああだ、こうだと言って、そういう時代なんですね。ちょっと話が飛びましたけれども、こういう時代にいい先輩の下で問題意識をひと通り、防衛研究臨時委員会の研究課題というのは旧軍時代の人たちを含めてだと思いますが、全部挙げてくれてあると思います、用語はともかくとしまして。

伊藤　これは、昭和二十七年でしたっけ。やっぱり旧軍の人がかなりいますね。

宝珠山　はい。ここには書きませんでしたけれども、全部割当があるんです。

伊藤　研究課題の担当者がいる？

宝珠山　研究課題ごとに、「（防衛研究臨時委員会の）研究方針（抜粋）」の別表の担当部局課の下部に担当者が書いてあるんですね。「2」というのは、第二幕だと思います。「調」で、これは蔵富ですか。これは広瀬とか、2の調査課の蔵富、広瀬ですか。これは、おそらく情勢関係じゃないでしょうか。情勢関係だから調査系統がずっと並んでいる。

伊藤　中山定義さんも。

宝珠山　来ていますね。それから、これは田中……。

伊藤　雄一と書いてあります。

宝珠山　田中耕二じゃないですね。ここは中山さんとか、寺井義

守さんもいたんじゃないかな。それから安藤さんとか、ずっと割り当てていますね。後年、偉くなられる方たちが来ているんですよ。

伊藤　やっぱり旧軍の方もいらっしゃいますね。

宝珠山　かなりの人が。2と書いてあるのは全部、旧軍だと私は思います。これは今泉正隆さんですね。銅崎？　これは宍戸基男さんですね。

伊藤　宮崎剛と書いてあります。

宝珠山　宮崎剛さん、いまもまだ生きているんじゃないですか。

伊藤　岡部長衛という人が、ずいぶん出てきますね。

宝珠山　これは装備局武器課ですね。これは通産かもしれません、どんな方ですか？　生産関係ですと、通産系統の方の可能性がございますね。私は存じあげておりません。

伊藤　「通」と書いてありますね。

宝珠山　これは、装備局の通信課です。（装・管）は装備局管理課です。これは、装備だけですか。

伊藤　「装・通」と書いてありますね。

宝珠山　「装・通」は、通信課ですね。来栖大児郎、この方は防衛施設庁の東京局長ぐらいで辞められていますけれども。

伊藤　これは、「クリス」と読むんですか。

宝珠山　「クリス」と読みました。名前がでしょう？　字が違っているかもしれませんが「クリス」です。私が入った時にまだいましたから。英語の達者な方です。

伊藤　そういう構想のところには、相当旧軍の関係の。

宝珠山　これだけの人を集めて会議を開いていって……。

伊藤　さっきのたくさんの、三十幾つかの課題ですよね。

宝珠山　そうです。それ全部やれなかったんですが、成果の一部がこれ（資料「制度調査報告」の最終頁）にまとまっているんですね。これは私、コピーする時に失敗しちゃったんですけれども、折り畳んだやつのままコピーしたんですね。そのために陸・海・空の別が出てないんですけど、この資料が将来公表されたら出てくるものです。第二次案以降は、いちばん右に『完成時の維持費』と書いてありますけれども、これがだいたい規模を示すものなんですね。

伊藤　維持費、ものすごく大きいですね。

宝珠山　そうなんですよ、一次は大きいんですよね。

伊藤　これは要するに、財政を考えないで？

宝珠山　おそらくこの時、集まった人たちが、やれること、やりたいことを全部取り入れてみたというのが一次案じゃないでしょうか。二次案以降というのが、財政とか現実性を考えて五ヵ年間でやれるものというので絞り込んでいくと、あまり大差ないものになったということだと思うんです。「計」のところにありますものが、だいたい計画の規模を示していると思いますが、大きく三分の一ぐらいに一挙に減るわけですけれども、ここらあたりは現実性を考えている。

あとの変化というのは、九月に三回もやるというのは何かあるんだと思いますが、九月は予算編成期ですから、若干単価の変更とかそういうのがある時期だと思います。それから、池田ーロバートソン会談などに、このあたりのものが流れていると考えられますね。数値的にも、ほぼ一致しているわけです。

伊藤　その最初のほうというのは、とにかくアメリカ軍からの供与？

宝珠山　供与を前提にしておりますね。供与は前提でしょうけど、装備は貰ってきたとしても、おかなきゃだめ（配置場所を取得・整備しなければならない）ですし、そういうのがいろいろと二次案以降の課題になるんじゃないでしょうか。

伊藤　供与してもらって、教育も供与なんですか。

宝珠山　顧問団がいましたからね。その時、顧問団と呼んでいたかどうかわかりませんが、実質的には顧問団ですよね。

伊藤　アメリカ本土に連れて行って、飛行機の訓練なんかやっているんでしょう。

宝珠山　航空自衛隊は、そういうのもあったんじゃないでしょうか。そうだと思いますが、陸はないと思います。

伊藤　そうですか、国内でやる。海もおそらくそうでしょうね。

宝珠山　海もないと思いますね。航空はちょっと後からの発足ですけど、海などは海上保安庁がありますし、海軍の人たちが船を動かすことには熟練していますから、それは必要ないんだと思いますが。ただ、規模をどうするかというのはまた別だと思います。

伊藤　海軍の人たちは、向こうの海軍とも仲がよろしいですからね。

宝珠山　そうです、そうです。また、任務引き継ぎを行ったときの問題とも絡むと思いますが。

伊藤　宝珠山先生は、これまでの時期にはあんまり在日米軍との接点はないですか。

宝珠山　英会話研修にＭＡＧ―Ｊというのがあって、行ったことはありますけれども、交渉とかそれはありません。

伊藤　情報交換とか、そういうものもなしですか。

宝珠山　それはないですね。それをやらせてもらえる時期ではありません。

佐道　あと？

宝珠山　それは、対米交渉の能力などは、まだ持ちようがないんです。そういうことで、計画官付の間が半年ほどあるわけですが、この時期は、将来のための仕入れで、その後の発展の基盤というか、その入口、玄関ぐらいまでは入ったという時期でございますね。

伊藤　結構短い期間に、ずいぶんなことをやられているんですね。

宝珠山　今まで述べたこと（「制度調査委員会」の資料でお話ししましたもの）は、私が行く前に、過去にやっていた人たちの成果について説明をしておりますので、自分がやったわけじゃありませんので、そこは誤解なきようお願いしたいんですが。そういう問題意識を持ったということが非常に大きいですね。問題意識を持ち、過去の人が持ったものを自分のものに取り入れたということで、非常に勉強になったということであります。

伊藤　そういう発想を持つ役人が、少なくなってきているんですよね。要するに、過去の蓄積をどういうふうに理解するかと。

宝珠山　それは、あるかもしれません。

伊藤　目先のことだけと。この前ちょっとお話がございましたように、要するに法律が決まっているから、その法律の中でどうやって運用していくかというだけで、総合的な見通しとか、そういうことはあんまりわからない。

宝珠山　そういうことはあるかもしれません。とくにこの頃（昭和三十年代）の防衛庁ということでいきますと、二年いて、次は出身省庁のどこに栄転するかというのが関心事項であるところに、私どもは「もうおまえ、ここから逃げられないよ」ということで放り込まれたわけですね。

伊藤　でも、ちょっと誘惑もあったんじゃないですか、経済企画庁に。

宝珠山　それは、初めから考えておりませんので（笑）。

伊藤　どうしましょう、ここで切っていいですね。

宝珠山　それでよろしいかと思います。あとは、「所要防衛力の一試算」というのを差し上げましたが、これは中曽根さんの命令なんです。これは、次回のほうがいい。

伊藤　その前に、防衛課なり防衛局なりの状況とか、ここで大蔵省主計局付になっていると。これは、なんとも理解し難い事態ですね。

宝珠山　これは、もっと後で申しあげたほうがいいと思うんですが、昭和四十五年春に、「四次防の概案」というのをつくり終えまして、私は防衛課から人事局のほうに移るんです。もう既に二年半たっています、確か。

その時に、「おまえ、アメリカに行って来い」と。当時は、PPBS（Planning Programming Budgeting System）の研修が華やかなりし頃なんです。各省庁、私どもは経済企画庁と警察と通産の人と四人で行きましたが、研修というか「行って調べてこい」という命が下りるんです。それで、海外出張の予算がどこについていたかというと、主計局についていたんですね、PPBSだものだから。

佐道　そのPPBSの話はゆっくり伺いたいので、次回に。

宝珠山　それで、予算のついている主計局付になってアメリカに一ヵ月ほど行くんです。そのためだけなんです。

伊藤　アメリカに行ったというのが書いてないから、何でと思ったんです。

宝珠山　出張の辞令は、ここ（履歴書）には入れてないから。

伊藤　いつも履歴だけ見ていると、そういう問題がしょっちゅう起こります。ハテナ？　という。

宝珠山　それから兼経理局会計課というのがありますけど、会計課というのはシステム分析室を会計課につけたんです。

伊藤　それで、そっちに行ったんですか。

宝珠山　それでOR担当ですから、会計課兼務となったんです。勤務の実態は変わってないんです。

佐道　よく役所の場合には、ちょっとの間だけ手が足りないので手伝いに、ということで替わったというか兼任になったということも。そういう関係なのかなと思ったんですが。

宝珠山　それではなくて、予算のつきどころですね。

佐道　仕事に名前が後でついたわけですね。

宝珠山　そうですね。

伊藤　いや、きょうは、今までいろんな方からお話を伺ったのとはまた違った角度から伺って、ちょっと感動いたしました。来月の予定を決めていただけないでしょうか。……次回は、四月十六日の三時～五時で。

宝珠山　ちょうど一ヵ月後ですね。

（次回打ち合わせ後）

宝珠山　この質問事項で、きょうは全部行ききれなかったかもしれませんが。

伊藤　いや、全部いくはずがないと思っておりましたけれども。

宝珠山　研究課題ということで若干触れる必要があれば、何をやったかという部分でいきますと、私がやったということではありませんが後の話の源流ということでいきますと、研究方針の別表の課題の部分項目というのは重要だと思うんです。ただ、このまま添付されていただいても結構ですけど。

伊藤　いいですか。そうしないと、これを読んで、わからなくなります。

宝珠山　それは構いません。そういうつもりでタイプいたしました。

伊藤　ありがとうございました。それでは来月、またよろしくお願いします。

佐道　（質問事項）をつくり直して、また次回用に。

宝珠山　十番については、自主防衛論というか、「中曽根さんが発表したものの陸上関係をつくれ」といわれてつくったのが、これ（「陸上所要防衛力の一試算」）なんです。マルにしてありますのは、数字を入れますと極秘になっちゃうからマルにしてあります。これはタイプしてありますが、原本は手書きなんです。これ（青焼きの資料の見本）と同じような二枚紙で青焼きで。最初は、「核を持たないで、核を持っているのにも対抗できるにはどれだけ要るか」と言ってきたように思うんですよ。「そんなの、できる話じゃない」とか言って押し返したら、「じゃ、何ができるか」というので、「こういう限定をおいてやれば、ひとつの試算はできますね」ということを上げたら、「じゃ、それでやってみろ」と。で、急遽やらされたのがこれなんですよ。

しかし、これは私がやったということではありません。陸・海・空各幕に各々お願いしてつくったわけですけれども、逆上っていきますと制度調査委員会に戻っています。

伊藤　やっぱりそれが源流だというのは、非常に大きな意味があるんですね。

宝珠山　はい。私、各幕にはもっとこれよりも詳細なものが眠っているだろうと思っています。各幕のほうが組織がしっかりしていると思います。というのは各幕は、二年交替で代わるようなことではなくて、ずっと定着してやってますので。

伊藤　活用していると思います？

宝珠山　ええ、保存してあるはずですから。

伊藤　いや、保存はしてるであろうけれども、活用している？

宝珠山　保存し、活用しているはずです。

伊藤　保存してロッカーの中に入ったきりというのだってしょっちゅうあるんですよ、本当に。

宝珠山　あるかもしれませんけれども、これらは原点に立って考えようとすれば非常に参考になるものだと思いますので、どこかにはあるはずです。

伊藤　しかし、防衛予算系はきょうお話を伺いまして、本当の「秘」の部分ですね。これは、大変なことだなと思いました。

宝珠山　この部分（実質的な内容）をつくっているのが、三十代から四十代にかけての十年間ぐらいに入る人々なんですね。まあ、四十を若干過ぎることもあるかと思いますが。あとは、その上に乗っかって国会で答弁したり、対外的に発言をしたりということなんですね。

　私はこの部分（制度調査委員会の研究方針、別表の課題など）が底流というか、あんまり動いてないと見ております。その時代、時代に応じて一般に受ける言葉を使って、国民の説得に当たっているんですね。これは一つの知恵だと思いますけど。

伊藤　まあそうですね。ちょっと違った役割ではありますが、大事な仕事ではあると。しかし、やっている本人は面白いわけがないでしょう。

宝珠山　どっちですか。

伊藤　いや、説明したり。

宝珠山　と思いますよ。しかし、とくに外から来た人たちは全部そうですよ。だって、四十四、五から来る人もいるんですよ。それは、どんなに優秀でも記憶力も違うし、吸収力も、（若い頃とは大きく）違いますよ。

佐道　中身、わからないですよね。

宝珠山　ええ。分からない。分かるということを言う人がいましたけれども、分かってないです。

伊藤　分からないということが分かれば、いいんじゃないですかね。

宝珠山　分からないということが分かってないで、分かっていると思っている人がいるから困るんですよ（笑）。だから、西廣局長とは長いつきあいですが、「家庭教師業も疲れるなあ」と言って（笑）。優秀な学生で、若ければ吸収力もありますけどね。もう吸収力が弱ってきて、あるいは頑固になっている人に、ある程度教えなきゃいかんというのは疲れる。

伊藤　教えられるほうも、それぞれプライドがあるでしょう。

宝珠山　そうなんですよ、大変なプライドを持ってたりするわけですよ。ですから、今はないと思いますけれども……今でもまだありますかねえ、他省庁から来ている人たちというのは優秀ではありますけれども、仕事をするといっても限界がありますね。対外的にその立場にありますから、自分が傷つかないように如何に二年間なりを過ごすかということが、やっぱり重点ですよね。支えるほうも、二年間をうまく無事に過ごしていただけるかというのが評価基準になりかねないわけですから。

伊藤　それで、なおかつ自衛隊の理解者になってもらうと。

宝珠山　まあ、それはございますね。

伊藤　これ、大事なことですね。

宝珠山　放っておいてもなりますけどね。だいたい防衛庁長官に来ますと、分かるようになるんじゃないですかね（笑）。普通の人だったらそうだと思いますよ。

伊藤　政務次官でもそうですか。でも、加藤紘一さんみたいな人もいるからね（笑）。

佐道　その話は、また後で。

伊藤　楽しみにとっておきますか。どうも本当にありがとうございました。

宝珠山　こんなことでよろしゅうございますか。

伊藤　きょうは、ちょっと目を開かれた感じがしました。本当に驚きました。さっきお見せくださった地図とかは、「秘」ですか。

宝珠山　いや、これは「秘」ではありませんよ。しかし、私に説明するためにいろいろ手書きで入ったりしておりますから、次回工夫してコピーして来ましょう。私は本来、十年か二十年か分かりませんけれども、こういうものは一定期間後にはオープンにされていくことが必要だと思うんですがね。

伊藤　本当ですね。

宝珠山　いま思えば、これなんか「秘」を解除しておけばよかったと思うんです。私に提案権限があったんだけど。制度調査委員会を廃止する手続きをした時に、「秘」を解除しておけばよかったと。

伊藤　どうも長時間にわたりまして、ありがとうございました。

（終了）

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第３回

開催日　2004年4月16日（木）
開始時刻　14：55
終了時刻　17：15
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（政策研究大学院大学 元助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

第3回 インタビュー質問項目

2004年4月16日

1

前回のお話で、防衛課におられたとき、中曽根長官の自主防衛論のうち、陸上所要防衛力の策定作業をされたということでした。前回ご提示していただいた資料を元に、内容や策定の基本的考え方など少し詳しくご説明いただけないでしょうか。

2

前回いただいた資料によりますと、「基盤的防衛力構想」の原型は、六〇年代の長期防衛力整備計画策定に深く関与した西廣整輝氏の考え方の中にあるとあります。その点について詳しくお話いただけますか。

3

上の質問とも関連しますが、有事急速造成の基盤整備を目標とする方向で陸幕と合意したとのことですが、陸幕はそれについてどのような見解だったのでしょうか。また、そういった合意があったとしたら、後年、久保氏が「基盤的防衛力構想」を提唱されたときに制服の方々からの批判がかなりあったと思いますが、それはどういった点について批判をされていたのでしょうか。

4

所要防衛力ではなく、基盤的な防衛力の整備という方針について、海上自衛隊や航空自衛隊はどのような反応をしていたのでしょうか。また、西廣氏の考え方は、防衛局内部で広く認められたのでしょうか。

5

先生の資料によりますと、七〇年一月には「四次防構想防衛課概案」は策定されて陸幕に検討依頼をされているとのことですが、そうしますと、四次防の基本的考え方はその時点でできていたということでしょうか。

6

中曽根長官は就任以前から自主防衛論を唱えており、かなり意欲をもって長官に就任されたといわれています。先生もそのための陸上所要兵力策定に関与されたわけですが、中曽根氏の意向というのは、防衛課が策定していた四次防の基本構想に何か影響を与えたのでしょうか。与えたとしたらどういった点でしょうか。

7

先生は、防衛庁長官としての中曽根氏（総理としての中曽根氏はまた改めてうかがいます）をどのように評価しておられますか。

8

前回のお話の最後に、米国出張をされたということがありました。出張の経緯や内容などについてお願いします。

9

上の質問にも関連しますが、当時、計画策定に当たってＰＰＢＳ（Planning Programming Budgeting System）の考え方が重要になっていたとのことでした。実際の計画策定に当たって、ＰＰＢＳの問題はどのように扱われたのでしょうか。

10

先生は七〇年四月に人事教育局人事課に異動されています。この時点で四次防とはまったく関係がなくなられたのでしょうか。あるいは何らかの形で関与されていたのでしょうか。

11

四次防の審議は紛糾し、国防会議などでかなり批判された結果、規模も縮小し、内容も三次防の延長という形になりました。先生は四次防の原案作成段階に大きく関与されたわけですが、成立した四次防についてはどのように見ておられますか。

■ OR研究についての補足説明

伊藤　それでは、始めさせていただきたいと思います。前回、防衛局防衛課の部員におなりになったところでいろいろお話がございまして、これはちょうど二年ですか。

宝珠山　（部員になってからの）約二年ぐらいです。

伊藤　人事教育局にお移りになります前、防衛課のいちばんおしまいのほうだと思いますが、先生がお移りになる年の初め頃だと思いますけれども、前回のお話で中曽根（康弘）長官の「自主防衛論」のうち、陸上所要防衛力の試算作業をされたということでございました。その点について少し、前回いただきました資料をもとにお話しいただければと思いますが、いかがでございましょうか。

宝珠山　その前に、この前お話ししたときにORの関係で青刷りのペーパーをお見せしましたけれども、その一部で差し支えないと思われますものをこの前さしあげました。

伊藤・佐道　お送りいただきました。

宝珠山　これに関連して、この後の話、いまおっしゃった所要防衛力の検討もORの中からスタートしておりますので、この部分を少しだけ補足させていただいて、本日の質問項目に入りたいと思います。

伊藤　ですから、中曽根さんは大きくぶちあげたといっても、その具体的な内容は、この前からお話がございました流れの中のことになるわけですね。

宝珠山　そうなんです。きょうの質問項目の5番目あたりも、きょう差しあげた資料の中で、『四次防審議資料（陸自関係No.01）』と関連するものです。これ（配布資料の元になる茶色の分厚い冊子）はこちらにさしあげますけれども、これは1から3まであるんですが、この中から今日の話に直接絡む一部をコピーしていただいたものです。

伊藤　それは、「秘」じゃないんですね。

宝珠山　これは（当時は）、「秘」なんです。「秘」と打ってあるんです。しかし、これは私が作って「秘」に登録する前のものですから、形式「秘」ではありません、もう時間がたっているからいい、実質「秘」でもないと判断しています。

伊藤　昭和四十四年だと、もう……。

佐道　もう三十年以上前だから。

宝珠山　「秘」に登録して、配付しているのは二十部つくっているということです。番号が1から20まで入りまして登録されて、関係者に配付されているんです。表紙には解除されない「秘」と――これは自分で決めたんですけれども、記しておりますが、これ（『四次防審議資料（陸自関係No.01～03）』）の冊子は、「秘」には登録はされてないんです。したがって、法形式的には捕まらないと、私は解しています。これは、No.1、2、3全部そうなんですが。

伊藤　これは、四次防の構想ですね。

宝珠山　そうなんです。審議途中のものです。

伊藤　四十四年十月ですね。四十五年になると、先生はもう……。

佐道　中曽根さんが来て。

宝珠山　中曽根さんが来る前の、部内の審議資料です。この前さしあげた（『陸自関係計画の問題点と整理の方向（四十四・十二・六）』）のは、（四次防構想防衛課）概案の中から抜粋したものですけれども、これはこれらの部内審議のために集約したものとしてまとめて、バトンタッチするために作成したものということで理解していただければいいかと思っております。

伊藤　分かりました。四次防がかなり煮詰まってきた段階で、人

事異動ですか。

宝珠山　そうですね。これは四月になりますけれども、公務員の場合、予算の見通しがついてきますと次の人にバトンタッチするというのが一つあります。それからもう一つは、二年間ぐらいたちますとバトンタッチするということです。

伊藤　いまは、だいたい二年でございますか。

宝珠山　だいたい二年ですね。二年を越しますと四年になっちゃうというようなことがございます。

伊藤　分かりました。

宝珠山　そういうことで、この前さしあげた資料（『「統合作戦能力の検討」作業実施について』）は、結論を出すということではなくて、これから統合作戦ということで、陸・海・空ということではなくて全体をまとめて日本の防衛にあたる作戦を考え、検討しようという作業方針の審議資料です。その材料といいますか、手段としてオペレーションズ・リサーチを使うということを決心するわけでございます。

伊藤　それは上のほうの方も、ＯＲのことは分かっていらっしゃる？

宝珠山　分かっているかと言われると、分かっていただいたという話になりますね（笑）。

伊藤　やっぱり説明した？

宝珠山　それは、説明します。色々と説明して、「こういう計画でやります」と。この前も申しあげたかと思いますが、それをやるためには人材を逐次、投入していかなければならないわけです。人材を採るためには予算を取ってこなきゃいけないということです。また、それはある日突然、人数を増やされてもだめですから、逐年計画で、このときはおよそ十年を考えて、連合（日米共同）作戦までいこうということを考えた構想なんです。

だから、こんな形（研究の手順と範囲の表）になりますが、原案ではこういうところからずっと上がっていく（重点正面→準備正面→対着上陸→正面防衛力→独力作戦→通常兵器→限定戦場→軍事力→直接侵攻対処）ということを考えたものなんです。

伊藤　こっち（右側）から上がって（左側へ）いくわけですね。

宝珠山　いちばん小さいところから始まって、こっち（右側から上方）へ上がっていくか、こっち（右側から下方）に上がっていくかですね。こちら（下側）のほうは、複合侵略対処のほうになりますが。そういうことを十年計画で予算と人をとってやろうということを構想して、オーソライズしたわけです。これは、オーソライズするときに防衛局長に説明した資料の抜粋です。だからＩＶのほうに、どんなことを内容的にということで準備しているものです。また、『我が国の防衛構想について』という資料を、同じく差し上げたと思いますが、この前は図解をお見せするだけでありましたが、これはそのときのものではありませんが、ＯＲの成果（の一部）を誰かが持ち出しまして――大賀（良平）さんとか（笑）。大賀さんは海をやっていまして、これは（『我が国の防衛構想について』）公刊しておりますものを要約させたものなんです。ご理解をいただくには便利な資料かと思いまして、お送りさせていただきました。

伊藤　ここに先生、五十八年とお書きになっているのは？

宝珠山　昭和ですね。

伊藤　そうですけど、これは？

宝珠山　五十八年にまとめたんです。ですから、この時のもの（『統合作戦能力の検討一』）は、こんなことを「やろう」という計画なわけですね。これらへの検討作業を実施していく過程で少しずつ成果が出てきて、これで十余年たっていますけれども、その成果の一部をこういう形で公刊したと推定されるものであります。

伊藤　先生自体は、計画をつくるところまでだったわけですか。

宝珠山　二年間は運営はしておりますが、その全部はフォローし

ておりません。

伊藤　そうすると、あとの方に引き継いで。

宝珠山　その通りです。これは、どこでも（組織では）同じだと思います。

伊藤　それで、五十八年頃に一応……。

宝珠山　ここで防衛局長に説明したということは、単に私の構想ではなくて、防衛局全体としてやるんだということをオーソライズするわけですから、あとの人はその路線に従って運転していくということになります。その当初の構想が、これ（『「統合作戦能力の検討」作業実施について』）だったということです。

伊藤　スタートラインですね、分かりました。

宝珠山　これ（『自衛隊の作戦能力の評価』）は、その成果の一部と、その他の成果をさらにまとめたもの、何時頃のものか正確には分からないんですが、「秘」じゃないので全部さしあげますけれども、いつ誰が作ったか分からないんです。

伊藤　『自衛隊の作戦能力の評価』。

佐道　すごいな。

宝珠山　これらのＯＲの成果を取り入れているんですよ、持ち出しているんです。ただ、非常に機微にわたるところは書いてないと思うんですが、この頃どんな考え方でやっていたかというのはご理解いただけるし、研究者には十分役立つと思うんです。

伊藤　これ、誰が作ったかということも分からないわけですよね。

宝珠山　だから、海賊版なんですね（笑）。夏目（晴雄）さんだと思っていますけど。

伊藤　夏目さんに聞いてみよう。

宝珠山　いやいや、夏目さんに聞かないでくださいよ。

伊藤　聞かないほうがいいですか。

宝珠山　聞かないでください。聞いたって、彼は言わない。

佐道　先生、大賀良平さんとかが取り入れて公刊されたというのは、本の中とか、こういうところで出しておられるということですね。

宝珠山　そうです。陸・海・空三冊だったと思いますが、それを三冊というのは面倒です（分厚過ぎます）から、当時、まとめろということでまとめさせたものがありましたので、コピーしたものです。

伊藤　まとめさせたんですか。

宝珠山　そうです。それ（まとめること）は、勉強にもなりますから。

伊藤　栗栖（弘臣）さんと？

宝珠山　陸を栗栖さんで、（空は）竹田（五郎）さんじゃないですか、大賀さんが海で。

佐道　空が竹田さんで、海が大賀さん、そうそうたる陸・海・空の。

宝珠山　この方々が、実務をやったかどうか分かりませんよ。手下を使って持ち出してやっているんですから（笑）。

佐道　悪い人だなあ。

宝珠山　盗み出しては言い過ぎですけれども、まあそういうことをやらせられるだけの人たちですね。機微にわたるところは捨象すればいいじゃないかと。おそらく私の記憶に明確にはありませんけれども、そういうことを公にすることが国民の理解を深める上で有益ではないか、ということで黙認をしているということがあると思います。だから、これ（『自衛隊の作戦能力の評価』）もその一部だと思います。

伊藤　そうですか。でも、これは一般に公刊したわけではないから非常に狭い範囲で。

宝珠山　ええ、これは公刊してはおりません。だから、誰が作ったかも分かりません。

伊藤　先生もこれ、「年が不明だ」と書いてありますね。

宝珠山　不明なんですよ。しかし、内容からいきまして、このＯ

Rの成果を使ったものであることだけは確かです。大賀さんなどの著書より前かどうか、というぐらいじゃないかとは思うんですけれども、詳細に読んでいけば分かるかと思いますが、それを尋ねる必要はないんじゃないかと思っております。

佐道　大変なものですね。

宝珠山　そういうことで、ORという……

伊藤　これでしょう、先生。一九七X年頃か、というやつですね。五十年ですから、このとき始めたものがある部分、こういう形でまとまっているんですね。

宝珠山　目次体系から見ましても、同時進行の何個師団とかいうことで、先ほどの枝分かれしていく中の、独力対処能力で枝分かれしていく部分を逐次やっているわけですね、陸・海・空と（『「統合作戦能力の検討」作業実施について』参照）。

伊藤　じゃ、ごく狭い範囲に配付したということですかね。

宝珠山　こういうのは、そんなに配付されているはずはありません。よく私のところに残っていたと思いますけれども。

伊藤　でも、先生のところにはどうやって来たんですかね。

宝珠山　それは、この構想の出発点の所掌ですから来ますよ。

伊藤　こういうのは、いわゆる白表紙となるともうちょっと違うものですか。よく内部資料として白表紙というのを作りますね。

宝珠山　これは、いわゆる内部資料でもないんですよね。内部資料ならこちら（箱）にたくさん（『OR・PPBS関連保管図書目録』）、入っていますが、内部資料は「内部資料」とちゃんと記入するんです。

伊藤　記入するんですか。

宝珠山　これは（ある一冊を示して）研究資料ですが、番号が全部入っています。少なくともどこが出したかというのは分かりますね。

伊藤　これなんか、何もないですね。

宝珠山　これは表には、入っていませんね。しかし、これは海上自衛隊の誰かの、著者の前書きがありますから。

伊藤　ありますね。

宝珠山　これらは全部ORそのものであるかどうかは別にして、OR的手法を採り入れながら定量的に各種の事態を分析して、客観性を与えるということをやっているものの一部です。それを、たまたま私がいた段階で始めたせいか、手元に保管されていましたので、どなたか研究される方には便利かと……。

佐道　いや、もう大変ありがたいです、これは。

宝珠山　お持ちしたわけでありまして、抽象的にやっていたものから、若干以前からかもしれませんけれども、少なくとも私が携わるようになってからORというもの――あるいはシステム分析とか、システムズ・アナリシスとか、いろいろな言い方をしました、あるいはPPBSもそうなんですが、客観性を持たせるということで威力を発揮しているものであります。これは、コンピュータの発達が支えまして、しかもプログラミングが非常に簡単にできるようになって、ますますよくなっていっているということであります。

伊藤　前にお話しくださった、計画官室でずっとやってきたことの延長線上にあるわけですか。

宝珠山　その通りです。

伊藤　手法として、ORを入れたということで。

宝珠山　はい、防衛力整備計画としては、四次防からということになりますかね。それから先ほどの『「統合作戦能力の検討」作業実施について』は、それをつくる（ORを実施する）人間と材料を、予算をとってやろうという計画、構想であります。

　話は飛びますけれども、「民主主義国家間では、戦争がもうなくなった」というような言い方をされるわけですけれども、民主主義国家イコール・コンピュータも発達しているということを前

提にいたしますと、無数の戦争がコンピュータの中で行われている。これがORの発達となっているわけです。これは、自らの持っているいろいろな防衛力の要素をインプットし、相手側のものを測定して入れますと、瞬間的とはいわないまでも一年も二年もかける必要はない、一日か二日の間に結論が出ちゃうから、もうこれ、戦えば負けだというのが明白になっちゃうシステムなんですね。

だから、現実にドンパチという戦争が、民主主義国家間でなくなったと言えることは事実でしょうけれども、コンピュータの中では無限に近いのをやられているということが言えると思うんです。ORは、国際政治の中で大きな役割を果たしていると思います。それを端的に示したのが、ソ連の敗退でしょう。一所懸命やってみたけど、これはもうどうしようもないなということを認めたところに、第三次大戦と言ってもいいと思うんですが、ゲームの世界で「勝ち目がない」ということを認めたと見ていいんじゃないかと思うんです。

伊藤　ああ、そうですか。

宝珠山　そういうことでOR、あるいはシステムズ・アナリシスともいいますが、非常に大きな役割を防衛政策面でも、計画面でも、運用面でも果たし続けて来ているものだと思います。そういうことで、これ以降のご質問にあります項目は全部といっていいと思いますが、ORの成長と軌を一にして政策や計画の体系が進化してきておりまして、自らの防衛力の運用もそうですが、若干遅れてスタートする日米防衛協力の研究も、ORの手法を使ってやっているわけです。この基礎があるか――もちろん米国にもありますよ、日本にもあるから、共同して研究ができるものなんだと言えると思います。

したがってこの前後関係は、性格は別にいたしまして、いま行われている共同研究であれ、運用の研究であれこの頃から基礎がつくられて、その後、人の充実とともに、コンピュータの成長、高速化、大容量化、プログラムの簡易化とともに、発展して来ているというものでありますので、前回からの続きとして補足させていただきます。

■「陸上所要防衛力の一試算」

伊藤　こういう流れと、中曽根さんがボンと打ち出したこととは、あんまり関係がないわけですね。

宝珠山　中曽根さんのは、質問項目の「1.」番目は、この前「陸上所要防衛力の一試算」という資料をさしあげたと思いますが、これについてのご質問だと思います。これは、資料の上のほうに書いてございますように、私が防衛課を出る頃に中曽根防衛庁長官が着任されるわけでありまして、日にちは正確に覚えておりませんけれども、最初は「核への対処も含めて、通常兵器で日本の防衛を独自でやるにはどれだけかかるか、作ってこい」と。

伊藤　核も含めてですか。

宝珠山　はい、核に対しても。という言い方をされたように記憶しております。おそらく咄嗟に、「そんなことは、出来っこないじゃないか」ということを申しあげて――といっても中曽根長官に申しあげたわけではありませんが部内で申しあげて、「それなら、どういうことなら出来るか」という反問がありましたて、「I　一般前提」というところに書きましたけれども、日本の場合、韓国、台湾というものをどう考えるかということでぜんぜん変わってまいりますので、その点をひとつ仮定をおかざるを得ませんねと。独自の防衛ということですけれども、片方で「日米安保体制を」と言っているわけですから、米国の行動が何らかの要因によって対日支援が難しいということにせざるを得ないでしょうね、と考えたわけです。

そこで、「対日だけに指向するという考え方で、核は使わないというものを想定するなら、どの程度の防衛力があれば日本の防衛の任務を達成できるかは、やってみることができるでしょう」ということを申しあげて、「じゃ、それでやってみろ」ということで、一週間はかけていませんね。

伊藤　これは、米国はゼロなんですね。

宝珠山　ゼロ。だって、独自防衛で幾らかかるか必要か、試算しろというわけですからね（笑）。仮説の世界なんです。

伊藤　まったく、ちょっと。

宝珠山　だから、自主防衛をそう考えたんでしょうね。これは、私の推定ですけれども。

伊藤　それは、日米安保条約廃棄みたいなものじゃないですか。

宝珠山　廃棄ではありませんが、「ないとして、どのぐらいあれば日本の防衛が出来るか」ということ。これ、計算できないんですけれどもね。だいいち仮定自体、台湾と韓国について現状と変化ないということは、既に日米安保条約というか米国の力が機能していることを前提としているわけですから、日米安保条約破棄でもないんです。しかし、何か作業をしろというから、「それなら、こういうことなら出来ますよ」ということなんですよ。

伊藤　ハッハッハ、分かりました。

宝珠山　これは、侵略の様相というものを設定しなければなりませんから、……。

伊藤　○○というのは、ちゃんと数字を入れていたんですね。

宝珠山　入っていますけど、これを入れちゃうと「秘」になっちゃうから。ここで読んでもいいんですがね（笑）。

伊藤　○が二つとか三つありますが、これは複数？

宝珠山　複数というか十桁ですね。○三つは百桁です。

伊藤　かなり大規模な？

宝珠山　いや、これは大規模じゃないです。大規模をやっちゃったら、もう始めに終わっちゃいますからね（笑）。これについて、国会では「数個師団の侵攻」ということで答えたことはあります。

伊藤　そうでしょうね。僕の記憶としては、二桁になったという記憶がないように思うんだけど。

宝珠山　二桁というのは、二桁配備されていることを前提にしてということです。

伊藤　配備ですか。

宝珠山　はい。そのうちの数分の一ぐらい侵攻して来るということで……。

伊藤　数個師団なんですか、分かりました。

宝珠山　数個師団なんですけど、まあ「何個が数個か」と言われると、困るんですけどねえ（笑）。また、Zというのは当時のソ連を頭に置いております。

伊藤　そうですね。

宝珠山　そういうことで、陸上部隊がどういう程度の対日指向兵力でやって来るかと。

伊藤　これは、想定するわけですね。

宝珠山　想定しないと、計算できませんから。

伊藤　だけど、情報によってある程度、根拠のある？

宝珠山　何個師団しか来れないというのは、上陸用舟艇というのがあるわけですが、これがなければ幾ら来ようとしたって向こうの海岸で止まっちゃいますから、それを推測することはできますので、第一波で、第二波で、どのぐらい来るかというのは計算できるんです。だから、それらを踏まえております。

伊藤　上陸用舟艇がどの程度あるかということは、一応分かっている？

宝珠山　それは、情報として持っています。どこに何隻配備されているはずだというのは、分かっております。

伊藤　それは、日本独自の情報として持っているわけですか。

宝珠山　これは、米国との情報交換を含めて持っているということで理解していただくことになると思います。……じゃそれが、日本のどこかに、どこに来るかということで、これは東北のトウ（当）が違っております、「東北」です（笑）。北日本に来るであろうということを想定しましょうと。じゃ、他の地域にまったく来ないかというと、そうは言えないでしょうから、小さな部隊が来るということはありますでしょう、ということを想定しましょうと。しかし、実際問題として日本海をソ連が渡って来るというなら、こちらは戦いやすいですから、露出する部分が長いわけですから、まあそんな作戦はとらないだろうということは言えるわけであります。そうすると、近いところということになると、北海道がどうしても念頭に浮かんでくるので……。

伊藤　四島からこっちへ、それから樺太から南へと。

宝珠山　そうですね。先ほどの栗栖さんなどの資料（『我が国の防衛構想について』）でいきますと、道東がこういう形ですね。次が道北ですか、ここが稚内。あと道央も考えないわけではありませんが、主としてこの二つということでありまして。たとえばということで、「そのときの上陸適地というのはこんなものですよ」というのを、この前お見せいたしました。

伊藤　これは、青焼きで見せていただいた分ですね。

宝珠山　そうです、それ（『上陸適地海岸の地形分析（一部）』）をコピーしました。そういうことを仮設して、我がほうの兵力を配備して、コンピュータの中で陸を戦わせてみるということになります。

　それから計算の前提の三番目ですけれども、海からも侵攻して来ると。船に乗ってやって来るということを中心に考えましょうと。航空機で何個師団運ぶなんていうのはできる話ではありません。いまはともかくとしまして、当時考えないで海上から中心に来ますと。

伊藤　でも多少、「従」と書いてありますから、それもあり得ると？

宝珠山　空挺などはあり得るということで、空挺ぐらいのものということは考えております。一波が数個師団ということでありまして、船に乗って海岸に到達してくるということを「ＳｈｉｐＴＯ Ｓｈｏｒｅ」方式といっておりますが、その場合に海・空自衛隊もそれぞれの防御手段で対応して、海・空が〇〇％から〇〇％海岸までに撃破するということを仮定しましょうと。例えばこれが、二〇％ぐらいであったとしますと、残りが到着するわけですから、これに対して陸が戦うということで考えたものです。

　海岸に到着しまして、ここにガッチリとした橋頭堡という言い方をしておりますけれども、陣地を構築されますと我が方が戦いにくくなるわけですから、なるべくそれをさせないようにするということを防衛期待度として持とうと。

伊藤　その前に、ということですね。

宝珠山　ということで、どのぐらいかということで出たのが、北部方面隊から順次こんな数字が出てきたということであります。

伊藤　北部方面隊というのは、北海道に配備されている部隊という意味ですか。

宝珠山　そういうことです。いまも五つの方面隊に分かれておりますので、そのままです。いま北部方面隊には、現実には三・五個師団ぐらいしかいないわけです（笑）。

伊藤　ずいぶん違いますね。

宝珠山　そうです、その頃もそうです。

伊藤　独力でやれば、このぐらい必要だよと？

宝珠山　中曽根さんの言う通りかどうか分かりませんけれども、こういう仮定を置いてもこの程度ないと……。

伊藤　水際で防ぐことはできない。

宝珠山　水際到達以前というか、到達はするけれども、そこで我

が方が優勢になるということで考えています。優勢という点についていいますと、どういうのを優勢かといいますと、この（『自衛隊の作戦能力の評価』）中に出てくると思いますが、ρ＝1以上ということをいっておりました。ρというのは、ORなどの数式ではよく使います。これは、相手の被害率分の我が方の被害率で、1であり続ければ均衡なわけです。これが1を上回りますと、我がほうの損耗が敵よりも少ないということで優勢で行けるということで、1以上を優勢と考えておりました。いまも変わらないと思います。例えば空でいきますと、戦闘機が仮に五百機来ると。こちら側が三百機で戦って、お互いに損耗率が同じであればその状態が維持されていくということで、負けはしない。

伊藤　率でいっているわけですか。

宝珠山　そうですね。相手が弱まるとともに自分も弱まっていくということで、できれば1以上にしたい、そうなれば、相手がだんだん弱くなっていくだけですから勝利が見える（防衛できる）ということであります。数式上はそういうものを前提にしておりました。

そういうのを非常に短時間にやらされて上げましたが、これは何といっても留保をつけておかないと、「おまえ、これでやれると言ったじゃないか」といわれても困りますから、「Ⅳ　注記」に書いているように、「これだけで自主防衛ができるといわれても困りますよ」ということを書いたつもりなわけです。といいますのは、「Ⅱ　計算の前提」の1にありますように、数十個師団もあるような中から輸送手段の制約によって侵攻兵力は、小さくしているものですから、相手のほうがはるかに継戦能力が強い（大きい）わけですから、我がほうはこれだけで戦って、緒戦は何とか持ったとしても次から次とくるとすると持ちませんから、いま言ったρ＝1を維持するためには、逐次増強をはからなければいけないわけですね。そのことを考えると、「急速造成ができるといったって、そんな容易なことではありませんよ」というようなことは申しあげた。申しあげたといっても、これは試算として差しあげたということであります。

伊藤　このままでいったら、太平洋戦争と同じで（笑）。

宝珠山　おそらく……。これは私がやった陸の部分だけですから、海・空も合わせて、これはかなわん、にわかに自主防衛とは行かないということで理解は得られたんじゃないかと思いますが、数字の正確さとか何とかいうよりも、とにかく「ちょっと俺の時代じゃ、提案しても実行できない」と思ったのではないかと思われるわけです。そういうことで、その後、修正されていったかどうかは分かりませんが、元に戻りまして私どもはこれとは別に、四次防の作業を続けていくわけでございます。

話が飛んで申しわけありませんが、いまの続きについては必要に応じまた触れさせていただくことにしますが、（質問項目の二番目の）「『「基盤的防衛力構想」の原型』は、六〇年代の『長期防衛力整備計画』策定に深く関与した西廣整輝氏の考え方の中にあるということを言っているが、どうだ」ということであります。これは、この前さしあげたものの中にごく要点の部分が時系列で、『基盤的防衛力構想」の原型』の中で、逆に遡りまして記しております。一部差し替えをさせていただきましたけれども、よろしゅうございましょうか。

伊藤　はい。

宝珠山　「基盤的防衛力構想」などという言葉が出てくる以前に、実質は四次防の作業の中でも出ておりますし、西廣整輝氏の講演の中でも出てきているということがございます。それ以前の四十四年十月二十二日、これは審議資料（四次防審議資料）ですけれども、この中に「基盤的防衛力構想」とは言っておりませんが、もっと強くこの考え方を示しているわけです。これは、陸自の常時維持すべき体制は、準即応体制かどうかということを言ってい

るわけですが、中曽根さんがまだ来る前で、四次防が非常におおまかにまとまりつつある時期でございます。

前のほう（表紙）に書いてございますように、「担当部員がとりあえず中間報告的に、現在検討中のものをとりまとめたもの」ということでありますが、これは審議資料なんです。他の人に責任を負わせないような形で注書きをしてあるものです。

伊藤　この担当部員というのは、先生なんですね。

宝珠山　私のことです、陸の関係はですね。

（『四次防審議資料（陸自関係No.01）』の）次のページをご覧いただきますと、「1　陸自が常時維持すべき体制は云々」というのがありますが、2のほうでは「基盤的防衛力」ではなくて「常備防衛力」という言い方をしていますが、それはどの程度なのかと、この制約事項をどうするのかなどということで、資料を添付して審議しております。

その中はいろいろ書いてありますが、コピーですのでページが右上と左上に分かれていますが、左上に2とあるページの真ん中あたりに、「①完全即応体制にしておくか、いや、②平時編成にしておくか、③この折衷案とするかと、大きな三つが考えられる」と。完全即応体制であれば、基盤的防衛力ではないんですね。しかし、あとは全部基盤的防衛力なんです、考え方として、そういう言葉は使っておりませんが。「そのどれを選択するかは、これは長期・中期計画の中でみんなで決めることでありませんか」という問題提起をしているわけであります。

完全即応体制というのは、実際にとれる話ではないと考えております。完全即応体制がどういうものかというのは、下のほうに（1）で書いておりますけれども、3のページに行きますと、「防衛上は望ましいものであるが、情勢によっては非効率的なものである」という言い方をしております。じゃ、全部を平時編成に落としていいかねというと、そうもいかんでしょうと。それは、確かに財政負担は少ないけれどもと。そういう考え方で、ここで準即応体制という言い方をしましたけれども、この言葉がいいかどうかは別にして、ある部分は即応体制に、ある部分は平時体制というか若干緩和したものにせざるを得ないんじゃないかと。これが、やがて4ページで「3　準即応体制の選択」ということを提案する形になっていっております。

伊藤　自衛官の定員プラスいざという時の補充ということで、補充としては何を考えるんですか。

宝珠山　その前に、別紙のほうをご覧いただきますと、ここで準即応体制というのはどういうものかという分解をしております。これは、（1）小規模の奇襲および間接侵略は、即応でなきゃいかんじゃないだろうかと。（2）として中規模といっておりますが、これには作戦準備期間をおいて対応すると。作戦準備期間が比較的短いもので対応するということではどうかと。次のページの（3）ですが、大規模の着上陸侵攻に対しては長い作戦準備期間をとる以外ないじゃないかと。

これは背景的にいいますと、「国家諸施策」と書いていますけれども、当時は「有事法制」もないわけです。いま論議されているほどの論議さえ、されてない状況なわけです。ただ、制度調査委員会の中の研究方針にありましたように、「考えなければいけない」というのはあるんですが、どういうものをつくるかという論議さえされてない段階ですから、「そういうのがなくて、自衛隊だけで防御なんてできっこないでしょう」ということで、「準即応体制の定義としては、三つでどうですか」という提案になっているわけです。またそういう体制をとるときに、自衛官の定員とか人間の数なども一つの枠とすると約十九万人で、いまご指摘のような予備自衛官というのをこの当時、まだ三万数千のときですが、三倍増ぐらいの約十万人で置けばいいんじゃないかということであります。あとは、部隊の数を書いております。予備自衛

官の十万を足しますと合計二十九万になるわけです。そうすると、だいたい中曽根さんに出した『陸上所要防衛力の一試算』の半分ぐらいのものなんですね、人間の数的には。

佐道　なるほど。

宝珠山　十八万というのが池田――ロバートソン会談以来いわれていたものですから、それに沖縄分等で一万を足したという感じですね。予備自衛官はちょっと分かりませんが（池田――ロバートソン会談ではふれていない）、予備自衛官は多ければ多いほどいいわけですが、十九万人ぐらいの自衛官の定員としますと、だいたいその半分ぐらいが限度なんですね。自衛官をリタイアした人を予備自衛官とするという当時の制度を考えますと、十万というのはぎりぎりの数字じゃないかと思われるわけであります。そういうのを提案して、審議されていったということであります。

そういうことで、西廣氏の講演などと時期をあまり異ならない形で、こういう資料が防衛庁内で論議されていたということからいきまして、私は、名前はともかくとして考え方というのはずっと以前からあると理解しているというのが、この前さしあげたペーパー（『「基盤的防衛力構想」の原型』）であります。

伊藤　それに「基盤的防衛力」という言い方をなさったのは、久保（卓也）さんですか、西廣さんですか。

宝珠山　基盤という言い方をしたのはどっちが先かというと、私は文学者の西廣さんじゃないかと思っているんですがねえ。

佐道　西廣さんは、文学者ですか。

宝珠山　文学部出身ですからね（笑）。

伊藤　そうですよ。僕の出た国史学科の卒業です。

宝珠山　ご一緒ぐらいですか。

伊藤　いやいや、先輩なんですね。

宝珠山　法学者じゃないと思うんですよ。文学者だと思うのは、ちょっと、度忘れしましたけれども、法学者が使わない言葉を結構使って講演をしたり、ものを書いています。私は、文学者の表現だと思っていますけどね。

伊藤　一応、歴史学なんですけどね。

宝珠山　はい、そうです。西洋史か何かですね。

伊藤　いや、日本史なんですよ。

宝珠山　久保さんにしろ、西廣さんにしろ、池田（久克）さんにしてもそうですが、飲んだり食ったりして意見交換をしていますから、その中であった（出ていた）ということは言えるだろうと思いますが。

ちょっと話が飛びますけれども、「基盤的」というのを使うことについては、ユニフォームからずっと抵抗があったんです。それで、私は「常備防衛力」という言い方をして、内容は異ならないからいいじゃないかということで使ったんです。先ほど申しあげたように、これは私が書いたことは確かですけれども、まとめる過程では彼らも考え方に合意しているわけです。「これでいいですよ」と、言葉についてもですね。

伊藤　陸上の方ですね。

宝珠山　もちろん私の担当の陸上です。ということで、この前申しあげたかもしれませんが、一応合意をとりつけて上にあげているということであります。

■久保氏の「基盤的防衛力構想」と制服組の反応

佐道　それで、この3番の質問がどうしても浮かんでしまったんですけれども。

宝珠山　そうでしょう。だから、「基盤的防衛力」という言葉を使うことについては、抵抗があったのは記憶しております。

佐道　言葉自体に反発があったということなんですか。

宝珠山　ン……これは分かりませんけれども、ここで（『四次防

審議資料』）の考え方は、所要防衛力の考え方を前提にして全部組み上げているんです。久保さんの考え方は、所要防衛力を否定して「脱脅威」という言い方をしていませんか。

佐道　そうです、「脱脅威」というのが引っ掛かってきたんです。

宝珠山　だから、私どもも言うんです。「脅威がないところに防衛を考えるというのは、あるかね」ということなんです（笑）。とくにORという量的世界から、小さいか大きいかじゃなくて、脅威がゼロじゃやれないんです。対抗するものが漠然として……脱脅威というのだと定義が難しいんですけれども、見えないでは計算できないんですよね。それから、小さいだろうというのは、「そういう場合もありますから計算してみます」ということは言えるわけですけれども、「脱」といわれると存在理由を否定されるような感じで受け取られたんじゃないでしょうか。

伊藤　それは、向こうの力・こちらの力を計算するとしても、向こうが攻めてくる可能性の問題ですよね。これがほとんど無いに近いといったら、こっちはまあ……。

宝珠山　少なくするか、なくてもいいことになっちゃいますでしょう。その議論が延々と続くんですね。その議論は前からあると思いますが、脅威を大中小と仮設し立てて見た（検討することにした）わけです。それで、「どれを選ぶかは、政策決定の場じゃありませんか」と。ユニフォームに情報を求めるまではいいですけれども、叩く（疑問を呈する）だけでは話になりませんね（建設的ではない）。少なくとも防衛庁にいて、防衛力整備をやろうと考える人が言うことじゃない。社会党が言うなら――社会党でいいでしょうか――別ですけれども。ということで、「脱脅威」といわれるとストンと別な世界に入っちゃう面があるんじゃないでしょうか。

伊藤　ORの世界じゃなくなりますわね、少なくとも。

宝珠山　とにかく脱脅威では話しあいできないテーブルになっちゃう。つけないテーブルになるという印象を受けたんじゃないかと思うんです。言葉もそうだと思うんですが、発想も、常々接していて受ける印象も、そういうふうに受けたんじゃないかなと思います。それらを尋ねていくと、久保さんのお考えはこのあたり（『抑制か防衛か―西側軍事体制の新構想』）にあるんだと思うんです。

いまは、抑止と言うと思いますが、そのときは抑制という言い方を言葉として使っていたと思うんです。それから、脅威に対抗するのではなくて、脅威が発生しないように未然防止するための防衛力を、脅威を考えないで考えろ、というようなものの考え方なんだと思うんです。一つの考え方だと思いますけれども、これはしかし久保さん自身も、防衛力の規模について、幾らならいいという代案を出しているわけじゃないんですね。だから、その考え方に対する反発ではないかと思います。

佐道　そうしますと、久保さんの場合には話が逆転していて、いま先生がおっしゃっているような話は、防衛力を整備するにあたって、完全な所要防衛力の整備は基本的に困難であるというところから、じゃ、どういうふうにしていくのかというところがあるんですけれども、久保さんの場合には脱脅威という話が前提になって、その「脱脅威」と「基盤的防衛力」がセットになっていろいろ話をされているところがあって。

宝珠山　大綱の後の話に飛んでいますけれども、彼が解説をそうしたんですね。私の解説、これは小宇佐昇というペンネームで書いていますが……。

佐道　先生が？

宝珠山　はい。これは次回でも軽いから持って来ます。さしあげますが、これはユニフォームの一部の人も、「あれは、結構です」と言ったんです。しかし、久保さんが大綱ができた翌日かに各紙に喋ったのは、みんな、「ノーなんです」。

佐道　この資料を読ませていただいて、先生のお話を聞いて、「基盤的防衛力」の原型になるような話が出ていて、制服組がオーケーしているのに、何故あとで久保さんがあんなに批判されたんだろうというのがちょっと疑問だったものですから。

宝珠山　でしょうね。それは当時からありました。作業に携わった私どもというのは、防衛力の素顔を見ているんですが、それを大綱の解説という形で化粧をして表に出したわけで、その化粧についての批判でしょう。素顔の部分というのは、この前申しあげたと思うんですが、もっと厚い赤本、極秘になってあるわけです。それらについての考え方は、これ（四次防審議資料）なんですね。この通りという意味ではありませんよ。その後の調整は当然行われておりますが、考え方はこちらにあるわけですから、合意した線ですから異論を唱えることはないわけですね。

それを、久保さんは当時、次官におられたわけですから、それほど実務に携わっているわけではありませんでしたし、自らのかねてからの主張が実ったものとして解説を加えたということについての反発ではないかと思っております。したがって、赤本の中にある内容についての反発ではなくて、その化粧の仕方について「違うじゃないか」というふうに理解していいかと思っています。

伊藤　抑制といっていますが、抑止のためにどれだけ防衛力が必要かという計算は、ちょっと無理ですね、これは。

宝珠山　ずいぶん論議されましたけどね。先ほどの中曽根さんのところでも一例としてさしあげましたが、何か手掛かりを、前提をおかないと、ゼロならゼロでいいですよ。ゼロなら「何もしなくていい」と言えばいい話ですからよろしいわけですが、そうも言わないで、抑制でも抑止でもいいですけれども、「核は置きまして、あとどのぐらいあったらいいかね」と言われても困るんですね。

だから、常々言われておりましたのは、「能力は外形的に分かりますね」と。意図のほうはどうかというのを問われても困るということなんです。「能力を基にして、あとはたとえば日本に到着する船がゼロであるなら、打撃能力を持っていたって日本までは来ないでしょう。しかし、何百隻か持っているとすれば数個師団は来る可能性がある。それを前提にしてはじくということは、できますよ」ということで、抑止――抑制でもいいですけれども、「相手の意志を抑止するというのをはじけ」と言われても、これは困るんですねえ。これは、オペレーションズ・リサーチの世界の係数的な世界ではなくて、政治の世界なのかもしれませんし、軍事力というあるものを持っていて、それをどう使うかの外交折衝の世界の問題かもしれません。自分の意志ではなくて相手の意志をどうコントロールしようかという部分ですから、相手がどう受け取るかということを計算をするというのは、なかなかできませんと。

伊藤　これは、非常に難しいですよね。

宝珠山　難しいというか、できないというのが私どもの回答であったわけです。そういうことで類型的に先ほどの三つぐらい考えて、「どうですかね」と。あとは、小規模をどのぐらいにするかとか、中規模をどのぐらいにするかとか、これは議論すればきりがない話なわけですが、計算はできるわけですね。

伊藤　前提をおけば、ですね。

宝珠山　そうです。そういうことで、質問項目の3番はそんなことで理解しております。「基盤的防衛力構想」についての部分というのは、「大綱」の時にも少し必要があれば補足できるかと思っております。

■基盤的防衛力構想への海・空の反応

「4.」番の所要防衛力と、「海・空はどのような反応をしたので

しょうか」というのは、海・空のほうが緊急造成というのができる分野が少ないので。

伊藤　陸上は、できるんですか。

宝珠山　できるというより、陸上がやりやすいということですね。先ほどの予備自衛官でも……。

伊藤　でも、兵器とか弾薬、その他……。

宝珠山　兵器・弾薬にしましても、戦車にしましても、当時ですけど半年とか一年あればできるというものが、かなりあるわけです。航空機の場合、五年かかりますね。艦艇も五年かかりますね。その要員の養成にいたっても同じことなんです。たとえばパイロットなんて、一人前になるのに五年かかるわけですね。航空機に五年かかって、戦闘力となるのは、十年後ぐらいになっちゃう。そんな作戦準備期間というのはないですから、作戦準備期間は一年とか、あるいは六ヵ月でもいいですけれども、これを政策的に決める以外にないわけです。六ヵ月の作戦準備期間をどう考えるかというと、「何時、法律（有事法制）を制定してくれますの？」というところから始まっちゃうと、お手上げなんです。防衛庁では決めきれない。

伊藤　そうですね。

宝珠山　ユニフォームの立場から、使われる立場から言いますとね。「有事法制もない時ですね。六ヵ月の作戦準備期間、この点はどう考えるか」という問題に実務家としては逢着するんです。これは、政治の世界の話です。それに対して当時は、「そんなのは一夜にしてやるから、あったものにしてやれ」ということを言うわけですよ（笑）。

伊藤　一夜が、ずいぶん長いですね（笑）。

宝珠山　いやいや、いまでもそう考えている人がいるんでしょうけれども、もう放置できなくなってここまで漕ぎ着けているんだと思いますが。

伊藤　超法規という形で考えていたんでしょうね。

宝珠山　超法規ではなくて佐藤さんは、「いざとなったら、日本人は一晩で法律なんか通すよ」と言っていたらしいですよ。それも「超法規」なのかもしれませんが、それを超法規というと栗栖さんのように、お気の毒なことになっちゃう。少なくとも制服の人が言ったら困るわけですね。私どもは、「これはもう政治の世界のお話ですから、整備されたものとしてスタートする以外ないですね」ということで、さしあげた資料にも入っていると思いますが、三次防にも二次防にも、防衛庁以外のところでのいろいろな準備は適切に行われるであろうということを期待している文書が付属しているわけですね。

伊藤　期待しているというか、それを前提にしていると。

宝珠山　そういうことです。それでないと、「全部、防衛庁というか自衛隊でやれる話じゃないでしょう」という積極的な言い方になりますでしょうか。それは公表はされておりませんけれども、三次防、二次防に、この前確か差しあげたと思いますが「関連諸施策」という部分が入っているわけです。これらは有事法制を念頭に置いているし、作戦準備期間の始まる前にできてなければ困るんですが、そんなのはないのですから。そうすると、作戦準備期間が六ヵ月というのはあまりなくて、一年とか、もっと長いものを考える。そうすると、エクスパンドというものが合理的に説明できるんですね。

　陸は、説明しやすい。海・空は、いま申しあげたような装備の性質から出来にくいものが多い。しかし、レーダーサイトの防備をどうするかとか、基地の警備をどうするかとか、機雷などの調整をどうするかと。これ、ある日、防衛出動を命じられたって、海原さんじゃないけど実行出来ない話ですね。数ヵ月かけての調整をし、配備をしなければならないということですが、それらは作戦準備期間の中でやることです。

これをエクスパンドというかどうかは別にして、海・空だってそういう分野があるんです。当時はまだ、航空自衛隊もまだ上がっていく飛行機に実弾を積んでいるか、積んでないかというような時代なんです。実弾を積めるようにするためにも弾薬の配備から、これは作戦準備期間にやる話ですね、それから、仮に北海道ということにしましたら、北海道に兵力をある程度集中しなければなりません。これも一夜にして出来る話じゃありませんから、作戦準備期間中にやる話なんです。それにレーダーサイトみたいなところの防御にしましても、やはり陣地をつくらなければいけませんし、野営施設もつくらなきゃいけない等々とあるわけですから、海・空だって相当の準備期間なしには戦えないんです。

伊藤　レーダーサイトというのは、防衛は相当難しいのではないですか。

宝珠山　これは、ゲリラに対して難しいですね。それから、航空からやられますと、自分で目を開けて電波を出してやっているわけですから、電波に乗って来れば簡単に来れるわけですね。いちばん見つけられやすいわけです。

伊藤　そこを叩かれたら？

宝珠山　盲になっちゃいますからね。だから、後年ですけれどもレーダーサイトの周りに防空火器を置くようになっているわけです。そういうことで、航空、海上自衛隊というのは「基盤的防衛力」についてエクスパンドする部分が少ないか――非常に狭い軍種ですから、平素持っておかなければならない部分が大きくなるだけなんです。それでも、準備期間がゼロとか、そういうことにはならないものです。

佐道　もう一点、海の問題でお聞きしたいのは、ここでも「基盤的防衛力」という言葉ではなくて「常備兵力」という言葉でいっていいと思いますが、陸の場合には先ほど先生がお話になったように、たとえば北海道にZ国ならZ国がどの程度の規模かは別としてやってくるという前提で、そういう直接侵略なり、あるいは局部的な小規模の侵略にどう対応するかという作戦構想で考えていると。

ところが、大賀さんなんかに伺っていると、海はまったくそういうことは考えていないと。たとえば、「海上に押し寄せて来ている敵の船団を攻撃するとか、そもそもそういうふうには海上自衛隊はつくられてはおりません」という言い方をよくされていたんです。そうすると、陸と海で作戦構想といいますか、防衛構想自体にかなり大きなズレがあって、そこのとりまとめといいますか、もちろん制度調査委員会以来のかなり大きな課題にもなっているとは思いますけれども、この段階でも、そういうのは一体どういうふうに考えられていたのでしょうか。

宝珠山　大賀さんがどうおっしゃったか分かりませんけれども、海上自衛隊の任務として、これは海上交通保護が中心になるんですが、対潜作戦の部分に大きな力を注いでいることは確かです。

（電話中断）

伊藤　ですから、海の場合はちょっと違う……。

宝珠山　違わないんです。海は、海上交通の保護という任務を持っておりますから、海上自衛隊の中の大きな兵力をその分野に常々展開している。これは、オペレーションを常々やっているわけです。航空自衛隊が警戒監視をやっているのと同じようにやっていると理解していただいていいと思います。仮に有事が近まってくるとすれば、その態勢を上げるためにどうするかという問題はあると思います。

もう一つの、仮に北のほうに侵攻するというときに海上自衛隊はどういう協力ができるかといいますと、潜水艦がありますから情報収集ができるわけですね。先ほどの北海道ですと、津軽海峡

と宗谷海峡の両海域は潜水艦が情報を取ることがやりやすいし、そういう任務を分担しております。これは、共同作戦の一種と考えてよろしいわけです。

伊藤　そこの海峡をどういう艦船が通るかということですか。

宝珠山　そういうことでもよろしいですね。

伊藤　封鎖も含めてですか。封鎖はできない……

宝珠山　封鎖はできませんでしょうね。我が方ですと、侵攻してくる船についての情報は、聞けますが。航空自衛隊の偵察機もありますが、海上自衛隊も海の中から音波で聞くということは十分可能なわけですから、これは情報収集の手段として十分あり得るし、もし強い（自分は安全で攻撃できる）と思えば潜水艦で水上艦をやっつけることもできるわけですから、これは海上自衛隊も手段は持っております。

もう一つは、余市を中心ですけれども高速艇、ミサイル艇を持っておりまして、これはまさに情報を得てからになると思いますが、侵攻して来つつあるものに魚雷を発射して帰る。これは、着上陸侵攻防止のために海上自衛隊が持っている機能なわけです。

それからあとは、水辺に機雷を撒くということも海上自衛隊の仕事です。これも、着上陸侵攻対処のためです。これは、P-3Cで撒くというのもあるでしょう。航空機で撒くというのもあるし、船で撒くというのもありますから、これはやはり着上陸侵攻に対して寄与できる分野ですので海上自衛隊も……全部じゃありませんよ。陸上自衛隊は圧倒的に多数が北に展開するし、航空自衛隊も展開しますが、海上自衛隊は少ないかもしれない。少ないかもしれないけれども、相応の寄与をして三自衛隊が共同しております。

おそらく大賀先生は、平素のオペレーションの分野に力点をおいてご説明になったと思われます。このORの中にも、その部分というのは全部カウントされております。それで、海上自衛隊が潜水艦等を展開して来るやつを全部撃沈しちゃったら、陸上自衛隊は要らなくなるわけですね（笑）。

佐道　確かにそれはそうですね。

伊藤　現実問題として、あり得ない。

宝珠山　だから、先ほど申しあげた中曽根さんのご下命に対しては、「海・空自衛隊が、空からも飛行機で侵攻してくる船を叩くでしょう。海上も努力をします。しかし、百パーセントはないということを前提にしましょう」ということで、はじいているわけです。

■四次防「防衛課概案」と沖縄返還

伊藤　質問項目の5番目になりますが、先生がお移りになる七〇年一月には、もう四次防の構想の概案ができているということですので、あとの方はそれを受け継いで……。

宝珠山　概案というのがどういうものかというと、おおまかな骨格の部分、それから後どうするかというのは、これはだんだん精緻にしていくということで理解していただいていいと思います。

もう一つは、夏と年明けには単価の積算をやりかえなきゃいけないんです。少なくとも概算要求のときに、全体各々の項目の単価（積算基準）が決まります。それから予算が決まりますと、予算単価によって積算しかえると。これも結構、大変なわけです。それから現実に契約しますと、予算通りに執行できない場合もありますと、単価を改訂しなければならないこともございますので、概案から外に出ていく、とくに大蔵折衝になりますと、単価の積算部分というのは非常に大きな作業になりますので、概案が出来たからそれで後でやることがないということにはならないんです。

基本的考え方はできたということでは、その通りなんです。じゃ、概案ができるまでにどうだったかというと、やっぱりずいぶん苦労しているんです。もしよろしければ私、ノートが残ってい

ましたのでご説明させていただきます。

伊藤　それは、何年のノートですか。

宝珠山　これが、計画官室時代から人事一課に行くまでで五冊ありますね。全部埋まっているわけではありませんけれども。当初、着いたとき私どもに割り当てられた業務分担というのが、ここからスタートしているんです。

伊藤　四十二年の十一月ですか。

宝珠山　はい。これは、若干遡った日付（四十二・十一・一）となっていると思いますが、着任日に分担が決められておりまして。

伊藤　人（ひと）別に出ているわけですね。

宝珠山　そうです。

伊藤　西廣さん、山下さん……。

宝珠山　そうです。この話に行ってよろしいですか。

西廣氏が総括で、先任部員――首席部員でもよろしいですが。防衛構想のこと、国会のことと、海上自衛隊の担当と。それから山下氏がオペレーションズ・リサーチと、先ほど申し上げたオペレーションズ・リサーチの体制をどう整備するかということについての担当だと。それと、航空自衛隊関係、超音速高等練習機等の関係が若干ございます。私が、オペレーションズ・リサーチ関係の補佐だということで着任時は指定されるわけです。で、小笠原・沖縄の返還問題、それから、陸上自衛隊の担当ということで割り当てがあった。すなわちここで既に、四次防と言っておりませんが、「四次防の作業をやるぞ」ということを意思表示しております。

その後、私のほうは年内は、オペレーションズ・リサーチ関係の先ほど申しあげたようなことでほとんど忙殺されております。しかし十二月五日、着任して一ヵ月後ぐらいには、「防衛構想を脅威から出発するのではだめだ」と、西廣氏が言ったというメモがあります。これは、日付けだけはきちっと入っておりますが、会議を開く中でそういうことを言ったのをメモしたんだと思います。「代わるものは何だ」ということで、「国連の機能を評価しろ」というようなことを言ったりしておりまして、「国際紛争は、外交の場で解決するのだ。だが、叩かれた場合、ガタガタにならないように持ちこたえること」とか、そんなことをメモしております。したがって防衛構想の問題、すなわち四次防の――三次防の後というべきでしょうけれども、ここでは分かりやすく四次防と言いますと――防衛構想をどうするのかということを、課内というか当時は室内ですけれども、室内で論議されていた形跡がありますので、もう四十二年十二月ぐらいから作業は始まっているということが言えます。ここらあたりは（十二月中下旬）オペレーションズ・リサーチ関係で、私が先ほど、「統合作戦能力の検討をどうするか」というようなことをやっております。

年が明けているようですが、一月六日に予算の内示がありますので、オペレーションズ・リサーチ関係の内示の関係で、防衛構想というようなものはしばらく休んでいると思いますが、一月十六日には「作業予定分担」というタイトルで、防衛構想の前提作業というようなことで、ここでは既に「目標は第四次防」というようなことでメモしておりますので、これから見まして、もう既にこのときから作業が構想されているということをご理解いただいていいと思います。

伊藤　それは、四十三年の初めですね。

宝珠山　一月十六日と入っていますね。この中で、「目標は四次防」ということで、「安全保障の中に占めるわが防衛力の範囲」とか、そういうことをメモしております。

それから、二十一日には「三次防の反省」ということで会議をやっております。西廣さんも三次防にタッチしておりますし、山下さんもタッチしておりますので、いま進んでいるもの（三次防）について、私はその人々の反省を聞いているということになると

思いますが。

一月二十五日には、統合幕僚会議事務局と「防衛計画の基本的事項について」といった会議をやっておりますから、四次防のことを頭においているのだと思います。

ここらあたり（二月頃？）はちょっと分かりませんが……四月になりますと、「三次防の経費」。四十三年度予算が決まりますので、四十三年度の予算を踏まえて三次防の経費を再度チェックしなおすという作業をやっているということになります。

伊藤　長期計画だけではなくて、遡って三次防のほうも？

宝珠山　それを、フォローしていきます。フォローしなきゃ出発点が分かりません。四次防というのは三次防の次に続くわけですから、三次防がどういう実体かというのを踏まえてその上に継ぐわけですから、もし三次防で計画どおり満たしていない部分がありますと、それをどう扱うかというのも四次防の中に入るわけですから、ずっとフォローはしているということです。

伊藤　三次防で実際落ちちゃったら、今度は四次防で拾わなければならないということもありますね。

宝珠山　拾うか、捨てるか、改めて判断ですけれども。

伊藤　でも、三次防はずいぶん積み残しをするわけですよね。

宝珠山　現実には。ですから、そういう積み残しがあるか、ないかを含めてずっと毎年フォローしていっているということになります。

六月は、四十四年度予算についていろいろ作業をしておりますが、四十三年五月四日には「長期計画方式」というものについて論議した形跡がございます。これは、ＰＰＢＳということも絡めておりますので、まさに長期計画方式ということに関わるものです。

それから、四十三年七月五日には「防衛力整備計画の作業手順試案」というのをつくって論議しております。先ほどの前提事項なんですけど、前提事項をどう考えるかということで、これは言っていいのかどうか分かりませんけれども、憲法改正からあらゆるものを挙げて、それらをいちいち「前提にするか、しないかということからやりましょう。やるべきではないか」ということを提起しております。

当時の有田（喜一）長官だと思いますが、「四次防の作業をやりなさい。しかし、表に出しちゃいかん」ということを言っているメモもあります。

伊藤　それは、いつですか。

宝珠山　これがちょっと、いま見てたんだけど……。

伊藤　有田さんがなったのは四十三年の十一月三十日ですから、もうちょっと後ですね。

宝珠山　そうですね。外務省とおそらく国防会議事務局が入っているんじゃないかと思うんですが、参事官クラスで話しあった時の報告のメモですが、四十四年四月九日ですね。「大河原外務参事官」と書いていますが、後の大河原（良雄）大使だと思います。メモの通りなんですけど、これは西廣部員が会議結果を報告したのを私がメモをしたというものなんですが、「岸代理に随行」と入っているんですけどね。岸さんはこのとき、どうしているのか分からないんですけれども。大河原さんが、「ニクソンから沖縄に及んだ」と言っているようにメモしていますから、沖縄に話が及んだということだと思います。「岸代理」とメモしているんですけど、「文化大革命は一段落では……」と触れたりしておりまして。

伊藤　沖縄返還の問題ですか。

宝珠山　そうです。

伊藤　ということは、岸さんが絡んでいることは確かですね。

宝珠山　そうですか。そのあたりのことを、私のメモではつまびらかではありませんけれども、「岸」と書いてあることは確かです。沖縄関係については、「反対陣営に利用されると困る」とメ

モしてありますね。「核問題について、国民感情の理解を訴えた」と。おそらく、岸さんが訴えたということなんでしょうね。それから、米側だと思うんですが、「なし崩し的に日本の基地が使用できなくなっている。いざという時に使えないという心配があるようだ。それをどう保障してくれるのか、ニクソンの心配」とメモしてあります。これらは、外にどこかに詳しく出ているものだと思います。

東郷アメリカ局長の、「本土の基地使用、有効性の確保が問題とされた。ベトナム問題と沖縄とは関連した議論がされているが、本質的に関係がない」というようなことをメモしていますね。「グアムと沖縄は、一ソーティで五千ドル違う」とも。

伊藤　何がですか。

宝珠山　一回飛んで帰ると、ベトナムへ沖縄から行くのとグアムから行くのと、一回飛ぶというのを一ソーティというんですが、五千ドルの差があるということだと思いますが、そういうことをメモしております。「B-52はまずグアムを減らす」とメモしていますね。

それから、千葉北米局長と書いていますけれども、「愛知大臣が行くときは、政治論ではだめだ。それはよく知られている。具体的な問題を知りたがっている」ということを言っています。防衛力整備の中身を知りたいということを言っていると思われます。「タイムテーブルが重要な問題となっている。米国も、議会の納得を得なければならない。条件が必要だ。日本としては、三年と考えている。スタートは六九年、三年以上は持たん。米国のほうは、七四年頃ではどうだと言っている」と。

伊藤　それは、沖縄の問題ですかね。

宝珠山　北米課長ですから……かもしれませんね。続けて「日本は、遅くては困ると答えた。最低二年は準備に要る」と。括弧して「七三年？」と書いていますね。

外務省で最も苦慮している点としては、「返してもらうまでは都合のよいことを言っているが、返った場合に基地として使用できる状態を確保できるかが心配だ。沖縄は、内部的には弱いところだ」と。沖縄の特殊性ということで、「日本本土とは異質だ。もう少し大きい人口と地域があれば、独立するところだ。大部隊の送り込みは取締りの感じを持たれるのではないか。それほどに違いがある。せいぜい一～二万、米国もあまり大きいものを持って行かれると困るとしている」というようなことを。

伊藤　それは、自衛隊派遣ですね。

宝珠山　と思いますね。私の理解でもそうです。以上は外務省の話で、この席で「我が方は（防衛庁）作業状況」を話した模様です。「昼」と書いています。その後に「夜の関係（長官）」と書いています。長官というのは有田さんですね。これも報告のメモなんですが、「四次防を早急に進めてくれ。外部的にはアウトだが、正式命令……」正式命令は後だという意味だと思います。「四次防は、飛躍的なものを考えてもらいたい」と。

伊藤　飛躍的？

宝珠山　はい。……と解されるものです。それからこれは私の推測ですが、先ほどからの、中曽根構想は中曽根さんが始発点なのではなくて、もう既にここにあるんじゃないかということであります。続いて「経費的には、GNP五・五兆円ないし六・五兆円、沖縄を含んで」という言い方をしております。それから、「十年ぐらいのレンジで考える。三次防でかなりアップする」三次防でかなり能力がアップするという意味だと思います。「それを立ち上がりとして、四次防を見る。ステップアップする時期は、沖縄が帰る前だ。それが大きく上げとかないとだめだ」と言っています、ちょっと意味が分かりませんが。それから、「三次防中にGNP一％まで上げる。四十六年には沖縄を入れる。四十五年度に入れたいが」と書いています。第六番目として、「四十五年度には三次防計画を繰上げ実施せよ」と書いています。意欲的なんで

すね。「防衛力整備を飛躍的に伸ばす時期だ」と。あとは、事務的なことになっていますが。

伊藤　これは、すぐ中曽根さんにつながるんですね。

宝珠山　ここは、今まで申しあげてきたような事務的に準備してきている、その準備をもって西廣部員が対外的に調整というか、意見調整をして、四月九日ですから予算が国会を通って、次のことをどう考えようかという時期だと思われるわけですが、そのときに実質的には四次防をかなり、ここでは「飛躍的」と言っておりますが、「大きなものに向けて作業をしよう。外へ言っちゃいかんよ」ということであります。そういうことで、その後私どもは作業をやっておりますが、そういう作業をやっていく中で四次防、先ほどのこれら（四次防審議資料）を通じて、防衛課概案というものを、これは秘密文書ですから持ち出しはできませんけれども、策定しています。

伊藤　だいたい七〇年の一月には、もう骨格ができたということですね。

宝珠山　骨格は決まっていたと思います。あとは微調整、状況の変化、先ほどの予算で落ちる――つかないとか、契約できないとかいうのがあると、それらをどこに埋め込むかというようなことで調整が入ってくるということはございます。

　すなわち、中曽根さんが長官で来る前には、だいたい事務的にはできている。あとは、中曽根さんがいろいろ言っているのは化粧をしたと見てよろしいんじゃないかと思います。

佐道　中曽根さんが、七〇年の一月に防衛庁長官に就任されて、七〇年十月にまず概要みたいなものが発表になって、正式に防衛庁案ができるのが翌年の四月ということになりますね。ですから就任されて、十月に中曽根さんの意向を全面的に取り入れたものができるというのは、ちょっと時間的にみても難しいから、やっぱり前からきちんとあったのだろうなということは思っていたんです。

宝珠山　もありますし、中曽根さんにあわせた化粧をするということは役人、簡単にできますね。

佐道　その期間が、ここには入ってなかったということですね。

宝珠山　これは中曽根さんに限らず、個性ある長官が見えればそういう化粧をして、実態は変わらないと言ってはいけませんけれども、それほど変えなくてもというのは、かなりありますね。

伊藤　このときの四次防の概案は、そんなイケイケドンドンじゃないわけでしょう？

宝珠山　まあまあのものだと思いますけどね。しかし、先ほど申しあげたような方針で行っていますので、かなりな規模のものではありますね。

伊藤　やっぱり有田さんなんかの考え方に、ある程度乗っているわけですね。

宝珠山　ええ。おそらく上のほうとも調整をしながらやっているんじゃないかと思うんですが、それについて申しあげますと、局内の審議の中で若干出てくるんです。大きすぎるんじゃないかといった……。（ノートを繰る）

佐道　ずいぶん、きちんとまとめておられますね。

宝珠山　いやいや、きちんとじゃないんですよ。自分でも解読が難しいんですけど、流れをフォローするのは大体できるんです。局内で審議したときのメモもありましたので。

伊藤　結構いろんな色のボールペンを使っていますね、緑になったり。

宝珠山　そのときに持って出ていったので書きますから（笑）。四十四・十二と書いていますけど、よく分かりませんが……。

伊藤　四十四年十二月だな。

宝珠山　ここで、「整備計画の第一回の中間報告をさせていただく」ということで、当時の小幡久男次官、島田豊官房長、田代一

正経理局長、宍戸（基男）防衛局長等が、審議しておりますが、この中で経費枠について、「経済企画庁の非公式の見込みは、伸び率が実質で一〇～一一％」という報告をしておりますね。経済成長だと思います。

伊藤　あ、そうですか。

宝珠山　はい。それを踏まえて防衛局長が、「要求の目処としては経費枠で一五％、六兆三千億が目処かなと思う。これまでも説明したのとだいたい一致している。二五％の伸びは、戦争準備でもやっていると誤解を与える」ということを。

伊藤　ということは、そのときのプランでは二五％増を考えているということですか。

宝珠山　いや、そういうのもあるということなんだと思いますが、宍戸局長は「一五％が目処ではないか。二五％というのは……」、よく分かりませんがメモ通りに読みますと、「それは大き過ぎるからだめよ」と言って切っているようですね。経理局長――これは田代一正さんです。「六兆三千億は、ここ数年で二五％の伸びが必要だが、これは問題」と。六兆三千億と言ったのに対して、伸ばしていくと二五％になるということなんでしょうかね。そうすると宍戸さんが言っているのは、ちょっと矛盾するように思いますけれども。確かめておりません。

田代さんは続けて、「次に、現実性の問題がある」と。二五％の伸びを必要とするというのでは、という意味だと思います。「五兆一千億から五兆五千億の間、五兆三千億ぐらいがいいところだと思う。新聞種になる」とメモしてある。六兆三千億では新聞種になるということですかね。「五兆八千億ぐらい、どうかな」ということを言っておりまして、部内でも大き過ぎるんじゃないかという意見がないわけじゃない、ということは窺える。あとは、GNP一％問題なども論議しておりますね。

伊藤　宝珠山さんの記憶としては、どうですか。やっぱり大き過ぎる？

宝珠山　いや、大き過ぎるというか、私どもとしては「こういう能力を持つものを整備しろ」という命令が下りてきておりますので、「それに合わせるのなら、この程度必要ですよ」という回答を出すということで、あと財政的にどうするかというのは、当時の経済成長を見ていくと、計算上はこんなのできるんですよね。二五％が大きいとか何とかいったって、現実に経済が大きく伸びて、一％に持っていこうとすれば簡単にそれぐらいになっちゃうんですから、大き過ぎるとか、そういう感じは残っておりません。

伊藤　ごく自然な形でそうなっているということですね。

■四次防策定における中曽根長官の影響

宝珠山　ええ、私はそう思っておりません。そんな形で、質問項目の6番でしたっけ。

伊藤　中曽根さん。

宝珠山　この中（ダンボールの箱）にも入っておりますが、中曽根さんが確かにいろいろ、あちこちで、おっしゃっている。ご覧になったことありますでしょうね（小冊子を数冊出す）。アメリカに行ったりして、ずっと吹いたりしているわけですよ。……これ（『自衛の哲学』）は、西村さんですよ。

伊藤　（表紙の中曽根氏の顔写真を見て）いや、若い写真だな（笑）。

宝珠山　若いときですから。いろいろおっしゃっていることは確かですが、内容的には今まで有田長官なりのやって来たものを若干、微調整をしながら、誰かが中曽根さん向きに化粧をして、発言をしてもらっているということでよろしいんじゃないかと思います。

伊藤　中曽根さんに付いていた……。

宝珠山　秘書官は、池田久克ですね。

伊藤　池田さんですか。

宝珠山　はい。池田さんが書いたかどうかは、分かりませんが。

伊藤　でも、それは防衛庁の意向を反映させているということでしょう。

宝珠山　そうです。中曽根さんと意見を交換する場がいちばんありますから、それを踏まえて、「大臣はこう言っているよ。こういう方向でどうだ」ということになりますと、そういう内容のものを用意して、アメリカに行ったりしておしゃべりをすると。

伊藤　他に、中曽根さんにぜんぜん防衛庁と関係なしにブレーンがついていて、それで発言をしているというものではないわけですね。

宝珠山　それはないと思います。当時、桃井真さんあたりがときどき呼ばれたりして意見は言っておりますけれども、彼は防衛力整備については詳しくありませんから。アメリカの国防政策を勉強しているということはありますけれども、日本の防衛力整備についてというのは分かりませんから、アメリカ関連のレクをして、「アメリカに行って、こういうことを言えば受けますよ」というのはあるかもしれません。

　正しいかどうかは分かりませんけれども、今までずっと申しあげてきたように、中曽根さんが言っている内容というのは、中曽根さんがおいでになってから若干の調整はありますけれども、基本的骨格は前長官の時代に実質的にはできていたと考えられます。

佐道　その四次防の十月に発表される概要とか、翌年の四月に出る防衛庁案というのは、中曽根さんが大きく変えたということではなくて、もう基本的にあるものをいろいろ装飾をしたという？

宝珠山　そう考えていただいていいと思います。中曽根さんも当初、もっと大きいものを考えていたかも知れませんけれども、着地点はずっと現実に合ったもの。少なくとも私どもの目から見れば、さっき言ったような二十何個師団なんていうものではないわけですね（笑）。陸上自衛隊は十八万だったと思いますが、一万ぐらい……八千五百ですか、七千五百ですか、「そのぐらいの増員はおかしくはないんじゃありませんか」という案ですから、実現可能性というものも、田代さんから見ればいろいろ経費の面から懸念はあるかもしれないけれども、「まあ、いいや」というところまで行ったと見られるわけですね、先ほどの議論などから見て。懸念を示しながらも、「まあ、こういうものか」ということになっていかないと、防衛庁案にはならないですね。

伊藤　いわゆる「中曽根構想」というような、でっかい体系的なものではないわけですよね。

宝珠山　ないですよ。

伊藤　いわば、防衛庁と別に。

宝珠山　ええ。だから、非常に大きいものであるかというと、それほどのものであったとも思いませんけれども、当時の経済成長が大きいですから物価上昇だけでも三次防の倍になるんです。

佐道　そうですね。

宝珠山　はい。それから、四次防になりますと二十年経つわけです。二十年たちますとリタイアしていく部分が出ますから、三次防までの水準を維持するだけでもコストがかかり始めるんです。三次防までは、とにかく新しく追加すれば増えていた。それがストックが大きくなりまして、耐用年数でダウンを始めるわけですね。飛行機にしろ、船にしたって二十年ぐらいしか持ちませんから。そうすると、つくってもストックはあまり増えないという時期に入るわけです。それから、二十年もたちますと運用できるようになりますから、運用コストがかかる、修理費がかかる、油代がかかるという時代になりますので、見せかけの防衛力は同じでも、古い時代と比較するとそれを維持運用するために、整備すべきものが大きくなってくる時期に入ってくるわけです。

伊藤　技術革新も入ってきますから、要するに武器の耐用年数が短くなってくるということもあり得るんじゃないですか。

宝珠山　ええ。戦闘機の場合、当時ですと十年なんです。船はだいたい二十五年ですけど、いまおっしゃるように船の船体は二十五年持ちますが、途中で、中身を取り替えたくなるんですね。

伊藤　当然そうですね。

宝珠山　そうすると、金がかかる。つくるよりも金がかかるといったら怒られますけれども、もうそんな時代になるわけです。したがって、防衛力の一定水準を維持するためには、今までよりもはるかに大きい努力をしないと維持さえできない時代に、四次防を境にして入るんです。

佐道　ずっと、想定している相手方と同じレベルの防衛力というわけではないですから。

宝珠山　それもあります。それもありますが、それを置きましても、維持するだけでも大変に経費をかけなきゃいけない。性能アップのためにコストは高くなる。人件費も高くなっている、日本の経済成長の結果、自衛隊員の給料が上がるわけですから。というような時代になりますから、経費的に外部には大きく見えたかもしれない。これはプレゼンテーションの悪さもあるかもしれませんが、それほど大きな構想ではないんです。

佐道　下手をすると、いろいろ予算をつくったけど、ほとんどが給料で消えてしまうみたいなことになってしまいますね。

宝珠山　そうです。すごいベアですからね。皆さんもそれを享受した口でしょうけど、私どももそうなわけです。それが、四次防の未達成もありますけれども、固定方式の計画制度の難点になってくるんです。したがって、ローリング・システムに切り換えていくインセンティブが出てくるんです。

佐道　ローリングの問題は、また後日。

■中曽根長官の評価

宝珠山　そのように思っております。それから、質問項目7の「防衛庁長官としての中曽根さんをどう評価されますか」というのは、これは直接お仕えしていませんので分かりませんけれども。

伊藤　いや、先生の、あるいは周辺のところで、中曽根長官というのはどう見られていたんですか。

宝珠山　当初は期待されておりました。外でいろいろと元気のいいことを言われておりましたから、期待されていたように思います。私は、それほどよく存じあげておりません。しかし、おいでになってからの振る舞いを見ておりますと、他人の意見を非常にうまく取捨選択して、かねてから自分の意見であったように非常にうまく表現する、演技することができる、あるいはそれをためらわない人という印象に変わってきましたね。それが、さっきからおっしゃっている「中曽根構想」という形で、実体以上に対外的な批判を浴びる原因ではないかなという気もいたします。しかし、確証を見せろと言われても困るんですが。

伊藤　パフォーマンスをやるということですね。

宝珠山　はい。それから、ある人が、レクに来いということで、行った後の話で、「昨日、おれは中曽根さんにレクしたんだよ。そしたら、今朝の新聞に全部出てるんだよ。中曽根さんが、かねてから自分で考えていたようなことになってんだよ。ああいう人かね」といって、これは技術者ですけどね（笑）。おっしゃっておりましたが、そういう非常に大衆受けといいますか、それからアメリカに行きますとアメリカ受けしやすいような行動といいますか、演技といいますか、ができる人であります。逆に見ますと、非常に強固な定見があるわけじゃない、有言実行よりも言いっぱなし、任期が終わったら「知らないよ」ということがあるように

思います。

それはその後の行動にも、少なくとも防衛関係については、立場が変わったら逆のことを平気でおっしゃっているという面で現れてきておりまして、必ずしも信頼をおいてない人がいるのではないかと思いますが。

佐道　この長期防衛力計画と、間接的にはもちろん関係がありますけれども、それとは違う部分で中曽根さんがいろいろおっしゃったことがございますね。たとえば、自主防衛五原則ですとか、国防の基本方針を改訂するとか、そういったことが対外的にはいろいろと反応を巻き起こすと思うんです。

たとえば自主防衛の問題でも、先ほどのお話の中で、アメリカが基地をきちんと使えるかどうか外務省が心配をしているというところで、中曽根さんがおっしゃっているのは、「自衛隊を拡充して、自衛隊でアメリカ軍の基地にとって変わる」ということをずいぶんおっしゃっているわけですね。あれは結局、有事駐留論みたいな話につながっていくわけで、アメリカはそれは大変心配する話だろうと思うんですね。それから、「国防の基本方針を改訂して自主防衛中心にするんだ」みたいな。それは、佐藤栄作さんの日記などを読みますと、結構最後までずいぶんこだわってやっておられたようだとか。

そうするとだいぶ、ちょっと化粧すればいいというわけではなくて、ずいぶんいろいろなことをやっておられるのですが、そこはどのように見ておられましたか。

宝珠山　中曽根さんが考えている自主防衛の中身というのは、冒頭のところに一試算ということで申し上げたような大きなものを、お考えでなかったんじゃないかと思うんですね。だから、できると思っていたんじゃないでしょうか。そうすると、米国が懸念をするかどうかは別にして自主防衛が成り立つと思われるわけですが、あの草案をもし真剣に理解したら、自主防衛の難しさというのは理解されたはずなんですね。そこらあたりのタイムラグがあるのかどうか分かりません。

それと、アメリカに行ったら今度、アメリカ受けのすることをおっしゃいますのでね。これ（小冊子『アメリカ訪問して』）なんかそうだと思います。これは、羽田に帰ってからの記者会見なんですけれども、そこそこにうまく使い分けておりますのでね。だから、自主防衛というものについて主張する人たち――石原慎太郎さんを含めてですけれども、どの程度のコストでできるかという点について、明確なものが示されていないんです。

話が飛びますけれども、先ほどさしあげた資料の中で、費用対効果分析というのがございますが、これもＯＲの中でできる話なんです。大きいものを持つすると、「つくればいい」というけど、つくった後ずっと維持していくとしますと、維持のコストをどの程度みるかということを含めて、ＯＲでは比較的簡単に計算できるわけです。初度投資、維持コスト、基地のコスト等々、人件費は当然ありますが。もちろん、政治的なプレッシャーというのはちょっと計算できませんが。そういう部分で、ずいぶん力を注いで分析をしているんです。

その部分について、自主防衛論者――日本の自主防衛論者というべきですが――は、計量的な定見を持ってないと思いますし、中曽根さんもそのあたりに誤解があるんじゃないかと思います。その一つの点が、先ほどの「一試算」の中に現れているんじゃないか。「こんなにかかるのかね」と思ったんじゃないかと思いますが。

もう一つ、どうしても抜けているのは核の問題です。最初に申しあげましたけれども、核も通常兵器で守れるぐらいのことを考えているとしたら、これは論外なんですね。

佐道　そうですね。

宝珠山　だから、核を除いて自主防衛が成り立つかという、そう

いう自主防衛というのは、「自主」というのはちょっといかがかと思います。

（中断）

■ＰＰＢＳ米国出張とその成果

宝珠山　質問項目の8米国出張、……。これ（『国防のための意思決定』）が、それに関連するものなんです。あと、あの（ダンボールの）中にもＰＰＢＳ関係のが幾つか入っておりますが、正確には覚えておりませんが、村上孝太郎主計局長じゃなかったかと思うんですが、非常にＰＰＢＳというものに関心を持った。これは、企業にも役立つであろうということで、経団連のほうで訳してくれていたものですが……。

佐道　防衛政策委員会の。

宝珠山　経団連がやる程度に、ＰＰＢＳというのが非常に話題になっておりまして、村上さんだったと思いますけれども、孝太郎さんの狙いというのは、これを導入することによって日本の予算を合理化しようという意図を持っていたように思います。各省庁にＰＰＢＳ担当室ができたりしました。そのときに「おまえ、行ってこい」ということで、一ヵ月間だったと思いますが、アメリカで二週間のコースがありまして、そこに行って。そのあと、幾つかのところを回って、「ＰＰＢＳをやっている実情を視察して来い」という命令でした。

佐道　コースというのは、どこに設置してあるんですか。

宝珠山　これは、国防省が米国の中のあちこちに設置してあるんだと思いますが、私どもが入りましたのはサンフランシスコから南に五十キロぐらい行ったところだと思いますがパロアルトという、スタンフォード大学がすぐ近くでした。そこのホテルというか……。

伊藤　そういう施設があってやるわけですか。

宝珠山　いや、ホテルにみんな米国から……各国から集まって来ていたんですかね。米国が中心だったと思いますが、そういう人たちのコースに入れられたわけです。その予算が、ＰＰＢＳということでバジェットのほうに力点をおいて理解していたかと思うんですが、主計局に一括して付いておりまして、その予算を使うために「主計局付」になりまして、各省庁の人々と一緒に行ったということです。

佐道　昭和四十五年二月の先生が大蔵省主計局付となっている間、ということですね。

宝珠山　そうです、そうです。

佐道　出張もこの期間に行かれてと？

宝珠山　そうですね。

伊藤　このＰＰＢＳというのは、ＯＲとかそういうこととかなり？

宝珠山　はい、これは私の理解ですけど、ＰＰＢＳというのは名前をそう言うかどうか分かりませんけれども、古くから実行してきていることなんですね。企画し、計画し、予算をつけて実行していく、これを何年ごとに繰り返すかいろいろありますけれども、一般的に存在をしているものです。

伊藤　マネージメントとして？

宝珠山　そうです。それとＯＲとどう関係するかというと、ＯＲというのはかねてから何度も申しあげていることですが、定量的に目的との関係で計算できるといいますか、数値化できる。幾つかのオプションを同じ条件でやってみて、狙いは費用対効果ですね。ですから費用対効果分析といってもいいし、ＰＰＢＳにとっての一つの手段だといっていいと思うんですが。狙いをどこにお

くか、どの側面から眺めているかによって名前のつけ方が異なると思いますが、その用語はオペレーションズ・リサーチ、あるいはシステムズ・アナリシスといわれるものだと思います。ＰＰＢＳは、ＯＲを含むいろいろの手段を活用した、マネージメントシステムに着目した表現だと思います。

ということで担当というか、そういうのに若干経験があったということで、「おまえ、行け」ということになったんだと思います。ちょうどその頃、四次防の概案というのもまとめられる時期でもありましたから。

佐道　一月に、四次防防衛課概案の、検討依頼を出されて、それをまとめて出張に行かれた。

宝珠山　そういうことですね。

佐道　防衛庁からは、先生おひとり？

宝珠山　防衛庁からは一人です。一緒に行ったのは、経済企画庁の安田さん、彼はどこで辞めたかな、局長にはならなかったと思います。通産省から、公害局長かで辞めた安楽さん、警察庁から警視総監で辞めた吉野さん、もう一人労働省から、職業安定局長で辞めた石岡さんの五人でした。

伊藤　実際問題として、これは後で活用できたものですか。

宝珠山　私は米国に出張するときには、人事一課に行っているんです。

伊藤　まだ行ってない？

宝珠山　いや、出張のときには行っているはずです。

佐道　一応、ご経歴では四月に人事一課ということになっているんですけれども。

宝珠山　四月に行っています。

佐道　そうですか。四月に経理局会計課、大蔵省主計局付を解くということになっているんですが、戻って来られて解かれたということですか。

伊藤　しかし、その前に二月に併任。

宝珠山　ちょっと待ってください……そっちに詳しいのがありますか。

伊藤　いや、先生の履歴を素直に読むと、順番としては二月二十六日に大蔵省の主計局付になって、四月六日にそれが解かれて。

宝珠山　行くのは一ヵ月ですから、確か四月中ぐらいですよ（後日調査の結果、三月八日～四月五日まで米国出張）。

伊藤　戻って来られて人事一課に行かれたという順序になるような気がしますが。

宝珠山　そうです。レポートは、人事一課で書きました。

伊藤　そういう意味ですね、分かりました。

宝珠山　これがどう活かされたかということになりますと、七、八年たってからですが、こちらのほう（昭和五十五年七月作成の防衛局資料の抜粋）の「5　計画制度」の中に、この計画体系に結びつけました。だから、ここでいう「統合長期」とか、「統合中期」というのがプランニングにあたる部分です。「中期業務見積り」あるいは「中期防衛力整備計画」がプログラミングにあたる。あとは、バジェティングです。

で、これを支えるものとしてＯＲをふんだんに取り入れていって、こういう成果（ダンボールの中の本）になっていると。もちろん、ここにお持ちして来たのは僅かな部分だとは思いますが。

伊藤　だけど、それほど非常にユニークな革新的なメソッドというわけではございませんね。

宝珠山　ありません、ありません。何でもないです。しかし、こういう形（『国防のための意思決定』）で皆さん大騒ぎをするわけです。まあ、それに乗っただけの話だと思いますが。

伊藤　分かりました。いや、ＯＲは確かに非常に大きな革新だったと思うんですね。

宝珠山　ただ、こちら（ＰＰＢＳ）のほうも意思決定を行う枠組

みとして、おそらくマクナマラさんは日本よりも進んでいたんだと思いますが、巨大な組織のマネージメントを、全体を、統一的、整合的にやったんじゃないかと思いますね。ＰＰＢＳは、オペレーションズ・リサーチをその一環として取り入れた意思決定システムといえるのかもしれないんです。そうは書いていませんけれども。

佐道　防衛庁などのいろいろな資料を見ますと、ある時期にＰＰＢＳというのが結構たくさん出てきて、ある時期までずっとたくさん出てくるんですけど、ある時期からパタッとなくなっていく。

宝珠山　あれは、各省庁でＰＰＢＳというやつがなくなっていったんですね（笑）。私の認識では、『防衛諸計画の体系』の中に全部、このとき（出張）の成果プラスαをぶち込みました。でも、これはいまおっしゃるように誰のアイデアということではなくて、どこの国も名前は別にして実態的には何らかの形でやってきていたことを、陸・海・空・統幕とか別々ではなくて、防衛庁としてオーソライズしたということが非常に大きい意義だと思います。

（次回の説明と資料の取扱）

伊藤　五時過ぎましたので9番で終わりにして、人事教育局に行かれたところから次回お話しいただくということにしたいと思います。

宝珠山　結構です。

伊藤　いま私どもの大学で、相当資料を蓄積しておりますが、先生のもお預かりしてもよろしゅうございますか。

宝珠山　そういうことで、私が死んじゃったらどこか捨ててもらうよりしようがないんで、お預かりいただければお使いいただきたい。

伊藤　ありがとうございます。

宝珠山　一つだけ、渡邉（昭夫）さんが「おれのところでもやるよ」と言っていたので、そういう時にもし必要になったときには見せていただくかもしれません。それ以外には予定はしておりません。

佐道　渡邉先生の研究会、私も入っておりまして、連絡をいろいろとこちらともとりあってやりたいと思います。お預かりして、研究に使わせていただいてよろしいということですか。

宝珠山　結構です。しかるべき時期に捨てていただいても結構でございます。

佐道　そんなこと（笑）。

伊藤　とりあえず詳細なリストをつくります。

宝珠山　それはお任せいたしますが、一つ気掛かりなのはこれだけ（冊子『四次防の審議資料』）だけです。

伊藤　ですからリストをつくった段階で、それについて「しばらくの間、非公開にしろ」とかコメントをくだされば。

宝珠山　そういう方法があれば。たとえば「基盤的防衛力構想の原型」などの前の資料でもかなり使おうと思えば使える話なので、ここ（冊子『四次防の審議資料』）まで使わなくても説明できる。

佐道　たとえば、先生に打っていただいた資料を論文に引用させていただくことは、可能ですか。

宝珠山　それは構いません。このヒストリーに添付するのも構いません。

伊藤　添付しなければ、分からないんですよ。

宝珠山　そう思いまして、後付けになってタイプしてさしあげたりしたのもそのためでございます。

佐道　コピーしていただいているものは、よろしいということですね。

宝珠山　それは、まったく構いません。留保する必要があるかと思われるのは、これだけです。

伊藤　ですからリストをつくった段階で……。

宝珠山　公的に公表されるまで置いといて公表はしないでください。私がお持ちしましたのは、これで犯罪にはなりません。というのは、私自身がやっているんですが登録していませんから、秘文書じゃないんです。「秘」と書いてある文書であるだけですから、構わないと思ったんです。しかし、実際にこれを配られた陸上自衛隊の中には番号が入ったのがあるはずなので、これを持ち出していたらこう（逮捕）なんです。「秘を解除しない」と書いてありますので。そこ（実質秘と形式秘）のところは抜け穴はあるんですが、心理的にできれば公開しないで、公開しているものの背景を詳細に理解、解明する資料としてお使いするなりで利用していただければ。

伊藤　「当分の間、非公開とする」という形でお預かりします。そういう区別を、リストをつくった段階でお願いできれば。

宝珠山　分かりました。それは、これだけです。

佐道　大変な資料ですね。

伊藤　ありがとうございました。次回は、五月十七日の午後三時三十分からよろしくお願いいたします。

（終了）

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第４回

開催日　2004年5月17日（月）
開始時刻　15：20
終了時刻　18：00
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（中京大学 助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

第4回 インタビュー質問項目

2004年5月17日

1

先生は七〇年四月に人事教育局人事課に異動されています。異動の経緯及び担当されたお仕事についてお願いします。また、この時点で四次防とはまったく関係がなくなられたのでしょうか。あるいは何らかの形で関与されていたのでしょうか。

2

四次防の審議は紛糾し、国防会議などでかなり批判された結果、規模も縮小され、内容も三次防の延長という形になりました。先生は四次防の原案作成段階に大きく関与されたわけですが、成立した四次防についてはどのように見ておられますか。

3

先生が人事教育局に移られた当時、局長はそのあと次官に就任された内海倫氏、課長は官房長になられた玉木清司氏でした。ほかにも、藤井一夫氏などもおられたようですが、それらの方々のご印象などお願いします。

4

防衛局から久しぶりに人事に戻られたわけですが、当時の人事教育局は人事局と教育訓練局が一緒になって人事教育局になってまだ二年ほどの時期でした。当時の局内の雰囲気や様子などお願いします。また、当時、人事教育局が抱えていた最重要問題にはどのようなことがあったのでしょうか。

5

七〇年十月、初の『防衛白書』が刊行されました。先生はあとで、『防衛白書』毎年刊行の制度化に関与されておられるそうですが、この最初の白書についてご印象はいかがでしょうか。

6

同じく七〇年十一月、三島由紀夫の事件が起きます。この事件をお聞きになってどのようにお感じになられましたか。また、三島氏は楯の会の会員ともども、自衛隊の訓練にしばしば参加されたりしていたとのことですが、こうしたことは当時防衛庁内で問題になったようなことはないのでしょうか。

7

七一年七月、ニクソン大統領が翌年の訪中を発表します（ニクソン・ショック）。日本の第一仮想敵はあくまでソ連であり、中国は想定していなかったと思いますが、米中接近が日本の戦略環境に与える影響について、当時防衛庁の中ではどのように議論されていたのでしょうか。

8

先生は七二年七月、装備局航空機課に異動されています。異動の経緯などお願いします。また、装備局長は通産から来られた黒部穣氏（七一年九月～七二年十一月）、ついて山口衛一氏（七二年十一月～七五年七月）となりますが、装備局の様子や局長・課長（吉田実氏）のご印象などお願いします。

9

T-2、C-1、RF-4の凍結問題がおき、先生はこれに関係しておられたとのことですが、その経緯などお願いします。

10

国会でF-4の空中給油装置が問題となり、これを取り外すということになりました。先生はこの問題にも関与されておられますが、その経緯などお願いします。

※次回は、先生が七四年六月に、防衛局防衛課に戻られてからのお話を中心にうかがいたいと思います。よろしくお願いします。

■人事第一課――幹部自衛官の人事

伊藤　このまえ大蔵省主計局兼務となってアメリカに行って、お帰りになって人事教育局の人事第一課という所に着任なさったということでございます。前にもちょっとお話があったと思いますが、これは人事局と教育局が一緒になったわけですね。

宝珠山　そうですね。

伊藤　この第一課というのは、何をお仕事されるところでございますか。今まで防衛局におられて、その前に確か人事局におられたんですね。

宝珠山　はい、最初の時ですね。二年目ですけど。

伊藤　人事というのは大事なところだということだったと思いますが、しかし防衛庁でいえば防衛局がいちばんメインといいますか、中枢になるわけですよね。

宝珠山　まあ、そうですね。

伊藤　こういう形で、少しあちこち回るわけですか。

宝珠山　私どもの場合には、そうなりますね。

伊藤　一般的にそうなんですか。

宝珠山　そうですね、だいたい。

伊藤　何年かごとに？

宝珠山　二年交替ぐらいで回っていきます。

伊藤　でも先生の場合は、やっぱり防衛局が主でありますね。

宝珠山　結果的にはそうなります。

伊藤　これは、結果が問題なんですか。

宝珠山　これは、入庁しまして五年間、見習い期間というのがあるわけです。ここで観察していて、これはどういう分野に使える人間かというのを上の連中が判定することになると思います。

伊藤　でも、上の連中だって替わるわけですから、その時々で判定は変わってくるんじゃないですか。

宝珠山　そこのところはいわく言い難しですが、中枢部があると理解していただくといいんじゃないかと思います。だいたい次官級になる人たちというのは、ある時期から数人に絞られますね。その人たちがずっと連綿と見ているということで理解していただいていいのかと思います。途中で、「これは、政策分野に向かない」ということになると、他の分野に回るということがございます。

伊藤　普通は専門に特化しないで、たとえば防衛局、人事教育局、経理局等々あちこち回って歩くということになるわけですか。

宝珠山　キャリアの場合には、原則そうですね。

伊藤　防衛局だけという人は、あんまりいない？

宝珠山　防衛局だけの人はいません。人事局だけもいません。装備局だけもいません。経理局だけもいません。

伊藤　先生は、だいたい防衛局と人事教育局ですよね。

宝珠山　だいたい一通り回りました。参事官になるまでは、施設系統が防衛庁内ではなかったんですが。

伊藤　前にもお伺いしたと思いますが、人事教育局になってからも人事第一課が担当するのは前と同じですか。

宝珠山　同じです。人事局の中が、幹部人事、曹士の人事と募集ですね。それからシビリアンの人事、給与、厚生。

伊藤　厚生も入るんですか。

宝珠山　はい。教育局が、一局削減の影響だったと思いますがなくなって、教育課であったものが人事局の中に入ってきて、人事教育局になったというだけなんですね。

伊藤　これ（履歴書）によりますと、二年ばかりそこでお仕事なさるわけですが、この時点での大きな問題は何だったんでしょうか。

宝珠山　人事一課というのは、幹部人事のルーチンの仕事というのが一つあるわけですが、それを陸・海・空に分けて担当しておりまして、私は海の担当ということで藤井（一夫）さんの後任で

行ったわけです。藤井さんとはバトンタッチで入れ代わりなんです。海・空担当がおりまして、その他に私に命じられましたものが、礼式の関係と、旗章というか旗の関係が。

伊藤　旗章というのは、旗だけですか。

宝珠山　旗と、標識が入りますね。ほかに、服制や階級章も担当しました。

伊藤　そういうのを改正したりするわけですか。

宝珠山　私が行きました時は、防衛庁ができて十数年のころですから、まだ防衛庁として一貫しているよりも、海は海軍、陸は陸軍、航空はみつくろってきたという感じのものでありまして。

伊藤　空はアメリカという感じじゃありません？

宝珠山　旗章とか服制とか何とかいうのは、やっぱりアメリカとはちょっと違うものだったのかと思いますけれども、そういうことで「自衛隊らしく一貫したものにしようじゃないか」というのが課題としてありましたので、たまたまそれに取り組みました。今もずっと活きていると思いますが、礼式を陸・海・空、一応統一しました。

伊藤　礼式の中で、いちばん中心になるのは何ですか。

宝珠山　礼式の中で中心になるのは当時、礼砲とかそういうものがありましたね。

伊藤　いろんな外国の高官を迎えた時の儀仗とか。

宝珠山　はい、儀仗を誰に対してどういう格付けでやるかとか、それが海の場合には、既に遠洋航海などで行っておりましたので、その部分は比較的できているわけですけれども、総理に対してどうかというような場合、最高指揮官はどうか、政務次官はどうだとか、そういうのが陸・海・空の中では必ずしもまだ足並みがそろってない、個別に審査をしているというような状況だったんですが、それを統一したのは覚えております。詳しくはそれほど覚えておりませんが、内容を変えるというよりも陸・海・空で各々やっているものの違っているところは、どちらかに合わせようというのが中心だったわけです。それから服制の関係は、まさに服を改定しました。帽章も、海も帽章を少し変えましたね。

伊藤　そういうのは、デザイナーに頼むんですか。

宝珠山　これは、デザイナーに頼みましたね。話が飛びますけれども、デザイナーというのは制服をデザインするのはすごく楽しいんだそうですよ。

伊藤　そうですか、知らなかったな。

宝珠山　伊藤先生が着るだけの服ではなくて、全国的に沢山の人が着るでしょう。

伊藤　何万人も着るわけですからね。

宝珠山　ええ。それで、比較的安くやってくれたのを覚えておりますよ。名前は忘れましたけど、渋谷に服飾の博物館か何かお持ちのような方でした。三種類ぐらいだったと思いますけれども各々について幾つか作って、あとは投票ですね。それで多分、今のができたんじゃないかと思います。その時には、海軍は国際的に黒と白というのがありますね、夏は白。これであんまり異論がないんですが、陸については（今のは）「野暮ったい」とか何とかいうのがありまして。それは当時、募集にすごく影響するんです。かっこいいのを着ていたいわけですね（笑）。そういうことがありまして、色をどうするとか。私は（どういう）色が良いか分かりませんから、着る人がいちばんいいと思うものが良い、「若い人たちの投票によればいいんじゃないか」というようなことを言ったことがあります。

　それから、礼装の服ですね。あれは高いんですけれども、外国で駐在武官などが勤務する時には必要なわけですね。夜会服ですか、そういうのを制式化しました。それから、儀礼刀ですか。航空は、旗章の中でもまだ旗をほとんど勝手に自分のところでつくっていた時代じゃないかと思うんです。それを統一的にしたのを

覚えています。

あと、人事の中では制度をやりますので、幹部人事ですけれども三尉から二尉、二尉から一尉と上がっていくのについて条件を設定するわけですね。

伊藤　最低何年は必要であるとか、そういうことですか。

宝珠山　そういうことです。それに勤評を加えることになるわけですが、その当時記憶しておりますいちばん大きかったのは、三尉から二尉になる時は一斉昇任なんです。病気で休んだとかいうのは別ですけれども、通常に勤務していれば皆さん一斉に上がっていくわけですが、二尉から一尉に上がる時だったと思いますが、半年ぐらい差で三選抜ぐらいにしているわけですね。そうすると、ここで下級生から追い抜かれていくのがどんどん出てくるわけですよ。幹部候補生として入って来て五年ぐらいしかたってなくて、「それでいいのか」というのを、大賀（良平）さんが持って来られましてね。大賀さんは、人事課長でした。「なんとか一斉昇任にしてもらえませんか」と、おいでになりまして、やったのがあります。

伊藤　それを、どこでやるんですか。格付けというか評価を加えて……。

宝珠山　いや、制度ですから人事一課で陸・海・空の昇任の時に。

伊藤　一尉になる時ではなくて？

宝珠山　一尉になる時です。一尉になる時の条件を三選抜にするような定員の割り振りを……。

伊藤　それはいけない、と言ったんでしょう？

宝珠山　定員がありますからできないんです、階級別定員がありますから。そこのところを考えをつくって、予算措置もありますけれども、まず要求しなければなりませんね。

佐道　そうですよね。

伊藤　だけど、それはどこかのレベルではやるんでしょう？

宝珠山　どこからというより、上が抜けていけばだんだん上がっていきますから。枠が空くわけですから、それは上がっていきます。それを三選抜だったと思いますが、三回に分けてやるのを一回にするということにしますと、一度はとにかく（予算定員を）取らなきゃいけないですね。待たせるか、取ってやるかになるわけですが、それについて海・空は幹部候補生が百人未満八十人ぐらいだったと思います。だから、なんとかなるという柔軟性があるんです。ところが陸になりますと二百数十採っていまして、しかも発足が数年古いわけですね。したがって、上のほうがつかえているわけですよ。陸は、基本的にやるのはまだ嫌だというんですね。やっぱり陸は、下からずっと叩き上げるというか、ひとつずつ積み上げて上がってくるという思考があるのかもしれません。つまり、陸には反対がありました。

しかし、一般大学を出てきた人たちと防大を出てきた人たちが、幹部候補生学校でスタートしますね。それから二尉になる時は一斉昇任でいいですが、一尉になる時は五年しか経過してないんです。この段階では、四年間の防大生活をした人たちとはどうしても差が出るんですね、まだ。そういう時期に、半年遅れか一年遅れになって追い抜かれていくというのは士気に関わる話ではないかという理屈をつけまして、一斉昇任しようということで人事局内で調整しました。「陸が嫌なら、あんたのところは別の理屈をつけてやめりゃいいじゃないか」と。航空は一緒に乗って来ましたから、「海と航空はやるよ」ということで調整をして、上にあげてオーケーをとってやったことがありましたね。

これは、大賀さんがそのとき言っていたんですが、内田一臣さんが海幕長であられたわけですが、この方が幹部のプライドといいますか、いろいろなことから「一尉の時までに差をつけるというのはよくない」ということを言われたと聞きました。もっとも

だと思っておりました。

伊藤　どこから差をつけるんですか。

宝珠山　今は、一尉から三佐になる時に差がつきます。その後はどんどん階級を追い抜かれていく人もあるし、また追い抜く人もいるかと思いますけれども。

伊藤　じゃ、やっぱり一尉のところではちょっと早過ぎると。

宝珠山　一尉になる時は、いま申し上げたように自衛官になって五年しかたってないわけです。五年間というのは、三人か四人の評価を受けたぐらいですね。三佐になるということは十年たつんです。十年たったら、これはプロ野球でも十年選手ですからね。ここまでに自分の能力をアピールできないとすれば、それはそれでしようがないじゃないかということがいえます。

私、もうひとつ考えましたのは、私ども事務官のキャリアはだいたい五年間を見習い期間としておりまして、ほぼ一斉昇任なんです。各省も同じだと思いますが、そういうことからいって五年というのは一つの区切りじゃないかと。自衛官で幹部候補生で入って来て五年間一緒にやって、五年の時は一緒に昇任して、十年になったところで差がついてくるというなら、これはひとつの境にしていいんじゃないか。だいたい三十年ぐらいしかいないわけですからね。長きゃ三十五、六年いますけれども、三分の一ぐらいのところで差がつき始めたって、それはしようがないんじゃないかと。五百人からの幹部候補生を採るわけですから、どこかで差をつけなきゃいけないとすれば、そのあたりかと考えたんですが。

伊藤　十年たてば、ある程度本人も周りもだいたい分かってくるということでしょうね。

宝珠山　いや、もう五年で分かります。

伊藤　分かるんですか。

宝珠山　はい、もう分かる。入ってきた時にすぐ分かるのもいますけれども（笑）。

佐道　厳しい。

伊藤　それは、だめなほうでしょう（笑）。そういう幹部人事は、一課ではどこまで見るんですか。

宝珠山　一課で一尉、二尉、三尉の尉官のところは定員枠と制度を与えるところまでです。佐官になるところからは、意見を持ってきたのをチェックする。三佐、二佐ですかね。

伊藤　誰が意見を持ってくるわけですか。

宝珠山　幕僚監部の人事課長、幕僚監部ですね。

伊藤　それは、もちろん……。

宝珠山　「こういう成績でありますから、定員枠までこの人たちを上げたい」という具申をしてくるわけです。

伊藤　そこがいちばんよく分かっているわけですから、それに対して「おかしいじゃないの」ということはなかなか言えないじゃないですか。

宝珠山　通常はそうですね。ですから、三佐、二佐のところまでは幕僚監部でほぼ仕切っているということが言えるかと思います。

伊藤　一佐になりますと？

宝珠山　一佐になりますと、長官発令なんです。だから、私ども部員のところで全部、審査をすることになります。

伊藤　初めからですか。

宝珠山　初めからです。しかし、初めからですけれども二佐までの経歴というのは厳然としてあるわけです。それから、一佐になってからの勤評というのも自衛官が書いていますからね。

伊藤　勤務評定というのは、かなり詳細なものなんですか。

宝珠山　詳細なのもあるし、詳細でないのもありますが……。

伊藤　それは、査定する人にもよるんでしょうけれども。

宝珠山　その通りですね。しかし、こっちは査定する人も査定できますのでね（笑）。だから、みんなに厳しいのもありますし、そうでないのもあったりするのは、だいたいずっとチェックして

いきますと（勤評をつける人とつけられる人の双方の評価が）出ますね。

伊藤　佐官に関しては……。

宝珠山　佐官というか、一佐以上についてはですね。

伊藤　以上というのは、どこまでですか。

宝珠山　トップまでです。

伊藤　トップまでですか。

宝珠山　はい。これは全部聴取します。グーンと数少なくなりますから。二佐といったら数百ですからとてもカバーできないですけど、一佐になりますとぐんと減りますので。

伊藤　将になったら？

宝珠山　将になったら、何十人ですからね。

佐道　それは、昇任ということだけでなくて、部署の問題もご覧になるわけですね。

宝珠山　同じです、人事ですから。

伊藤　しかし、両方絡んでいるでしょう？

宝珠山　そうです。経補屋さんもいますし、潜水艦屋さんもいますし、船の人もいる、航空の人もいる、整備の人もいる。

伊藤　それに見合うポストがなければ、まずいわけですね。

宝珠山　それはそうです。しかし、だいたいそれは二佐までの間の養成課程で、優秀な人がどこかに固まらないようにせざるを得ないです。それは、防大を出た時から取り合いだそうです。海に来い、空に来いと。海に来る人についても、潜水艦に来い、航空に来いと、ずっと人脈ができるんでしょうね。

伊藤　どうやって見ているんですか。教官が見ているんですかね。

宝珠山　防大の時？　そうです。だって全部、海上教官、航空教官と行っていますから。

伊藤　教官とはいえ、人を集める係じゃないですか（笑）。

宝珠山　それは、陸・海・空、横並びにはそういう取り合いがあるそうです。全部じゃありませんよ。優秀と思われるのは、誰が見ても優秀なんじゃないですか（笑）。

佐道　だいたいそういう人的系譜もできていくわけですか。

宝珠山　じゃないでしょうかねえ、防大の場合は。一般大から入ってくる人というのは白紙で入って来ますので、私から見れば初めから一緒のスタートラインにないわけですから、観察期間というのを長くとっておくべきではないかという理屈をこねたんですがね。しかし、それは通りました。

佐道　先生がご覧になっている感じで、防大から来ている人と一般大学から来ている人、十年で査定の対象になる段階ではどうなんでしょう、一般的にいって。

宝珠山　十年ですと、十枚の勤評が上がってくるわけですね。だいたい同じ人に仕える場合もありますけれども、七、八人の人が見ますので、その勤評は見ることができます。

伊藤　一般的に差がありますか。

宝珠山　まあ当時ですと、一般大学から来る人と当初の意気込みが違うんじゃないでしょうかね。

伊藤　ということは、防大出身の人のほうが……。

宝珠山　技術というか、術科にかけては文句なしですよね。それから戦略の仕事をさせたとしても、四年間全部じゃありませんけれども、そういう科目を一般大学の科目の他にやっているわけですから差が出てきます。防大ですと、戦史をやっている。歴史の先生にそういうことを言ってはいけませんけれども、政策を考える時のひとつの大きな実験室ですよね。しかし、一般大学で戦史をやってきた人はいるかといえば、ないですよね。

伊藤　ないですよ。それは、講義がないんですから。

宝珠山　だから、そういう人たちと一緒に扱うのは如何かというのがありますよね。しかし、そういう人たちが（たとえば）経補に行きますと、これは今度は優位な面があります。それから警務

もそうじゃないでしょうか。警務隊などは、法科を出てきた人などは有利な面があります。

伊藤　文官もおやりになるわけですね。

宝珠山　人事一課は、文官はやらないです。人事三課と秘書課です。今は秘書課ですけど。

伊藤　そうすると、宝珠山さんなんかの場合は？

宝珠山　人事一課の時には、私は海上自衛官の幹部人事です。

伊藤　分かります。じゃ、宝珠山さんの人事については？

宝珠山　私の人事のことを言うわけにはいきませんよ。

伊藤　人事三課がやっているわけですか。

宝珠山　人事三課は内部部局を除いておりましたので、当時は総務課がやっておりました。

伊藤　官房の総務課ですか。

宝珠山　はい。今は、官房の秘書課にシビリアンの人事が全部集まっております。

伊藤　それは、内局を含めて全部ですか。

宝珠山　はい。というのは、だんだん課の数を減らされていく（今は人事第三課はない）中でなってきた面もあるかと思いますが。

伊藤　この人事一課で二年間お仕事をされた中で、いちばん厄介だった問題というのは？

宝珠山　人事一課のは（ノートが）二冊ほどありますけど、ほとんど固有名詞とか何とかで、厄介だったという記憶はありませんね。

伊藤　そうですか。まあ、ルーチンワークみたいな形になるわけですね。

宝珠山　人事一課の人事はルーチンワークです。とくに思い出しますのは制度変更のそれですね。それから旗章とか。これは、制度ですから。

伊藤　これは、つくらなければならないわけですね。

宝珠山　一回終わったら、後（しばらくは）ないですよ。そんなにしょっちゅう制服を変えられたら困りますしね（笑）。

佐道　それは、そうですね。

宝珠山　何故そういう時にやったかというと、防衛庁ができて、自衛隊ができてまだ日が浅かったということ。各々が、とりあえずスタートしていたものを一本にまとめるという時期にあった。やらなくて放っておいてもいいんですよ（笑）。で、やったということですね。

伊藤　でも、そういうことがなければ本当にルーチンワークだけということになりますね。

宝珠山　はい。だから出張して、飯を食って、相手の人たちと意見交換をしながら、勤評と合っているか、というようなことになりますね。それで部隊に行きますと、人事一課の部員というのは大事にされました（笑）。

佐道　それは、そうでしょうね。

宝珠山　センサーですから。

佐道　幕僚監部については、いちばんトップの幕僚長を目掛けてのレースをなさっている方々がいらっしゃいますよね、選抜された意味で。それこそ防衛課長になるか、何課長になるか、それから防衛部長になるか、総務部長になるかとか、それで後々のいろいろなコースが変わっていったり。幕僚長は、「自分の防衛部長には彼を据えたい」という話が来たり、いろいろあると思いますが、そこら辺はどういう兼ね合いになるんでしょうか。

宝珠山　トップクラスになりますと、部員が出る幕ではありませんけど、人事課長などがいろいろやって情報を取るということじゃないでしょうか。私ども部員が主としてやりますのは、一佐ですね。それから、将補に上がる時のお手伝いですね。いまおっしゃる幕僚長というようなことになると、口出しすると怒られます。

その決済文書は私たちが、つくりますよ。大賀さんのところに持って行っても、大賀さんは判子を押さないですよ。「これは私

の押すことじゃないから、総務部長のところに行ってください」というようなものですね。あとでは押しますよ。それは、内容を押すということではなくて、事務的に様式として整っているということでしょうかね。だから、覚えていますのは、大賀さんのところに持って行くとき、実質的に内容が書いてあるところに紙を貼って置くんですね。それで、決済印のところだけ（笑）。そういうのもありましたよ。そういう時には、大賀さん自身の人事が入ったりすることはありますけどね（笑）。

伊藤　人事一課の課長におなりになったことはないんですね。

宝珠山　人事三課長にはなりました。

伊藤　この前のお話で、防衛局で四次防の作業を進めておられた後、バーンと人事局に移られる。そうすると、まったく離れちゃうものですか。

宝珠山　ええ、それは後任に引き継いだ後で口出しをするのは失礼にあたります。

伊藤　それはそうでしょうけれども、向こうからいろいろ意見を聞いてくるとか、そういうことはあるんですか。一般的にはそれもしないものですか。

宝珠山　普通はないですねえ。「あの時どうだったのでしょうか」というのがあるかもしれませんけれども、引き継ぎでほとんどカバーできますね。それから、内容的に説明したことが理解できない部分は、幕僚幹部のほうにもいるわけですから、「それは、こういうことですよ」という説明をそちらから聞けますので、この前差し上げた資料の中などについても詳細な説明を聞けますよ。これは私が書きましたけれども、書いた背景については幕僚幹部はもっとたくさんのデータを持っているわけですから。私は、それを集約する形――取捨選択もありますが――ですから。この資料そのものではありませんが、同じような資料を見ることによって、どういう変遷を経てここに到達しているかということは分かりますので。

■四次防と人事一課の関わり

伊藤　ご自身の関心としては、そのあと四次防がどうなっていくかというのはあったろうと思いますが。

宝珠山　それはありますけれども、しかしそれを言うと、他のところが「おまえは、もう離れたから」というだけの話ですから。逆の立場になったら、そう言いますからね。

伊藤　そうですか。

宝珠山　「口出しをするな」ということになりますね（笑）。

佐道　情報自体は、自然に入ってきたりすることはないんですか。

宝珠山　人事の情報は入ります。人事の情報というのは、人事系統の情報……人事一課ですと、人事局の総括課なんです。防衛局の防衛課、官房の総務課、経理局の会計課、装備局の管理課といったような総括課があるわけですね、局の中で筆頭課。そこには、人事系統の四次防の作業の一部が流れてきます。

伊藤　たとえば、どういうものですか。

宝珠山　たとえば、募集の系統はどうするのかというのは人事局の所掌ですので、四次防の中の作業は分担しています。

伊藤　四次防全体の姿は見えない？

宝珠山　装備（等の全体）の姿は、人事局では見えません。それから、後ほど出てくる航空機課でいきますと、装備局の中の航空機の四次防というのは相談があります。それと同じで、人事系統にかかるものについては当然、人事局に相談というか分担が来ます。この（保管図書）中にあると思いますが、作業の分担が全部決められて、それをまとめているのが防衛局計画官室。この時は防衛課になっておりますけれども。そういうことはございますが、その他の分野について装備の数をどうかとか、そういうのはあり

ません。

伊藤　それに人事がくっつけば分かるというわけですね。

宝珠山　人事の部分ですから、募集可能数をどう見るかというようなことについていうならば、それは防衛局の所掌ではなくて人事局の所掌になるわけですね。

それで募集見積もりとしては、向こう五年間に十万人採れるという見積もりが限度だということになると、防衛局のほうでは「十五万人採ってほしい」ということになりますと、この調整をどうするのかというような問題は人事局に来ます。この時は、決して募集が楽な状況ではありませんので、「それだけの要請があるなら、処遇改善をきちっとやるのを計画の中に入れてもらわなきゃいかん。それは、こういうことだ」と。たとえば、服制をよくするというのもあるでしょうし、給料を上げるとか、隊舎をきちっとするとか、そういう四次防の中に盛り込むべき施策と取引きをすることになります。

伊藤　業務分担ですね。

宝珠山　それは、所掌として各局にあるわけです。

伊藤　そうすると、四次防が決定されて、全体として「ああ、こういう姿になったか」ということですか。

宝珠山　その部分というのは、おそらく経費規模が大幅に下がっていく過程をおっしゃっているのだと思いますが、その削減過程とか何とかについて、トータルがどういう姿かというのは分かりません。人事一課にいて、四次防のトータルの姿というのは分かりません。

伊藤　結局、四次防が公表されてから分かるということですね。

宝珠山　そういうことですね。

伊藤　それまでは、部分、部分しか分からない。

宝珠山　そうです。自分の所掌に関わる部分だけということになります。

佐道　中曽根さんが外でいろいろなことを打ち上げたり、七一年の四月に防衛庁の原案ができる前に、七〇年の十月にその基本的なものが出されたりしますよね。

宝珠山　そうでしたかね。

佐道　そのあと大蔵省とかいろいろ折衝が入ったり、四次防の中曽根さんの時の原案が七一年四月に出たあと国防会議、海原（治）さんが議論に入ったり。その中で、四次防というものはだいぶ変わっていったという話に従来なっていますが、大蔵省がどこに文句をつけたとか、国防会議がいったい何を言ってるのかとか、そういったことはもうあまり入って来ないということになるんでしょうか。

宝珠山　国防会議での審議状況というのは、ちょっとつかめませんが、それが募集見積もりに関わるようなことであれば参加します、原理的に。しかし、それも当時の防衛課長が国防会議事務局の参事官を兼ねておりますが、それを通じてになります。四次防の経過、これ（「四次防策定の経緯等」及び「四次防問題の経過」）はコピーをしていただいたほうがよければ。この（「TCR関係国会想定問答及び資料集」）中にも入っていますけれども。

伊藤　いま人事第一課の課長補佐ぐらいですか。部員でしょう？

宝珠山　この時ですね。課長補佐です。

伊藤　それぐらいだと、庁議などには全然出られない？　まだパスですか。

宝珠山　まず出ませんね、出られません。

伊藤　庁議だと、課長ぐらいですか。

宝珠山　所管であれば。

伊藤　そうすると、やっぱり局長ぐらいの？

宝珠山　はい、局長メンバーですから。局長が「おまえ、ついて来い」といえば、ついて行けますけれども、一般的に出るという性格ではありません。

伊藤　その段階になると、みんなは物事がどういうふうに進んでいるかというのは分かるわけですね、庁議に出られるぐらいから。

宝珠山　いまご指摘の、国防会議でどういう論議があったかというのは、局長クラスにもそれほどオープンにされてないんじゃないでしょうか。当時の人間関係もあるかもしれません。仲が悪いなかで――もう言っていいと思いますけれども、海原さんと宍戸（基男）さんとか必ずしも……普通よりも悪い状況なんですね。国防会議には局長は出ていけないんですよ。（国防会議事務の）参事官でもないんですね。だから、防衛課長が出て行って説明をして、何を言った、かにを言ったということになるんですね。それをどう対応するのかというのを、今度は各局にばらすことになるんですが、その際に人事局系統は人事局系統のものを（防衛庁）参事官会議を経ないで降ろされるというのが多いんじゃないかと思いますね。

伊藤　そうすると防衛庁にいらっしゃっても、防衛庁全体の中が、大筋がよく見えているというわけでは必ずしもないわけですね。

宝珠山　大筋が見えるところは防衛課だけだったんです。経理局も見えないんです。他の局は、もっと見えないんです。だから、みんな怒るんです。怒るんですけれども、オープンにするともう作戦ができなくなっちゃうんですね。相手に手の内が分かっちゃうから。ということがあるんですよ。だから、不満はあります。

■人事局での上司、同僚

伊藤　それでは、そのことを飛ばして、3番に書いてあります当時の局長、内海（倫）さん、課長が玉木（清司）さん、他に藤井一夫さんなどが先生同様としておられると。

宝珠山　藤井一夫さんは私の前任者ですから、私とバトンタッチで出て行くんです。だから、この時は陸の担当が児玉良雄さんで……。

伊藤　先生は海でしたね。

宝珠山　そうです。それから、長谷川宏さんが航空でした。

伊藤　それは、みんな課長補佐なんですか。

宝珠山　そうです、部員（課長補佐）が担当で並んでいるんです。

伊藤　課長は？

宝珠山　玉木さんですね。

伊藤　この方は、どういう方ですか。

宝珠山　玉木さんは、三次防をやった方です、実質的に。三次防の時の計画官なんです。非常に詳しい方ですね。人事院採用の方です。当時は、人事院採用とか、どこから来るかということは別ですが、人事院から防衛庁に来て、そのまま居つくことを決心した方ということができるかと思いますが。京都大学のご出身ですから、東大閥の色彩の濃い官庁の中ではちょっと異色のほうですね。それでも、もちろん能力が買われて三次防の担当に抜擢されたんだと思いますが。

伊藤　東大閥が圧倒的に強いんですか。

宝珠山　官庁はそうですよ。

伊藤　官庁といっても、防衛庁？

宝珠山　もそうですよ。この前、申しあげたかもしれませんけど、私が入庁して海原さんのところに挨拶に行って、「おまえ、どこの出身だ」と言われた話をしたことがあると思います。まだ海原さんが健在な頃ですからね。

佐道　旧内務省系統の人がまだいらした頃ですからね。

宝珠山　そうです。

伊藤　局長の内海さんは、どうですか。

宝珠山　内海さんは、制度調査委員会の時にもちょっとお出でになって、メモにも出ていたと思いますが、人事においでになって

おられますが、防衛にそれほど関心を持っておられる方ではありませんでしたね。ただし、田中角栄さんとか中曽根（康弘）さん……中曽根さんと同級生ですかね。ということで、非常に政治的に動かれる方だったように思います。

伊藤　政治的には積極的に動かれる方なんですか。

宝珠山　ではないでしょうか。そういうこともあってか、人事についても政治的な注文が下りて来ていたりしていたのを覚えておりますね。そういうのをいかにさばくかというのもありまして（笑）。

佐道　ご本人は、警察で道路交通法をおつくりになったと。

宝珠山　そうかもしれません。交通とか警察の系統は、若い時からやっておられますのでお詳しいんですが、制度調査委員会の時に来てからですから十何年かたって来ておられますので、それほど防衛についてお詳しいわけではありませんし、そもそもあまり興味をお持ちでなかったのかもしれません。

■四次防成立までの経緯とその感想

宝珠山　ちょっとさか上りまして質問項目の2に戻りますけれども、いまお配りしましたコピー（「四次防策定の経緯等」）で、四次防がへこんだというのは、次の「防衛計画の大綱」につながっていく伏線としてあるわけです。そういうことで見ていただくといいのかと思いましたが、佐道先生がおっしゃった四十五年十月のはちょっとメモしていませんが、四十六年四月二十六日にいわゆる中曽根原案というのが発表されておりまして、これは五兆八千億ということで大きいとか小さいとか言われていたわけです。この五兆八千億というのは、この前の時に経理局長が六兆三千億についてどうだこうだと。経理局長は「五兆八千億ぐらいが」と言っていたのとだいたい符合するものなわけですね。したがって、内容的にはあのころ既に出来ていたということで、十月よりももっと前にあったと考えてよろしいんじゃないかと思われるわけです。

ここには書き込んでおきましたが、（コピーしたもので）見えるかどうか分かりませんが、この案が大きいかどうかというよりも、全日空事故というのが非常に印象を悪くして、中曽根さんのご性格、お人柄もあると思うんですが、一緒くたになったということが四次防の不幸な出生につながるんじゃないかと私は見ております。したがって、五兆八千億なりが巨大であった。中曽根構想が大き過ぎたからうまくいかなかったんだということではないんじゃないかというのが、私の仮説であります。自衛隊機との衝突事故があって、いろいろ裁判では真実が明らかになるわけですけれども、この当時は全面的に航空自衛隊に責任をかぶせて流れていくわけです。

交代した西村（直己）さんも、「五千億修正」というのを出すわけですから、一〇％近い削減修正なわけですね。五千五百億ほどの修正をしているわけですけれども、さらに江崎（真澄）長官、これは内閣改造で交替するんですかね……あ、違いますね。江崎長官は……西村さんが何で辞めたのかな。これも、何か失言ですよ。

佐道　そうですね、失言でお辞めになったんですね。

宝珠山　失言で辞めているんですよ。それで、江崎さんが来るんですね。表に書いてありますが、七月五日に増原（恵吉）長官が就任して、八月二日には西村長官になっていますから、これも何か失言ですよ。あれだと思います、「国連は、田舎の信用組合みたいなもの」と。それで十二月に江崎長官がおいでになって、長期目標を目指した構想を白紙に戻すということですから、中曽根構想と言われていた時のほぼ十年間で達成することを考える、という部分の将来目標をここで放棄するということだと思います。

四十七年一月七日には、佐藤―ニクソン共同声明で沖縄返還が決まる。これで、佐藤内閣の末期が見え始めるんですね。政権が

弱い時にぶちあった大きな決定は、よく不幸なことになるんですね。これが全日空事故と、中曽根さんの与える印象と、佐藤内閣の末期というマイナス三はんかかって決着せざるを得ないというか、決着できなかったんですね。これが、四次防――四次防というのは名前もよくないんです。シジボウ（死次防）ですからね（笑）。僕らも「四次防、やめようじゃないか」と言ってたんですよ。四という字はよくないというようなことを言って。そういうこともあって、本当に結局、「死次防」になっちゃったんです。そういう不幸な経過をたどる時期にあったということで、審議が紛糾したとかいうことはありますけれども、これは海原さんの影響だけではない、周囲の状況があまりにも悪かったということではないかと思います。その時の三輪（良雄）次官などは、相当な力を持っていた方ですよね。

佐道　先生は、三輪次官はかなり評価しておられるわけですか。

宝珠山　三輪次官は、ずいぶん努力をされておりました。飛行機が何機とか、船が何隻とか、そういう細かいことはあまり口を出す性格の人でもないし、お詳しい方でもないわけですが、対外折衝の中で五千億削るとかいうような時になると、総論部分で自ら筆をとって戦っておられます。徹夜で大論文を書いて、「これ、主計局長のところに持って行け」とやったりしておられた。私のところにコピーが残ってないかと思って探しているんですけれども、まだ見つかりません。見つかったら寄贈いたしますが、そういうことで非常に積極的に努力をされた方です。そういうのがあって、政治家との間では必ずしもよくなかったのかもしれません。

佐道　ついこの前、お亡くなりになりましたね。

宝珠山　そうそう、去年か今年かな。

※三輪良雄氏は、二〇〇三年八月十六日九十歳で没。

佐道　ごく最近ですね。

宝珠山　そうです。お辞めになりましてからも、司法修習に入られて弁護士をずっとやられるという形で、官に頼らないで独歩で終わりまで務められました。

伊藤　結局、四次防というのは大綱だけ？

宝珠山　大綱だけというか、大綱をつくるについても佐藤内閣はできなかったんですね。それが、後段の「凍結」事態に入っていくんですが。

　それから、この四十七年二月X日というところで、新聞に出ていたと思うんですけどね。この見解がずいぶん……誰がつくったか分からないんですが、後の紛糾の原因になるんです。統一見解と四次防大綱を決めているんですが、統一見解というのが非常に分かりにくいものであるんです。分かりにくいのをつつかれたのが、ＴＣＲ――ＣＴＲでもよろしいんですが。これ（新聞記事「四次防政府見解に野党反発」）、要約して読むのがいいのかどうかわかりませんが、「四十七年度予算案は四次防に基づいて編成されたものではないので、四次防決定の結果必要となる装備の増強は、四十八年度以降において予算化されることとなる」という締めくくりになっているんです。

　ところが、ＴＣＲは三次防までの継続ではないんです。新規計画なんです。したがってこの文面通りにいきますと……その前の部分を読まなきゃいけないかな。「四十七年度予算案は、四次防の決定を見るに至らなかった段階において編成されたので、防衛関係予算については沖縄への配備は別にして、三次防の継続事業、従来装備の維持、更新にかかるもの、人件費などについて必要な経費を計上するとの原則によって予算編成を行った。したがって、四十七年度防衛関係予算は四次防に基づいて編成されたものではない」と言っているわけね。三次防の継続事案だけでやったと言っているわけです。中身を見ると、四次防で新規に取り上げようとしているＴＣＲが、前金が出ているわけです。ここをつつかれたわけですね。それで紛糾することになる。内閣が強ければ、そ

んなもの蹴れるんです。しかし、もうヨボヨボなんですね。

佐道　もう末期になったので。

宝珠山　沖縄返還――もちろん小笠原も入りますけれども――という大事業をやって、防衛なんかじゃなくて次の政権のほうに皆さんの関心は移っていて、なるべくここでけつまずいてくれるほうがありがたい人たちが周辺にいるということじゃないでしょうか。

伊藤　やるんだったら、おれが内閣をつくってからやると。

宝珠山　そういうことなんですねえ。証明しろといっても難しいですが、だいたいそういう状況。

伊藤　でも、こういうレベルの問題は新聞なんかでどんどん出てきますからね。

宝珠山　その通りです。

伊藤　先生もずっとご覧になって、ありゃありゃと思って（笑）。

宝珠山　それは、状況として分かるわけです。

伊藤　大変なことになっとるなと。

宝珠山　沖縄返還のほうはそういうことで別途、米国との協議の関係で進んでおりますので、四十七年度予算の中にも沖縄は入っているということで、沖縄関係の配備のことが進んでいく。そこで沖縄が五月十五日に返還されて、七夕内閣ができる。しかし、田中内閣になりましてからも、第一優先は日中国交だったようですね。

伊藤　そうですね。

宝珠山　これがなんとか目処がついて来たところで主要項目に行くわけですが、「主要項目が決まらないと、TCRは契約しちゃいけないよ」ということでありまして、いろいろと問題を抱えていたということがあります。

佐道　その時は、先生はもう航空機課のほうに移られていたわけですよね。

■四次防凍結と契約問題

宝珠山　そういうことで、このメモをコピー（「四次防問題の経過」）いたしましたが、この関係でいきますと質問項目の8に入ったほうがよろしいかと思います。凍結が解除されるかどうか、これはもう部員なんかがタッチできる話ではありませんので分かりませんけれども、この時にやらされたのは、凍結が解除されたら契約できるのかどうかという点が航空機課の仕事でした。契約しなければならない、しかし、契約するにしても、時期的に遅れていながら、準備作業をやっちゃいけない、凍結ですから、やっちゃいけないことになっているわけですから大変でした。

憶測しますと、契約するためにはだいたい大きいもの、とくに初めての契約などというのは一年近い準備期間が必要なんです、細かな準備が必要です。それは何故かというと、ひとつ例を挙げれば航空機一機といっても大システムですから、日本だけでも五百社ぐらいが関わっているわけです。

伊藤　部品ですか。

宝珠山　部品というか、契約をするのはこの時は三菱重工がT-2なわけですけれども、これに全部下請けが入っているわけです。だから、下請けが準備できているかどうか、準備するとして下請けが幾らで請け負うか。孫請けもある、更にその下請けもあるということで、ずっと下りていくわけですから、誰か一人の決心で、ある日ポンとできるというものではないんですね。

伊藤　でも、三菱はそのつもりでいたわけでしょう？

宝珠山　つもりでいたけど、それを凍結させられたわけですから。

伊藤　だけど、その凍結がいずれ解けると？

宝珠山　いずれ解けるということは期待しておりますが、その間に、「凍結されているのに準備作業をしたらいかん」と言ってい

るんですね。

伊藤　それは、防衛庁がでしょう？

宝珠山　いやいや、楢崎（弥之助）さんか何かですよ。

伊藤　そうでしょうけれども……。

宝珠山　防衛庁はそう言わざるを得ないですよ、国会で凍結すると、言っているわけですから。準備作業をやったら、確かに凍結の意味はありませんからね。何が凍結なのか分からなくなっちゃうから、論理的には。凍結というのを当時の船田（中）さんでしたか。

佐道　議長ですね。

宝珠山　ええ、議長斡旋でやっているわけですから。

佐道　すべてのものが、ピタッとフリーズしてないといけないわけですね。

宝珠山　そう、動いちゃいけないんですよ。

伊藤　それは、政府はそうかもしれませんけれども、私企業は別段、何をやろうと構わないわけでしょう。

宝珠山　原理的にはね。

伊藤　自己負担で。

宝珠山　自己負担で。しかし、そういう伊藤先生のような方がいらっしゃればいいんですが（笑）、逆にそれで崩れることもなきにしもあらずというぐらいの情勢ですね。政治的には。一年送られたらもっとひどいわけですから、そこをうまくかいくぐって、どうやるかということですね。それがありまして、つくった資料がこれなんですよ。

伊藤　「ＴＣＲ関係国会想定問答及び資料集」。

宝珠山　何故はやく凍結を解除しなければならないかということを、いろいろ説明をしているわけです。

佐道　じゃ、この中に先ほどの下請け、孫請けの問題から始まる契約の問題とか。

宝珠山　そうですね。そこまで細かくは言っておりませんけれども、その種のことを匂わせながら。だから、普通に必要のないことを、この時期やらされておりますね。

佐道　装備局にいらっしゃった頃は、装備局に防衛産業の方々も頻繁に来られる？

宝珠山　ええ、それは見えます。時期によりますけど、予算要求の時に自分のところに幾らつくのかというのを、主に見えますけれども。

伊藤　四次防が決定されたら、凍結が解除されるというものではないんですか。

宝珠山　四次防の主要項目が決定されて、そのことがこの中（四次防策定の経過）にもっと詳しい、四次防の凍結の経緯が入っております。四十七年一月に政府案が決定して、二月三日に国防会議を開いたけれども、四次防の年度内決定を断念。しかし、二月四日には予算委員会が開会しちゃって、冒頭から空転ということになってきて、七日に国防会議の議員懇談会を開いて統一見解を決定したというところが、先ほど申しあげたようなことなんですね。

それで、予算を減額することを、ＴＣＲのが入っておりますので、それを減額するというわけですね。減額の内容というのは、（「四次防策定の経過」）二五五ページにございます。航空機購入費を二六億三〇六〇万ほど減らすというわけです。その他、等々あるわけですが……。修正をして、二五四ページに返りますが、二月二十四日に自民党議長斡旋を依頼して、議長が斡旋をする。十月十三日のところで、主要項目に関する衆議院議長の確認及び参議院議長の了承を通知。これで、凍結解除なんです。十月十八日に凍結解除について四党の国対委員長に申入れをして、ようやく動きだすということになりますね。二五七ページに、これは予算の関係ですが、先ほど申しあげた以外に国庫債務負担行為についても、「大蔵大臣の承認を凍結解除されるまでは、しばらくい

たしません」という閣議了解までしているわけです。これらについて、十月十三日まで引っ張られた。十月十三日というのは、もう十一月に近いわけですから、準備期間の空白がおよそ半年過ぎているということで、契約部門としては非常につらいんですね。

そういうことで契約が遅れるとどうなるのかということについて言いますと、遊休が生じるわけです。順調にやろうとしている人たちが、遊んでいることになるわけです。その負担が増えるということと、当時、物価上昇がきついんですね。だから、半年間の物価上昇をどうするのかというようなことまでかかってくるものですから、予算の執行というのが非常に厳しくなるな、という心配をしているのがこのＴＣＲの関係で、凍結解除などというのは自分の力ではできないんだけれど、その結果の悪影響は全部装備局のほうでなんとか取り繕わなければならないという課題を押しつけられているわけですね。

伊藤　予算減額になって、凍結解除になって、予算はどうなるんですか。

宝珠山　凍結解除になって、今度は準備を認められるはずなんですが……。

伊藤　いや、予算は減額されちゃったんでしょう？

宝珠山　減額されています。

伊藤　それで、この年度には予算はないわけですね。

宝珠山　その部分というのは、キャッシュの部分なんです。だから、いま申しあげた国庫債務負担行為というのは、将来にわたる契約だけはできるんです。

伊藤　できるんですか。そうか、それは頭金なしでですね？

宝珠山　それで、「頭金なしで契約をできるのかね」という検討をしたりしていますよ。〔頭金なしに〕契約ができるとすれば、何で予算に積んであったのかという質問も出るわけでしょう。

伊藤　当然ですよね。

宝珠山　これは、きれいに答弁してありますから（笑）。

伊藤　ああ、驚いた。

宝珠山　そういうことで、おそらく防衛庁始まって以来の騒動だったと思います。

伊藤　四十七年七月に航空機課に行かされたというのは、もうこういう状況を見通して？

宝珠山　いや、それはないでしょう。「（人事第一課で）もう二年たったから、おまえ、どこか行け」ということで、「おまえ、どこへ行きたいか」といわれたことを記憶しています。「そんなら、航空機課に行きたいです。どうですか」と言った。

伊藤　いちばん紛糾しているところにですか。

宝珠山　それはあるかもしれませんけど、その前段を話しますと、防衛庁の中で防衛力整備という政策を裏で支えるものがあるわけですね。まず、人間がありますね。人間は、人事なわけです。で、施設があるんですね。それらの中で防衛依存度の高いのは、航空機と弾薬なんです。弾薬が九〇何％でしょうね。航空機で八〇何％なんです。すなわち、これらは防衛産業なんです。航空機課は、防衛を支える一つの要素の中の実態を見るにはいいところなんです。だから、ここは非常にいいポストなんです。

佐道　先生は前から、ちょっと装備局航空機課に行きたいなという、ご自身のご希望でしたか。

宝珠山　それは、当時の上司が航空機課長から人事一課長に来た馬場（義郎）さんだったんですよ。で、二年ぐらいになってから「私を推薦しませんか」と言ったりしていたんです。それから、航空機課長だった人が吉田（実）さんというんですが、この人は僕が人事二課にいた時の上司だったんです、課長じゃありませんけれども。で、「私を採りなさいよ」とか（笑）、飲んだ時の話ですけどね。そんなことを言っていたら、その通りになりました。

伊藤　それは、希望が通ることもあるんですか（笑）。

宝珠山　希望が通ったかどうか分かりませんけれども、二年ぐらいたつと異動だというのは、皆さん分かりますので。

佐道　入ってみたら、とんでもない渦中に入ったと。

宝珠山　ということですね、その通りです。

伊藤　そうですか。僕は、逆だと思ったんですけど。

佐道　渦中だから、先生を。

宝珠山　しかし、渦中であったから勉強できた部分というのは、これもひとつの成果ですね。そうでなかったら、スーッと通っていたかもしれないんです。ということで防衛産業の、一端ですけれども企業の人から直接意見を聞く、自らの苦しみを。もう訴えざるを得ないですね。「早く解除してほしい」とか、あるいは「遅れて契約する時には、こういう経費をどこかで見てもらわないと困りますよ」と。企業として当然なんですよ。そういうことを言ってくる中で、防衛産業の実態がどうなのかというのを勉強できたというのは、非常に大きな財産になりました。

これ（「防衛庁航空機関係の概要」）もそうですが、この時に合わせて、そもそも航空機の調達というのはどういうシステムでなされているのか、なされるべきなのか、輸入はどうなのかというのをまとめろということで、まとめたのがこれなんです。これ、半年ぐらいかかっているんですけれども。

佐道　両方とも先生がまとめられたわけですか。

宝珠山　私がまとめたというか、「まとめろ」という命を受けてみんなで。

伊藤　課でまとめたということですか。

宝珠山　ずっと分担をしてまとめておりますけれども、航空機関係の執務提要なんですね。今でも全部が活きているというわけではありませんけれども、だいたいこれを読むと分かるわけです。

この意義はどういうことかといいますと、当時の通産省などから二年ぐらいで来るわけですが、何も知らなくて来るわけですよ。だから、教育用には「まずこれを読んで、分からんところがあったら質問をして」という形でやりますと、優秀な人たちですから短期間でマスターしてくれるわけですね。そうすると、どこに出しても一通りの応答はできるようになるんです。国会議員のいるところに行こうと、大蔵省に行ってやる時にも、全体の中で「自分はここを所掌しているんで」ということで行けるわけですね。私どもが行った時には、こんな教材はないんです。

佐道　そうですか。

宝珠山　だって、順調に来ている限り要らないんですよ。こういう騒動がありますと、それは徹底的に勉強しなきゃ防衛できないんです。強くて、威張った人たちから叩かれるわけですから。それが成果です。

伊藤　だけどしかし、普通だってマニュアルは必要なわけでしょう。

宝珠山　マニュアルは必要でしょうけれども、契約条項とか何かあれば普通にいける話ですよね。

伊藤　前例を踏襲していけば、問題ないと。

宝珠山　はい、そうだと思います。

伊藤　しかし、これは本当に分かりやすくできているな。まず航空機の分類表から始まって。

宝珠山　はい、航空機の定義からずっとやらなきゃいけないし、エンジンがどういうシステムなのかというのも、そういう勉強ができるということで、これはずっと大きな財産になりましたね。

佐道　防衛庁の中で、調達の問題とかまで詳しく知るというのは、こういう機会がないと分からないでしょうね。

宝珠山　はい、分かりませんね。だから後年、私は今度は〔調達実施本部の〕契約第四課長になってF-15とP-3Cの契約をするんですが、これが役に立ちましたね。この時は、同じく吉田さんが副本部長をやられていて、F-15とP-3Cといった大物の初度契約というのは大変なんですよ。「おまえ、来い」ということで

引っ張られちゃったんですね。これはもう確実にそうなんです。

佐道　そういう大変なものは、ある程度経験のある方でないと、ということになったわけでしょうね。

宝珠山　それは、調達実施本部全体で二兆ぐらいの契約をする中でも、六千億ぐらいの契約ですからね。初めての契約で過去の例がない。あれが第二次契約であれば、過去の例に従ってやればいいわけですけれども、第一次契約ですから大変だということで、組織全体の中でも大プロジェクトであったわけですけれども。

佐道　装備局の場合には、局長は基本的に通産からの指定席ということになりますね。課長とか各課の中の部員にも、かなり通産の方はいらっしゃっていたわけですか。

宝珠山　管理課と航空機課に一人ずつ来ておりましたね。そういうのを教育する役割も私どもは負うわけです。だから、上のほうは全部そうですね。これ（「防衛庁航空機関係の概要」）は、局長等教育用でもありますよ。

佐道　しっかり読んで……。

宝珠山　しっかり読んでというか、このことを頭に入れといて対応してもらうよりしようがないですから。

伊藤　国会に出たときに、質問があるわけですからね。

宝珠山　この通り、質問が来るわけでもありませんがーー。

伊藤　僕はてっきり、これはこういうことを予想して上が配置したかなと思ったんですけど。

宝珠山　それは分かりませんけれども。

伊藤　必ずしもそういうお話ではなかったんですか。

宝珠山　（防衛庁に）入っていちばんきつい時期でしたね、この時期というのは外との戦いで。しかし、勉強にはなりました。

伊藤　外と戦うというのは、どういう意味ですか。

宝珠山　国会です。

伊藤　解除されるまでの間？

宝珠山　そうですね。それと、企業とのやりとりです。

佐道　企業から、突き上げられて。

宝珠山　とにかく押さえ込まなければいけませんからね。

佐道　先生は七月に航空機課に移られるわけですね。七月に移られて、それから間もなく田中内閣ができる。先ほどおっしゃったように、田中内閣はできたけれども最初は日中のことばっかりで。

宝珠山　そうですね。

佐道　四次防の主要項目策定なんていうところは、まだ全然見えないわけですよね。そうすると、いつになったら凍結解除できるのかと。まったく先が見えないという状況で民間の産業の方と調整するのは、相当しんどかったんじゃないですか。

宝珠山　だから、逆に発想して、「何故早く凍結を解除しなければならないか」という説明をやっているんですね。それは、自民党の先生方にお願いをしたということになりますね。

伊藤　質問をしてもらうわけね。

宝珠山　振り付ける面もありますけど、「高くなりますよ。契約できなくなるかもしれませんよ」というようなことをやったりはしているんです。説明も合理的でなければいけませんから、ということはございますけどね。

伊藤　しかし、自民党の先生に行った時に、宝珠山さん自身がそれをやるんですか。

宝珠山　まだ当時はやってないですね。ついて行ったことはありますけれども、これは課長か先任部員以上の筆頭部員という、だいたい課長と筆頭部員が国会の窓口なんですね。私どもは、この時はヒラですから。

伊藤　この時は、ヒラですか。

宝珠山　はい、まだヒラですよ。

伊藤　航空機課の課長補佐？

宝珠山　まだ課長補佐です。

伊藤　課長補佐の上に、先任部員がいるわけですか。

宝珠山　部員というのは、課長補佐なんです。

伊藤　でしょう？

宝珠山　だから、その中でヒラ部員と、先任部員・筆頭部員がいて、筆頭課長補佐がいるということなんです。外務省などでは主席事務官と言っていますか、それと同じなんですかね。

佐道　課長補佐という言葉の持っている意味が、他の役所とちょっと違う感じですね。

宝珠山　かもしれません。しかし、この前申しあげたかと思いますが、部員というのが独立した性格をかなり持ったものではありますけれども、対国会という面では防衛庁の中では先任部員の仕事〔担当〕として、その他の部員を束ねているわけですね。で、局長が答弁する時に詰まるようなことがあると、先任部員が行ってうまくやらなきゃいけないわけです。素人の局長が来れば来るほど大変なんです。

佐道　そうですよね。

宝珠山　応用動作が効きませんからね。これだけ覚えていればいいかというと、そうはいかないんですよ（笑）。相手のほうが達者ですからね。いや、国会議員十年、十五年というと、私どもよりもはるかに長く防衛に携わっている人がいるわけですよ。それもまた威張っているわけですから……だんだん偉くなっちゃって、自民党の国対などについてもきっと、たとえば金丸（信）さんなどとつるんでやっていますから、やりにくかったですよ。

佐道　野党のほうでも、国会で爆弾質問をやったり、防衛問題を得意にしていらっしゃるような先生方もいらっしゃれば、自民党の中でも国防族といわれる方々がいらっしゃって、とくに防衛産業のことは自民党の先生たちは一応大事に考えながら、いろいろなことをおやりになる。課長や先任部員の方も、そういうことを勘案しながら「こういう問題だったら、この先生にとくに」と、作戦を立てていかれると？

宝珠山　それはありますけど、先生方というのは当時はそれほど力にはならなかったですね。機種選定の時とかに献金を受けたとかいうことで叩かれたりしますと、みんな嫌なんですね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　最近は、そのために質問して利害何とかで捕まったりしていますけれども、ＦＸ戦争などの経験があってか、直接利害が絡むようになると、なかなか皆さん、動けないですねえ。

伊藤　そうでしょうね。

宝珠山　おそらく凍結解除などで効果があったとのは、表に出ない人たちの力が大きいんじゃないかと私は思っています。それは後年、刑事沙汰になったりする日商岩井の某部長というような人たちの働きがあるんじゃないでしょうか。それが表に出ないでうまくいったということもあるでしょうし、よその国から表にされてどうにもならなかったというのもあるんだと思いますが。

■「ＴＣＲ」を担当

伊藤　（「ＴＣＲ関係国会想定問答及び資料集」は）四十七年十二月につくっているということは、解除になってからつくったわけじゃないんでしょう？

宝珠山　これは印刷した時（の日付）ですからその前の、この中にずっと日付を書いたりしています。四十七年三月のもありますし、それらを集大成というか、まとめたもの。十月のもありますし、全部かどうかは別にして日付が入っています。

伊藤　これは、宝珠山さんが航空機課に行かれてから？

宝珠山　つくったものですね。

伊藤　つくったんですか。

宝珠山　それはそうです。三月のもありますから、全部じゃない

かもしれませんけれども。

伊藤　まとめようといった時？

宝珠山　ＴＣＲともに私の担当なんです、航空自衛隊の、前に申しあげなかったかもしれません、私は航空自衛隊担当になったんですよ。

伊藤　どこでですか。

宝珠山　航空機課で。海上自衛隊担当と、陸上自衛隊担当と、研究開発担当がいるんですが、私は航空自衛隊担当になったわけです。だから、全部来ちゃったんです。

佐道　面倒なものが、みんな来たわけですね。

宝珠山　当時、騒動になっているのは全部来たんです。もちろん、皆さん支えてくれますよ。しかし、窓口は来ちゃったんですね。

佐道　先生は防衛課で、最初、計画官室に入られていろいろやられた時は陸上の担当、人事のときには海上自衛隊で、今度は航空自衛隊。陸・海・空まんべんなくずっとされていたわけですね。

宝珠山　それと、計画官の時には研究開発を担当していますからね。それから統幕ということがありましたので、一通り回ってバランスはいいんですよ。

佐道　そういう方も珍しいんじゃないでしょうか。

宝珠山　結果的にそうですね。だから、陸だけに偏る人だっているんです。そうすると、反発があるんです。「あいつ、俺のところに冷たい」とかね。冷たいわけじゃないんだけれども、やっぱり理解力が違うんです。同じ時間、会話をしても。その点では、航空機課で航空自衛隊担当ということになりますと、だいたい全部担当なんです。主力装備ですから。航空自衛隊というのは、だいたい航空機とミサイルですから。ミサイル〔担当の組織〕が室でありますけれども、航空機にはミサイルを積んでいますし。

佐道　航空自衛隊そのものという感じですね。

宝珠山　そうなんです。その点もありますし、海上も航空機がかなりありますから、航空機課というのは先ほど申しあげたように、防衛庁の中ではいいポストなんですね。悪い時もありますよ。苦労する時もありますけれども、逆に苦労することによって学ぶものも多いということがありますね。

佐道　先生のポストですと、局議とかありますね。

宝珠山　局議には、〔この種の問題では〕メインで出ます。通常、課長では捌ききれませんので、とくにこんな問題になりますと技術的になりますし。支えてはくれますけれども。

佐道　しかし局議も、局長は通産から来られて、どっちかというとまだよく分からない方が来られる。そうすると、先生とか防衛庁の生え抜きの方が中心にいろいろなことを回していかざるを得ないと。

宝珠山　だから、議であるよりも説明ですね。形式は違いますよ。実態は「これでよろしいでしょうか」ということなんですが、聞いて、理解をして、対応に備えるという部分ですね。前にも申しあげたと思いますけれども、家庭教師業ということになるんですね。今は、それがだんだんなくなってきつつあると思いますけれども。

佐道　そうですか。

宝珠山　まあ、生え抜きが主になってきましたからね。

佐道　航空機課も、それぞれの機種にぶらさがっている企業があるわけですね。これは重工、これは川崎とか、いろんな形で、それぞれの企業と個別に対応していろいろやっているということですか。

宝珠山　それは、いろいろありますね。向こうが接近してくるし、下請けが直接来ることもありますね。

伊藤　そうですか、上を飛び越して？

宝珠山　まあ、愚痴を訴えたいんでしょう。

伊藤　そういう意味でね。

佐道　経団連の中に、防衛生産委員会というのがございますね。あれは、どういう立場になるわけでしょうか。

宝珠山　一つは、献金窓口なんでしょうね。

伊藤　政治資金のですか。

宝珠山　はい、割り振りですね。あとは、こういう〔凍結などの問題がある〕時に意見をまとめて要望を出すというのはやっていますね。

佐道　意見書の類を出したりとかしていますよね。

宝珠山　各次防の時、三次防とかいうのができそうだという時に向けて、企業の要望を出すというようなことはやっております。

伊藤　どこに出すんですか。

宝珠山　防衛庁とか、当時の通産です。官邸には出してないと思いますけれども。

佐道　防衛生産委員会の人が、直接防衛庁といろいろ対応するとか、あるいは接触するということはあるわけですか。

宝珠山　直接というのは、そういうのを出す時に持って来るというようなことはあると思いますけれども、代表してというのはまずないと思いますね。それほど個別企業の状況を掌握しているわけじゃないんですよ。

伊藤　ハッハッハ。それは業界だって、みんな競争相手ですからね。

宝珠山　そうですよ。だから、どこかの企業を代表して、たとえば三菱さんとか、川崎さんとかが代表して持ち回りで委員長をやっていますね。だから、通常どこかの企業が代表してとかいうのはないですね。しかし、たとえばＴＣＲですと、Ｒは輸入ですけれども、Ｔは三菱さん、Ｃは川重さんがメイン・コントラクターといっておりますが、プライムで下請けを各々持っていますから、Ｃについては川崎さんが、Ｔについては三菱さんが、ということで来ることはあっても、まとめて装備工業界がというのはないみたいですね。私の記憶にはありません。しかし、エアーショーはあそこが関係してますね。一年に一回ぐらいやっていますか。そんな団体じゃないでしょうか。

伊藤　でも、だいたい空中戦をやって取り合うというよりは、業界の中でうまく棲み分けているという形になっているわけでしょう。

宝珠山　まあ、その時によりますけどねえ。日本の場合には、戦闘機の技術と輸送機の技術、エンジンの技術、搭載機器――最近、搭載機器というのが非常に高くなってくるという傾向はあるわけですけれども、大きな四つの分野については、それぞれ皆さん特徴を持っているんですね。エンジンでいきますと、石川島さんには三菱も勝たないんですね。それから提携する外国の企業も、能力のある企業と提携するほうが楽ですし、それが積み上げられて来ますとなかなか対抗できないようですね。だから、この時もエンジンについて三菱が取ろうとしてずいぶん努力をしていた時期がございますけれども、やっぱり石川島さんが取るというのが多いですね。

伊藤　それは、性能というのは分かる？

宝珠山　それは、ブレード一つだってすごい技術が要るんですね。回転数にしても、この前どこか事故がありましたね。ああいうのが起こるか、起こらないかというのをテストする施設。何千時間と回さないといけないわけですね、実際に。そういう経験を持っているとか、私は分かりませんけどその中に細かい名人芸があるんだと思います。それから、カチッと留めればいいというわけではなくて、少し緩みがなければいけない。何故、緩みがなければいけないかというと、熱で膨張する。その状況に柔軟に対応できなきゃいけないらしいんですね。そういうのがあるということですか。そういう技術を持っているのは、こういう企業だとなる。戦闘機ですとどうしても三菱重工さんに行く、大型機の輸送機になると川崎さんに行くというのが、だいたい出来てしまうんですね。

伊藤　どこどこに行くといっても、今度はその中のまた部品、部品はそれぞれ？

■東京螺子事件

宝珠山　今度は、そこが下請けを全部持っているんですね。たとえば、航空機のリベットというか留め金もすごい技術らしいんですよ。それは、そこら辺りにある町工場の小さいところでやっているらしいんです。私がここにいる時に、東京螺子（らし）事件というのがありまして、工数を誤魔化したんです。たくさん人を使ったように見せたということですね。最近、ずいぶん出ましたでしょう。日本電気も、日本飛行機でしたか、名前はちょっと忘れましたけど、ついこのあいだ大騒ぎした。

佐道　調達実施本部の。

宝珠山　ええ。あれに似たことが、私がいた時あったんです。

伊藤　それは、受けたところの下請けのまた下請けかもしれませんしね。

宝珠山　そうです。下請けかもしれませんけれども、やっちゃったんですね。三菱の下請けでやっていたかと思うんですけれども、やっぱり内部分裂で投書からなんです。それもひとつの産業の中を見る、非常に有効な材料になりました。この会社は処分されて潰れましたよ、結果的に。小さい会社ですから、それはかなりの金額だったと思いますが、お気の毒なことをしましたけどね。それがこの前、再発しているんですね。一般化していたんでしょうか。あるいは、そういう契約方式に追い込んでいたのかもしれませんけれども。

伊藤　そうですね、逆の面も考えてみないといけないですね。

宝珠山　あるのだと思いますが。

伊藤　非常に安く買い叩いたら、何か工夫しますね、それは。

宝珠山　そうです。やっぱり生きていかなければいけませんのでね。これ（「防衛庁航空機関係の概要」）には、東京螺子の問題は入っていませんけれども、ございました。もう今、東京螺子というのはございません。どこに行ったかな、ミネベアに売られたのかな。

伊藤　技術を持っているわけですからですね。

宝珠山　そうそう、技術があるからです。話が飛びますけれども、この前の調本事件のときに私、検察庁に呼ばれた時にその話をしました。「私がここにいた何十年か前に、同じようなことがありました」といって、お話をしましたね。

佐道　防衛装備の調達ということに関しては、どうしてもそういうことも生じやすい構造的なみたいなものが？

宝珠山　あるんだと思いますけどね。

伊藤　別に航空機じゃなくたってあるでしょうからね、何の調達だって。

宝珠山　そうです、その通りですね。それから、原価計算方式とか何とかいって、この中には入っておりますけれども、一長一短がひとつあるんだと思いますが。

伊藤　非常に特異な分野になればなるほど、いったい幾らなのかというのは難しいでしょう。値段の決定というのは。

宝珠山　難しいですね。原価計算の戸の立てかたが非常に、防衛庁向けの航空機ということで間仕切りをすることを要請するわけですけれども、他の民需品もやっているわけですからね。その戸を立てるについて議論をし始めるときりがない。きりがないけれども、官側――今はどうか知りませんけれども、今までの官庁契約というのは官が強いんですよね。めちゃくちゃ強いんですね。そうすると、のんじゃう。のんじゃうけれども、絶対戸は合わないから、隣の壁から来たことにしてとかいうような操作をするというのはあるんだと思います。しかし、トータルとしてその会社

はそんなに儲けてなきゃ、おかしな話じゃないんですけれども。しかし、「契約条項には違反じゃないか」ということを言われると、この前の事件なんだと思いますが。

伊藤　われわれの世界だって、科学研究費の使いかたとか、みんなむちゃなことをいろいろやっていますから（笑）。

宝珠山　そんなに奇麗事ばっかりではいかないんですよね。「じゃあ、もう一括契約でオープンにやってください」というなら、それまた受けられると思うんですが、それもやらないわけですね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　そこのところが、官庁契約のずるさですよ。いいとこだけ取るんです。また後日、お話しすることがあると思いますけれども、非常にひどい契約条項もあるんです。

■装備局航空機課

伊藤　航空機課というのは、どのぐらいの人数を抱えているところですか。

宝珠山　陸・海・空・先任……七人か八人ですね。

伊藤　そんなものですか。

宝珠山　はい、そのぐらいです。それからミサイル関係が三人ぐらいですから、せいぜい十人です。

伊藤　それ、ノンキャリの人も入れてですか。

宝珠山　それはそうです。タイプをするとか手伝いを含めて。

伊藤　へえ、そういう人を含めてなんですか。

宝珠山　ただ、このタイプ（「ＴＣＲ関係国会想定問答及び資料集」）は……。

伊藤　外に出したんじゃないですか。

宝珠山　外注しています。印刷隊がありますので、出しています。

伊藤　こういう形のものは、だいたい白表紙といわれるものですか。そうではない？　外には出さない？

宝珠山　これは出せませんね。「取扱注意」というのは、これで答えてはいかんというわけではないけれども、このまま出してはいけないということです。

伊藤　「秘」ではない？

宝珠山　「秘」ではないです。だから、処分はされないですね、今は。しかし、この当時出していたら、然るべく処分は受けるでしょう。

伊藤　もう何十年もたっているけれども。

宝珠山　だから、この当時そのまま出したら。「取扱注意」ですから。私の署名があったりすると、なおさら（笑）。すぐ分かっちゃいますから。それでなくても番号を振っていますから、誰に行ったかというのはこれ（番号）で分かるんです。

伊藤　これで国会で、こうやって（振り上げる）やられたら（笑）。

宝珠山　これ（そのものではありませんが、）新聞記者に盗まれちゃって、『朝日ジャーナル』とかいうのに出たことがあるんです。これじゃないですよ。

伊藤　こういった類のものですね。

宝珠山　ええ、想定問答がそのまま出ちゃった。その応答の想定を書いたことがあるんですよ（笑）。また後日、持ってくるかもしれませんけど。犯人も知っているんですよ。

佐道　記者ですか。

宝珠山　うん。どこでか、課は分かりませんけどね。これは署名記事でしょう。

佐道　記者も、確かにこういうのを狙っているでしょうしね。

宝珠山　そういうのがあるのは知っていますからね。

伊藤　記者の連中は、席まで来られるんでしょう？

宝珠山　来ますけど、こんなものは置いてないですよ（笑）。い

や、それをやった、無理矢理見ようとする人は捕まえますよ。ある時、席上に置いてあるのを無理に開けて取材した人がいて、夏目（晴雄）防衛課長が怒ったことがあります。「おれにも考えがある」といって、遂に記事にはしなかったですけどね。

■装備品の契約方法

伊藤　そうすると、個別企業といってもとくに川重と三菱ですか、川崎航空機？

宝珠山　いや、この中に入っていますけどね。

伊藤　他にも？

宝珠山　ずいぶんあります。

伊藤　いやいや、下請けではなくて。

宝珠山　下請けでなくても、今度は……。いま申しあげたＴＣＲなどはメインのコントラクターがいるわけですけれども、だんだん実績が出てまいりますと脚だけを注文するとか、そういうのが出てきますと、これはこのメインになるんです。

伊藤　あ、そうですか。

宝珠山　原価がだんだん実績で分かってきますね。初めての契約の時は、分かりませんよ。だから、トータルで幾らという契約をせざるを得ないんですね。エンジンは別とか、搭載機器は別とか、分けられるものは別ですけれども。しかし、だんだんそういう契約が続いていきますと、たとえば三菱重工が、住友精密製の航空機の脚が非常に優れているのでここに注文するわけですが、ある時期から「幾らで買ってあるのか」というのが分かるわけですね。三菱重工はたとえば住友精密から百円で買って、それにマージンを乗せて防衛庁に請求してくるわけですね。

　それが分かってくれれば、今度は防衛庁は住友精密から直接買えばいいですね。そうすれば、たとえば十円安くなる。そういうことをやり始めるんですね。これを、航空機トータルとしての時にはやらないとしても、補用部品といいますか、取り替えるための部品を買う場合がありますから直接契約が出てくる。

伊藤　ははあ。

宝珠山　金額的には小さいけれども出てくるのが、結構、何社もありますよ。

伊藤　そうですか。航空機の脚ですね。

宝珠山　航空機の脚は、大変なんですよ。あれはぶつける重量を全部支えるわけですからね。

伊藤・佐道　そうですね。

宝珠山　あれがもし、どこか折れるとか、あるいはタイヤでもいいですがパンクしたら、もうアウトですね。

佐道　猛烈なスピードで降りてくるわけですからね。

宝珠山　そうです。ぶつけるのに耐えなきゃいけないんです。耐えるためのシステムが入っているようです。

伊藤　これも、すごい技術なんですね。

宝珠山　そうなんです。ですから三菱重工さんはおそらく、自分でつくれないかどうか知りませんけれども、つくってないはずです。

伊藤　そこまで全部つくっていたら、大変じゃないですかね。

宝珠山　その通りだと思います。そういうことで、下請けの企業というのはたくさんありますので、ちょっと数えきれません。

伊藤　そうですか。これは、航空機の種類から始まって、エンジンの機能まで全部書いてある。

宝珠山　下請けも入っているはずです。下請けというか、メインの下請けまで入っているはずですよ。

伊藤　すごいな。三菱、川崎、石川島播磨、富士重工……富士重工もあるんですね。

宝珠山　はい、富士重工は練習機をやっておりますね。

伊藤　あと、日本飛行機というのは？

宝珠山　ここは、修理が得意ですね。これを学んだのは、ベトナム戦争の時に米軍が日本に持ってきて、修理を委託したんですね。ここは、修理はすごい技術を持っているはずです。だから、米軍の戦場における整備に近いものをやっているんです。弾で穴が開きますね。それを全部ふせちゃうんです。

伊藤　へえ。

佐道　なるほど、そういう修理？

宝珠山　ええ。もちろん、通常の修理はマニュアルによればいいですよ。

伊藤　通常の修理は、航空自衛隊の中でやるでしょう？

宝珠山　いや、航空自衛隊の中で出来るのは、簡単な整備までです。そんな修理能力は持っておりませんから。一定の飛行時間がたちますと、アイランとかいって工場に全部入れて。

伊藤　ほとんど分解するような形でやるんですか。

宝珠山　そうです。その種の修理は、原則としてつくったところに行きます。輸入したものは、修理について製造元とライセンス契約を結んで修理技術を取得します。だから、このRなどは米軍のがありましたから、おそらくどこか取ったんじゃないですかね。三菱が取ったのかなあ。

伊藤　そういう技術は、向こうから買うわけですか。

宝珠山　そうそう、修理技術を買わなきゃしようがないです。ライセンス生産するか、あるいは輸入しますとどこかに修理してもらわなければいけませんから。もちろん、アメリカに持って行ってもいいですよ。しかし、そんなこと不効率ですでからね。その修理系列の選定も装備局の仕事なんです。どこに修理を……たとえば、RF-4Eを輸入したらどこに修理してもらうかと。今、輸入してすぐの発注じゃありませんけど、系列は決めなければいけないですね。あのとき、日本飛行機と三菱重工が争っていたのは記憶していますが、どっちにしたかは覚えていません。

伊藤　あと、新明和というのがありますね。

宝珠山　新明和は、海上自衛隊の……

佐道　飛行艇？

宝珠山　PS-1。

伊藤　飛行艇ですか。

宝珠山　はい。昔の何かですね。

伊藤　売れるかもしれないといって、つくったところだな。

佐道　そうです。性能はいいんですよね。

宝珠山　そうですね、東南アジアの中のインドネシアのような島々の多いところは非常に使いでがあるはずなんですが、なにせ年間一機か二機ぐらいしかつくっていませんから、手工業なんですよね（笑）。

佐道　職人がつくっているみたいな感じですね。

宝珠山　そうならざるを得ないんですね。だから、高い面が難点です。

伊藤　飛行機の主翼、尾翼、胴体だって、それぞれ分担してつくったりするんでしょう？

宝珠山　分担しているんです。日本の場合、とくにそうなっているんですね。しかし、今はもう一般化しました。いま飛んでいる民間機でも、側のほうは日本でつくっていて、内部のほうはどこかほかがやっていますでしょう。

佐道　各企業があって対応能力があるとすれば、防衛生産というのはたとえば売れるから車をたくさんつくるというものではありませんから、従業員とか、つくるためのレーンとか遊ばせておくわけにいかないからということで、いろいろ割り振ったりということも考慮するわけですか。

宝珠山　生産分担を決めますね。それから、「既にあるのを使えるから、安くいけます」というのも、企業の受注努力の一つですね。

伊藤　汎用品を使えるものはあるんですか。

宝珠山　汎用品というか、ＴＣＲについて言いますと、同系列のＦ-４Ｅという生産は進んでいるわけですね。それから、もうひとつ前のＦ-８６Ｆなどの生産の経験がありますから、こういうラインが残って、これを使えますと。要するに、償却済みに近い設備を持っているのが三菱重工の強さですね、戦闘機については。

佐道　ちょっといじくれば、すぐ対応できますよと。

宝珠山　そう説明すればいいんですね（笑）。それは、説得力はありますでしょう。だって実績として経験があるわけですから、それを別のところ〔企業〕に持って行くと……。

伊藤　初めから生産ラインをつくらなきゃならないということですね。

宝珠山　そうです。その生産ラインの作り方から学ばなきゃいけなくなるわけですね。

伊藤　その生産ラインは、もう終わったやつは償却と同じなわけですね。

宝珠山　それは、償却します。

伊藤　償却でしょうけれども、つまりただになる？

宝珠山　防衛庁は全部買い取るわけですから。

伊藤　買い取るんですか。

宝珠山　買い取るというか、その時までに全部金を払っているわけですから。

伊藤　払ったからといって、別段引き取るわけじゃないんでしょう？

宝珠山　引き取るわけではないですけれども、取る時にどうするかというと、償却額をさっ引いたものしか払わないんです。だから、廃品として売却する額はさっ引きまして、あとは防衛庁が支払うんです。

伊藤　だから結局、物としては残るわけですね。

宝珠山　物として残りますね、その契約だけについていえば。

伊藤　後につながらないのだったら、本当に邪魔者。

宝珠山　邪魔者というか、処分するだけの金は払っていますから。

伊藤　まあ、それはそうですけどね（笑）。

佐道　損はしないわけですか。

宝珠山　損しないようにしてあります。しかし、それは最終の結果、その契約についてあるわけですけれども、いま新たな契約が進行中に発生するわけですね、ＴＣＲと。その時に、「いや、このラインはこういう形に変えて使えます」といえば、生きてくる部分があるわけです。全部じゃなくていいですよ。

伊藤　途中、いろいろ変えますと。

宝珠山　はい、それは配置を変えるかもしれませんけどね。

佐道　「新たな生産ラインをつくるのであれば、これだけの費用がかかって、その分、製造費に上乗せしなければなりませんが、これだから安くなりましたよ」という形になるわけですね。

宝珠山　「安くできますね」ということがありますね。人間についてもそうなんです。

伊藤　技術者ですね。

宝珠山　はい。「この経験がありますから、養成費が安くつきます」というのもありますし、最後の仕上げになりますとテスト・パイロットまであるわけですね。テスト・パイロットというのは、大変なんですよ。

佐道　そうでしょうねえ。

宝珠山　いちばん危険な時に乗って、いちばん危険なこともやってみなきゃいけないんですからね。だいたい戦闘機パイロットを終わった優秀な人を採用していますけどね。

伊藤　そうですか。

宝珠山　はい。テスト・パイロット向きの人もいるらしいんです。

佐道　そういうのは、あんまり長いことやれないでしょうね。

宝珠山　でしょうねえ。でも、誰かやってもらわなきゃいかんですから。それは、常にあるんです。飛行機を修理しますね。修理

したら、きれいに出来ているかというのを駐在の検査官はマニュアルに従って全部チェックしますよ。しかし、最終的には飛んでみせてもらわないと困るんですね（笑）。

佐道　マニュアルで見たらいいようだけど、飛んだらおかしかったというのは困りますものね。

宝珠山　だから、飛行テストまでやってみせるんです。飛行テストも単に飛んで、上がって降りてくるだけではだめなんで、いろいろな機器のテストをやって、テスト機材を積んでやるわけですね。全部記録を持って帰るというところまでやるんです。そういうのもありますし、輸送機のテスト・パイロットと戦闘機のテスト・パイロットを一緒にはできないです。

伊藤　できないんですか。

宝珠山　できません、全然飛行パターンが違いますから。そうすると、どうしても得意分野ができちゃいますね。

佐道　たとえば、何年度にF-15を二十機の導入ということであれば、二十機全部について一機、一機にテストをやるわけですね。

宝珠山　それはもう一機ごとです。新規のものについてのテストですね。それから二年ごとぐらいになるんですか、一定飛行時間飛びますとオーバーホールしますね。それも、おそらく数ヵ月かかると思いますが、終わったところでテストしてということになります。企業は、それだけのものを常に抱えているわけですよ。それを何年計画ぐらいでずっと組み上げて、なるべくロスが少なくなるように受注活動をやるというのが望ましいわけですから、F-15Jの時もどうでしたかね、何十機とかまとめて契約することを予定するわけです。百機ですか。「百機を一応買うことにします」ということでつくった専用ですかね、生産ラインにかかる自工具とかいっていますけれども、そういうのは百機に全部割り掛けることにするわけですね。

佐道　一度つくったそういうものは、「今この注文がないから、別のものをここでつくってる」というわけにはいきませんよね、防衛生産の場合には。

宝珠山　そういうのがあれば、それは汎用品のほうで見ますから、「使いかたによって払います」ということになるんですね。

伊藤　使えるものだってあるでしょう。

宝珠山　使えるものは、まあないでしょうけれども、あればそれは、たとえばT-2専用の自工具じゃないんです。別のところにある汎用品の中からですから、そこでのコストをカウントする形になりますね。これ、原理的ですよ。考え方としては、そうせざるを得ないです。

佐道　だから、こういう先が見えない凍結みたいなことがあると、もう……。

宝珠山　その通りです。ですから、この中（「TCR関係国会想定問答及び資料集」）でそういう事情を一所懸命訴えるわけですがね。

■直接関わらなかった第一回『防衛白書』

伊藤　時間になりました。航空機課の部員、課長補佐をされた時期のお話になったわけですが、残っているのは『防衛白書』の問題と、三島事件……。

宝珠山　『防衛白書』は、中曽根さんがおいでになって、命じられて。

伊藤　これは、一回出したやつだったっけ。

佐道　そうです。このときポンと出て、しばらくまた出なかったんですね。

宝珠山　そうです。そういうわけですが、チームを組んでやりましたけれども、出てきたのは国会答弁の要録みたいなものでした。あんまり反響がなかったと思います。私もよく読んでいませんね。

伊藤　関わっているんですか。

宝珠山　いや、私は関わっていません。

伊藤　全然書いてない？

宝珠山　はい、それは書いていません。

佐道　先生は、その後に坂田さんの時からずっと毎年出る、その後のことには関わられるわけですね、ある段階から。

宝珠山　だから、そういうのを出すということの意味については論議していますけれども、『防衛白書』自体を書いたことはありません。書いたほうがいいかもしれませんけれども、『防衛白書』は中学卒業生が読んでも分かるようにというご注文ですから、僕みたいな詳しい人が書いたのでは分からないと、こういう断りかたです（笑）。

伊藤　そうですか、そういう断りかたがあるんだ（笑）。

佐道　プロしか読めないという。

宝珠山　だから、『防衛白書』を担当した人は、防衛局経験があまりない人とか、他省庁から来た人が担当していますよ。

伊藤　もちろん、チェックするでしょうけどね。

宝珠山　それはそうです。チェックはしますし、原稿は出させますけどね。それから、自分で書くという、そういう時期にもなかったんですが、そんな冗談をいいながら。

佐道　じゃ、最初の白書についてはあまり庁内でも話題にならなかったということですか。

宝珠山　記憶がないですねえ。薄っぺらな、当時としてもあまり見栄えのしない、私のところにどこかにあったと思うんですけど、見当たらないんですけどね。おそらく、誰か「貸せ」といって、新聞記者か何かに貸して返してくれないんじゃないかと思う。私は、一冊だけ保存してはいたんですが、読んでいません。

■三島事件

伊藤　次の三島事件はどうですか。

宝珠山　これは私、人事一課にいる時に伊藤圭一さんが課長でおられて、部屋から出てきて、「おれは、友達なんだよ」とか言っていたのは覚えていますけどねえ。

伊藤　そうですよ。伊藤さんは、ずいぶんいろいろ話してくださいました。

宝珠山　私はほとんど関係ありません。

伊藤　この事件の時は、驚かれたでしょう。

宝珠山　それは驚きますよね。児玉さんが陸の担当をされておりましたから、人事の関係ですぐ行ったのかな。それも定かではありません。海の担当は、まず関係ないですから（笑）。

佐道　あれで、陸幕の人事が少し変わったということですね。

宝珠山　その辺りが関係はあるんだと思いますが、しかし事件当時どうこうとかいうのはありませんし、楯の会の関係も海はあんまりないんですよねえ。

伊藤　しかし、およそ予想できなかったことが起こったわけですからね。

宝珠山　そうですねえ。

伊藤　予想なんかできないでしょう。

宝珠山　いや、できません。伊藤さんも予想してないでしょう（笑）。

伊藤　びっくりしましたね。

宝珠山　しかも、自分だけでやるならいいけれども、総監をねえ。

伊藤　本当ですよ。ニクソン・ショック……

■ニクソン・ショック

宝珠山　ニクソンも当時のメモを繰ってみましたけれども、何にも残ってないですね。

伊藤　こういうものだ、ということですね。

宝珠山　ええ。ニクソンの二年後ぐらいの外交演説はファイルしてありますけど、この時のは残っておりませんね。ニクソンで思い出すのは、むしろニクソン・ドクトリンで、大綱の時にチャイナカードなどとともに使ったというのはありますけど、この時にはそういう立場にもないんですが。とくに人事というのは、防衛政策絡みで少し考えるというのはあまりありませんので、見当たらない、記憶にもないんですが。

佐道　中国をどうのこうのというのは、当時の防衛庁はあまり意識しないんですか。

宝珠山　そんなことはありません。ロシア、中国はあります。ただ、中国は当時はまだ遠洋に出てくる能力は低いという見方はしておりますけれども、逆にいうとゲリラ的な間接侵略的な行動は得意とする面がありますので、要警戒であるという見方はしております。

それからもうひとつは、ソ連に対するバランサーとしての見方というのはありますけれども、そういうことを日本が主体的に工作するだけの力はない。そういう扱い方ができれば、というのはありますけれども、防衛力を整備してそういう力をつけようということではなくて、あるがままを受け入れて政策を立案しようという状況ですね。それが、『防衛計画の大綱』の時には私、いまでも覚えていますが、「おまえ、この防衛力を日本の防衛体制として十分だと説明する理由は、一言でいうと何だ」というのを、局長と課長から問い詰められたことがあるんです。「中国をバランサーとして組み入れるという決心をしていただくということです」ということを申しあげて、「分かった」と言ったかどうかは別として、それで結局、丸山（昂）局長と西廣課長も通りました。しかし、この人事一課の時ではありません。

伊藤　東アジアだけ見ても、力関係がずいぶん変わりましたからね。

宝珠山　今とはですね。しかし、当時は一枚岩か、米国のほうに寄るかというのは見極めをしたということですね、大綱の時には。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　この時には、まだ分かりませんが。

伊藤　その辺で切っておきましょう。

宝珠山　これでだいたい全部終わりますでしょう。凍結問題が起きて、空中給油が残りましたか。

伊藤　そうですけど、その他に装備局装備局長や、幹部の人たちの……。

宝珠山　これはしかし、通産省から一任期ということで来ている方々ですからね。

伊藤　やっぱりそうなんですか。

宝珠山　ええ。とにかく安全にこの職を過ごしていくということが第一で、防衛産業をどう育てるかというところまでは、なかなか回らないですよね。その点については案をつくって、そう働きかけていくよりしようがないですね。積極的にそういう意欲を持って来られる方というのは、ちょっと記憶にありません。

伊藤　そうすると防衛庁側としては、無事に勤めていただいてお帰りいただくと。

宝珠山　はい。それを傷つけるようなことがあると、こっちのほうが傷つくということじゃないかと思います。

伊藤　分かりました。

宝珠山　それから吉田さんは、労働省からお出でになって防衛庁にいついた方ですが、人事二課長をやったりして。

伊藤　あと、ずっと防衛庁ですか。

宝珠山　ずっと防衛庁で、防衛庁で卒業されました。防衛医大の副校長でお辞めになりました。航空機課長をやり、人事一課長をやり、審議官をやっています。それから、調達施設本部の副本部長、防衛医大の副校長でお辞めになったんじゃないかと思いますが。それから、労働省ですから募集系統に詳しいということがございます。もちろん、人事は当然どなたでもやれるんですが、人事二課長をやっていて募集にも詳しいというようなことがあると思います。それから、航空機課で防衛産業との関係でも非常に親密におやりになっていたように思います。その成果があって、調達実施本部の副本部長をかなり長くやられて、難しい時期を過ごされたのだと思います。

伊藤　先生ご自身は、航空機課は二年ですよね。

宝珠山　だいたい二年で動いています。

■空中給油装置問題

伊藤　その間に、空中給油機の問題が起こっているんですか。

宝珠山　そうです、空中給油機の問題が起こっています。ここまで終えておきましょう。

（赤色のノートを見る）空中給油機の問題は、今でも続いている専守防衛というものと絡んで、当時強かった社会党の上田（哲）さんが問題提起をしたようになっています。四十八年三月二十二日の参議院予算委員会で、上田哲さんが「空中給油装置の除去を要求すること」から始まっています。この考え方は、F-4という当時、非常に優れた戦闘機を、空中給油装置をつけなくてもかなりの行動半径をもっているのに、何で（空中給油装置が）残っているんだということをご質問したように思います。それに対して久保（卓也）さんが、「上空で訓練をして、帰って来て給油する必要がありますが、その時に二点給油をすると短時間に給油できるから、訓練が効率化できる」というような説明をしたようです。私、現場にいたわけではありません。

「そうか、じゃ、実験してみせろ」ということになりまして、百里基地でやったんです。そしたら、大差が出なかったんですね。「嘘じゃないか」ということになりましたようで、四十八年の四月三日には「二点給油というのは、部隊はやっていないじゃないか。それで、そういう説明をして何だ。しかも、実験というか実際にやって見せてもらったら、そんな効果ないじゃないか」ということになるんですね。それは、効果ゼロじゃありませんよ。ゼロじゃありませんけれども、久保さんが答弁したほどに優位性を説明できなかったように思います。

そういうことで、四月四日には防衛庁長官は上田さんに陳謝しているんですね。「取り外す」ということを言っちゃったんです。これは航空機課の仕事になるんですが、その間に取り外すとすると、どういうことをやる必要があるのか、取り外せるものなのか、取り外すとしたら幾らかかるのかという検討をしております。この中（「防衛庁航空機関係の概要」）には入ってないと思いますが、取り外すだけならできますけれども、穴を開けておくわけにいきませんから、ふせななきゃいけないですね。ふせるといったって、他に何もないわけですから開発しなきゃいけないですね。そんなことを議論したのを覚えています。

これは、輸入というか米国で開発された飛行機ですから、こっちには開発のノウハウはF-4について持ってないわけですね。そうではありますけれども、開発の中でどういうものに取り替えればよいかということを、三菱重工を通じて米国の協力を受けてやったようになっております。ここには、「取り外し五千万と答弁」と、メモで書いています。そんなことをやらされながら、結

局取りはずしをさせられて、四十八年六月一日には地上給油口専用に改修すると。「二点給油」と言っちゃったから、引っ込みつかなくなっちゃったんですね。「空中給油はできないけど、地上なら二点給油できるよ」ということをやらされています。

この時には、既に八十一機を発注していますから、発注分についてそういう取り替えのキットを入手してやると。新たに契約する分は、初めからそうするということ。それから、取りはずしたものを保管することにしたことは公にしていません。保管したんです。後でまたとっつけましたけどね。それにどのぐらいの時間がかかるかというと、約十二ヵ月と書いていますけれども、全部の経費は四億一千万円になると見積もりしています。

伊藤　社会党の狙いは、何だったんですかね。

宝珠山　いや、それは行きがかりですよ。うまく答弁したら問題なかったかもしれませんけどね。上田さんという方には、おそらく形式論で「言ったのは嘘じゃないか」ということで攻められたのが、いちばんつらいですよ。だから、こういうことになっちゃったんだと思うんですが、そのために……。

伊藤　「航空機に空中給油口がついていて、何故具合が悪いですか」というふうに反論してもよかった。それは、ちょっと無理だったんです。

宝珠山　だから、その時にどうしてそういうふうに（二点給油が効率的と）答弁したかというのは分かりません。私はそこにいませんし、答弁も書く立場にもいませんから。しかし、それを（空中給油は当然と）やったのがF-15の時なんです。F-15には空中給油を残しました。これ、議論してやっているわけですが、これは来週以降のお話の中で、場合によればご説明できるかもしれませんが。おっしゃるように、「日本の防衛を効率的にやるのに、付いていて何で悪いですか」ということで残したんです。で、「空中給油機を入れるつもりが今あるわけじゃないけれども、将来のことを考えれば残しておくのがいいんだ」という言い方をしたんです。

その一つの運用として例を挙げれば、ＣＡＰ（ＣＯＭＢＡＴ ＡＩＲ ＰＡＴＲＯＬ・空中警戒待機）といっていますが、空中警戒待機を将来は必要とするようになるんだという説明をしております。「F-4の時、取り外したじゃないか」というのに対しては、「いや、その時にはまだそこまで考えなくてよかったと、考えました」ということにして……、それから二十年たってようやく空中給油機を買えるところまで来たんですね。

伊藤　本当に時間がかかりますねえ。

宝珠山　いやいや、一回取り落としますとね。有事法制もそうですけれども、佐藤（栄作）さんの最初の答弁がちょっと狂ったために、ひっくり返っちゃうわけですね。「何で有事法制、当然じゃないか」と言えていたら、あんなことにはならなかったと思うんですが、「クーデターとはけしからん」と言ったために、「けしからん」だけが残っていくわけですね。実態とはかけ離れて、あるべき姿とはもっとかけ離れちゃって、不幸な防衛論議になっていくと思います。

その時も、これは四月十日になりますけれども、田中（角栄）総理は「空中給油はしない。空中給油機は持たない。空中給油機の訓練・演習もしない」と、こういう答弁をしているんですよ。ここまで譲歩しているんです。

佐道　非核三原則みたいですね。「しない、持たない……」と。

伊藤　社会党は大きな得点だったでしょうね、これは。

宝珠山　得点かどうか分かりませんけど。

伊藤　いやいや、彼らにとって得点だったと思います。

宝珠山　そうなんだと思います。しかし、国家としては大変大きなマイナスですが、ああいう人に勲章をやっていいのかと思いますよ、本当に。国会議員をやっただけでと思いますけど、勲章を

やっているんですね。

伊藤　よくまあ、勲章を貰うほうも貰うほうですね（笑）。

宝珠山　あれ、大喜びで貰いますからね。ああいうのに出さないことにすると、もう少し予算委も治まるのかもしれませんけど（笑）。

伊藤　元の社会党は、ほとんどなくなりましたから。

宝珠山　そんなことでありますが、空中給油の問題というのは専守防衛と結びついて、非常に難しい議論ではありますけれども、F-15の時になんとか……。空中給油機までは入れませんでしたけれども、その種の能力を持つことが日本の防衛にとって効率的な防衛体制を築く上で重要だ、必要なんだということまで押し戻しましたので、これはよかったと思っていますが。

佐道　この間、米軍と空中給油の訓練をしてというところにようやく。

宝珠山　そうなんですねえ。だから、専守防衛体制の見直しというか、実質的には少しずつ見直してきている。今言った、さっきのあれは専守防衛を一面で非常に狭めている田中答弁ですよね。しかし、今はそこを解除して、使いかたによっては遠くまで行けますからね。そういうことをやるとは言っていませんよ。しかし……。

伊藤　いや、やる能力があるということは、必要なことですからね。

宝珠山　その通りなんです。それをどういう理屈で認知してもらうかという作業があったわけですが、ＣＡＰということを一つの理由にし、かつ低空飛行で入ってくるような時代になったという技術進歩をかみ合わせて、当時の論客ももうリタイアしたということもあると思います。分からず屋の論客がですね。

佐道　そうですね。

伊藤　全部、リタイアしましたね。

宝珠山　そうですね。敗退でリタイアすればよかったんですが、引退リタイアだからよくないです。

伊藤　まあ、そうですね。でも、みんな大臣なんかになって成仏して（笑）。

佐道　ご本人は成仏したかもしれませんけどね。

伊藤　あと残った被害は、今ごろまた埋めなければならないということですから。

次回は六月十八日（金）午後三時半から、今度はまた防衛課にお戻りになってというところからですね。

宝珠山　そうですね。

佐道　この資料（「四次防策定の経緯等」及び「四次防問題の経過」）は、どこでおつくりになった資料でしょうか。

宝珠山　下のほうは、この中（「ＴＣＲ関係国会想定問答及び資料集」）のどっちかに入っています。ページが入っていませんか。

伊藤　入ってる、入ってる。

佐道　二五二から。

宝珠山　その前（「四次防策定の経緯等」）は、私のノートの中のものです。

伊藤　おそらく、後で航空機課に行かれてから。

佐道　四次防策定の経緯等は……。

宝珠山　それは四次防の、来月話をするかもしれない中のノートの中から取っていますので。しかし、それは……。

佐道　防衛局の中にあった防衛課の資料ですか。

宝珠山　そうですね。ポスト四次防をやる時につくらせたものです。これ（「防衛庁航空機関係の概要」及び「ＴＣＲ関係国会想定問答及び資料集」）は、お預けするつもりですけれども、こんなのでもいいですか。置いといて、（本日の発言の）校正をしてみてチェックする必要があれば、来月でもちょっと見るということにしましょう。

伊藤　ありがとうございました。

（終了）

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第５回

開催日　2004年6月18日（金）
開始時刻　15：30
終了時刻　18：15
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（中京大学 助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

第5回 インタビュー質問項目

2004年6月18日

1

今回は、先生が七四年六月に　防衛局防衛課に戻られてからのお話を中心にうかがいたいと思います。当時は田中内閣の末期（十二月に三木内閣に交代）でした。先生は異動後、どのような業務を担当されたのでしょうか。

2

防衛局長は先生の防衛局への異動とほぼ同じ時期に、官房長から転じた丸山昂氏が就任しました。丸山氏は「日米防衛協力の指針」（旧ガイドライン）を熱心に推進したことで知られています。久保氏などと比べてどのような方だというご印象ですか。

3

政局混乱の末、田中内閣は総辞職し三木内閣が成立しました。防衛庁長官には文教族の坂田道太氏が就任します。外部の有識者による「防衛を考える会」の設置や防衛白書の刊行など行いますが、坂田長官についてはどのようなご印象でしょうか。

4

坂田長官時代、久保氏の基盤的防衛力構想を基礎においた「防衛計画の大綱」策定の作業が進められます。防衛課におられて先生はこの作業にかかわられたと思いますが、具体的にはどのようにすすめられたのでしょうか。

5

七五年六月、次官が久保卓也氏に代わり、防衛課長に西廣整輝氏が就任します。久保氏は施設庁から戻られて大綱の作業にどのようにかかわられたのでしょうか。また、西廣氏の就任で大綱の作業はいっそう進展したのではないかと思いますが、当時の状況や制服組みとの調整の問題などお願いします。

6

七五年八月、米国のシュレジンジャー国防長官が来日し、三木首相、坂田長官と会談します。その結果、日米防衛首脳定期協議、有事に対応した日米作戦協力の協議機関設置で合意します。ここで、丸山防衛局長が熱心に進めたとされるガイドラインの作成が具体化していきます。先生は、この日米防衛協力の問題、つまりガイドライン作成の問題にはどのように関与されたのでしょうか。

7

七六年二月、ロッキード事件がおき、政界は大混乱します。この問題は、ＰＸＬの導入問題から久保次官の「問題発言」（ＰＸＬ国産化白紙還元は田中首相、後藤田官房副長官、相沢主計局長の決定と発言）といった事態が生じたのをはじめ防衛庁にも波及します。当時、検察から事情を聞かれた人もいたということですが、航空機課におられた先生には何か影響がありましたか。

8

七六年十月二十九日、政府は「防衛計画の大綱」を決定します。先生は雑誌『国防』で、その特徴と課題を説明しておられます。その中で、外部からの批判を紹介した上で、「基盤的防衛力構想」の持つ〝リスク〟を最小限にするような「国防システム」の整備が重要だと述べておられます。責任がいっそう重くなった「内局」の役割といった問題も含めて、先生が主張されている「国防システム」の内容についてご説明ください。

9

防衛計画の大綱に関しては、その内容とともに、別表の兵力算定の根拠などがよく問題にされます。これまでORなどによって、さまざまな事態のシミュレーションや必要な兵力の算定など行ってこられたことから別表の数字も算出されたのだと思いますが、この別表の作成状況についてお願いします。

10

防衛大綱が決定された直後の十一月五日、政府は毎年度の防衛費をGNPの一%以内と決定します。当時一%に達してはいなかったわけですが、この問題については当時どのように受け止められたのでしょうか。

※今回は以上のような問題を中心にお願いします。

■防衛局防衛課時代――ポスト四次防を担当

伊藤　やっぱりその紙（グリーン）のファイルをお使いですね。

宝珠山　昔いただいたのはこれだったんですが、A4になってから困っているんですよ。

伊藤　それでは、始めてもよろしいですか。

宝珠山　コピーにできる資料じゃないものですから、ワープロにして説明を効率的にできればということでお送りしました。

伊藤　先生は、一九七四年（昭和四十九年）六月に、防衛局防衛課に移られますが、これは結構長いんですね。

宝珠山　第二回目の防衛課は四年ぐらいになります。

伊藤　四十九年から、五十三年も経て……

宝珠山　五十三年の六月一日までだったと思いますね。

伊藤　ですから、丸々四年ですよ。ちょっと一年あいだを置いて、また防衛局ですからね。

宝珠山　四十五年四月に異動してますので、四年おいてですよ。

伊藤　これはだけど、昭和五十三年に……。

宝珠山　この履歴の書き方は、どうだったのかな。

伊藤　また、五十四年に防衛局の調査第二課長になっていますから。

宝珠山　その後ですか。後は一年数ヵ月ですね、おっしゃる通り。

伊藤　あと、ずっと防衛局ですね。人事教育局にいらっしゃるまで。

宝珠山　二年ぐらい行っていますね。

伊藤　だから、防衛局がすごく長いんですね。

宝珠山　それは、その通りですね。

伊藤　防衛局防衛課と書いてありますが、このときは課長ではなくて次席ぐらいですか。

宝珠山　まだヒラですね。次席の次席ぐらいです。

伊藤　そうですか。先生は、前からずっとそうおっしゃっていますが。

宝珠山　先任補佐になりますのが大綱を終わってからですから、だいぶまだ後です。

伊藤　次席の次ぐらいですか。

宝珠山　防衛課が当時、課長がいまして、先任部員というのがいまして、それが児玉（良雄）さんだったんです。その次に私がいました。だから、三番目ですか。途中で児玉さんが抜けまして私が入るという形で、トータル四年になるわけです。次席の次席で二年、先任で約二年という感じですね、おおまかには。

伊藤　分かりました。それで、いちばん最初に担当された業務のことですが。

宝珠山　そうですね、なかなか一言では難しいんですが。

伊藤　課の中に、また何かあるんですか。

宝珠山　課の中には、部員がずっと並んでいますね。その部員を大きく分けて、年度担当と長期担当が当時はいました。私は、次席の次席で長期を担当するというのがメインになりますが、当初まいりました時には確か六月だったと思いますが、年度計画、予算要求を担当しろということで、まずそちらを手伝いました。

伊藤　最初の一年は、それをおやりになった？

宝珠山　いやいや、最初の三ヵ月ぐらいです。六月から九月までですから、概算要求をやるまでぐらい。そのときの状況というのは……

伊藤　それは五十年度の予算案の、予算編成ですね。

宝珠山　そうですね、お手元に差しあげていると思いますが（三次防、四次防、ポスト四次防の日程を比較をした横長の資料）、Pというのはポスト四次防のことをいっております。三次防、四次防、ポスト四次防を比較しまして、私はここ（四十九年六月一日）に着任するわけです。三次防、四次防ではもう既に作業が始まっている時期なんですね。したがって、焦りがある時期なんで

す。そのところに放り込まれることになるわけです。

周辺状況でいきますと、この前お話ししましたように四次防が大変不幸な出生をするわけですが、それと田中（角栄）さんがなられてからも日中国交正常化というようなことで、これも防衛にとっては逆風なんですね。そういう中で、四次防の不幸な出生に伴う庁内における逆風の受け止め方も非常に厳しいものがあって、どうするか不明な時期に私は入り込んだわけです。先々というか、やがて長期の担当ということはありますが、とりあえず年度を……。

伊藤　初めからいわれているわけですか。そうじゃなくて？

宝珠山　いや、それがはっきりしてないんです。よく覚えてないんですが、私のノートにはその辺りの記録がありません。九月になって初めて、長期の関連の仕事を始めた記録が残っております。はっきり覚えていますのは、ここ（六月）では五十年度の年度計画が進んでいますので、「おまえ、それをやれ」ということで、そこに入っております。

伊藤　四次防の最後？

宝珠山　四次防の五十年度の未達成などが見込まれる中で、どうするかということがあるわけです。その作業をやらされておりまして、八月から九月頃まで――八月三十一日に概算要求をやり、九月初め、大蔵省、行政管理庁と各省庁に説明するわけですが、それまでやっております。

その頃、「おまえ、長期の総括をやれ」といわれております。久保（卓也）さんが局長で、夏目（晴雄）課長なわけですね。そのときに貰ったかどうか分かりませんが、K・B論文といわれるもの――佐道さんがお詳しいかもしれませんが、この中（グリーンのファイル）には入っております。久保さんの追悼集の中にも同じようなものが入っていると思いますが、それほど分厚なものではありません。これを読めということなのかもしれませんが渡されました。

伊藤　それは、タイプで打ったものですか。

宝珠山　打ったものです。タイトルも何も書いてないんですよ。（ファイルを見ながら）だんだん記憶が曖昧になりまして、これは私がつけたタイトルです。当時あった全然関係ない表紙をつけています（笑）。「防衛庁まとめ」といいますか、日程表か何かのものをつけて綴じ込んでいますが、四十ページほどですね。防衛論とかいろいろ書いてあります。

伊藤　K・Bというのは、どこに書いてあるわけですか。

宝珠山　これは、通称「K・B」なんです。

伊藤　もともとの文章には、K・Bはないんですか。

宝珠山　ありません、俗称でしょうね。「取扱注意」というのは入っています。だから、ごく一部の人に配られたということだと思います。

ですから流れでいきますと、久保さんはやがて防衛局から出るということは理解しているわけですね。しかし、長期計画についていろいろの思いがあって、それを遺書ではありませんけれども引き継ぎに書いたものと思われます。しかし、きれいにタイプはされております。局長が書かれたのですから、タイプをするのはあたりまえですけど。「それを読め」といわれたのが、その時であるかどうか分かりませんけれども……。

伊藤　その前後なんですね。

宝珠山　着任して、長期の担当に変わるどこかなんですね。久保さんが六月に代わられていますから、その時に原稿ができていて既に打ったのか、既にあったのか、その辺りは私は定かではありませんが、着任してから九月までの間のどこかで受け取っていることだけは確かです。その趣旨は、「長期をやるについては、このことを忘れてはいかんよ」でしょう。

伊藤　誰に渡されたんですか。

宝珠山　夏目さんからだと思います。その時はもう夏目さんしか、直接上はいませんから。児玉さんはもちろんいますけれども、これは長期の担当と並列ですから、もう児玉さんを通すことはありません。夏目さんから直接来ます。

伊藤　夏目さんですか。

宝珠山　ということで、この表はもっとずっと長いんです。長いんですが、ポスト四次防という名前さえまだできてないんですが、「どうしようか」ということもまったく不明で、かなり……。

伊藤　仮に、「五次防」とも言わなかったわけですか。

宝珠山　私は、そう付けています。後ほど出てきますけれども、「第五次防の計画」という、これがそうです（別添1「第五次防衛力整備五個年計画（仮称）作成日程（案）」）。話が飛び飛びになりますけれども、左の四十九年九月のところをご覧いただくと分かりますが、「おまえ、長期をやれ」といわれて、じゃどんな作業日程でやるかということが当然、問題というか課題になるわけですが、これは遅れていることを踏まえながらつくったものと思われます。

伊藤先生のご質問でいくと、いちばん上に書いてあります原案は、「第五次防衛力整備五個年計画（仮称）作成日程（案）」と書いています。その後で、原本は赤字なんですが、（「五次防」を）「四次防」としまして、「仮称」のところを「後の」と変えてあります。ここで、「五次防」といわなくなる議論が行われたということで、ご理解いただいていいのではないかと思います。

佐道　これは、四十九年十二月十二日と日にちが入っていますから、四十九年の十二月にお作りになったわけですか。

宝珠山　そうですね。

佐道　これ（横長の表）は、いつ？

宝珠山　分かりません。分かりませんが、その後ろのほうをご覧いただきますと、ここ（五十一年）から以降は空白なんです。これをつくったのは、航空幕僚監部です。

佐道　空幕がつくったんですか。

宝珠山　はい。中身をご覧いただきますと、三次防、四次防が空幕のことばっかり書いてあります。だから、空幕がつくったのだと思います。しかしここでは、いかに遅れていたかということをご理解いただくには便利な資料だと思いまして。

佐道　確かに便利です。これはいいですね。

宝珠山　というのは、五ヵ年計画を頭においていますから。ここでこれだけの作業ができるということは、この前にも少し先行して作業がある話ですね。

伊藤　もちろんそうですね。

宝珠山　ということになるとここ（四十九年）のところは全然空白なわけですから、そういう状況にあるということは、私がつくった資料ではありませんけれども、ご理解いただくには便利かと思ってお持ちしました。

伊藤　つまり元来でいうと、ここの辺（四十九年六月一日）からということになるわけですか。

宝珠山　いや、もっと前だと思います。もっと前だと思われますのは、山中（貞則）長官が「ポスト四次防――というか、今でいうポスト四次防――の作業を急ぐんだ」と言ったというメモは残っています。

（別添1「第五次防衛力整備五個年計画（仮称）作成日程（案）」）を作ったのは十二月十二日なんですが、左のほうをご覧いただきますと九月のところから記入してあります。したがって、これは何回かつくる過程での十二月十二日版だとご理解いただいていいんじゃないかと思います。九月のところにN研究会というのを提案しております。これは、九月十一日に提案したということです。

伊藤　どこに提案したんですか。

■長期計画立案のためのN研究会

宝珠山　戻りますけれども、年度の担当から長期の担当をやれというのを夏目課長からいわれた時期があるわけですね。その時がおそらく九月前後だと思うんですが、どうするかということで、まず何もないところですが「研究会を始めようじゃないですか」ということを申しあげたということです。このNは夏目のNなんです――と、私は思っています。

伊藤・佐道　あ、そうですか。

宝珠山　夏目さんの話になかったですか。

伊藤　確かこの話は……。

佐道　されなかったと思います。

宝珠山　だいたいその程度なんです。その程度だというのは、実務者の集まりなんです。課長レベルが一緒に集まるということではなくて、幕僚監部、統幕の二佐から一佐クラスのいちばん実務をやらされる連中の研究会をまず始めようじゃないですかということを提案。しかし、私がやるわけにいかないわけですから、課長の名前をとったと。

伊藤　実際に課長が主催するわけではない？

宝珠山　いや、出ていたと思いますよ。出ていたと思いますけれども、「それは聞いておく」ということであって、あとは適宜こっちでやるよりしようがないです。ここで、「五次防研究会」でもいいわけです。だけど、それ（五次防）は当時まだ許されてないですから、とにかくN研究会。何か分からない研究ですけれども、「夏目課長がやる研究会」で構わないんじゃないか、というぐらいの感じです。

　これを提案して二ヵ月ぐらいたってから第一回目を開いて、年末までに八回開くという計画でやっています。これ、実績ですね。ただ、ノートには残っておりません。

伊藤　残ってないんですか、内容は？

宝珠山　この内容は、私のノートに残ってないですから。

伊藤　ただ、やったということだけはどこかに記録がある？

宝珠山　ここに残っている。十二月十二日につくっていますから。そこまでに、これは大まかにいいますと、そういうことでやってきたということです。

伊藤　この時は、もう防衛局長は丸山（昂）さんになっているんですね。

宝珠山　丸山さんになっています。私と一週間違いでなって来ていますから、もう丸山さんです。

伊藤　夏目さん、丸山さんという感じですね。

宝珠山　そうです。これでいきますと、三月のところに「四次防後の課題と展望」というのを作成ということで、これは後ほど説明できるかと思いますが、それをつくって、長官指示と次官通達を出そうじゃないかということを十二月の段階で提案しています。長官指示というのは何かというと、「こういう方針の下に、四次防後の作業をやれ」ということを各幕僚監部に出すべきじゃないかという提案。次官通達というのは、それを受けてもう少し詳しいものを出すということであります。

　あとは、それらを受けながら並行作業になりますが、「統合防衛構想」。「統合防衛構想」というのは、今まで批判を受けて、佐道さんもいわれるように「陸・海・空ばらばらじゃないか」と。今もいわれているかもしれませんが、当時も同じことでありまして、そういうことを検討しようじゃないかということです。六、七月に「主要事業計画案」を、まず概要はここら（六月）辺りで、「聴取」になっておりますのは各幕僚監部がどのようなものを考えているか、聞こうじゃないかと。それらを踏まえて、八、九月には「防衛課……」というのは、防衛局防衛課の概案を作るべき

ではないかと。

伊藤　そうすると、（四十九年）十二月から後は予定なんですか。

宝珠山　その通りです。こういうことを頭において作業をしていくことではなかろうか、ということを局内で検討する。全体の予定が立たないと作業命令など出せませんから、ある意味で作戦計画です。

伊藤　五十一年度の十月に「大綱決定」に持っていこうということでございますか。

宝珠山　そうです。

伊藤　十二月に、主要項目を決定する。

宝珠山　終末時点は、ほぼこれと合っているわけですね。

伊藤　合っているんですか。

宝珠山　五十一年十月二十九日に（大綱決定）しておりますから。あと、主要項目はもう表向きには作りませんでした。

伊藤　内部的にもあるわけですね。

宝珠山　もちろん、後ほどご説明する機会があるかと思いますが、当然ございます。そういうことで、九月に命令を受けて作業日程をつくったというのがこれ（別添1の資料）でございます。そういうことで、最初何をやったかというと年度をやっていたんですが、三ヵ月後ぐらいから長期をマネージするようになった。その最初の作品だということでありまして、この通りいったわけではありませんが、これに合わせて作業を陸・海・空、統幕、私どもがやるということになります。

伊藤　「私ども」というときには、先生と？

宝珠山　陸・海・空の担当者。

伊藤　内局では？

宝珠山　内局では私のところに四人かな、陸・海・空の担当と、研究開発の担当がおります。各幕僚監部には、中長期担当がいるということになります。

伊藤　それを集めて研究会をやるということですか。

宝珠山　その中の主だった人ですね。そんなに大きな会議はできません。百人ぐらいになりますから。各幕三人出てきていても二十人くらいですね、このN研は。

伊藤　場所は、防衛庁の中の会議室？

宝珠山　会議室をあちこち取りながらやっています。

伊藤　こういう研究会というのは、どんなにふうにしてスタートするものですか。何もメモなしに始めるというわけにはいかんでしょう？

宝珠山　こちらに、「先行して検討を要する四次防以後の主要問題について」というのがあると思いますが……。

伊藤　五十年の一月。

宝珠山　これが、いまのN研究会の成果を踏まえて、市ヶ谷会館に二日間か三日間だったか、とにかく席にいますと雑務がいっぱい入ってきますから仕事にならないので、市ヶ谷会館に宿泊しまして詰めきりをやって、これからの作業をどう進めるかということでまとめたものです。

まず何が必要かということで、「1　『平和時の防衛力』の取扱い」というのは避けて通れない。田中総理は撤回はしているわけですけれども、一回出したことは確かでして、それを次の防衛力整備期間にどうするか。破棄でもいいし、活かすならどう活かすかということで、扱いははっきりしなければいけないんじゃないかという問題提起です。もうひとつは、今まで通りの五ヵ年計画方式でいくのか、計画制度を改めるのかという問題を、まず検討しておくべきじゃないかという問題提起でありまして、それ等に対するひとつの考え方を、次の「『平和時の防衛力』の四次防以後における取扱について」ということで、ペーパーにしております。次のページに、計画制度はどうだということでペーパーにしております。もちろん、これは手書きです。

その後ろのほうに付いております表は、計画方式を比較したものです。

伊藤　先ほどの計画でいきますと、十二月に研究会が終わって、それで一月にこれをつくった？

宝珠山　研究会の成果を踏まえてつくったものと思われます。その中には、長官指示の試案というのがあるはずです（「昭和五十二年度以後の防衛力整備五ヵ年計画案の作成に関する長官指示（案）」）。これも合わせて市ヶ谷で書いたものです。これが、同じく一月なんですね。日付が入っておりませんが一月なんです。日程表のこの段階ですね。N研究会を八回ほどやって、それらをもって長官指示というのは大体どんなものにするか、それから計画制度についてどういうことにすることにして、各幕僚監部に作業を命じてもらうかということであります。

この中に、「添付書類：1」となっておりますが、「防衛力整備の基本方針（試案）」が、後々「防衛計画の大綱」として実っていく内容を書いたものです。「四次防以降の防衛力整備計画制度（試案）」は、以前申しあげたと思いますが、防衛諸計画の体系になっていくものであります。

「情勢判断」は、本来防衛課でやる性格ではありませんけれども、この種の判断がなされることがなければ、「防衛力整備の基本方針（試案）」で書いてあるようなことも採択できないということで、ごく短いものですが書いたもの。それは、これの3／3と書いてあります中に入っております。そんな作業をやって、これらを課内で審議をするという作業が行われていくわけです。

それから、これ（「基盤的防衛力」構想の背景、策定経過関連メモ）で、全体の流れをご覧いただきたいと思いますが、二枚目の四十九年十二月のところで、概略の審議を局長室でしたわけです。さか上りますと、九月十一日から「N研究会」を実務者を中心に提案をしてやっております。坂田（道太）大臣が来るのが十二月九日でございますか、十二日に作業方針などを局長室で審議をしたりしておりますということであります。

■N研の成果物・四次防以後の主要問題を整理

伊藤　これは、さっきの一月におやりになったのとはどういう？

宝珠山　こういうことをやっているわけですが、五十年一月二十日から二十三日に市ヶ谷で詰めきり作業をしまして、「先行して検討を要する四次防以後の主要問題について」ということを課内審議しましたというのが、先ほどまでございます。

それらを踏まえて、二月十五日のところに「常備すべき防衛力の検討について（依頼）」防衛局防衛課長名で発簡をしておりますというのがございます。これは、秘文書ですからコピーはできませんでしたが、表書きだけはこういうものです（グリーンのファイルの中に秘文書のコピーが入っています）。それで、ここに書いてございますように「なお別添試案は……」と。別添試案というのは、先ほど差し上げた「防衛力整備の基本方針（試案）」を課内で審議して、さらにオーソライズ度を高めたものなんです。これ（「防衛力整備の基本方針（試案）」）そのものではありません。「別添試案」は「秘」になっておりますのでタイプはさし控えましたが、これ（「防衛力整備の基本方針（試案）」）は私のノートですから許されるかと思っております。「長期的な防衛力整備の指針として決定されることを期待しつつ、当面、当課の担当部員が作成した一試案であるが、これに対する忌憚のない意見も合わせて開示されたい」ということで、これを修正したものを入れて検討を促進しているということになります。

伊藤　これは、防衛課長名で各幕僚監部に？

宝珠山　各幕僚監部の防衛部長と統合幕僚会議の第五幕僚室長です。これは統合幕僚会議には防衛部長はありませんので、防衛部

長ではありませんが長期計画を担当している部門に依頼しているということでございます。そういうことを事務的に進める中で、坂田大臣は各幕僚長とポスト四次防――P4というのはポスト四次防のことです――で懇談などをしております。

伊藤　この時には、その前にこれ（試案）を見せているわけですか。見せない？

宝珠山　いやいや、防衛課長が出したばかりですから大臣などに見せておりません。

伊藤　大臣は、もっと一般的な形でこういう人たちと懇談したということですか。何も手元になしに？

宝珠山　ないかどうか、その辺りは分かりません。夏目さんが何をやったかということになりますけれども、大臣の性格としては、まずトップと話をしてみようということがあったのではないかと思います。しかし、そこで話し合われた内容というのは、三月二日に「防衛を考える会」発足ということで出てまいりますので、おそらくこのことについて中心に話したんじゃないかということが一つです。

それからもう一つは、『防衛白書』の中に出てくるのですが、「防衛計画を、国民のコンセンサスを高める形でやっていくことを考えた」ということを言っておりますので、その一つの手段として「考える会」も発足させるわけですが、二月二十六日の一時間半ほどの会議では、官僚のサポートなどを必要としない坂田さんの人生観から出てくる哲学をご披露になったんじゃないかと推測されます。

こういう作業をやっている中で、三月二日に「防衛を考える会」がある日突然出てくるわけではありませんで、私どもはその準備を並行してやっております。

■「シーレーン秘密協定」問題

宝珠山　そういうことをやっている中で、上田哲議員が「日米制服間でシーレーンの秘密協定を持っているのではないか」という質問を、予算委員会の冒頭でやっているわけですね。ここで一騒動あるわけです。

伊藤　これは、上田さんは何かをつかまえてやったんですか。

宝珠山　その辺りは、分かりません。彼の著書を見ましても、それは出てきませんね。だから、どこかから耳にはさんだんじゃないかと思います。しかし……。

伊藤　何もこれをやらないでそんなこと言ったって、大して影響ないじゃないですか。

宝珠山　ただ前兆としては、長いことずっと「日本のユニフォームと在日米軍との間では、秘密のことが話し合われているのではないか」というのが、伝聞としては流れているんです。

伊藤　いかにもありそうなことですからね。

宝珠山　あって当然なんですよ。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　あって当然なんですが、「ない」というから探るわけですね（笑）。見せたくないのか、それは分かりませんけれども、そういうものなんだと思うんですが、当時は少なくともそういう状況であった。一つの例としては、「松前・バーンズ協定」などというのが取り上げられたこともあるわけです。しかし、「あるや・なしや」という議論をする。議論をすればするほどつつきたい人もいるわけですね（笑）。その一つとして、安保に非常に強い上田哲さん、彼はジャーナリストですよね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　だから、どこかから伝聞して、「あるのではないか」と

いうことを突いてきたわけですね。これが、丸山さんにつながっていくわけです。

佐道　ガイドラインのですね。

伊藤　うまくいったというやつだな（笑）。

宝珠山　前後してよろしければそこに話を飛ばしますと、丸山さんも坂田さんも、「協定はない」と答弁しているんです。そこは、「ある・ない」で終わるんです。何日かしてから、たしか一ヵ月ぐらいしてからですけれども、「実は協定はないけど、協議をしている」というんですよ。おそらくこの一ヵ月か、二週間か三週間か分からない、この間に上田哲さんと丸山さんとが中心だと思いますが、大臣がそんなに前面に出ていくわけではありませんから、いろいろな取引が行われた可能性が推測されるわけです。

丸山さんは、それを引き受けることになるんだと思うんですね。これは坂田さん、丸山さんともにうまくやったと褒めるべきだと思いますが、上田さんの顔も潰さないように、自らの顔も潰さないようにして、「協定はないけれども協議はしている。本来、協定があるべきだ。これからやりたいと思います」と、切り返すわけです。逆手にとっているんですね。上田さんも、それで顔が立つわけですよ。

伊藤　そうですか。

宝珠山　それはそうですよ。「ない」とはいわれたものの、協議をやっているということを認めて、「あなたのいう通り、本来あるべきだ」ということになるわけですから（笑）。いや、そう受け取っていいんじゃないですか。彼の著書にもそう書いてあるんですよ。だから、ここのところで「協定があるじゃないかといったのが、若気の至り」と書いていますよ（笑）。そこでもし彼が「協議」といっていたとしますと、「協議をやっているんじゃないか」といって、もし坂田さんと丸山さんが「ない」と答えたら、これはクビものですね。嘘をついたことになりますね、突然の質問であれ何であれ。しかし、「協定」だから「ない」といったんですよ。それは事実なんです。「しかし、協議ならありますよ」と。

伊藤　そうしたら、上田さんは藪蛇だったわけですか。

宝珠山　だからそこのところ、先ほど申しあげたように二、三週間だったと思いますけれども、取引して、お互いの顔を立てたんじゃないでしょうか。

伊藤　お互いの顔を立てたといっても、それは防衛の側は得したけど、上田さんは……。

佐道　上田さん個人の質問に対しては、「あなたの言っていることは、すべて間違いというわけではありません」ということで上田さん個人は顔を立てて、社会党は丸損をしたということでしょうか。

宝珠山　まあ、それはあるかもしれませんけど、それは私の知ったことではありません（笑）。

佐道　みんないい方向に行ったと。

伊藤　社会党も、「実は」というわけではないでしょう（笑）。

■「防衛を考える会」

宝珠山　そういうことで「考える会」が発足して、「考える会」は進んでいきますが、「考える会」の資料はお送りしました資料の中に三分冊入っていまして、資料目録の中に入っていたと思います。

伊藤　「ポスト四次防関連保管文書目録」というやつですね。

宝珠山　これ（秘文書）の原本（コピー）も、こちら（グリーンのファイル）の中に入っていますよ。入っていますけれども公にはしておりません……。

伊藤　線が引いてある分ですね。

宝珠山　そうなんです。「・防衛計画の大綱策定時（第二次長官

指示まで）」という資料の中に入っております。それは、資料目録の一ページ目の下のほうのタイトルにございますように入っておりまして、ここで説明しますと「三次防、四次防、P4作業状況比較表」というのがまさにこれ（横長の資料）です。「次期防の当面の課題と方針（案）」というのも、この中に入っております。作業の依頼案等々が入っておりまして、一部はこのコピーで差し上げた資料の中に添付しております。

それから、長官指示の案は先ほどご覧いただいたものです。それから、「o常備すべき防衛力の検討について」というのがこの中（グリーンのファイル）に入っております。

伊藤　これは、「秘」ですね。

宝珠山　そうです。だから目録では下線が引いてあります。

佐道　「防衛を考える会」のやつが、いちばん最後のページにありますね。

宝珠山　最後になりますか。

佐道　いちばん最後のページの下の段の四行目に、配付資料。

宝珠山　あ、そうだ。あっちのほう（郵送した箱のこと）に入っています。これは大分冊で、全部で六、七百ページあるものですが、そういうものをつくる作業を防衛課で手伝いながらやっております。

佐道　防衛課がお手伝いをしたわけですか。

宝珠山　「防衛を考える会」は、防衛課の中にみんなが工夫をしまして、陸・海・空・統幕から一名ずつと、防衛研修所から伊藤皓文さんを呼びまして、彼をヘッドにしまして、私の下になるわけですけれども作業グループを置きました。伊藤皓文さんが防衛研修所の所員をやっておられましたから、資料収集など非常に長けておりますので、「考える会」のメンバーの方々にぜひお読みいただきたいという資料、膨大なものをまとめてくれました。

論文集ですよ。一部は論文集ですし、一部は「いまの政策は、こういうものです」というのを差し上げて、「こういう論議が行われています。ご参考にお使いください」ということになりますが、そういう資料をつくる作業も「考える会」と並行してやっております。その資料が一部残っておりましたので、こちらにお送りしたわけです。必要かどうか分かりませんけれども、私のところに置いておく必要はありませんのでお持ちしたということです。

話が飛び飛びになって申しわけありませんが、そういうことで「考える会」を小さなグループをつくってやりながら、上田さんが提起したシーレーンの問題も適宜処理をしながらということでありますが、三月十九日から二十六日にかけてP4で関係参事官会議というのを行っております。この内容は、最初に申しあげたようにこれからどう進めていくのかというのを、ここら辺り（横長の資料）は防衛局内の話ですから、庁内の話にするために計画制度をどうするのかなどの全体像を、防衛庁の首脳部に論議していただくという形をとるわけであります。それで、三月に予定しておりました長官指示をこういうもの（昭和五十二年度以降の防衛力整備五ヵ年計画の作成に関する長官指示（試案））で出してはどうかということが、ここで論議されたと見られます。

■ポスト四次防の策定過程

伊藤　それは、参事官会議ということですか。

宝珠山　はい、関係参事官会議ですね。その成果が三十一日に、「第一次長官指示」として出されるわけです。

伊藤　これは、現実に出されたわけですか。

宝珠山　そうです。ここで何を論議されたかというのは、三十一日の中に出された「第一次長官指示」の中に――第一次とは呼んでおりませんが――一部は出てきているわけです。これは公表されておりますので、もちろんこちら（グリーンのファイル）にも

入っておりますがコピーはして来ておりません。これ（指示）は、「まず始めろ」ということです。

伊藤　四月一日に「第一次長官指示」を印刷して、記者クラブでレクと？

宝珠山　はい、そうですね。

伊藤　「縛り」というのは、要するに「次の日の朝刊まではだめよ」ということですか。

宝珠山　そうです。ラジオ、テレビは夜からよかったんですかね。

伊藤　何で、新聞とあれ（ラジオ、テレビ）と違うんですか。

宝珠山　朝刊の締切りが二時ぐらいですかね。

伊藤　ああ、最後はね。

宝珠山　はい。ですから朝刊レベルで各社を比較すると、抜け駆けがないんですね。ラジオ、テレビは、朝刊に出たものから後を報道していたのではテレビにもラジオにもなりませんから、いつからかということになるんですが。

佐道　それはそうですね。

宝珠山　ラジオ、テレビは夕刊からというのが普通です。これは私が決めるのではなくて、記者クラブのほうで決めるんです。そういうことで、「まず始めろ」ということを三月三十一日に記者クラブにも発表した。

伊藤　これは、予定通りですね。

宝珠山　そういうことですね。それと合わせて「第一次長官指示」の中には、期間内の防衛力整備をどういう考え方でやるのかというのは、まだオープンにしてないわけですが、将来そのオープンにすべき部分、後に「防衛計画の大綱」の形になっていく部分というのを関係者の検討に付するために、四月七日に「常備すべき防衛力の検討について（通達）」ということで、事務次官に発簡してもらうわけです。

したがって、この（「基盤的防衛力」構想の背景、策定経過関連メモの二ページの）上のほうにございますように二月十五日に同じタイトルで防衛課長が発簡しているわけです。この間――一ヵ月ちょっとございますか――に局内なりで、それから担当者間で防衛課長と各幕の防衛部長――実際には課長ですけれども――討議して、さらに反映したものをうんと格を上げて、次官通達で検討を命じるわけであります。これも表紙だけしかコピーして来ていませんが、こちら（グリーンのファイル）には原本（コピー）が入っております。ここでは「第四次防衛力整備五ヵ年計画に続く防衛力整備計画の策定に際しては、七十一国会――前国会ですね――で行った平和時における防衛力の限界に関する論議などに鑑み、これに関連する検討が必要不可欠であると考えられる。このため、四次防後の長官指示――これは前日出したものですが――に示される情勢判断を踏まえて、防衛力を保持する意義、国力、国情に応じた常備すべき防衛力の態勢、規模などについて早急に検討されたい」ということを頭にしまして、「作業の細部要領については、防衛局長から連絡させるように」と。

注書きとして、「検討にあたっては、別紙を参考にするとともに――この別紙というのが『防衛力整備の基本方針（試案）』なわけですね――常備すべき防衛力の規模は、第七十一国会において発表された平和時における防衛力の数量などを大きく変更することは、極めて困難であることを十分考慮されたい」ということで枠をはめているところまで、次官のところでオーソライズしたということです。

伊藤　要するに、時間になれば防衛庁の中では作業を始めるよ、どんどん進めるよ、ということなんでしょう？

宝珠山　その「作業を始めろよ」というのは、第一次指示というので大臣から全体に出していますから。これは公にしています。今は、その中で後ろのほうに隠れている部分について、非公表の次官通達で実質的な内容を示して、「検討材料にしなさい」とい

うことで通達しているわけです。

伊藤　そういうことですか。

宝珠山　高級幹部会同というのは、一年に一回高級幹部――将以上と考えていただいていいですが――を集めて、その年の方針を説明するわけですが、その中で「P4」と書いてあるものがひとつの大きな課題であるということで、その原稿などをつくったということであります。

この頃、防衛局内でもポスト四次防の姿というものが、ほぼ実質的には頭の中に固まるわけです。どういう経過か分かりませんが、この時に丸山局長は、防衛研修所で講義をすることになっておりました。その原稿をつくったのが、こちらなんです。（「防衛力整備の現状と問題点」50・4・18）となっていますが、これは手持ち資料です。手持ち資料ですけれども、防衛局長が「防衛力整備の現状と問題点」といいながら、ポスト四次防のことを頭において、将来の将官候補たちに講義をしております。

この中に、ちょっと長くはなっておりますが、後に大綱の中に入ってくるであろう、あるいは何故こういう形にしなければならないのかという部分を語っております。その原稿は手書きのものでありますのでタイプして参りました。

伊藤　手書きということは、宝珠山さんがお書きになったということですか。

宝珠山　もちろん私が書いています、私の字です。この中で、先ほどの上田哲さんに質問を受けた部分との関連では、……すぐには見つかりませんが、「今までの防衛政策では日米安保を機軸にして来ているけれども、日米が共同してどう対応するのかという点については研究されてないよ」ということを言っております。ということは、「これから何か考える」ということが裏にあるわけであります。

伊藤　（資料の）2の終わりのほうですね。

佐道　「我が国と米国との任務分担、支援内容等については、簡単に決定できるものではないとはいえ、何等決定されているわけではない。」

宝珠山　これですね。このことで要約して表現していただいておりますが、おそらく実際にはもう少し詳しくお喋りになったかもしれません。上田さんとの論議などございますから、これは体験的にご存じな部分でありますから。

伊藤　ということは、丸山さんは非常に積極的だったということですね。

宝珠山　その時から、そういう問題意識をもったということですね。その他の部分についても同じようなことになりますが、そういうことでこの段階で計画制度についても、ポスト四次防の内容、問題意識についても、それからそれを踏まえて日米間で何をしようかということについて、おおまかに局長段階においても整理をされていたとご理解いただいていいと思います。あとは、それをいかに政治に汲み上げていくか、庁内のコンセンサスを高めていくかの作業の段階といえるかと思います。

そういう流れの中で、六月二十日になりますけれども、「防衛を考える会」は六回目の会合を終えましてレポート作成に入る。これから一ヵ月後ぐらいになりますか、久保次官に交代するわけです。七月十五日に久保次官に代わるわけですから、その前から、夏目課長が交代するというのも、もうこの頃はある程度、上層部には明らかであったと思われますが、それはちょっと先走り過ぎましたかね。

伊藤　夏目さんは……。

宝珠山　夏目課長の交替は、久保次官になって五十日後です。事務的には七月三十日には第二次指示案を調整しているというのが、次の行であります。ここで、八月一日に「小規模侵攻の考え方、説明」と書いていますが、誰に説明したかというのは分かり

ません。ノートではちょっと分からないんですが、局内で論議しているということでよろしいかと思います。

それらを踏まえて、数日後に夏目課長が、交代した久保次官に業務説明。これは、次官交代しますと各課の所掌事務を説明するわけですが、その際にポスト四次防についての今までの検討結果を報告していただいております。私は同席しておりません。

私のメモに残っておりますが、「『秘』の通達は渡したけれども、第二次指示案は渡さなかったよ」と聞いております。「秘」の通達というのは何かというと、久保さんがまだ防衛施設庁長官でおられたときに、田代（一正）次官の下で審議して出した「防衛力整備の基本方針（試案）」なわけであります。これは、久保さんのお気に入りになるかどうか分かりませんが、「とにかく出しちゃったよ」ということで渡してくれたと。これから久保次官の名の下で、久保次官のご審議も得ながら渡さなければならない第二次長官指示案については、既にもうできているんですが、「調整案は渡してないよ」ということであります。

で、「三木・フォード」がありまして、それが終わる頃でありますが八月九日には、夏目さんが業務説明した後ですけれども、久保次官の指示が西廣（整輝）広報課長経由で私のところに入っています。

伊藤　整備目標……

宝珠山　これは、夏目課長が説明した後で、おそらく久保さんはそれを読んで、「これじゃ、整備目標が示されてないんじゃないか」と思ったんじゃないでしょうか。ということで、「それを明示するような作業をしろ」というのが一つと、もうひとつは今までのように各幕僚監部がつくった整備計画を内部々局がカットする形でやる作業ではなくて、「トップ・ダウンでやれよ」という二つがポイントですけれども、まだ防衛課長でない西廣広報課長経由で指示を受けております。ということは、ここのところでは夏目課長が交代するというのは分かっていたということになろうかと思います。

事務的にはそういうことを頭に置きながら、四次防の現状分析を行ったりしております。この頃は概算要求の作業が進んでおりますので、それらを並行してやっておりますが……。

伊藤　それは、直接には先生が関わってないわけですね。

宝珠山　いや、業務計画は関わりますよ。

伊藤　五一業務計画？

宝珠山　はい。それはもう課内にいますから。だって、それがどう進むかによってポスト四次防、全部の組み方の土台が動くわけですから、それは踏まえておかなければいけません。とくにこのときには、FXがどうなるかとかいろいろあるわけですから、それらを頭に入れながら進めざるを得ません。

二十九日に、坂田・シュレジンジャーの日米首脳会談がございます。ここで、質問事項の第6に、坂田・シュレジンジャー会談との関係で、「日米防衛協力の問題、つまりガイドラインの作成の問題にはどのように関与されたのでしょうか」というご質問が入っていますが、これは先ほど申し上げましたように、前から専門家の間では上田さんに指摘されるまでもなく、何らかのことを考えなければいけないというのはあるわけですけれども、なかなかとっかかりが難しいということと、日本の防衛力の規模自体が米軍にとってはネグリジブル・スモールであるわけですから、日米防衛協力といったってなかなか相手にしてもらえない面がありますので、それで悩んでいたということがあろうかと思うんです。

それが、久保次官の頭と丸山さんの立場の違いがあるのではないかと思われますけれども、これは私の推測であります。ネグリジブル・スモールで、今まで「ノー、ノー」といわれていたもの、しかし丸山さんは、上田さんとの間の話、それから坂田さんの「あるべき姿」ということから来る方向に乗った。実態を丸山さ

んよりよく知っていたと思われる久保さんは、「そうはいってもな、理屈は分かるけれども」という面があるのかなと思われますが、しかし坂田さんの哲学的なものの考え方のほうを優先してシュレジンジャー会談、すなわちトップ間の約束に仕上がっていくわけです。結果的には、成功裏にやったということではないかと思います。

■大臣室の「フリートーキング」

宝珠山　そういうのを終えて西廣防衛課長が就任して来ました。事務的には進んでおりまして、第二次長官指示をフリートーキングという形でやっておりました。並行しながら、私ども――私どもというのか部員レベル――は、細かい作業をずっとやっておりますし、西廣課長に引継ぎ説明をしなければなりませんが、引継ぎと審議と同時にやっているという側面もありました。この頃になりますと、久保さんの「トップ・ダウンでやるよ」という方針と、坂田さんの「皆さんの論議を得ながらやろう」というのがドッキングしまして、フリートーキングを高いレベルでやるということで、集中的に「二十二日から二十五日」と書いてございますが、大臣、次官、局長、議長、各幕僚長が入りましてやっております。

伊藤　議長というのは、誰ですか。

宝珠山　統合幕僚会議長です。

伊藤　これは、何日間か続けて？

宝珠山　連日やっています。久保さんが「基盤的防衛力構想」といわれるものを主張し、各幕僚長が反論すると、それを大臣がとりなすというか、政治的な立場でいろいろご発言になるというようなことがございます。

佐道　この場で、久保さんの「基盤的防衛力構想」に、制服からの厳しい批判が出ていたわけですか。

宝珠山　久保さんの発言については、もうそこからありますね。私は議事録をまとめさせられたのを覚えていますが、後で「おまえは、久保寄りだ」といわれたこともございます。

伊藤　まとめ方がですか。

宝珠山　そうでしょう（笑）。だけど、議事録をまとめるというのは大変ですよ。皆さんのいうことを完全に理解というわけにいきませんのでね。五十年九月かな。

伊藤　その批判というのは、あり得べき事態の想定といいますか、要するに敵ですね。

宝珠山　ちょっとそこまで全部記憶しておりませんけれども、久保さんは抽象的にいろいろものを考えているのに対して、各幕僚長は次の計画で飛行機を何機取りたい、船を何隻取りたいというのが大きな関心事ですね。そこら辺りで噛み合わない面があったように思います。

佐道　先生は、このフリートーキングは毎回出ておられたんですか。

宝珠山　出ておりましたが、発言するという意味ではありませんよ。この後ろにおりました。

伊藤　事務方になるわけですか。

宝珠山　はい、議事録をとっております。防衛課長も出ております。私のほかは出てないと思います。各幕僚監部は……。

伊藤　フリートーキングのところに、「大臣、次官、局長、各幕僚長等」と書いてございますが、課長も入っているわけでしょう？

宝珠山　防衛課長は入っておりまして、各幕僚監部の防衛部長も同じく同席しているはずです。ただ、発言はしておりません。発言を求められれば別ですけれども。

佐道　次官、幕僚長がやりあっているところで、課長はなかなか発言できるものではないでしょう（笑）。

宝珠山　発言ができるわけではありません。求められればという

ことですが、聞いていることはできますね。ある意味で説明員ですか、求められたものに対して。そういうことを、おそらく初めてだと思いますけれども、大臣が議長役を務めながらやるということをやっております。しかし、そういうことをやりながら大臣の立場でいきますと、久保構想を叩き、ユニフォーム側の所要防衛力構想を叩かせるという形で、ずっと落とし所を探っていたのではないかと思います。私どもの立場としては、既にそういう構想を秘密ではありますが検討させているわけですが、しかしそれは久保さんの脱脅威論じゃないわけですよ。

佐道　前からあった常備兵力という考え方ですね。

宝珠山　ええ。だから常備の目標は何かというと、それは小さいかどうかは別にして、周辺の国際情勢、軍事情勢を踏まえて、それに防衛期待度を加味して常備すべき防衛力の量を求めようという考え方ですね。これはずっと一貫しているわけですが、これは幕僚長なども受け入れられるわけですよ。久保さんは、そういう所要防衛力のアプローチ自体について反論というか、意見を述べるから噛み合わないでずっと行くわけですけれども、大臣は両方じっと聞いているということで、ある意味ではお互いに発散させながら、大臣はその時にこの「秘」の文書を知っているわけではありませんけれども、双方の言い分をじっと見ているということであろうかと思います。

「四九統合中期」というのは、所要防衛力構想みたいなものを統合幕僚会議がつくっているわけですが、それを交代した西廣課長に説明したということだけであります。

佐道　これは、宝珠山先生が説明をされた？

宝珠山　いえ、これは統幕が。「統合中期」というのは、統合幕僚会議がつくる計画なわけですから、説明者は統幕議長なわけですけれども、もちろん西廣課長のところに来るのは五室長（第五幕僚室長）になります。

伊藤　中期というのは何ですか。

宝珠山　中期というのは、五ヵ年という意味です。ずっと前に差しあげたと思いますけれども、計画制度の中で実現してくる……ずっと前に差し上げましたけれども、これ（「防衛諸計画の体系図」）はいまの制度化されたものです。防衛諸計画の体系の中で、いまは「統合中期防衛見積もり」という形で呼ばれておりますが、これは五ヵ年間の軍事情勢見積もりと今後の防衛力整備の基本構想などもまとめたもの。統合長期は、二十年ぐらい先までを対象にするということです。

四九というのは、「四十九年度に作業をした」ということであります。今では、このような名前が訓令によって示されるようになりましたけれども、以前はまだ統幕限りの計画制度の下で進んでおりましたものであります。

伊藤　それは、各幕のやつを持ち出してやるわけですか。

宝珠山　統合長期ですから、各幕ではありません。統合幕僚会議事務局でやる作業です。

伊藤　まったく各幕と？

宝珠山　いや、それはどういう協力関係にあるかは私がいうことではありませんが、密接に協力をしながらということであります。

佐道　さっきのフリートーキングは、フリートーキングですから別にその場で何か結論を出すということではないわけですね。

宝珠山　ないんですよ。

佐道　意見を言いあうということですね。

宝珠山　そういう場にしたんです。だって何かを決めようとしたら、決まらないです。次官と合わないことを私どもはよく知っていますから。大臣もそのことは、おそらく何らかの形でご承知ではないでしょうか。「じゃ、二人でここで喧嘩するのを俺、見とこう」と、そういう言い方をしたかどうか分かりませんけれども、そういうことになる。喧嘩をするわけではありませんけれども、

お互いに論を戦ったらいいじゃないかと。

伊藤　そういうときは、大臣は進行はするけれども自分の意見はいわないわけですね。

宝珠山　自分の意見をいうほどには、まだなってない（笑）。

佐道　久保さんに対して、陸・海・空、統幕も入って一対四ですよね。

宝珠山　まあ、そうですね（笑）。

伊藤　宝珠山さんたちも、必ずしも久保さんの思っているように思っているわけじゃないでしょう？　黙ってはいられないじゃないですか。

宝珠山　久保さんの思っているのでいいかもしれませんけれども、量が出てこないですね。

伊藤　当然ですよね。何か所要をつくらない限りは、そうでしょう？　たとえば、「これぐらいの国力だったら、これぐらいの防衛力を持つべきだ」とか、そういう所要がないとだめですね。

宝珠山　その立場は、私はどこかではっきり書いています。

伊藤　量が出てこないということですか。

宝珠山　K・B論文が、久保さんの主張なわけですね。これは皆さん知っていることだろうと思うわけですが、それを踏まえているわけですけれども、私がそれについて……コピーしなかったかどうか分かりませんが、しなかったんだろうな。

伊藤　いいですよ、言葉で喋ってくだされば。

宝珠山　これは、四十九年十二月十二日の中に入っているんですが、「K・B論文は『従来の防衛論および防衛力整備の考え方』は、『本来、特定し難い』周辺諸国の軍事能力を敢えて前提として算定した所要防衛力を中心としているので、『軍事、戦争は政治の一環であるにもかかわらず、政府の表明された考え方としては軍事中心であるという印象を一般に与えている』とし――これは四ページとしてあります――これは平時における防衛力整備の考え方としては既に破綻している。」ということで、言っております。

これに対して、「そういう基本的認識を出発点としていると思われるが、この基本的認識を支えているものは国際情勢判断などで述べられ、提案を行っているけれども、整備すべき防衛力の具体的内容については触れていない」と。これは、事実関係だけを説明した部分ですが、続いて、「K・B論文の基本的認識ないし問題意識、わが国の防衛力の維持・役割を国民がより受容しやすい形で提示し、それに合致し、かつ軍事的にも意味ある防衛力を整備したいとしていることには、個人的にはもちろん何びとも異論はあるまい。また、個人的には大筋としてここに提示されている基本的認識、防衛力の意義、役割および防衛力整備の前提について異議はない。しかしながら、四次防作業の第一段階においてもそうであったが、ここに提示されているような防衛力の意義、役割を評価基準ないし物差しとして、現在保有している防衛力または整備しようとする防衛力の質および量の妥当性を測定ないし評価しようとすると、大変な困難に直面してしまう。

この論文においても、この点については何ら解決策を提示してない。このため、『わが国の防衛力は過大であることも、過小であることも望ましくない』（三十六ページ）、あるいは『防衛力が内容的にはできるだけ抵抗力として有効であること』（三十七ページ）などといわれても、評価の尺度が明示されてないので客観的に理解することができない。したがって、この論文を基礎として、当面の予備的作業における防衛能力の評価や、目標防衛力の算定を行うことは困難であると判断される。このような理解に基づいて、当面の作業は従来の所要防衛力から接近して防衛力の評価・算定を行う従来の方法によって行うこととし、これと並行して、この論文の提示するような防衛力の意義、役割や、所要防衛力から接近した防衛力との接合点を見出すための研究を行うこと

として、当面の作業の進行を図ることとする」と。

あとは、「所要防衛力の総合的な説明の方策についても――この方策というのは、陸・海・空ばらばらの防衛構想といった批判に対応し得るようなものと書いておりますが――統幕事務局第五室の実施しているK・B論文の問題意識を考慮した作業に期待する」と。ここで、「五室の実施している」というのは、この前から説明しておりますOR作業を頭においております。

「次期防の作業日程を別添1、次期防の長官指示を出すと仮定しての試案は別添2」これは、先ほどお話ししたようなものでありますが、ここで「(K・B論文は)作業の材料には使えない」ということを言っておりますし、このことはここで作業している人たちは周知です。

伊藤　そうですね。

宝珠山　久保さんには言っていませんよ。しかし、夏目さんは知っております。

伊藤　夏目さんも、確かそう言っていました。

宝珠山　それから、丸山さんは忙しいけれどもそれは承知のはずです。「これは大きくてもいけれども、小さくてもいけない」といわれたって、誰にも分からないですね。久保さんだけしか分からないわけです。そのことを、常識的なことをいっただけなんですけれども。

伊藤　でも、久保さん自体は本当のところ、どう考えていたんですか。

宝珠山　そんなことを私に聞かれても、困りますけれども。

伊藤　いや、想定するところ。

宝珠山　ですから先ほど申し上げたように、こういうことを言いながら量を示さないで、示さない理由を彼は、「議論の本筋からずれる恐れのないよう、防衛力の整備目標の具体的内容については示さない」という趣旨のことをK・B論文の中でいっているんですよ。

伊藤　じゃ、初めからはずしているんですね。

宝珠山　そうなんですよ。だから逃げが打ってあるんですね。しかし、防衛庁なり各幕僚監部なりが作業する人たちに必要なのは、それなんですよね。

佐道　現実に作業をするということからすると、量を算定する基準が出てこないと何も出てこない。

宝珠山　ええ。それが幾つかあったって構わないですよ。この前触れたように「大規模に対してどうか、小規模に対してどうか、中間はどうか、それについて作業をしてみろ。選択はこっちに任せろ」というのはいいですけれども、これ(K・B論文)だけでは論議にもならないんです。ということを私は言っているだけなんですが。

佐道　ただ「抵抗力」といわれても、どの程度があれば抵抗力になるのかが分からないですね。

宝珠山　その通りです。相手がどういうものかというのが分からないし、今いわれるように「北海道は放置してもいい」という抵抗の仕方もありますし、「北海道全体はだめだけど道北、道東はある程度取られたって、それはしようがないよ」という考え方だってあるわけですね。米軍などにとっては、北海道が半分ぐらい行っちゃっていいと考えているかもしれないんです。ディーン・アチソンじゃないですけれども、米国の防衛ラインは朝鮮半島は外に出ていたわけですよね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　そのときに北海道はどうだったかというのは、議論あるところだと思うんです。

伊藤　そうですね、何がなんでも守らなければならない範囲に入っているかどうかということですね。

宝珠山　米国にとってはですね。日本だってあり得る話なんです。

「一兵たりとも」というのは不可能に近い話、先制攻撃すれば別ですけれども。そういう議論はないんです。それで、抵抗力とか、大きくてもだめだ、小さ過ぎてもだめだとか。

伊藤　相手を測定して、「これと対抗するために、この程度の防衛力が必要である」というご議論ですね。だけど、たとえば平和時の云々といって基盤的防衛力といった場合に、たとえば「GNP換算で、大体このぐらいは持っていたらよかろう」という議論だって成り立ち得るわけじゃないですか。

宝珠山　その関係でいきますと、久保さんはそのこと自体も触れてないんですね。だから、久保さんは経費枠でものを考えることについて……。

伊藤　も、だめなんですか。

宝珠山　考えていたわけじゃないですね。そこのところは……これはそれで、一つのやり方としてあるんですよ。

伊藤　あると思いますね。

宝珠山　うん。それはもう「一％以内でやるよ。それ以外のものは受け付けないよ」というのも構わないですけど、それはひとつで量になります。

伊藤　基準になるわけでしょう？

宝珠山　それは、私どもの作業の前提になり得ます。反対はするかもしれません。後に私ども反対するわけですけれども、「そういう経費枠でものを考えることはできない」ということを最後にいうわけですけれども、考え方としてないとか、作業の指針にならないということはないです。しかし、久保さんがK・B論文の中で言っているものは作業指針にならないということで、これは十二月十二日ですけれども、それ以前に私どもは切っています。

伊藤　しかし一般的に考えても、K・B論文というのは議論としてどのぐらい日本は防衛力を整備すればいいのかということに対する指針になるんですか。

宝珠山　だから、私は「ならない」といって作業を始めたわけです。それが、大臣・長官指示までのトップのところに入っているわけです。

伊藤　その久保さんが次官になるわけですね。

宝珠山　次官になるんですよ（笑）。

佐道　その「基盤的防衛力構想」というのをうたい文句にして大綱をつくられ、そして次の大綱もまた「基盤的防衛力構想」に基づいてずっとうたってあるということになっていくわけですね。

伊藤　でも、計算の基礎は違うんでしょう？

佐道　想定している状況も違いますけど。

宝珠山　それは周辺の軍事情勢が変わりますと、変わる話です。それから、質と量において変わる話なんです。二十年前の飛行機と今の飛行機は、相手も違うしこっちも違わなければいけない話ですから、それは変わることは基盤的防衛力というものであれ、全部考慮していることですね。

伊藤　だけど、その場合は相手を想定しているわけじゃないですか。

宝珠山　そうですよ。だから、今の「基盤的防衛力構想」はそれを考えていますけれども、久保さんはそういう点が明確でないということなんです。「それでは、私どもは作業できません」ということで、何度も申しあげますが……。

伊藤　でも、実際の作業はそれで進んで、次官はそれでいいわけですか。

宝珠山　そこのところまで行く前に、もう少し進んでいきたいと思います。

伊藤　じゃ、お願いします（笑）。

佐道　大事な問題ですね。

■「防衛計画の大綱」の策定

宝珠山　（「基盤的防衛力」構想の背景、策定経過関連メモ3／5ページ）九月二十二日のフリートーキングのところまで行きまして、二十六日に統合幕僚会議がどういう考え方をしているかというのを、これは新しい課長への引き継ぎを兼ねて説明をしております。

十月一日ぐらいから陸・海・空・幕が「フリートーキング」を受けて、具体的に何を考えているかということを大臣に説明する会議を行っております。

伊藤　この席には、宝珠山さんは同席しているわけですか。

宝珠山　もちろん同席しております。ここまで細かくなりますと、局長も課長も手が負えなくなることがありますね。それで、部員案作成の指示を受けております。部員案というのは、「幕僚監部がつくるのではなくて、防衛課が主導的につくれ」という指示ですね。で、つくるといっても、こんな短期間でできるかというとそうではなくて、前から準備しているということでご理解ください。それを局内で審議しております。

伊藤　もちろんこれは、各幕のつくっているものを参考にしながらやっていくわけでしょう？

宝珠山　それは、先ほどの「常備すべき防衛力の検討について」という依頼をしておりますので、それを根拠に部員とそれぞれの幕僚監部、統幕事務局の担当者とは議論をしているわけでありまして、明示的に「部員案作成の指示」というのは、この段階で出されたように記録に残っておりますが、具体的にはもっと前に、この時（「第五次防衛力整備五個年計画（仮称）作成日程（案）」）から防衛課案をつくるということと、防衛局案をつくるぞということをいっているわけですから、部員はそのことを頭において作業をしているわけですね。

佐道　七日と九日に局内審議をされたということですか、この案について。

宝珠山　そうです。六日から、翌日からやっているということですが、準備ができていたということでご理解いただいていいかと思います。

伊藤　本当ですよね。指示したら次の日からやっている（笑）。

宝珠山　この「部員案作成指示」というのは、大臣室で討議したのを踏まえて西廣課長が、「おまえたちの案をつくれ」といった。「持って来い」ということでもあるわけですが。だから、ここで陸・海・空の主要検討事項というのは、陸・海・空の案を大臣室で討議にかけたということでご理解いただいていかがでしょうか。

伊藤　分かりました。

宝珠山　それは、ここで聞いたのは大臣ですけど、それ以前に担当部員などは聞いていて、どうすべきだということを頭においているわけです。だから、六日に大臣のところに各幕は説明したな。「おまえたちがどう考えているか、案を示せ」「はい、分かりました」ということで、翌日からやっているわけです。

「（連休）試案作成」というのは、自宅作業です。これは、私が独りでやったということでありまして、第二次長官指示のたたき台のたたき台みたいなものを連休中にやっております。それを踏まえて、第二次長官指示案の主要者と――主要者というのは局長クラスと次官が入っておりますが、大臣に内々に説明をしております。

この時に、「久保次官不満あり」と、ノートにはっきり残っております。第二次長官指示案というのは何かというと、前に「常備すべき防衛力の検討について」等の中に入っております「防衛力整備の基本方針」（試案）として、次官通達などで、久保さんの時代じゃない、田代次官の時に出したもの――その前の防衛課

長のも含めてですが――それらを基に各幕僚監部といろいろディスカッションしたものを、この三日間で集大成したものですから、それを大臣にも久保さんにも個別にやっているわけですが、それについて久保さんは、「そこまで進んでいる」ということで持って来られていますから不満があるのと、内容についてもやっぱり不満があったという「メモ」だと思います。そういうことで、先ほど伊藤先生のおっしゃる、「久保さんは、それでオーケーしたのか」といわれると、不満はあるけれどもオーケーせざるを得なかったという面もあるのだと思います。

大臣とか局長クラスの意見を個別に聴取して、二十日ですから数日後には第二次長官指示の第三次案をつくって、これは各幕僚監部に意見を聴取しております。一部修正をして、二十三日に大臣室で審議しておりますが、この時にはほとんどもう修正はない状態で、久保さんは不満があるけれども、自分の意見を全部通すことはできないことも、また承知しておられる立場にある方ですから、受けていただいたということだと思いますが、二十一日、二十二日というのは手続きです。

以前に、佐道先生が「各幕はどう考えていたのかね」とおっしゃっていたことについての資料がございました。この中（グリーンのファイル）には入っておりますが、第二次長官指示のようなものについて、第二次長官指示というのは最終決定される「防衛計画の大綱」の考え方とほぼ変わらない哲学の部分――事業計画はもちろん入りませんが――なわけですが、これについて統幕の脅威認識、それからポスト四次防をどう考えるかというのを統幕議長等が大臣に説明しております。

これ（グリーンのファイル）は、「統幕の脅威認識」ということで「長官説明」と書いております。この考え方は、従来の所要防衛力的な考え方に則っておりますが、「従来よりも小さくした基盤的なものにすることについて、小規模の直接侵略事態を目標とすることについては異存はないよ」と。「常備すべき防衛力」というものを、こういうものを考えますということでありますが、「従来とは変わるものについて、統幕も異存はない」ということを表明した形になっております。ただ、前提としては情勢云々ということをいっておりますが、これは長官指示で出した情勢判断とあまり異なるものではありません。従来の考え方というのは、かなり大きなものを目標にしておりました。今回は「常備すべき防衛力」ということで、こういうものに下げていくわけですけれども、「異存はありません」ということをこの資料を使って説明しています。

伊藤　しかし、実質変わらないのじゃないですか。

宝珠山　考え方は変わりませんよ。だから、「いい」と言っているわけです。

伊藤　じゃ、どこが変わったんですか。

宝珠山　どこが変わったというのは、また後ほど別の資料でご説明させていただきます。この前お配りしたもので説明したほうが、私もやりやすいから。

伊藤　今まで伺った話だと、何も変わってないと思う（笑）。

宝珠山　だから、そこのところはまだ私の説明がそこまで行ってないということでご理解ください。

伊藤　分かりました。

宝珠山　ここで申しあげたいのは、この段階において、すでに統幕が陸・海・空を代表して、「久保さんの考え方ではないけれども、脅威についてこういう考え方をします。ポスト四次防で整備目標を下げるということについて、私どもは異存がありません」ということを述べたということで、佐道先生が前々から「制服はどう考えていたのですか」とおっしゃっているのについては、「これで異存はありませんということを、長官に公式に申しあげております」ということであります。

伊藤　じゃ、これは一応久保さんに対して、形としては多少近寄ったといいますか、同調したということですか。

宝珠山　ウーン、久保さんに同調したというか、先ほど来の久保さんが来る前に次官通達も出し、その前に防衛課長の検討依頼を出す形で私どもが根回しをやっているわけですから、久保さんの考え方というよりも私どもの作業グループの考え方をここで認知したということですね。だから、久保さんの考え方がどうであったかというのは……。

伊藤　また別の問題ですか。

宝珠山　別の問題というよりも、量に転換するものが示されてないわけですから、それに歩み寄ったかといわれると、歩み寄ってはいないですね。

伊藤　そうですね、分かりました。では、どういうふうに変わったかというのは後で伺います。

宝珠山　それは後で申しあげるということで、いまの伊藤先生のご質問の部分は先送りさせていただきます。

そういうことで「統幕の脅威認識」で、大臣に「第二次長官指示で出そうとするものについても、統合幕僚会議として異存はありませんよ」ということを、私ども事務当局としては直接にご理解をいただいたということになります。その段階になりますと、もう久保さんは少数派になりますから、次官であってもどうしようもないということになろうかと思います。二十九日に長官指示を出しております。第二次長官指示は、先ほどから申し上げておりますように「防衛計画の大綱」の中の実質的な内容をほぼカバーしているわけですから、これを国防会議決定、閣議決定に向けてどう運んでいくかというのが、これから以降です。

これ（「Ｐ４の第二次長官指示国防会議議員懇談会説明要旨」）は、長官指示を出しまして十一月十三日に議員懇談会、日程のところに「第二次指示について坂田大臣説明」と書いてございますが、ここで坂田大臣が国防会議の議員に、「防衛庁内部に発した指示ではありますけれども、皆さんにご論議いただき、またそれを公にするのが防衛について国民の理解を深める有意義なものと思いますので、説明させていただきます」ということで行っております。こちら（「Ｐ４の第二次長官指示国防会議議員懇談会説明要旨」）をご覧いただいたほうがいいと思いますし、先ほど伊藤先生がおっしゃった「どういうふうに変わったか」というのも、この中で説明させていただこうと思っております。

前書きはおきまして、「１　はじめに」のところ、これはおそらく坂田大臣が説明する時に使われたと思われるものでありまして、「はじめに」といっているかどうかはわかりませんが、坂田大臣にお渡しした資料にはこんな形になっております。

「本日説明する私の指示は、四次防以後の防衛力整備計画、いわゆるポスト四次防の防衛庁案の作業指針として、部内に示したものであります。したがって、今後の作業の進捗度合に応じて、更に検討補備すべき点も多く、国防会議で御審議願うに十分なほど固まったものになっておりませんし、必ずしも国防会議にお諮りしなければならない性格のものではありません。

しかし、私は計画策定の各段階で、できる限り外交、経済その他各般の行政分野を含めた、広い意味での安全保障という立場からの審議をお願いすると同時に、それぞれの段階で、防衛庁の考え方や案を示して、国民各界、各層の意見を汲み上げていくことが、ポスト四次防について、ひいては防衛問題に関する国民の合意を得る道だと考えております。その意味で、今回も、部内への指示ではありましたが、その考え方を公表し、また、大変お忙しい時期にも拘わらず特に総理にお願いして、本日の懇談会を開いていただいた訳であります」

ということで、坂田大臣がずっと庁内で根回しして来て、国民のサポートを受けながら、久保さんの構想というわけではありま

せんが、久保さん的な考え方をも踏まえ、ユニフォームのほうの考え方も踏まえて落とし所を探っていってということを、まずはじめに言って、長官指示の内容というのはこれこれだということで、防衛力を保持する意義というのを……。

伊藤　「その考え方を公表し」の「公表し」は、議員懇談会に公表するという意味ですか。

宝珠山　長官指示自体を、何日か前にここ（「基・防策定経過関連メモ」）で書いてませんかね……。プレスにオープンしていますから。

伊藤　プレスにですか。

宝珠山　十月二十九日に「第二次長官指示」とあります。これを、もう公にしていますから。

伊藤　そうですか。

宝珠山　公にして、この（議員懇談会説明要旨）後ろに書いてございますようなこと、この内容は若干遅れて公開しておりますけれども、クラブにはこういうもの（第二次長官指示について・防衛局防衛課）を。

伊藤　渡しているわけですか。

宝珠山　これ自体ではありませんが、こういうペーパーを出しております。

伊藤　それは、前例のないことですか。

宝珠山　ないです。それをやった。「だから、あなた方も一緒につきあいなさいよ」といっているわけです。あなた方というのは、国防会議の議員というか大臣ですけれども。で、「長官指示の内容」以下が、いかに従来と異なるのかということを縷々説明するわけでありまして、次のところに「（3）基盤的防衛力」というのもございますが、これを読みながらやると相当かかります。

佐道　そうしたら、ここから次回に入るということで。

宝珠山・伊藤　もうそんな時間ですか。

佐道　若干五分前ではありますが。これから、「大綱」というものを本当につくることになるわけですね。

宝珠山　この考え方を広げながら、まずいま読み上げましたような形で大臣に理解いただき、論議されるわけですけれども、それほどの異論があるわけではありません。

伊藤　ちょっと休憩をして、時間をいただければ、これを全部説明していただくのではなくて。

（休憩）

■これまでの防衛構想との比較とその資料説明

宝珠山　なかなか難しいですけどね。

伊藤　それが、いちばん分かりやすいですか。

宝珠山　先ほどの伊藤先生のいわれる部分との関連でいきますと、この「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」という図は、坂田さんが「こういう図をつくれないか」といわれて、私どもがつくったんです。しかし、私はこちら（『国防』四十二ページ「図表1　防衛構想の比較」）のほうが説明しやすいと思います。

どう変わったかというのは、図表1の「従来の考え方」というのは、核の事態というのは、わが国は従来も考えておりません。それから通常兵器による事態であっても、全面戦に至るようなものは考えておりませんということで、ここ（通常兵器による限定的な侵略事態）から以下が比較すべきものだということであります。

四次防までは、「わが国が整備すべき所要防衛力」ということで、「所要防衛力？」とクエスチョンをしておりますが、考え方としては四次防の大綱の表現を使いますと、「わが国が整備すべき防衛力は、通常兵器による局地戦以下の侵略事態に対し、最も

有効に対応しうる効率的なものを目標とする。この目標を漸進的に達成する」という考え方でした。これを分解いたしますと、（「図表1　防衛構想の比較」）右側のほうに「小規模を越える侵略事態」を含み、「小規模の直接侵略事態」を含み、「軍事力をもってする不法行為等」をも含む、「間接侵略事態」も含みますという、「通常兵器による限定的な侵略事態」に対応し得る防衛力を目標にしてやって来ましたと。しかし、今回はそれは諦めますと。諦めてどうするかというのが、左側なわけです。

その考え方は、先ほどのこの中（資料「P4の第2次長官指示国防会議議員懇談会説明要旨」）で言っておりますけれども、二枚目の上のほうに坂田長官は、「1　我が国の防衛力整備は、二次防以来通常兵器による限定的な侵略事態に有効に対応し得るものを目標としてきたが、四次にわたる計画を終了しても、なお目標とする防衛力にとても及ばない」と。二十年間やってきたけれども、こんな所要防衛力には遂に到達してないということで、「2　しかし、国民の中には、我が国の防衛力が何処まで増大するのか、上限を示してほしいという声もあり、防衛に関する国民的合意を得るためには、それに応える必要があること」「3　また、自衛隊は、創設以来二十五年を経過して、装備、施設等の老朽化、旧式化が進み、その更新近代化のための経費所要が増大しておりますし、人件費の上昇も著しいものがあります。一方、最近の経済財政事情を見ると、今後防衛費を大幅に増加することは困難であると思われますので、見通しうる将来に、従来どうりの目標を達成できる見込みがありません」ということを理由にして、こちら（左側の図）に下げるわけであります。

それで、次のところがポイントだと思いますが、「本来国の防衛については、政治自らが責任を負うべきものですが、現状では目標だけ高いものを与えて、自衛隊に過大な責任を負わせているといえます。もっと現実的な目標を与えることによって、防衛力も、より完結性のある効果的なものにすることができると考えました」と。

次に、国際情勢の分析をやっておりますが、これはデタントといわれていた時の考え方を述べているかと思います。後段のほうに、「当面我が国に対する差し迫った侵略の脅威はないと判断されます。今回の『常備すべき防衛力』の構想は、このような状況が今後とも継続するであろうという判断に立って、また先に述べた諸点を勘案して採用したものであります」ということで、目標防衛力を下げることについて、「国際情勢と政治の責任とを加味して下げました」といっているわけです。

次の「（3）基盤的防衛力」のところが、下げるものの防衛力の考え方、内容についての説明であります。このときに使ったチャートが、こちら（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）です。これは大きいチャートですが、一メートルから……。

伊藤　本当は、そんな大きなものなんですか。

宝珠山　ええ。皆さんが大きな会議室で見られるものですから、一メートル×二メートルぐらいのものをつくりまして、これを掲げて説明しております。

これは、横軸に各種の防衛機能ということでご覧いただきますと、「警戒・監視」「情報・通信」「人的基盤（教育訓練）」それから「各種作戦機能」「整備・調整」や「補給（部品・弾薬）」を含む後方、それから重要な「基地・施設」と、「その他（抗たん性）等」ということで。

伊藤　「抗たん性」というのは、何ですか。

宝珠山　攻撃されたときに持ちこたえるという意味で、タンの字は難しい字（堪）で当時は使えなかったのでこうなりました。分かりやすくいいますと、レーダーサイトなど目を開いて見張っているわけですが、いちばん先にやられる可能性がある。やられるのを防御するために周辺に防空火器を置くようになるわけです

が、一つの例はそれです。航空基地などでは、航空機は地上にある時いちばん弱いわけですが、そこを叩かれるというのも非常に被害が大きいわけです。真珠湾がそうですね。そういうのを避けるために、防空基地の周りに防空火器を置く。弾薬庫の周りも同じというようなことで、そういうのを「抗たん性」と呼んでおります。そういう横軸に各種の機能、縦軸に能力を描いてみました。

左のほうに、「核抑止力　戦略攻撃力等」は対米依存ですよと。右側のほうにいきますが、「全面戦の事態」などは米国の抑止力に依存しますということで、「小規模を越える限定的な侵略事態」以下を、「脅威の認識」としては頭において防衛力整備を考えますと。しかし、「警戒・監視」「情報・通信」といったものについては、平素から高いレディネスを持っていなければならないでしょう。したがって、黒くなっておりますけれども、これは当時何色だったか覚えておりませんが色をつけております。こういう高いものを準備しますと。高いものというのは、黒線で矢印を上げてありますが、矢印の下の線のところが「基盤的防衛力」の考え方です。ほぼ「小規模以下の侵略事態」までには対応できるもの……。

伊藤　対応できるんですか。

宝珠山　「できるものを目標とします」ということです。

伊藤　でも、これだと、この線はここ（「小規模を越える限定的な侵略事態」の上限）に行く？

宝珠山　「情勢の変化に応じて移行」して、作戦準備期間等に急造成して、ここは後ほどいうエクスパンドして、対応する考えですね。

伊藤　ですから、「基盤的防衛力」というのは、黒線のところまで？

宝珠山　を目標にします、これは平素持つもつですから。それで、こちら（「図表1　防衛構想の比較」）でいきますと、「（6）情勢に重要な変化が生じ、新たな防衛力の態勢が必要とされるに至ったときには、円滑にこれに移行し得るように配慮されている」という部分が、（概念図では上向きの）矢印で示されている部分です。ということで、「警戒・監視」とか「情報・通信」というのは、非常に高い状態で維持しますということ。

伊藤　現状も、かなり高くなっているわけですね。

宝珠山　現状はどうかというのは、この黒い部分です。「現状は、『基盤的防衛力』の目標よりも、なお低いんです」ということですね。しかし、従来のものよりも低いということが、こちら（「図表1　防衛構想の比較」）で説明しやすいと申しあげたのはその趣旨です。「図表1　防衛構想の比較」のほうでご理解いただいたほうがいいと思って先ほど申し上げたのが、「基盤的防衛力の考え方」の中であります。繰り返しになりますけれども、「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」の中ではいちばん右のほうにある「警戒・監視」「情報・通信」といったのが、（1　必要な警戒・監視及び情報収集を常続的に実施し得る）に当たるわけです。

伊藤　具体的な数字が入っているわけではないから分かりませんが、概念図としてはこの線（太線）が「基盤的防衛力」だと。

宝珠山　目標ですね。

伊藤　現在のところは、こういう状態であると。

宝珠山　黒いところですね。

伊藤　そうすると、「まだ整備すべき余地がかなりたくさんあるよ」ということでございますね。

宝珠山　とくに大きいのが「情報・通信」、「人的基盤（教育訓練）」は欠員がいっぱいあるということですから。それから、「対潜機能」「防空機能」「対着上陸」というのは、正面重視できておりますのでかなり高いという認識を示しておりますが、「補給（部品・弾薬）」などは大幅に不足です。それから、「抗たん性」などというのは大変弱いということを示しております。

佐道　従来は、このここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限の線）を目標にした整備計画ということで考えていたんですか。

宝珠山　この図ではそうです。先ほどの「図表1　防衛構想の比較」の図でいきますと、この図の右の「全面戦の事態」の中に「通常兵器による事態」というのをこの中に一つ入れています。この図の「主として米国の抑止力に期待」の部分の中にもうひとつ線を入れた形になっています。この図はその部分が入ってないので、私はこちら（「図表1　防衛構想の比較」）を『国防』に書くときの解説としては使いました。

したがって、「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」を国防会議懇談会に説明したのは、こちら（「図表1　防衛構想の比較」）の左側の方を中心にして図解しているわけですね。だけど、こちら（「図表1　防衛構想の比較」）の「従来の考え方」との対比というのが、ここ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）ではちょっと時系列的に説明し難いものになっておりますが、当時の図表そのままを、縮小はしておりますけれどもコピーしたものです。

伊藤　まあしかし、具体的な数字が入っているわけではないから。

宝珠山　具体的な数字を示せということをよく言われますけれども、それまでに「所要防衛力」が出されてないので示せません。しかし、だいたい「基盤的防衛力」というものの五割以上大きいもので、この前、「所要防衛力の一試算」ということでお示ししたのがございますが、数字は申し上げませんでしたけれども、いちばん下に「五、六十万」というのがあったことをご記憶かと思いますが、それとの対応では十八万ぐらいでありますので、少なくとも五割以上高いものをわが国が整備すべき防衛力、すなわち所要防衛力としては考えていたということだと理解しています。これは久保さんも同じだと思います。

それ故に、今まで二十年間も達成できなかったものを目標にしてきた。これでは、防衛力整備計画としてはもう破綻じゃないかということを言っていると私は解しますけれども、じゃあここでいう「基盤的防衛力」なるものを、どう算定するのかということについては、K・B論文には「ありませんね、作業指針にならないんですよ」というわけです。じゃ、どうするかということで、先ほど来言っておりますように「常備すべき防衛力」ということでORの作業など、「具体的に検討してくださいよ」というのを次々にボールを投げるわけですね。で、概念的ではありますが、こういうものを出したと。この裏には、私どもというか実務レベルの作業成果というのがあるわけです。

そういうことを、防衛庁長官が国防会議で説明したのが、このペーパー「P4の第二次長官指示国防会議議員懇談会説明要旨」です。多分、ほぼこの通りにやったと思います。

伊藤　概念としては非常に変わったように見えますが、実態はあまり変わりないと？

宝珠山　持っている防衛力との関係では、この黒いのと斜線の部分だけの差だということですね。

伊藤　だけど、限定的な侵略事態が発生したときには、ここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）までエクスパンドするわけですから、今まで整備すべき防衛力というのはここ（太線）ぐらいまでだとすれば……。

宝珠山　このもうひとつ上（いちばん上の破線）です。

伊藤　だけど、これは「小規模を越える限定的侵略事態」というところまで入っているわけですよね。

宝珠山　こちらとの言葉づかいでは、そうなりますね。

佐道　そうですね。

宝珠山　じゃ、私の説明がまずいのかな……。

伊藤　だから、今までここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）まで目標にしてきたと。

宝珠山　それでいいですね。

伊藤　それを、ちょっとへこませてみせた。

宝珠山　そうです、そうです。

伊藤　ちょっと、目に見えるように……。

宝珠山　先ほどの説明を修正します。そうですね、「通常兵器による事態」……。

伊藤　全面戦になった場合には、これは……。

宝珠山　こちら（「図表1　防衛構想の比較」）のほうも、「全面戦をも含むその他の侵略事態」としていますから、こちら（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）の図のほうでいきますと右側と一致しているわけですね。はい、分かりました。

伊藤　従来のと、ここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）までが目標だけれども、この黒までしかどうしても今まで達成できていないから、「基盤的防衛力」でとりあえずここ（太線）を目標にしようということですね。

宝珠山　はい。

伊藤　結局、これ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）に対して何割なのか分からないし。

佐道　それが、五割程度。

宝珠山　それを示すということは、従来やっていませんからね。

伊藤　そもそもこれ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）は、数値化できないわけじゃないですか。

宝珠山　数値化できないか、できるかということよりも、しなければ防衛力整備はできないんです。やってきたんです。それがいいかどうかじゃなくて、数値化してきた。

伊藤　でも、想定している相手の軍事力が強化されれば、これ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）はどんどん上がっていくということになりますね。

宝珠山　そうですね、それはその通りです。それは、相対的なものですから。基盤的防衛力も相対的なものです。

伊藤　相対的になりますよね。

宝珠山　これは、この図（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）の中で、中ほどのこの線（限定的侵略事態の上限）は相手の能力によって、こちら右側の（小規模を越える限定的侵略事態）の変動によって動くということです。

伊藤　そういうことですね。ですから逆にいえば、実態的には今までとあまり変わらないと。

宝珠山　だから、今あるものとの関係では変わらない。しかし、従来目標としていたものを目標としないことにしたということは、変わるといっているわけです。

佐道　だから、制服は納得したということになるわけですね。「それならば、いいでしょう」と。

宝珠山　はい、そうです。考え方において変わるわけではない。それから、この部分（小規模を越える限定侵略事態）自体を否定したわけではない。従来の考え方（「図表1　防衛構想の比較」）と変わらない。これに至る過程に作戦準備期間をビルト・インしたわけですね。

佐道　これ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）が出た当初は、デタントという状況を背景にはしているけれども、別に脅威がすべてなくなったわけではないということなわけですよね。

■政治の責任を強調

宝珠山　そうです、それはその通りです。だから繰り返しになりますが、久保さんのいう「脱脅威」というのには言葉の上で反発があるわけですが、私どもが作業をやってきたのはこの図（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）で示されるようなものでありますから、先ほどのように「第五幕僚室長、統幕のほうが説明しましても結構です」ということをいっているわけですね。

その際に、政治の責任というものを坂田長官は強調しているわけですから、「それは結構ですよ。国防会議でも、本来政治が負うべきものですが、その政治が負うべき部分をかなり大きくして、与える手段というものを縮めますよ」ということを、国防会議議員懇談会で発言をしている。制服の荷を軽くする、目標とする部分を下げるということで、概念的には妥協が成り立っているわけで、相互に握手できる状態にしているわけですね。

伊藤　理屈としては、非常によく分かりましたけどね。

宝珠山　概念としてはね。ユニフォームのほうは、ここ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」の太線）でやる防衛力の整備の内容について、具体的に何を何機という計画を、別途作業が進んでおりますので知っているわけですね。ただ、伊藤先生がいわれるように従来と差があるかというと、従来やってきたこととの差があるわけじゃない。目標との間に、「目標を諦めますよ」ということが違うだけ。ここ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）の格子（斜線）にしてあります部分についての努力は……。

伊藤　これからも、やらなければならない。

宝珠山　やるといっているわけで、どこもだれも切るといってないわけです。

伊藤　さらに、その上に非常事態があった場合にはエクスパンドする。これは、言葉上の問題ですけど。

宝珠山　そうですね。ということで、理論としては完結しているんですね。

伊藤　私は、理論としてもちょっと変だと思っているんですけれども。

宝珠山　しかし、どこの国の軍隊も大なり小なりこれですよ。

伊藤　まあ、そうでしょうね。

宝珠山　米国にあっては全部（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）全体」）をやっているかというと、そんなことやっていませんから。ただ、冷戦時代は空中哨戒をやっていますし、ミサイルは全部目標を割り当てられるなど、やっておりますけれども、通常は志願兵制の下で、いざとなったら予備役をということをやる、まさにエクスパンドなんですね。エクスパンドの手段について、明確に米国は持っている。日本はそれがなくて、こういうこと（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）をやっているという批判はあります。しかしそれは、「こういう構想をとったら、そういう知恵を出していくのがわれわれの仕事だ」と、私は申し上げたんです。

佐道　それまでは、そういうことをやってなかったわけですからね。

宝珠山　そうです。だから、予備自衛官を増やすというのもひとつの手でしょうということで、ついこの間ですけれども、即応予備自衛官などというのが出てくるわけです。それらについて、従来のように理論的に反発するというのはなかなかできないし、アメリカだって見てみなさいと。これ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」の斜線の部分）が大きいかどうかは別ですよ。ものの考え方としては、私は「全部、どこの国も平素は基盤的防衛力じゃないか」と申しあげている。

海上とか航空になってきますと、「こんなエクスパンドといわれても、航空機をつくるのに五年かかりますよ」というわけです。それらに対しては、「そうであれば、エクスパンドじゃなくて、ここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）まで持ってくるといえばいいじゃないですか。平素から、持っていなきゃならんと主張すればいい」と答える。「しかし、あなたはそういうことをいうけれども、部品どうですか。部品なしに飛んでませんか。弾薬どうですか。弾薬なくて艦艇ばっかりたくさん持ってて、戦力といえますか。ここを高める必要があるというのについてどうですか」といえる。

海上自衛隊についても、同じなんです。機雷なんていうのを持つことになっているんですけど、使える状態で持っていないんです。弾薬を持ち、ドンガラを別のところで持っているわけです。これを充填してやる作業どのぐらいでできますかというと、数ヵ月かかるという。それは作戦準備期間の話じゃないですかと。航空自衛隊だって、今は実戦ミサイルを積んでいますけれども、当時、実弾を積んでないわけです。実弾を積んでなくて訓練していて、本当にいざとなって戦えますかと。できないでしょう。侵攻なりが近づいてきたら、作戦準備期間に実弾を積むことの訓練を整備員にも、また、できれば撃ってみる訓練をやらなきゃ上空で戦闘して負けますよ、相手のほうがそれをやっていたとしたらですけど。

伊藤　やってないわけないです。

宝珠山　それは、まさにこの部分（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」の斜線の部分）じゃないですかと。これは、概念的に一律に切っていますけど、でこぼこがあったっていい話なわけです。各国ともそうじゃありませんかと。

とくによく言われたのは「抗たん性」なんかまさにそうで、「あんた、飛行機ばっかり買ってるけど、飛行機は丸裸じゃないですか。地上にいる間に爆撃されちゃったら、戦力ゼロになっちゃったらどうにもならないですね」という議論をされると、終わりなわけですね。「やっぱりバランスのいいものにしようじゃないですか、それが基盤的防衛力ですよ」といわれると、反論できないですよ。

伊藤　いいですね。

宝珠山　あとは、具体部分でやりましょうということなわけですね。

伊藤　海原（治）さんだな。

佐道　海原さんがいちばん得意になって議論したところですよ（笑）。レーダーなんか、全部すぐにやられちゃうとか言って。

伊藤　もうひとつだけ分からないのは、ここ（P4の第二次長官指示国防会議議員懇談会説明要旨）の中で、「政治が自ら責任を負うべきものだ」という、その政治というのはいったい何ですか。

宝珠山　これは、どこかに書いてあったかな……。書いてあったかどうか記憶しておりませんけれども、防衛庁もひとつの行政機関なわけです。任務を法律によって与えられます。そして、手段を予算によって与えられるわけですね。問題なのは、手段と任務との間に階差があると考えるのと、「いや、ないよ」と考える差が図式的にはありますね。

伊藤　ございます。

宝珠山　任務を与えるのも、予算というか手段を与えるのも、これは立法府ですね。意思決定の国権の最高機関であるべきなんでしょう。それを、今までは社会党みたいなのがいまして、あまり建設的な論議が行われないで来ていた状況が背景にあるわけで、防衛庁は防衛庁なりの論理によって、とにかく向こう五ヵ年ぐらいの目標を掲げて、どこまで行くべきかというのは示さないで五ヵ年間の買い物計画だけを出して予算を取っていたという状況なわけですね。ユニフォーム側といいますか防衛庁側にとっては、立法府から与えられている任務を達成するためには百ぐらい必要だと思っている、しかし、与えられている予算は五十だと、これは困ると思っているわけですね。

それから、この間を調整する現実の情勢を踏まえた任務というのは、それほど階差があると思うのか、ないと思うのか。これは、ユニフォーム・サイドの理論も理屈も聞かなきゃなりませんけれども、そちらだけで決めるというのは軍事優先ですね。そこで、シビルサイドといいますか、坂田長官がいわれている広い意味での安全保障という観点から、行政を総合的に見るべきではないか。それは、最終判断するのはやはり内閣であろうということをこういったんだと思います。

最後は、やっぱり国権の最高機関でしょうけれども、実務的には内閣ですね。それを政治ということで言った。で、政治の判断として一つの参考例を申しあげますと、「差し迫った脅威はありませんね」というもの。その前段だったかと思いますけれども、全面戦に至るようなものというのは……。

伊藤　（P4の第二次長官指示国防会議議員説明要旨資料二ページ）「当面我が国に対する差し迫った侵略の脅威はないと判断されます」という話ですね。

宝珠山　「その他」の部分で……。

伊藤　ここ（「（3）基盤的防衛力」）のところに、「なお、基本的な情勢の変化が生じて、政治が防衛力の拡充強化を決意した場合、それに全く応じられないのではいかがかということで、そのような際に対応し得るよう配慮しております。しかし、防衛力の拡充強化にはかなりの時日を要しますので、そのリスクというものは、常備防衛力を低い水準に押さえた政治の負うべきものと考えます」と。これは、防衛庁の責任ではないよと？

宝珠山　そうです。まさに「政治」というのはそういうことで、内閣を念頭においています。内容というのは、情勢判断を「軍事的情勢判断」と「その他の情勢判断」を総合的に行う任務を内閣が引き受けることにしておりますということで、そのリスクは負いますという意味なんですが。「それを支えるものとして情報部門を充実しましょう」というのは、前からある話ですが、ここでも非常に強調しております。やがて実るのが、情報本部なわけです。

伊藤　社会党は、基本的には「防衛力は不要だ」という考え方だと私は思いますけれども。

宝珠山　そう思っていたんですね。石橋（政嗣）さんなどは、そうです。

伊藤　だから、「政治の責任」といった場合に、それでもう要らないと。向こうが侵略してくれれば、手を挙げればよろしいという考え方ですから。

宝珠山　それは私共はとっておりませんけどね。しかし、社会党政権が当時できてそう言ったら、そこで崩れてしまうから同じですね。しかし、まさに「政治」が「脅威ないんだよ」と判断するなら、それは要らないですね。

伊藤　脅威がないと考えたら、これ（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）は全然、基盤も何もないじゃないですか。

宝珠山　それは実線が下に降りていくでしょうね。それは、政治が責任を負えばいい話ですね。

伊藤　あとは、治安維持のために特別な部隊があればいいと。治安維持も必要ないかもしれないけど。

宝珠山　しかし石橋さんなどは、そんなこと具体的なことは言ってないですからね。だから、石橋さんのことなどは考えておりませんけれども。

伊藤　それも、政治の責任の中に入るんじゃないですか。

宝珠山　それは入りますね。その通りです。

佐道　最大限、日本の安全のためには、所要防衛力で本当はここ（小規模を越える限定的侵略事態の上限）まであるのがいちばん望ましいけれども、政治の判断で基盤的な整備に留めようと。そのリスクは政治、政府が負うべきものだということですね。

宝珠山　そういうことです。

佐道　それが、国防会議議員懇談会だから、そういうふうに。

宝珠山　言ったんですね。繰り返しになるかと思いますが、そのことを先ほどのような手続きの中で、久保さんと各幕僚長など議論される中で大臣は自分で理解していったと言っていいかと思いますが、私どもは当初からそれを考えていたわけです。

伊藤　久保さんは、これでオーケー？

宝珠山　オーケーしたかどうか分からないですけれども、判子を押したということです。

佐道　せざるを得ないということですね。

伊藤　逆さまに判子を押したりしない？（笑）。

宝珠山　だって、坂田さんもオーケーし、幕僚長もオーケーし、事務方もオーケーしているのに、それは不満があるかもしれませんけれども判子は押したわけです。ただ、この中（グリーンのファイル）にも入っているかもしれませんが、解説は自分独自にやっちゃったんですね。

佐道　それで、またちょっと違う波紋が起きたということになりますね。

宝珠山　「そんな解説をされちゃ」というのがあるんです。

伊藤　その解説は、夏目さんが書いたとか言わなかったっけ？

佐道　それは、『防衛白書』で二回目か何か。

宝珠山　その解説は三井（康有）が書いたんですけど、それは先ほどの『国防』の中にあるやつを私が一月に出して、夏目さんは審議官でおられまして、「『防衛白書』を担当しろ」といわれたんですね。誰か手伝いを寄越せという時に、一緒にやっていた三井君が白書に抜擢されたわけですよ。三井君は、「もう『防衛計画の大綱』で全部説明しているから、解説なんか要らねえよ」というようなことをいった、というようなことをいっておられましたが、夏目さんは「いや、そんなことないよ。もう少し詳しくやったらいいじゃないか。たとえば、『国防』1月号に出ていた――といわれたどうか分かりませんが――こういうのを、役所としてきちっとオーラソイズして説明したらいいじゃないか」ということをいわれているわけです。

伊藤　分かりました。ありがとうございました。ちょっとここで切りますね。

宝珠山　あとは、いま申し上げたようなことを、もう少し先のことになりますけれども、「防衛計画の大綱の解説」ということでテープが残っています。

伊藤　エーッ、すごいな。

宝珠山　これは、西廣さんがやったものです。

佐道　それは、すごいですね。

宝珠山　これ、私は聞いてないんですが、当時は公にしてはいけなかったものと思います。たが、もう三十年たっていますからいいかと思いますが、私は起こせないんですよ。

伊藤　お許しが出れば、起こします。

宝珠山　構わないです。責任は持ちます。だって、オープンにしたものですから。私も聞いてないんですけれども、起こしていただくと、いま伊藤先生から質問があって私が答えたものと同じようなことが当時、記者クラブ、それから論懇（論説委員への説明会）の形で、もう少し明解にご理解いただけるかと思います。

伊藤　テープには誰ということが書いてありませんが。

宝珠山　それは、西廣が喋りました。このチャート（「常備すべき防衛力の考え方（概念図）」）を使いながら、外にもっとたくさんのチャートを使っています。この中（グリーンのファイル）にもチャートが入っていると思いますが、それらについては、また後日。分からないところは、私が補足することは可能でございます。

伊藤　それは、ぜひお願いします。

宝珠山　たとえば、こういうチャートを大きくしたものを使いました。

伊藤　地図ですね。（地勢区分）

佐道　北海道……。

宝珠山　何故、十三個師団にしたかということです。黒いところは、二千メートル級以上のものですが、北海道は三つですねと。日本全体が十五ぐらいなんです。しかし、十五個師団は持てないねということで、師団を旅団にする。旅団というか当時、混成団といいましたが、そういうことにするという説明です。これは防空体系です。低空から入ってくるのに対してどうするかということ。

これが、今いった従来の考え方との差を説明した、別の図です。これは、同じくいろいろな考え方。

伊藤　いろいろなものですな。

宝珠山　ここまでか、というようなことですね。言葉遣いがその時々で異なってきますけれども、「三までを目標にしています。四を諦めます」という説明になろうかと思います。事態様相の関係でいきますと、不法行為などの行為にテロなんか全部入っていますから、今この「間接侵略および軍事力をもってする不法行為など」といっているものの内容が変わってきているというだけで、基盤的防衛力の考え方のほうには……。

伊藤　テロが入っているわけですね。

宝珠山　入っているんです。ただ、この時には海外までは入っていません（想定していない）。それから、警戒・監視をどう強化するかというようなこと。これは、先ほどのと同じです。これは、災害派遣のときに困らないようにということで、「各地にばらまいてますよ」ということ。これは、レディネスの関係で「四個護衛隊群でも、常に働けるのは二箇ぐらいですよ」ということ。これは防空……。

伊藤　対潜……

宝珠山　海峡防備はこうやりますと。

伊藤　三海峡封鎖の話だ。

宝珠山　「護衛はこうやります、哨戒はこんな広さでやります」と。これは、防空関係ですね。「低空域はこんなものです。ここらあたりに穴がありますね」と。沖縄と鹿児島との間には、大きな穴があります。だから、ここを通過すると分からない（発見されない）んです。しかし、そういうことは忍びましょうということなんです。

これは、領空侵犯対処ですね。だから、ここにも穴があるんです。同じものかな。これ、さっきのと同じ図が入っています。まあ、こういう図を使って、これと同じであったかどうかは分かりませんが、説明をしております。

伊藤　ありがとうございました。次回を決めさせてください。次回は、七月二十一日午後二時から、一応四時までということにしましょう。

（終了）

宝珠山　昇
オーラルヒストリー

第6回

開催日　2004年7月21日（水）
開始時刻　14：00
終了時刻　16：30
開催場所　政策研究大学院大学
政策研究プロジェクトセンター

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）
伊藤　隆（政策研究大学院大学 教授）
佐道 明広（中京大学 助教授）

記録・有限会社ペンハウス　神門恵子

第6回 インタビュー質問項目

2004年7月21日

1　防衛計画の大綱の策定経緯やその内容については前回お聞きしましたが、防衛計画の大綱の「たたき台」となった「『基盤的防衛力』の考え方（防衛局案）」には「随時見直し条項」が入っていたのに削られたということですが、その経緯をお願いします。

2　防衛計画の大綱の決定にともなって、防衛力の建設、維持、運用などに関して統合幕僚会議議長、各幕僚長などの権限と義務を明確にした「防衛諸計画に関する訓令」（七七年四月）を定められたとのことです。その内容などについてお願いします。

3　防衛計画の大綱に関しては、その内容とともに、別表の兵力算定の根拠などがよく問題にされます。これまでORなどによって、さまざまな事態のシミュレーションや必要な兵力の算定など行ってこられたことから別表の数字も算出されたのだと思いますが、この別表の作成状況についてお願いします。

4　前回も話がでましたが、七五年八月、坂田・シュレジンジャー会談の結果、日米防衛首脳定期協議、有事に対応した日米作戦協力の協議機関設置が合意されます。ガイドラインの作成が具体化していくわけですが、先生は、この日米防衛協力の問題、つまりガイドライン作成の問題にはどのように関与されたのでしょうか。

5　七六年二月、ロッキード事件がおき、政界は大混乱します。この問題は、PXLの導入問題から久保次官の「問題発言」（PXL国産化白紙還元は田中首相、後藤田官房副長官、相沢主計局長の決定と発言）といった事態が生じたのをはじめ防衛庁にも波及します。当時、検察から事情を聞かれた人もいたということですが、航空機課におられた先生には何か影響がありましたか。

6　防衛計画の大綱が決定された直後の十一月五日、政府は毎年度の防衛費をGNPの一％以内と決定します。当時一％に達してはいなかったわけですが、この問題については当時どのように受け止められたのでしょうか。

7　少し前に戻りますが、七六年九月にソ連のミグ25が函館に強制着陸し、亡命を求めるという事件がありました。これは防衛庁・外務省・警察などどこが担当するかという問題も生じ、一方でソ連による奪還作戦の実施の可能性が伝えられ、自衛隊の出動が考えられたとも言われています。防衛局はあらゆる情報が集まってくると思いますが、先生はこの問題に関与されていたのでしょうか。

8　同年十一月、在韓米軍撤退を主張するカーターが米大統領選挙で勝ちました。在韓米軍の撤退は東アジアの安全保障環境に大きな影響を及ぼすと思いますが、防衛庁内ではこの問題はどのように考えられていたのでしょう。

9　防衛計画の大綱の決定後、防衛局内での先生のもっとも重要な仕事はどのようなことだったのでしょうか。

※今回は以上のような問題を中心にお願いします。

■「防衛計画の大綱」の策定（続）

伊藤　前回は、「防衛計画の大綱」の策定経緯とか内容について、だいたいのお話を伺いました。佐道君の質問要綱に、「防衛計画の大綱のたたき台となった『基盤的防衛力』の考え方（防衛局案）には、随時見直し条項が入っていたのに削られたということですが、その経緯をお願いします」と書いてありますが、私はこのことをよく知りませんので。

宝珠山　この前のところからそこに行くのは、ちょっと飛び過ぎるので、もう少し「防衛計画の大綱」の策定過程をお聞きいただくということでよろしゅうございましょうか。

伊藤　そのほうがいいと思います。私も、これを見ていてそう思いました。

宝珠山　その中で当然この問題が出てきますが、これは指示（前回説明した「第二次長官指示」）が出た後の問題です。しかも、半年ぐらい後の話なんです。だから、そのほうが順序として読者にも分かりやすいかなと思いますが、よろしゅうございますか。

伊藤　結構でございます。それでお願いいたします。

宝珠山　この前、チャート等を使いましてご説明いたしましたものは、防衛庁長官が安全保障会議（当時の国防会議）の議員懇談会に説明した内容であります。

伊藤　まだ、正式に国防会議にかかる前の話ですね。

宝珠山　そうなんです。「防衛庁でこういう案を検討しております。皆さんも、ぜひご参加ください」ということと、これを国民といいますかプレスにも公開をして、いろいろなご批判をいただきながら国民の理解度を高めて策定を始めたいというところまでなわけであります。

伊藤　その懇談会では、大臣からいろいろ意見が出るものでございますか。

宝珠山　まあ、あんまり期待はできませんけれども、そういう手続きを踏むということが、坂田（道太）大臣としては重要だとお考えになったということでしょう。

伊藤　具体的な意見よりも、そういう姿勢ですね。

宝珠山　そうですね、そのことを大事にされた大臣だと思います。それ以降は……。

伊藤　すみません、お話が途中で。プレスの反応は、いかがでございましたか。

宝珠山　プレスは、記録ぐらいでしょうかね。

伊藤　そんなものですか。一応、内容は記事にはするわけですね。

宝珠山　ええ。あまり大きな記事になったという記憶はありませんけれども、考え方を示して、「いま防衛庁内で検討が進んでいる」というような扱いだったと思います。ただ、その考え方を防衛白書の第二回目の中にぶち込みましたので、そこではきちんと扱われておりまして、当時の防衛白書の中のメインの一つになっています。

伊藤　それは、出来上がってから？

宝珠山　いや、出来上がる前です。

伊藤　前ですか。

宝珠山　はい。坂田大臣が見えて国防会議にかける、それで……

伊藤　いま「かける」とおっしゃったのは、懇談会ですね。

宝珠山　この前、説明したところですね。それをかけましたのが、十月の末です。翌年の四月二十六日に防衛白書を発表しておりますので、そこの過程ではまだ十月末に決められる「防衛計画の大綱」より半年ほど前でございますので、この『防衛白書』では、大臣が国防会議の議員懇談会で説明したようなことを敷衍して白書にしております。それが大体この前説明したようなのが触りになるかと思います。

そのあと私どもは何が仕事かというと、内閣の閣議決定でございますので、防衛庁の考え方を内閣あるいは国防会議としての考え方になるように根回しをするといいますか、植え付けていくという作業になるわけであります。

伊藤　国防会議の議を経て閣議になるんですか。それとも？

宝珠山　考え方としましては、内閣総理大臣が国防会議の議長である内閣総理大臣に「防衛計画の大綱」について諮問をするという手続きがございます。それに国防会議、議員懇談会も含めてですが、議員懇談会というのは正式の議題にする前の勉強会みたいな感じでご理解いただいたらよろしいかと思います。議員懇談会と国防会議を繰り返しながら、最後に「防衛計画の大綱は、こうあるべきだ」ということを答申する。これは、国防会議決定ですね。個人的には同じですが、国防会議の議長がそれを内閣総理大臣に答申をする。それを受けて内閣が閣議決定して、行政府としての権威づけを終わるということになります。そういう段取りを踏むために、約一年間かかったわけです。

伊藤　そんなにかかるわけですか。

宝珠山　第二指示を出したのが七五年の十月二十九日で、「防衛計画の大綱」が閣議で決定されるのが一年後の同じ日ということになったわけです。

伊藤　その場合には、別表は付いているんでしょうか。

宝珠山　防衛庁から出しましたのは、最終決定されるよりちょっと詳しいものを付けております。

伊藤　それは、最初に議員懇談会に出すときから、もう別表は付いているんでしょうか。

宝珠山　議員懇談会のときには、それは出ておりません。事務当局から……。国防会議は、幹事会とその下に参事官会議という三段階になっております。幹事会というのは事務次官の会議体で、参事官会議というのは課長クラス。当時の大蔵省でいきますと主計官、他省庁の課長クラスというものであります。防衛庁は、防衛課長が参事官を兼ねているわけですが、私どもはそこに出すという形であります。参事官会議でほぼ、おおよその見通しをつけたところで、幹事会に行くときにはもう最終段階の手続きになりますね。

伊藤　決まりですか。だって、もう既に各省庁から出てきているわけですから。

宝珠山　各々の直列で、課長（参事官）は局長、次官への説明を通じて収まり所を踏まえて参事官会議で発言をしているとご理解いただいていいかと思います。そういう参事官会議を繰り返しながらやっておりますが、この中で一つ大きかったのは、何度も申し上げますが四次防の出生自体が不幸でした。しかし、結末の未達成ということで……。

伊藤　未達成は、その前からずっと未達成じゃないですか。

宝珠山　しかし、五ヵ年計画で未達成が幾らか出るというのはありますが、非常に大きいわけでして、四次防はそれが非常に大きかったということですね。計画通りというのはなかなか難しい話でございますが、非常に大きいということが四次防の特徴だと思います。出生があまり幸せなものではなくて、結末のほうも非常に未達成が大きい。

この四次防の達成状況が落ちますと、目標としているものとの間が開くわけですから、表には出てきませんけどポスト四次防でやろうとしている事業計画が大きくなるわけですね。その関係がありますので、それらも含めて十月末から十一月、十二月というのは予算編成でいろいろと議論をされております。したがって、翌年度の五十一年度の予算の編成――予算の編成というのは、いくら四次防で未達成が出るかということと絡んでいるわけですが、その部分を踏まえて、次のポスト四次防の中でどの程度の事業を盛り込むかというのとが並行して進んでおり、それが大枠を

決める「防衛計画の大綱」の内容と絡むわけですね。とくに別表の数字と絡んでいくわけです。

もうひとつ流れておりましたのは、その中でFXとPXも一緒に議論をし続けているわけでありまして、これは後ほど佐道さんの質問には出てきますが、久保（卓也）さんの発言として白紙還元の問題などが出てきて、またここでも……。

伊藤　大揉めですね。

宝珠山　足を引っ張る事態が出てきたりするわけであります。そういうのも、国防会議の参事官会議の中でいろいろ議論されながら進んでおります。ここらあたりで、次官交代が出てくるんですね……あ、違います。次官交代はありません。失礼しました。

伊藤　先生、いま久保さん……。

宝珠山　翌年の四月になりましてから、坂田大臣が西廣（整輝）課長に、「ポスト四次防は、幕僚監部ではなくて防衛局でつくりなさい」という指示を出しておられます。これは若干補足をさせていただきますと、従来の防衛力整備計画は、幕僚監部で主として「これだけ買いたい、これだけ金がかかります」というような計画をつくってきて、それを防衛局で横並びなどを見ながら、多くの場合は縮小し形を整えるということで、原案を幕僚監部の方でつくっているというのが四次防までの流れだったというのを踏まえて、坂田大臣は「そうではなくて、防衛局が主体になってポスト四次防をつくりなさい」という指示をしたのが大きいと思います。

伊藤　実際問題、どうなんですか。データは向こうが持っているわけでしょうし。

宝珠山　そのあたりが、この前の作業スケジュールの中で「第四次防衛力整備五ヵ年計画後の作成日程」という中でお話をしたかと思いますが、「まず、各幕がどういう考え方をしているかまでは聞きなさい」というところですね。「それを踏まえて各幕の案を削るだけでつくる作業ではなくて、それを踏まえて防衛局としてのあり方を考えなさい」という趣旨で、私どもは解しました。

遡りますけれども、そのことは私が着任して間もなくですが、その趣旨を五十年四月十九日にメモで、防衛局内の担当者には指示をしております。

伊藤　誰がですか。

宝珠山　私が。「長期関係部員の作業方針」というメモですけれども、五十年四月十九日と書いてございまして、ちょっと長くなりますが、「幕（幕僚監部）から出てきたのを待って作業をするようなやり方ではなく、自らポスト四次防をつくる心構えが必要である。当面、次のような作業を自ら実施する」という言い方をしております。この考え方でずっと、この前お話をしましたような作業日程でやっておりますので、ここで坂田大臣の考え方と、私が当初取りかかった考え方が、一年後になりますか、上のほうでオーソライズされて下りてきたということで、今までやってきた作業とも符合するという形になってはおります。

伊藤　偶然一致したわけではないんですね。

宝珠山　そういうことではなくて、私の指示で防衛庁全体を動かせるわけではありませんので、西廣課長、局長を通じて上のほうに届いていたと。それが、五十一年の四月五日に大臣の「指示」となって表れたと思います。

伊藤　それについて、各幕はあんまり文句はなかったんですか。

宝珠山　もうそれは言えませんですね、大臣から下りて来るわけですから。また、それを狙ったわけでもあります。でも、それと並行して、この時までの作業というのはひとつは五ヵ年間の事業計画、買物の計画がございます。もうひとつは長期的な防衛力の整備目標という……。

伊藤　今度は個々にですね。たとえば防空なら防空とか、そういうことですか。

宝珠山　防空のためにどういう装備が必要かという買物計画と、もうひとつは長期的に防空能力はこういうものを、対潜能力はこういうものを、というのがございます。

伊藤　もう、ここは相手方のあれもありますからね。

宝珠山　相手方もありますが、相互に相対的なものであるとお考えいただくことで時間を動かせると考えております。そういうものを定める二つの作業が進んでいるわけです。久保さんなどは、目標を定める哲学のほうに非常に関心がある。幕僚監部のほうは、五ヵ年間で何が買えるかというほうに関心が深いわけです。「哲学はどうでもいい、たくさん金をくれればそれでいい」とまで、極端には言いませんけれども、端的にいうと関心の度合いが違うわけです。

伊藤　ウエイトが全然違うんですね。

宝珠山　はい。しかし、私どもは両方をやらなければいけないわけです。それらの作業を並行的にやっていくわけですが、この頃からではありません、初めからですけれども計画・制度で分けて考えようということで、その調整も続けております。

伊藤　五十二年度の防衛予算の取れ具合というのは、影響するわけですね。

宝珠山　まだ五十一年度ですね。五十二年から始まるのがポスト四次防ですから、五十一年の取れ具合が五十二年からの五ヵ年間の計画に非常に大きな影響を与えるわけです。

伊藤　取り残せば、それが今度は。

宝珠山　次の計画で全部担がなければいけませんから、そういう関係にあるわけです。その中で大きいのが、繰り返しになりますがPXとFXです。

伊藤　要するに、航空自衛隊の戦闘機ですね。

宝珠山　主力戦闘機。それから海上自衛隊の、艦艇と並びます主力装備、洋上哨戒機です。

伊藤　両方とも飛行機ですね。

宝珠山　そうです、そうです。しかし、両方とも飛行機で非常に高いわけですね。一機あたりは船よりも安いかもしれませんけど、一機の航空機では成り立ちませんので十数機とかなります。P-3Cですと百機体制とか、F-15も同じく百機体制ということになりますと、すぐ一兆円になりかねないわけですね。一機百何十億とする飛行機でございますので。そういうプロジェクトも並行して進んでいる。こちらのほうに幕僚監部の関心は強いわけです。何機買えるか。防空能力がどうかという哲学の部分は、「適宜で」ということにもなりかねないぐらい強いわけですね（笑）。そういうのが並行して進んでおります。

並行して進む中で、『防衛白書』を五十一年の四月二十六日、これは参事官会議ですけれども、発表は六月四日ですから――。二十六日などに、国防会議などで審議しておりますが。

■坂田長官時代の『防衛白書』

伊藤　この『防衛白書』は、閣議決定……閣議了解ですか。

宝珠山　了解ですね、白書は決定ではないと思います。手続き的には同じようなことをやらされますので、事務方の負担はあまり大差はありませんが。そういう形で、ポスト四次防という大きなプロジェクトの考え方といいますか、それを『防衛白書』の五十一年版に。これは、中曽根白書に続いての二回目ですけれども、この中に反映させて。

伊藤　これは、坂田さんの考え方ですか。だって、『防衛白書』はしばらくなかったわけですから。

宝珠山　坂田さんは、「防衛の考え方を国民になるべく広く示して理解を求める。国民の理解と支持なしには、防衛力にならない」という考え方が基本的にありまして、その国民に理解を求める材

料を提供するものとして白書を出すということになって、これも確か坂田さんの発想だったと思いますけれども、「同じような内容でもいいんだ。毎年、必要な部分は改定しながら出せばいいじゃないか」ということで、中曽根さんのように一回出してこっきりじゃなくて、この時から毎年出すことを慣行にしまして今日まで続いております。

伊藤　ずっと続いていますね。

宝珠山　そうですね。これは、やはり国民の理解を深める上で大きかったと思います。

伊藤　この時の白書は、夏目（晴雄）さんあたりがお書きになっていますか。

宝珠山　夏目さんは、第三回ですね。大綱をつくった後の白書です。この時は、伊藤（圭一）さんなのかなあ。

伊藤　ああ、伊藤さんかもしれませんね。伊藤さんが白書の話をされておりましたので。

宝珠山　伊藤さんは中曽根白書にも関係していると思いますが、これにも関係しているかもしれません。ちょっと正確ではありません。といいますのは、伊藤さんは「防衛を考える会」を担当しておられまして……。

伊藤　世話役ですね。

宝珠山　実質的には私どもでやりましたが、その続きでおそらく白書もやっているかと思います。ただ、執筆をするとかいうことではありませんけれども、担当審議官としては伊藤さんじゃなかったかと思います。

伊藤　その内容の執筆は、宝珠山さんなんかもおやりになるわけですか。

宝珠山　いや、この前も申しあげたように、私は詳し過ぎて読者に分かりにくいということですから（笑）、やっておりません。もっと、おおまかに理解している人たちがよいということで。話が飛びますけれども、担当は外の省庁から来た人がやっている場合が多いんです。そうすると、素人の目で見て分かる形のものということになるわけですね。

伊藤　ほんと、そうですね。

宝珠山　十数年間やっていますと、専門家になっちゃうんですね。よく、「おまえの常識と国民の常識は違うんだよ。常識になるまでに、おまえは十年かかっているじゃないか。それで議論しても通用しないよ。内部はいいけれども、そこのところは外と会話する時には心得なきゃ」と言われたり言ったことが何回かありますけれども、『防衛白書』はそういうものなんですね。だからといって、要部を全部素人分かりするようにしようとすると、これまた大変なんですね。そこらあたりは苦労するところだと思いますけれども、お役所の難しさではあります。しかし、何回かやるうちに、そういうのも常識化して来て読みやすくなるのだと思います。

■「防衛計画の大綱」と予算

伊藤　五十一年度の予算が決まるのと、「防衛計画の大綱」が決定されるのとは、どういう関係になりますか。

宝珠山　五十一年度の予算が決まることで、事業計画の向こう五ヵ年間の土台ができるわけでございますね。その上にどんなものを積み上げるかということでございますので、事業計画のほうはそこから作業の土台ができた。今までやっていた作業を、土台を少し修正することによって成形をするという形になるかと思います。

伊藤　時間的には、だいたい予算が決まったところで国防会議決定をするというふうになりますか。

宝珠山　いや、五十一年度予算自体は、年末に閣議で決められて議会に入って、まだこの頃は議会で審議中でございますので最終土台にはなってないわけですね。といっても政府の予算案になれ

ば、政府の土台としてはここで確定と見るわけですけれども、論理的にはまだここでは並行的に議会の審議を見ながら、次の計画の土台が変化した場合に備えるという作業はございます。といいますのが、単価などが動きますと経費計画にすぐ響いてくるわけです。

伊藤　しかし、そういうことは為替が変われば、全然どうにもならなくなるじゃないですか。

宝珠山　そうなんです。変動為替相場に入っていますからね、そうなってたから大変なんです。

伊藤　大変でしょうねえ。動きがものすごく激しいじゃないですか。

宝珠山　そうなんです。大きいプロジェクト、FXなどというのは最初はほとんどが為替なんですよ。だから、これは大変なんです。そういう問題も、向こう五ヵ年間の経費計画の規模には影響して来ます。

伊藤　しますよね。

宝珠山　それも頭に置きながら、財政当局とは接触を並行的に続けております。この頃になりますと、次の大綱をどうするのか、事業計画も併せて国防会議にお諮りするのかというようなことを区分けしていかなければならないわけですが、正確には分かりませんが、ここではもう「事業計画は防衛庁内に留め、将来目標を定める『防衛計画の大綱』を国防会議でご決定いただこう」というような方針が出ているように思われます。その「防衛計画の大綱」の素案を六月五日に作成して、課内の審議をしております。課内というのは、防衛課内。まあ、課長のところで、ということでございましょうか。それから、十四日には防衛局内で審議をし、十七日に各幕僚監部との調整、二十四日には大臣に中間報告をしております。そういう形で、大体ここで事業計画をちょっと置いて、「防衛計画の大綱」を安全保障会議に持ち込むということで作業に入っております。

そこで、先ほど伊藤先生からございました手続きをしておりますが、昭和五十一年七月十二日に内閣総理大臣から国防会議議長に「防衛計画の大綱について（諮問）」という形で。

伊藤　今度は、正式な諮問なんですか。

宝珠山　そうなんです。先ほど申しあげたような準備がほぼ整って、諮問しても恥をかかないぐらいの準備ができたというのを見計らいまして、ということになろうかと思いますが、「昭和五十二年度以降にかかる防衛計画の大綱について、防衛庁設置法（昭和二十九年法律第百六十四号）第六十二条第二項の規定に基づき諮問をする」というのを出しております。こんな一枚紙のものですが、これで正規に国防会議は「防衛計画の大綱」の審議に入るという段取りになっております。

伊藤　そこは、さっきおっしゃった参事官会議……。

宝珠山　それから以降が、七月になりまして国防会議の開催準備などをやっておりまして、国防会議が諮問をされたということを報告し、審議をする国防会議があり、次官級の幹事会がありということで進んでおります。

ここで、久保次官から丸山昂次官に七月十六日に代わっております。伊藤防衛局長が就任するという形になります。すなわち、この段階でほぼ内容的には防衛庁内でかたまり、政府部内でも見通しがついて来たというところで次官交代、ということでご理解いただいていいかと思います。したがって、内容は久保さんの時代にかたまって、手続きの段階で丸山さんは防衛局長から次官になって、伊藤さんがまた防衛局に戻って局長に就任されるということになります。そういう見通しがついたところで、先ほどの「基盤的防衛力整備の考え方」という「防衛計画の大綱」のたたき台を、私どもは作って出しております。これは、秘文書で出しておりますが、それを今までも国防会議の参事官会議などに説明をしているわけですが、改めて正規に「防衛局試案」という形で

出して、だいたい全貌を示しております。

今度は並行的になりますが、この頃から五十二年度の予算要求を準備しなければならないわけです。これは、「防衛計画の大綱」すなわち「基盤的防衛力整備の考え方」ではなくて、これに基づいてどんな事業を――飛行機をどうするか、艦艇をどうするか、戦車をどうするかといった整備計画を、予算要求の項目として挙げなければいけないわけです。その作業が並行して進んでおります。

伊藤　しかし、その予算要求は、国防計画の別表との関連はどうなるんですか。

宝珠山　それは、並行審議ですね。そういう別表があり、具体的な概算要求……。

伊藤　でも、別表は決定されるんですか。

宝珠山　それは案として、この（「基盤的防衛力整備の考え方（防衛局試案）」）中について入るわけです。まだしかし、決定には至っておりません。しかし、同様に五十二年度予算もまだ決定ではありませんから、並行して進んでいくと。

伊藤　五十二年度予算は、大蔵に出すのは夏ぐらいですか。

宝珠山　八月末ですから、この段階で「基盤的防衛力整備の考え方」防衛局試案というのは五十一年の七月二十四日に出しております。もうこの頃は当然ですが、概算要求の具体的な作業も行っていなければならないわけであります。

伊藤　同時に、これ（「秘・基盤的防衛力整備の考え方（防衛局試案）」）につく別表も？

宝珠山　これには別表が付いております。だから、事務当局同士は両方知っているわけです。

伊藤　でも、もし予算がうまくいかなかった場合には、国防会議の決定のほうが先になったら……。

宝珠山　そういう齟齬が生じないように運営していかなければならないのが、私どもの仕事なわけですね。両方を見ながら調整していっているわけであります。

伊藤　しかし、時間的には非常に切迫していますよね。

宝珠山　まあしかし、予定通りなんですよ。

伊藤　たとえば、議会で修正されたりしたら。

宝珠山　その時には、五十一年度予算は国会で通っておりますね。だから五十二年度の問題なんですが、五十二年度の土台となる部分について事業計画と、以降の長期的なものの考え方というのが並行して進んでいるわけですね。そういうのをやりながら、当然その中にはＰＸ、ＦＸというのも並行して進んでおります。もうひとつは、日米防衛協力の問題も並行して進むことになりますが、それらをやっております。

そんな中で、並行して進む中で事業計画の一部だけを取り出して、八月三十一日だったと思いますが、五十二年度の概算要求はとりあえずやっております。こちらとの関係を一応整合させているわけですね、防衛庁内としてはですよ。で、進んでおりまして、そういうことをやっている時に、九月六日にミグ25が函館に強行着陸してまた一騒動あるわけです。これは、夏目さんなどがうまく……。

伊藤　これはだけど、国防会議の決定に影響を与えるというようなものではない？

宝珠山　与えるか与えないか、その時は分かりませんねえ。質問事項にありますように、この時に防衛出動でもかけるようなことがありますと、もうこれは根底から崩れますね。だって、これは平和時を前提にしますと――平和時という言い方はしておりませんが、「差し迫った脅威はないよ」ということで物を考えようということであります。もし、この事件が落着したような形でなくて進むようですと、これは緊張関係が一挙に高まる可能性もあるわけですね。

伊藤　低空でやって来た場合には、捕捉できないと。これが亡命

だったからよかったですけど、そうじゃないとしたら防衛力整備の非常に大きな欠陥という問題になるわけですか。

宝珠山　ええ。ただし、この「基盤的防衛力整備の考え方」の中には、それはもう既に織り込み済みです。それはプロの中では当然、前々から指摘されているわけですが、手段が適当なものがないということで整備ができてなかったということでありまして、ああいう事態が有り得るというのは北海道だけではなくて、あちこち――と言ってはいけませんけど、数カ所はあるんです。これは今もあります。

伊藤　これは、地形上の問題？

宝珠山　電波の直進性がある限り、どうしようもないですね。それを解消するのが、上から見ればいいじゃないかということで、いまはＡＷＡＣＳ（早期警戒管制機）、あのときにはＡＥＷ（早期警戒機）――小型の飛行機ですけれども、レーダーを背中に積んで上から見るということでカバーしようとしたわけですね。そういうことがあって、「基盤的防衛力整備の考え方」には既にプラスしていますね。ちょうど、いま北朝鮮が日本の防衛力整備を大変支援してくれておりますと同じような現象を（笑）、当時のミグ25は結果的には後押しになりました。

伊藤　これは、夏目さんは大変だったようですけれども、宝珠山さん自体はこの問題には直接には？

宝珠山　私は隣の部屋で拝見して。これは、運用の問題ですから（笑）。

伊藤　夏目さんの話は、非常におもしろかったです（笑）。

宝珠山　ご苦労があったと思いますが。そういうのが直接的には関係はありませんが、支援を受けながら九月の段階では大きな問題点を絞り込みまして、残されたのが海上自衛隊の護衛隊群の数を、目標を四個護衛隊群にするか、五個護衛隊群にするかという問題が揉め続けました。

もうひとつは、結果的にＧＮＰ一％という形になるわけですが、「経費の規模を示さなくていいのかね」という問題が残っておりました。それらについては並行して審議をしようというようなことで、十月になりまして……。

伊藤　それは、一％問題というのは庁内の問題ですか。

宝珠山　いや、一％の問題は財政サイドから来る要請ですね。それは、後ほど触れさせていただきたいと思います。

十月の初めには、だいたい「防衛計画の大綱」の姿が、「基盤的防衛力整備の考え方」などを参考としながらおおまかに出てまいりまして、法制局の審査といいますか、法制局の見解を十月五日には取っております。十月九日には大綱について国防会議の幹事会を開き、十三日に国防会議を開き、十八日にまた幹事会を開いております。最終的な詰めを行って、この間に一％問題と、四、五群についての審議が何回か繰り返されております。四、五群の問題については、「国防会議の審議にお任せしましょう」ということで、最終の国防会議で坂田大臣が軍事的に五群の必要性を主張し、大平大蔵大臣が「さはさりながら、財政的に負担が重い。四群でいいのではないか」ということを発言されまして、結果的に四群という別表の数字で落ちついております。

伊藤　そういうふうに、国防会議に――正式のですね――任されるということは、有り得るんですか。

宝珠山　困ってくると、責任を分散する。上のほうに分散していただくと、下のほうは軽くなるわけです。

伊藤　でも、それはシナリオが……。

宝珠山　シナリオをつくるのが、この参事官会議ということでいかがでしょうか。

伊藤　分かりました。

宝珠山　だから坂田大臣の発言も、大蔵大臣の発言も、参事官会議なりでいろいろと打ち合わせをしていたとご理解いただいてい

いと思います。

伊藤　ある意味では、やっぱり芝居ですね。

宝珠山　一種の芝居と言わざるを得ないかと思いますけれども、要求側、ユニフォームの軍事的な考え方について、誰が最終的に裁定するかということでありますと……。

伊藤　防衛庁長官が、とにかく主張したと。

宝珠山　ええ、防衛庁長官は、やっぱり政府の中では軍事的な立場を主張するポストだと思いますね。そういう軍事的な立場で防衛庁長官をサポートするユニフォームの考え方を、国防会議で主張をする。しかし、最終決定はやはり国防会議といいますか、内閣総理大臣ですから、その判断を仰ぐということで振り付けたと思われますが。それに対して、軍事的な観点からの反論は他の閣僚はできるわけではございませんので、大蔵大臣が「四群でいいのではないか」ということは、あまり明確な軍事的な理由ではなくて、財政的な理由からご発言になって、それを採択する。

伊藤　それを、総理が採決するという？

宝珠山　他の大臣も、「それでいいんじゃないか」という発言はあったと思いますけれども、国防会議として四群を採決するという形になっております。

　そういうことで若干の変化はございましたけれども、この前、第二次長官指示の時に説明いたしました部分の、内容的には「基盤的防衛力整備の考え方」という形で国防会議に出し、ほぼ同じような形で最終の行政府としての意思決定に至ったということであります。

■防衛費一％枠了解の背景

伊藤　さっき話題になりました一％というのは、まだこの時は議論で、結論が出たわけではないんですか。

宝珠山　その関係について、ちょっとご説明させていただきます。これは「防衛計画の大綱」に至る過程で、事業計画と物の考え方と二つの課題があり、物の考え方についてはこういう形でいいだろうということで合意が得られるわけですが、「この物の考え方で、従来のような五ヵ年ごとに経費倍増というようなことにならないと言えるのか」と。これは、誰もそうだと思いますね。事業計画が明確に示しているわけではありませんから答えられない。これについて、何らかの経費の指針を示せというのがあるわけです。

伊藤　これは、財政当局からですね。

宝珠山　財政当局といいますか、一般的に大臣としてもそうだと思います。この中で、坂田大臣が参考にされたと思いますのは、「防衛を考える会」で『朝日新聞』ご出身の荒垣秀雄さんが、正確な表現ではありませんけれども、「国民の理解、支持というのはやはりＧＮＰ一％程度のところの経費については、サポートがあるんじゃないか」というようなことを、考える会の報告書の中でもお書きになっております。そういうことで、坂田大臣は一％程度というのが頭にあったと思います。

　私どもとしましては、事業計画を持っております。これは、各幕僚監部も合意した上での事業計画でありますが、この事業計画と別途、経済財政計画でも五ヵ年間ぐらいがあるわけですが、ここでのＧＮＰの成長率とを合わせて見ますと、ＧＮＰ一％におさまることを確認できたわけです。したがって、未来永劫一％でいいかどうかというのは分かりませんけれども、いま持っている五ヵ年計画、それから政府としての財政経済計画での見通しの中と合わせますと、両方とも仮定ですけれども、政府が持っている見通しの中では整合する確信を持っているわけであります。それをある程度、政府部内で理解されるというのが、五十二年度予算要求にかけての折衝の中で、国防会議としては参事官会議の中で論議されて、おそらくコンセンサスとしてある……。

伊藤　国防会議の中でですか。

宝珠山　参事官会議ですね。

伊藤　それは、一％以内ですか。

宝珠山　だから、防衛庁で考えている事業の中でやろうとするものについて、当時の経済企画庁が描いている経済計画の成長見通しの中の一％を防衛費に配分する、という仮定に立てば、十分おさまるという確信を持ちました。

伊藤　一％以内ということですか。一％程度？

宝珠山　その時は、明らかに一％以内です。しかし、だから以内という表現でいいというつもりはありませんよ。一％問題は、ご質問の項目にあったと思いますが。

伊藤　後にあります。これは、「防衛計画の大綱」が決定された後ですよね。

宝珠山　閣議決定の文書になりますのは後ですけれども、そのことを審議するのは以前からなんです。これを審議しましたのが五十一年十月二十二日午後ですけれども、国防会議、参事官会議で次のようなやりとりがございますので、メモですけれどもご参考に。ごく正確ではないんですが、読ませていただきたいと思います。

　このときには幾つかの問題を議論しておりますが、経費問題ということで西廣防衛課長が、「坂田長官は、当面を入れれば一％は止むを得ない」……と考えているということだと思います。「国防会議了解事項とすることについてはオーケーだ。ただし、同時点の決定では困る」

伊藤　同時点？

宝珠山　同時点というのは、「防衛計画の大綱」と一％の国防会議了解事項とするのを同日では困るということを、十月二十二日の最終段階で申しあげております。

　これに続きまして、「こんなことを念頭においての決定ではないのだから」と言っております。「こんなこと」というのは、「一％以内あるいは一％程度にするために、防衛計画の大綱を定めたわけではないよ。そういう誤解を受けるのは困る」という言い方だと思います。それに続けての補足になりますけれども、「同時決定では、どうしても二つを結びつけられる」という言い方をしておりまして、「あわせて五十二年度予算の場合にでも、決定することには異存がないが」と言っております。

　すなわち、ここでは「防衛計画の大綱」だけにしておいて、五十二年度予算が十二月なりに決まりますね。そのときに向こう五ヵ年間なのか分かりませんが、「一％というのを入れるのには異存がないよ」ということを西廣防衛課長が発言しておりますが、これは西廣課長が言っているように、主語を「長官は」としておりますが、すなわち言い換えれば「防衛庁は」であり、さらに実質的には「私ども作業グループは事業計画を踏まえ、政府の経済計画を踏まえて了解できる。しかし、一％の中で防衛力整備あるいは防衛体制を考えているんじゃないよということは、しっかり確認してほしい。誤解を受けるような決定は困りますよ」ということを言っております。

伊藤　いまのお話の中で、いちばん最初に「当面は、というのが付けば」というのがございますね。

宝珠山　そうです。未来永劫に一％だと、もっと困りますからね。

伊藤　いま、未来永劫になってるじゃないですか（笑）。

宝珠山　いやいや、そんなことはありませんよ。これは後日になりますが、この一％問題は、これまた変な話ですが、西廣さんが局長になって、私が防衛課長になって、二人でまたこれを解消するんですよ。まあ、因縁ですがねえ。

佐道　大変だったわけですけどね。

宝珠山　それは、つくるのに大変でね。これまた解消するのが大変で、誰にも喜ばれないことをやっているんですよ。しかし、これは給料を貰っていましたから（笑）。

佐道　給料分の仕事というには、ちょっと大変ですけど（笑）。

宝珠山　若干、他のほうの発言も入れたほうが誤解を招かないかと思います。岩崎主計官が「同時が困るというのも分かる。しかし、なるべく早い時期・特別国会の中では答弁できるようなもの、大綱決定後の答弁方針は決めておくべきだ」ということで、西廣課長が「五十二年度の時でもいいじゃないか」と言ったのに対して、「いや、それは困る。しかし、同時でなくてもいいよ。特別国会までにははっきりしてほしい」ということを言っております。

伊藤　それは、参事官会議での合意？

宝珠山　これは、審議中の発言ですね。

伊藤　ですが、審議して合意になったんですか。

宝珠山　結果的になりましたから、一週間遅れで決めることになるわけですね、一％の問題は。

伊藤　しかし、決めたというのは政府のレベル？

宝珠山　政府のレベルで決定する過程における課長クラスの会議であります参事官会議で、いまの議論の発言の趣旨を、私のメモでありますけれども申し上げているわけです。

伊藤　それが、そのまま政府決定に？

宝珠山　反映されるわけですね。したがって「防衛計画の大綱」の決定後、一週間後にまたいろいろと手続きをやって、一％の決定がなされるという形になっております。

伊藤　閣議での決定ですね。

宝珠山　両方ともそうです。

伊藤　閣議での決定というのは、どこが定義するわけでございますか。

宝珠山　これは、国防会議が……。

伊藤　国防会議の答申の中に入っているわけですか。

宝珠山　そういうことになります。これに対して、「西崎」と書いてあるんですが、どこの西崎さんか分かりません。

佐道　西崎さん？

宝珠山　はい、私の字が綺麗だから（笑）。西廣ではないんです。「予算編成方針の時ではどうかと思う」と。だから、西廣課長と同じですね。時期的には十二月ぐらいを頭においた発言がございます。山田さん――これは国防会議の筆頭参事官で、大蔵省ご出身の方です。「騒がれたから決めるというのも困る」と、また戻しているわけですね。やっぱり早めの、主計官と同じような。時期は言っておりませんが、「予算編成まで持っていくのはだめだよ。特別国会の時には、答弁方針が明確であるようなものが欲しいな」ということでありましょう。山田さんはトータルをとりまとめる立場でありますから。

それに続けて西廣課長が、「次の三つの考え方があろう。一つは、本来出すべきものではないがうるさいから出す（笑）。二番目として、五ヵ年の事業計画を積み上げてから出す。三番目として、今後検討し、予算編成方針なりで出す」ということを発言しております。

伊藤　考え方としてですね。

宝珠山　そうですね、三つあろうと。また山田さんが、「遅らすとすれば、何かのきっかけが必要だ。『主要事項の範囲』の決定を延ばしておくことも考えられる」と。主要事項というのを別途決めることになっておりますので……、これについて補足的に説明いたしますと、「文民統制の立場から、年々の予算で重要事項については国防会議に諮りなさい」というものが既にあるわけです。それを「防衛計画の大綱」ができたところで、修正版を出すことを既にその日の参事官会議の前段のほうで審議しておりますので……、これを遅らせておいて、それと一緒に決めればいいじゃないかということを言っております。

内海（倫）さん――これは事務局長ですが、「一％以内ということで、官房長官談話でも先取りする必要はあろう」と、とにか

く何らかの形で先行させなきゃいかんよということで、西廣氏が主張する予算編成方針の「十二月ぐらいでいいじゃないか」というのに対して、議長の立場で前に持ってくるという趣旨のご発言だと思います。西廣課長が、「いま同時というなら、『程度』と書けといわざるを得ない。どうせ先取りされることですよ、と伝えることになるのかな」と。ちょっと明確ではありませんが、そういうことを言っております。科学技術庁からの参事官が、「後だと追い込まれます。前にやったらどうでしょうか」と。外務省の参事官が、「先ではまったくだめだ」と。

伊藤　「先」というのは？

宝珠山　「先」と書いていますから、あらかじめ決めておいて、大綱を決めたようにとらえるということですかね。同時でも困ると西廣課長が言っているのに対して、外務省のほうは「前では困る」という言い方ですね。いや、私のメモですから、現場でどう言ったかというのは正確ではありませんが、そういう言い方をしています。それから、「科学技術庁のほうで後だと言ったから、先ではもっとだめだ」という言い方を。「後だと追い込まれるということで、前にやったらどうか」と言ったのに対して、「前」というのを「先」と言い換えたのだと思いますが、「先ではまったくだめだ」と否定しておりますので、ここは科学技術庁と外務省とのやりとりになっているかと思います。

　山田参事官が、「一％に基づいてつくった大綱ではない。しかし、実際の運営は一％以内ということになろう、ということとするか」ということで、打ち切っております。

伊藤　いまのお話を伺っていますと、一％問題というのはその前からずっとあることはあるんですね。

宝珠山　ですから、「防衛を考える会」の時から荒垣秀雄先生がそういうことを言っておりますので、坂田大臣の頭では繰り返し考えていると思います。それから、作業をやっております私どものほうは、事業計画としても個別の具体的な単価をかけた事業計画を持っておりますので、これはやろうとするときに一％以内でおさまるかどうかという検証もやっているわけですね。それらが、いつ、どういう形でというのは、説明するときりがないですが、最後の要約の部分というのはこういう形で。

伊藤　どういうタイミングで、それを公にするかという問題ですね。

宝珠山　ということに集約をされていたことになります。基本的には防衛庁の立場は、「経費枠に基づいて、防衛政策を決めているんじゃないよ、防衛事業計画を決めているのでもないよ、ということは明確にしてほしい」というのが要請であり、片方は「国会で騒がれちゃ困るよ」とか、「財政当局としては、あまり無原則に要求されても困るよ」というのがあるのだと思います。そういうことで、防衛庁の言うように経費枠の中で防衛体制を考えているということは、やめようと。しかし、何らかの経費的な指標も出さなきゃいけないということで、時間差をおくということで来ているということだろうと思います。

伊藤　さっき言われた「当面の」というのは、ずっと残るんですか。

宝珠山　「当面」は、ずっと付きます。「当面」は入れないと、受けられません。もっと防衛体制を経費枠で押さえるということに等しい……。

伊藤　この枠の中で入れようということになります。

宝珠山　ということを明確に出しかねないわけですから、それは困ると。防衛庁は受けられない。

伊藤　「当面の」という場合の「当面」は、五ヵ年ぐらいのことを念頭に置いたわけですね。

宝珠山　それについて申し上げますと、こちらに差し上げてございますが（ＧＮＰ一％以内の「当面」の意味）、まさに伊藤先生がおっしゃるような質問が出てくるわけです。冒頭に出てきたのは、一枚目の下のほうにございますが和泉（照雄）さんの中で、

「昨年十一月決定の当面一％の『当面』の意味について、三原長官は十月十三日の衆議院予算委員会で、大体昭和五十五、六年までとの発言をされ、その後十月二十五日の衆議院内閣委員会では、七、八年先か十年先になってもよいと修正されているようでありますが、真意は一体どこにあるのか、明確に御答弁されたい」という質問となって表れてきております。

これについては、同じく二枚目の後ろのいちばん最後、三原朝雄国務大臣の答弁がその部分についての答えになっていると思います。「ＧＮＰ一％の問題についても総理からお答えがございました。私が五十五、六年のことを言い、あるいは十年というようなことを内閣委員会で言ったことが御指摘でございますので、ここで解明をいたしたいと思うのでございますが、『当面』という御質問がございました。これにつきましては、政府において現在実施をやっております経済計画、この終わるのが大体五十年代の前半期、五、六年ということになりますから、一応の当面の見通しはそうであろうということをお答えをいたしました。十年という点につきましては、それは現在組んでおりますＦＸ、Ｆ-15なり、Ｐ-３Ｃの予算というようなものが実際に将来一％以内で賄えるのかという御質問がございました。それに答えて、現在のようなわが国の経済状態の推移等見てまいりますれば、十年後においても一％以内で賄い得ると見通しを立てておりますというお答えをいたしたのでございます」ということで、そのやりとりが上のほうにございますけれども、先ほどから申し上げておりますように事業計画のほうで非常に大きなＦ-15とＰ-３Ｃになるわけですが、当時から進んでおりますので、「それでもあんた、一％でおさまりますか」ということを、野党としては当然聞いてくるわけでございます。

それに対して、閣議で決めた「当面というのは五、六年を頭に置いております」というのが一点、しかしＦ-15、Ｐ-３Ｃというのはもっと長い期間にわたるわけですが、「それでも一％におさまりますかね」という質問に対しては、「いまのような経済情勢でいけば、それはおさまります」ということを申し上げたということで、二つを切りわけて答弁しております。これは何度も出てまいりますけれども、三原大臣も明快にお答えになっていただいております。私どもの答弁資料もそうなっているわけでございます。

伊藤　非常によく分かりました。

■「大綱」の防衛局試案

宝珠山　それで、質問のほうに戻っていただくのがいいかと思いますが、質問項目１の「防衛計画の大綱の策定経緯云々」ということの関係ですが、これはこちら（「秘・基盤的防衛力整備の考え方」）をご覧いただけますか。これは秘文書で、残っているかどうかわかりませんが私が保管をしていて、この前お持ちしました資料集の中には原本が入っております。防衛局試案というのは、内容的には大綱になっていくものの、たたき台のたたき台かと思いますけれども、そういうものを出したということの中であります。

伊藤　こういう文書は、宝珠山さんのレベルでおつくりになるわけですか。

宝珠山　それはそうです、課長なんかつくりませんよ。何か問題がありますか。

伊藤　いやいや、私はどのレベルでこういう文書をおつくりになるのかなと思ったものですから。

宝珠山　まあ、そうですねえ……。

伊藤　実際に課長のレベルになったら、もう文書をおつくりになるということはあまりないのでしょうか。

宝珠山　そういう課長もいるかもしれませんけれども、私がお仕

えしました課長は、私に任せてくれております。また、その程度ができないのを持ってきたら回りません。それは人選するときに考えていると思います（笑）。課長が四十代になりまして、こんなことをやってたら持ちませんですよ。それは、体力的にも持たないと思います。私も、課長になって以降は何もやってませんよ。

伊藤　そうですか。そうすると、本当の政策決定のプロセスの中で大事なのは、課員なんですね。

宝珠山　そうですよ。それは、どなたにお聞きになっても同じだと思いますが、上司は意見具申を受けて、それをうまく使えるかどうかですね。それから、部下の意見をうまく引き出せるかどうかというのがあると思います。いまは、もっとそうなっているんじゃないでしょうか。命令で動かなくなる部下が多くなってきています。叱っちゃったら、動かないのがね（笑）。

こんなこと申し上げることではないかもしれませんけれども、叱るというのは教育なんですよね。しかし、いまは叱っちゃったら寄りつかなくなる人がいるらしいですよ。叱る意味が理解できなくなっているんですかね。ひとりっ子政策の中で、うまくおだてられながらドーッと来ちゃうと、叱られるということが過去の人たち――私どもの世代とか、もっと下も含まれるかもしれませんが、――のように意味がよく理解できない育て方が進んでいるんでしょうかねえ。

佐道　叱られたことがないのが急に叱られて、どうしていいか分からなくなる。

宝珠山　はい、そういうことなんだと思います。

伊藤　叱られるというのは、日常普段のことで叱られたことがございましたけどね。

宝珠山　伊藤先生は？（笑）

伊藤　われわれは、よく叱られていましたよ。

宝珠山　いやいや、それはそうですよ。私どももそう。それで反発をしたり、その中からエキスを取って成長する面がありますよね。いまは、なくなりつつあるという面はあるようです。

元に戻りますが、体力的にも課長以上になったら過去の遺産で食っていますよ。

伊藤　だけど、課長はそういう部員をフルに動かすという重要な役割ではあるわけですね。

宝珠山　ですから、未経験でポンと行って出来るわけじゃないですね。

伊藤　自分はもう、これをやって？

宝珠山　自分でもやれるくらいな力があって、初めて審査もできますしね。それはこの中でも、「西廣課長が、これはこっちの表現がいいじゃないか」と、そういうのはございますよ。しかし、おっしゃる意味が全体をどう課長が作成したかというのであれば、それはもう課長クラスにはないです。

伊藤　やっぱり役人の世界と学者の世界の違うところでございまして。

宝珠山　そうかもしれません。戻りますけれども、四十九年十二月にこんな計画表（5．防衛庁における防衛諸計画の体系の二枚目の別表）をつくりますけれども、これは全部議論はしていますけれども、当時の私がやっているわけです。で、これに従いながら進めているわけです。

伊藤　文章もつくり？

宝珠山　そうです。作業指示も出していくわけです。課長の名においてですね。各幕僚監部へも課長の名において出し、さらに高めて防衛局長名にし、次官名にしてずっと浸透させていくわけですね。そういうのをつくったところで大臣がまた、指示を出すことによってさらに固めていく。で、防衛庁のコンセンサスにして他省庁に持っていくというのを運転しなければいけないのが、先任部員かその前ぐらいのクラスですね。

伊藤　偉い人が動かしているわけではない？

宝珠山　動かしているわけですけれども……。

伊藤　いや、そうでしょうけどね。実際の具体的なものの考えとか、発想とか、そういうことはやっぱり三十代？

宝珠山　三十代から、四十代も……四十に至らないところですかねえ。それから、戦闘パイロットは四十代の前までが限界なんですね。輸送機の、乗っちゃって自動操縦に切り換えて遊んでおられるというのがあれば、ちょっと別ですけどね（笑）。ウォッチしているだけぐらいはいいでしょうけれども、戦闘パイロットは限界が早いんですね。

伊藤　理科系の学者なんていうのは、そういうところがあるでしょうね。

佐道　そうでしょうね。

宝珠山　全部ではありませんよ。決められたことを、「この中のこれをやれ」という命を受けてやるのは、それはロートルでもできますよ。しかし、道のない所にレールを敷きながら谷間を縫ったりしながらやる仕事というのは、できないですよ。

伊藤　政策官庁の中の、そのまた政策部門ですね。

宝珠山　はい、そうです。それが、こういうことなんですね。

伊藤　実際に動かしていくのは、そういう人たちだというわけですね。

宝珠山　はい。それは、上のほうを見ながらやる面はありますよ。しかし、譲れないところの原則はありますね。

伊藤　ですから法律があって、役所はそれを施行していく。これは全然違いますよね。

宝珠山　それは、私は中央官庁の課長の仕事じゃないと思います。出先機関の局長や課長というのはそれがあると思います。話は飛びますけれども、人事をやるときにも「この人は、政策部門に向かない」という人は現場にボンボン出して、回ってもらうよりしようがないですよ。

佐道　執行機関であれば、そもそもこういう文書（秘・基盤的防衛力整備の考え方）は必要ないわけですからね。

宝珠山　その通りです。それをやれるのは、体力的にも柔軟性もあり、かつ適性があるんじゃないでしょうか。法律の枠の中でものを考えることしかできない思考法の人というのは現場しかしようがないです、どんなに成績がいい人であっても。とくに成績がいいほどそうかもしれませんし、私の短い経験でいきますと、法律系統にそういう人が多いんです、枠の中で考える。

伊藤　新しい道をつくろうということは、考えない？

宝珠山　不得意なんですね。考えないのかどうかじゃなくて、「こうなっているじゃないか」ということから抜けられない。これは、いわゆる成長しつつある防衛政策の中では不向きだと、私は申し上げていたんです。だから、政策官僚たれと。前にも申し上げたと思いますけれども、枠をとっぱらわしてまず原点から考えて、その次に枠をはめてみる。枠をとっぱらえるものならとっぱらうし、少々動かせるものなら動かすにはどうするかを考える、ということなんですね。

伊藤　私、宝珠山さんのお話を伺っていて、いちばん最初に長期計画のそもそもからやって歴史を振り返ったと。あそこは非常に印象的でございました。

宝珠山　あそこが原点ですし、いまもそうなんですね。

伊藤　あの時に、ありとあらゆる問題提起をしているわけですね。

宝珠山　そうです。それは、度々やってきておりますね。立場、立場でありますけれども。

伊藤　ですから、政策官庁の政策官庁たるところは、まさにそういうところだろうと思ったんですけれども。

宝珠山　それがとくに必要だったのが、この数十年だと思うんですね。しかし、なかなか政府も議会も動かないで、ついこの間ま

で来ていたわけですが。それでも、一九七六年の大綱というのは、それまでのを一つにまとめて土台をつくって今日まで来たということで、日米協力の問題も、これができて初めて進めましたし、いろいろな問題が……。

■防衛局案の「随時見直し条項」

伊藤　すみません、途中で変なところで切ってしまいまして。いちばん最初の「随時見直し条項」の話のところから。

宝珠山　「随時見直し条項」というのは何だったかというのを要約的に言いますと、この（秘・基盤的防衛力整備の考え方）の第4の第3項に、「この大綱は、前提とする国際情勢の変化等に伴って随時再検討せられるものとし、必要ある場合はすみやかにこれを修正する」ということを投げたんですね、国防会議の事務局に。これに対して、最終案の中には入っておりませんが、「こんなのは閣議決定で、いつも見直しながらやるというのは当然のことだ」ということで入っておりません。

しかし、私がここの中に入れたのは、第4の第2項もそうなんですけれども、今までのような整備計画ではなくて、中長期の期限を定めない「防衛計画の大綱」という新しい制度を安全保障会議で決めるわけですね。これは、「考え方」となっておりますように、何年から何年までという期限をつけてないわけですから。それが一つ。

もう一つは、第1「国際情勢（略）」で、「略」と書いてありますが、述べておりますのは、「差し迫ったわが国に対する侵略の脅威はないという前提に立てば、この考え方でいきますよ。その判断が適切であるかどうかは、あなた方の責任ですよ」というのがあるんです。防衛庁は政府の一員ではありますけれども、「政府として立法府も含めて国家の意思決定機関が責任を負うべき問題で、国防任務を全て防衛庁に持って来られても困るよ。負わされてもできない」ということが、込められているわけです。そういうことが他の決定事項――経済計画にしましても、財政計画にしましても、通常ですとあると思いますが、全部期限付きなんです。防衛計画も、四次防までは期限付きなんです。だから、随時見直し条項が必要であるかどうか論点がないんですね、多分。と、私は考えた。

伊藤　それは、途中で変更が有り得ることは有り得ますけれどね。

宝珠山　それは当然でしょうけれども、それはどんな計画でも見通しをつくってやるんでしょうが、この「防衛計画の大綱」の前提としていることは異例のものではないですかと。そういうことを考えれば、随時見直し条項を明確にして、すなわち決定者が異例のものであるということを自覚する根拠となることを期待したのですが、それは入らなかったということであります。

伊藤　当たり前のことだ、という意味ですか。

宝珠山　ええ、「それは当然のことだから」と言われたように記憶しています。

伊藤　分かりました。これは、「五次防」と打っているわけではないんですね。

宝珠山　五次防じゃない。タイトルのように五次防じゃないんです、もうこの段階では。ものの考え方を、「防衛計画の大綱」として決めるということについてコンセンサスができた後に、「じゃ、おまえはどういうことを考えているか」ということで、「じゃ、こういうものです」ということで出したわけですね。

もう一点、ここでついでにつけ加えさせていただきますと、第2項です。これは、先々までなかなか見通しの難しい将来のことまでを含んだ「防衛計画の大綱」というのをつくるわけですが、期限のないものをつくるわけですが、「それをうまく実行していくためには、防衛庁だけではできません。関係省庁の協力が必要

ですよ」ということを、こんな形で表現したものなんです。速記録に残るように読ませていただきますと、「関係省庁は、相互に密接に協力して、総合的な安全保障政策の遂行に資するため各種非常事態に関する研究を計画的に実施し、その研究成果を必要に応じ国防会議に諮る等により、各年度の施策に反映させるよう努力することとする」ということで、防衛庁以外の関係省庁に義務を……。

伊藤　安全保障政策に関する考え方を出せ、という意味ですね。

宝珠山　そうです。当時は、有事法制なんていうのはみんなこう敬遠しているわけですから。それから各種非常事態というのも、災害についても「何か起こったら防衛庁に頼めばいいや」ぐらいのことなんですね。そういうことを考えて、防衛庁だけに持って来られては困ると。これはもう分かっていますが、そういう言い方をしては困るから、「関係省庁は……」ということで期待を国防会議決定において義務づけることを意図したんですが、これは何の議論もなく落ちちゃったんですね。

伊藤　落ちちゃったんですか。

宝珠山　みんな、嫌ですからね（笑）。こんな義務を負うのは嫌ですよ。これ、誰も金をくれませんよ。全部、給料の中でやらなきゃいかんですよ。

佐道　確かに。

宝珠山　給料は、仕事をしたからくれるわけじゃないんです。時間を過ぎるほうがくれるんですよ（笑）。伊藤先生の世界は、論文を書かなきゃくれないかもしれませんが、役人の世界は、ポストについて時間を過ぎれば給料をくれるんですよ。成果の尺度、ないですよ。他から課題を持って来ても、議論をしておけば時間は過ぎるんです。イエスと言って引き受けたら、自分で背負うだけなんですよね。これはね、公務員制度の――永久に解決はできないでしょうけれども――難しい問題です。みんな、嫌な仕事はなるべくしないほうがいいです。やって接待してくれてもいいですよ、実入りがあれば。権限が来ればいいですよ。取締りの権限とか、予算配分権とかね。

非常事態について一所懸命研究をして、自分たちがやらなきゃならない仕事だけ引き受けるのが、この非常事態に関する研究なんですよ。だから、有事法制の研究は進まなかったんです。

佐道　研究をして、「わが省は、こういうことをしなければならない」なんていうことを言いだしたら、「おまえは何を言い出すんだ」みたいな感じになりますよね。

宝珠山　ということですね。わが省に仕事だけ持って来てね。

伊藤　予算がついて来ればいいじゃない。

佐道　予算は……。

宝珠山　予算を取る部分については、各省やっているでしょう。たとえば、警察庁は銃が欲しいとかいうのを全部やるわけですよ。しかし、これは非常事態を考えたのではないですよね。警備の中でやればいいと考えたわけです。外務省についてもそうでしょうね。

伊藤　原子力発電所が危ないので警備をするということになれば、これは非常事態じゃないですか。

宝珠山　だから、そういうこと（国家の非常事態の一環としての警備等）を考えてなかったんでしょうねえ。まあ、考えていたかもしれません。

伊藤　だけど、これはちょっとある程度現実的な問題になってきたということで、要するに警察官の増員とか……。

宝珠山　それは、この件とは別にやったわけですね。だから、ここで言ったのは、そういうことも含めて……。

■総合的な危機管理への対応

伊藤　総合的になんですね。

宝珠山　ええ、関係省庁は。すなわちこれは国防会議で、「トータルとしての危機管理政策の整合性をとりながらやることを考えましょう」というのが、頭にあるわけです。まあ、そういうことをやりましたけど、入りませんでした。

しかし、これで終わりとするのは私どもの目的にかないませんので、質問2に関わる話でありますが、お配りしました「防衛庁における防衛諸計画の体系」、これはこの前にもお話ししたものですけれども、これをつくることでカバーしようと考えたわけです。

この狙いは二つあります。一つは、軍事専門的な立場から防衛庁長官を補佐する制服の人たちの意見をシステマティックに汲み上げていくシステムを設けようということがあります。そこで出てきたものを防衛庁長官は、この図（二ページ・別表）でいきますと右側の点線の外（左側）ですね、これは、防衛庁の外なわけですけれども、外（他の国の機関）に適切に意見を具申して反映させるというシステムをつくろうとしたわけです。

図のほうで見ていただくほうがいいと思いますが、「統合長期防衛見積り」というのは、統合幕僚会議長がだいたい二十年先ぐらいを頭におきながらものを考える。何故二十年かというと、兵器の開発などにはやっぱり十年かかるんです。そうすると、研究開発の「ゴー（GO）」を掛けて十年後ぐらいに物が出てくるわけでございますので、研究対象の期間としては二十年後ぐらいを頭におきます。例えば、「将来、この技術が進んでいったら無人機が使えるようになるだろうか」とか、根本的に戦略、戦術が変わってくるわけですね。

伊藤　そうですね。

宝珠山　そういうことを長期的な観点から、戦争について最も詳しいことを期待されている自衛官として意見をまとめろというのが、いちばん上です。

それを踏まえて、向こう五ヵ年間ぐらいのさらに詳細な見積りを自らつくりなさいというのが、二番目です。

伊藤　これは、相当たくさんの情報を集めないとできないわけですね。

宝珠山　それはそうですね。それが仕事だということです。その見積りで、もしいまの大綱では――ここでは基盤的防衛力の考え方みたいなものですけれども――だめだというなら意見を挙げなさいと。良ければ下に降りていきまして「能力見積り」という形になる。「能力見積り」というのは非常時の戦闘様相をいくつも想定してみて、持っているものを戦わせてみて、これでいいのかどうかということでもあります。

伊藤　シミュレーションをやれ、ということですね。

宝珠山　はい。まさにここらあたりはシミュレーションの、一回目か二回目ぐらいに申し上げたオペレーションズ・リサーチの手法を用いてやりなさいということを、訓令の中では明記しております。

そういうのを踏まえて、「中期防衛力整備計画」――これは買い物計画です。施設であれ、人であれ、装備であれ、部品等々を買う計画に反映させること。それを踏まえて「年度業務計画」と言っておりますが、予算要求の元になりますものをつくって、予算を取得して、長いものでは五年もたちますけれども「現有防衛力」という右側の上のものが出てきます。これを、「その年度に何かが起こったときにはこう対処しましょう」という詳細な計画をつくるのが「防衛、警備等に関する計画」ですが、これは運用計画です。

伊藤　言ってみれば、作戦計画ですね。

宝珠山　まさにその通りです。それをつくって、うまくいく場合もあるでしょうし、うまくいかない場合もありますが、「能力見積り」とも照合しながら、また不都合があればそれを次の年度の「業務計画」に反映させる。あるいは、「中期防衛力整備計画」に

反映させるという形で、フィードバックさせながら運営していくということを考えたわけです。繰り返しになりますが、ここで議長がこうしろ、幕僚長がこうしようということを定めることによって、今までは庁内における立場が必ずしも明確でなかった議長の地位を明確にしたというのが、この訓令の大きな成果だったと思います。

伊藤　高めたわけですね。

宝珠山　まあ、高めたんです。当時、ある新聞記者が参りまして、「この訓令の主たる狙いは、統幕議長の権威をしっかりしたものにしたんだな」と言って来られました。もう亡くなられまして、第二次世界大戦で従軍していたような方ですから、旧軍の運用システムなどを私どもよりはるかにしっかり知っていた方でしたが、そういうことは書いてありませんけれども、見る人はきちっと見てくれたんだなと思いました。

伊藤　ここでの内局の役割は、どういう？

宝珠山　ここで、こちら（一ページ）のほうの中で、「統合長期防衛見積り」については「長官に報告する。」それから、「統合中期防衛見積り」については「長官の承認を得る。」「中期能力見積り」については「長官の承認を得る。」となっていますが、この長官というのは、内局を通じて長官ということで理解していただくことになると思います。ここで、「長官の承認を得るにあたって、防衛庁は内局を通じなくてもいいじゃないか」という見方をする人もいるようでありますが、それはそもそも内部部局というものについての誤解によるものと思います。でも、「年度業務計画」になりますと、これは長官の承認を得たり、長官に報告したりしますけれども、それ以上に予算要求の原資料になるわけです、根拠資料でありますので。「防衛、警備等に関する計画」も、「長官の承認等を得る」ということになっております。

「長官に報告する」というのが、「統合長期防衛見積り」なわけですが、これは長官に二十年後のことを説明して承認を得るというような性格ではないというご理解で、勉強の材料ということでよろしいのかと思っております。先ほどの図（二ページ）に帰りますと、「統合長期防衛見積り」からストレートに防衛計画の大綱に意見具申はしてないんです。あくまで向こう五ヵ年間ぐらい。五ヵ年間ぐらいですと、まあ見積り得る……通常の人が作業するときには五ヵ年間ぐらいは考えますので、そこを考える場合の参考資料的な位置づけにしてあるのが特徴かと思います。それから先はかなり不確定になりますので、それは庁内で処理します。庁内で承認という形ではなくて、もっとソフトな形で取り扱えばいいじゃないかという考え方になろうかと思います。

伊藤　まだこの段階では、実際アメリカがこの前のイラク戦争でやったみたいなピンポイントで目標を非常に狭めてバババーッと爆撃するなんていうのは、あるいはミサイルを撃ち込むなんていうようなことは、まだ想像できてない？

宝珠山　この時にそういうことを出来ているかどうかということよりも、「そういうことが見通せるようになったときに、日本の防衛体制にはどういう影響を与えるかということを常々、少なくとも五年ごとには報告をしろよ。それが、あなた方の仕事ですよ」ということを、ここでは言っているわけです。五年ごとだけでいいのかというと、それはもっと頻繁にやったって構わないわけですけれども、「さし迫った脅威がないということを頭におきながらすれば、五年ぐらいごとに先を見てどうか。今まで通りで良ければそれでよし、悪ければ変えろということを提起しなさい」ということですね。

伊藤　いまはアメリカが圧倒的な軍事力の強さを持っていますから、それと同盟しているわけですからあんまり心配はないのかもしれませんけれども、もし敵性な国家がアメリカと同じような能力を持った場合には、これは大変なことですね。

宝珠山　まあ、やがて来るかもしれませんですね。

伊藤　どうせ技術が拡散するに決まっていますから。

宝珠山　だって、何とかいうところ（米国のロスアラモス研究所）が、ネット経由のメールで極秘のものを送っているとかいうじゃありませんか。

伊藤　そうですね、信じられないようなことが起こりますね。

宝珠山　いや、アメリカにしてもそうなのかなと思って。

伊藤　抜けているんですね。

宝珠山　本当かどうか分かりませんけれども、ニュースというか報道によりますとね。

伊藤　事実だとすると、とんでもない話ですね。

宝珠山　あるいは、もうその程度に核の技術なんていうのは一般化しているのかもしれません。プロの世界では、常識になっているのかもしれません。「秘」に指定しているのがおかしいのかもしれませんよ、逆にいうと。

それは置きまして、「このシステムというのは、おまえが考え出したのか」と言われると、これは前にも申し上げたと思いますが米国等のシステムを参考にしておりますので、これは国際水準というか、世界水準のものなんです。

佐道　なるほど。

伊藤　およそ期間も、だいたいそんなものですか。

宝珠山　そうです。人間ができることというのは、そんなものでしょう。米国のほうは、もっとサイクルが早いんです。ここらあたりは（二ページの表の左側）大統領交代ぐらいの時にやっているわけですね。ここらあたり（二ページの表の右側）は、毎年やりかえているわけです。毎年やりかえるということは、長期見積りや中期見積りをやる能力が人間パワー的にも大きく、予算も投入しているのだと思います。それは、研究所がたくさんあることでもお分かりいただけますように、政権についてなければ研究所で同じことをやっているんですね。名前は違いますよ。名前は違いますけれども、同じことをやっているわけですね。「イラク戦争もうまくいかなかったから、こうすべきだ」というのは、このあたり（二ページの表の真中）なんでしょうね（笑）。基本方針、戦略方針を変えるべきではないかというのが、外にいる研究所からも出ているということであります。

伊藤　大統領が代われば、それがまた国防省に来る入るということですね。

宝珠山　そういうことですね。日本ではそういう毎年やる程の能力はありませんけれども、形式は整っているんです（笑）。

今度は、いま申しあげた「実効あるものとするための努力」というのが、私どものまた一つの仕事でありまして、統幕議長の下にこういう長期見積りをやれるような人材を配置しないで命令を出すのは、これは無責任なことでありますので、統合幕僚会議事務局の充実すなわち人材の配置、人材の配置のための定員増というものを手掛けます。

それからもうひとつ、先ほど伊藤先生が言われた、たくさんの情報を取り、分析できるように、これはやはり、情報に人材を配置しないと形式だけになりますので、その情報能力の向上ということに力を注いでいきました。一つが情報本部になって、ついこのあいだ実るわけでありますね。それから統合幕僚会議の人数も今や五倍とか、もっと多くなっているかと思いますが、一挙に増やしたって質が伴いませんから、逐次増強をしていっているということで、形式的に整うとともに実質的にも少しずつレベルアップしている。ただ、米国の水準まではとても行かないと思いますが、近づける努力はしているということです。

伊藤　人材の問題がありますよね。

宝珠山　そうです。これはもう、避けられません。

佐道　それまでは、陸・海・空の各幕僚監部にしても、統幕に人

材を送るより自分のところの幕僚監部に人材を集めようとする傾向があったわけですね。

宝珠山　まあ、それを証明しろと言われますと困りますけど、そういうことです。

伊藤　それはしかし、いまでもそうなんじゃないかな。

佐道　それを少しこちらにも、統幕のほうにも自由にさせてという。

宝珠山　統幕に権限を移しますと……。

伊藤　やっぱり人も移るんですか。

宝珠山　各幕も自分のところで抱えていたのでは……。

佐道　移さざるを得なくなる。

宝珠山　自分のところの意見をいかに通すかが目的ですよね。こっち（二ページ）を通してやったほうが、はるかにいいですよ。このシステムでいけば。

佐道　上からのオーソライズがあってやるほうがいいですね。

宝珠山　それは、お分かりいただけると思います。そう理解すると、優秀なやつをここ（統幕）にも持って行くようになるんじゃないでしょうか。だから、権限を与えてその枠組みも広げるということを通じて、広まっていくのだと思います。

　このとき考えていたわけではありませんが、いまや統合幕僚長にして名実ともにトップにしようじゃないかというのが出てきておりますが、ようやくそういう時期に来ているのかと思います。もしそうなってくると、各幕は自分のところで抱えている、自分のところのいちばん優秀なのを持って行って、そちらを通じて自分のところに水がたくさん流れるように努力する、それは当然の思考法だと思います。しかし、その時の水の流れというのは自分から稼ぐということではなくて、統合のスクリーンがかかっておりますので、我が儘度が緩和されていると理解してよろしいんじゃないでしょうか（笑）。

伊藤　いまのは、いい表現ですね。

宝珠山　あとは今度はユニフォームの世界から離れて、ソフトウエア、いまでいう有事法制をどうするかということで、一つは先ほどの（秘・基盤的防衛力整備の考え方）関係省庁の協力のことも考えて動きだすわけであります。やがて福田さんが取り上げてくれるようになるという努力、これは、ここの中には出てきませんが、防衛警備等に関する計画の枠組みを与えるものを、この時には非常に不十分なものだというのは理解しておりますけれども、それを有事法制の研究ということで内閣のオーソライズを得ながらやるということになっていくわけであります。

■日米防衛協力小委員会

宝珠山　質問が一つ飛びますけれども、日米防衛協力というのはその中の一環として取り入れたわけですね。こういうのをつくったとしましても、実戦経験のない人たちばっかりになりつつあるわけです、この前もお話ししたかと思いますけれども。そうすると、やはり実戦経験を持っているところの知恵をどう吸収するかということになりますと、日本の場合、米国しかないわけでありまして、これをオーソライズしてくれたのが日米防衛協力小委員会でございます。

　確か八回ぐらいだったと思いますが、憲法上の制約とか、非核三原則とかいういろいろの枠組み制限はありますけれども、「研究するのはいいよ」というところまでではありましたけれども進んだわけです。しかし、研究することが許されれば、その研究成果をこの中にどう反映していくかというのは、これは知恵の問題ですね。内政干渉と考える必要はないわけです。したがって、ガイドラインなどに結実していきますけれども、ガイドライン等としてオーソライズされた部分の周辺、それに至る過程における収

穫物というのはたくさんあるわけでありまして、それが緒として防衛警備等に関する計画の中に吸収され、さらに能力見積りにも反映されるわけですが、やがて形式的には先般の有事法制に結実していくわけであります。

併せて、これらを防衛庁だけでやるわけにはいきませんので、国民の理解を得るということで『防衛白書』を毎年度刊行というのも行い、その（日米共同研究等）中の一部を、オープンにしていいものを『防衛白書』の中に盛り込んでいくような形になって来ております。実態について自信が持てるようになれば、情報を出せる。情報が多くなるほど一般の理解も高まるという効果を期待したわけでありまして、全部かどうかは別でありますが、やっぱりそのような方向に進んでいったと思います。

もうひとつは、そういうことを通じて非武装・中立などを主張している人々が対抗できなくなっていったのは大きいですね。それからこれは坂田大臣が、国民の理解を得るということが重要だということで発想されているわけですが、国民の理解というのは無理解者が減っていくということでありまして、空想論が減っていくわけでありますが。

■兵力の算定などにORを積極活用

宝珠山　質問項目の3番目に戻ります。兵力の算定などについてORなどを使ったのか、というご質問ですが、これは第二回目以降繰り返し申しあげておりますように、「オペレーションズ・リサーチの手法を使いなさい」というのを、何度も出しております指示「常備すべき防衛力の検討」の中でやっております。その手法というのはまさに客観的な手法を使うことを指示しておりまして、やっております。ただし、この内容をオープンにするというわけにはいかないということであります。

伊藤　それは、ORを学習させるという必要があるわけですが、これは防大だの、幹部学校だのでどんどんやったわけでございますか。あるいは、特別な？

宝珠山　陸・海・空・統幕にオペレーションズ・リサーチ部門が、当時小さいながらございました。そこに人間を逐次増加していって、これの実態を整えていきました。

伊藤　実戦的な教育ですか。

宝珠山　OJTですかねえ。OR学校をつくるといったって、そんなものはできるわけではありませんから、その中に適性のある人間を注ぎ込んで行って鍛えてもらう。一部は米国に行くというようなことがあります。米国に行くということでいきますと、先ほどの日米防衛協力の研究などで一緒にやるわけですが、ハワイに行って一緒にやることで能力をアップして帰ってくるわけですね。向こうは、はるかに進んでおりますから。そういう形で人間と機会を増やすことで、機会というのはチャンスを与えることで能力を高めていって、質問項目の3番のシミュレーション技術を4番の日米防衛協力と相互に絡めながら、すなわち米国の進んでいる部分を吸収しながら進んで来ております。

■「久保発言」「ミグ25」問題等

宝珠山　質問項目の5番目ですが、これは久保次官が当時の関係でご発言になったということで一騒動ありますが、私はこの時は長期計画をやっておりまして、児玉（良雄）先任部員が担当されまして、当時の経緯などを非常に手際よくまとめられる作業をやっておりました。私は当時、航空機課の経験がありましたので、若干裏側は見えるわけでありますけれども、そこらあたりまで私に絡むことはありませんでした。

しかし、このときに企業の方の参考人招致というのがあったり

して、参考人になられる方が、「どんなふうにやったらいいんでしょうかねえ」というようなことで、相談というか、意見を聞きに見えたことはございます。それに対しては、「隠し事をしてもしようがないんじゃないですか。あなた方がやってきた信念に基づいてご発言をされれば、よろしいんじゃないですか。偽証することによって捕まるほうが、はるかに企業的にもマイナスでしょうし、個人的にもマイナスじゃないでしょうかね」というようなことをお話ししたのは記憶しております。

それから質問項目の6番目は、先ほどの一%問題ですが申しあげました。

伊藤　ミグの問題も、さっきお話がございました。

宝珠山　ミグの問題は夏目審議官がとりまとめて、ごく限られた方が関わって処理されました。

伊藤　そういうふうにおっしゃっていました。非常に関わる人を少なくしたと。

宝珠山　はい、限定しておられました。限定しないと、おそらく関係者が勝手なことを言いだしてしようがないんだと思いますが。

伊藤　この事件で、いざとなった場合に各省庁が協力しあわないと大変なことになっちゃうと。しかし、協力するのは非常に難しいということも、逆に分かるわけですね。

宝珠山　そうですね。とくに警察は警察の関心事項、外務省は外務省の関心事項というのがあるのだと思いますが、いずれも戦闘機とかについて能力があるわけではありませんし、それを取り返しに来るかもしれないというようなことについても、対応能力があるわけではありませんから、そのあたりのことを考えますと限定しておく以外になかったのだと思います。

たとえば、何も知らなくても「ソ連の戦闘機について見たことがある」とか、そういうことを自慢話にする人もなきにしもあらずなわけですよ。そういうのは困るんですね。だから航空機の関係者にしても、限定した人たちを派遣して調査したはずですし。

伊藤　結局、アメリカにかなり依存するわけですよね。

宝珠山　自衛隊、防衛庁だけではどうにもできないから、というのがあると思いますが、しかしそれ以上に米国のほうは、いい材料が来たということがありますから。これは依存じゃなくて……。

伊藤　向こう様から……。

宝珠山　ええ。一杯奢ってもらってもいいんじゃないでしょうかねえ（笑）。

伊藤　そうですね。

宝珠山　それは、ジェンキンスさんも同じじゃないですか。どんな情報を持っているか知りませんよ。知りませんけれども……。

伊藤　何をやっていたのか、分からないですからね。

宝珠山　しかし、生き残っていたということがありますのでね。優遇されていますし、相当の資料を提供しているということはありますよね。だから、これは弱みだと思いますが、その過程で得られたものをまたここで吐き出してくれれば、価値があるのかもしれませんが。

伊藤　そうですね。もっとも、そのために日本は食糧援助か何かやっていますからね。だから、アメリカから相応のお礼ぐらい言われてもいいと思うんですが。

宝珠山　そのあたり、難しいですねえ。ある意味では、拉致なんかという犯罪よりもはるかに重い罪を犯している人ですから、これと取引きされても困るんですよね。普通の国家だったら、許せないですよ。司法取引きとか何とか言っていますけれども、逃げ道としてあそこしかないんでしょうけどね。

伊藤　そうでしょうね。どれほど重要な情報を持っているかということですよね。

宝珠山　そうです。まあ、それを評価したことにしてやるのかど

うかですけれどもね。といったって、やっぱり裏切り行為ですからねえ……。まあ、それは置きまして。

伊藤　これは、安全保障の問題としても非常に大きな問題ですね。

宝珠山　はい。その点は外務省も含めてですけれども、あのことをあまり前面に持っていって要求するというのは、日本は国家として、この犯罪をどう考えているかと問われる。犯罪というのは逃亡ですけれども、単なる逃亡罪だけじゃないんですよね。戦線から離脱したという意味ではないんです。向こうに行って生き延び続けて、優遇されて来たということの意味をどう考えているのか。国を売っているんですよね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　少なくとも米軍を売っているんです。

伊藤　ただ、日本の国民の中に、国を売ることについてそれほど深刻な罪意識がないんですよ。

宝珠山　だから、それが問題、それが問題なんです、外国から見ると。

伊藤　これは、驚くべきことですよ。

宝珠山　そのことを国民がというのはまだいいんですけれども、ミスター小泉がどうかなんです。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　ミスター小泉、外務省がおかしいんじゃないかと、私は申し上げたいんです。ミスター小泉まではいいんです、個人なら。ミスター・プライムミニスターがそうなってないかというのが、外国から見た日本の姿だと私は思います。拉致に目がくらんでませんか、ということです。

佐道　「国もいろいろ」と言うんじゃないですか（笑）。

宝珠山　そうなんです。しかし、「国もいろいろ」なんでしょうけれども、世界の中で何番目かに入っている国として、物を考えてもらわなきゃいかん中で、その中の「いろいろ」の中では、日本はあまりにも特殊。

佐道　そうですね。

伊藤　それは前からそうなんですね。「人命は地球より重い」と言った頃から、もう既に。

宝珠山　それは、若干修正をしましたけれどもね。

■在韓米軍撤退問題と「大綱」との関係

宝珠山　それから、七六年十一月に在韓米軍撤退問題をカーターさんが持ち出すわけですが、これはまさに大綱との関係で、国際情勢認識を変えるものではないかという観点から問題になりますし、議論はしております。

伊藤　内部で？

宝珠山　はい。

伊藤　これは、国会でも問題に……。

宝珠山　はい、問題になっておりますね。古い答弁資料の、「昭和五十二年三月　第八十国会の答弁資料の追加」というのが出ております。いま言われるようになることが想定されておりまして、答弁をつくっております。

　これは私がつくったんでしょうけれども、問いとして「『在韓米地上軍の撤退』は、『大綱』の『情勢の重要な変化』に当たるのではないか」という質問を用意しております。これもやっぱり逃げなんですけれども、こんなところで「大綱を修正」なんて言えませんからね。答弁資料としては、「先般の防衛計画の大綱は、『安定化のための努力が続けられている国際情勢およびわが国周辺の国際政治構造』が、『当分の間、大きく変化しない』ことを前提としている。しかし、福田内閣総理大臣とカーター大統領との間の共同声明において、『大統領は、米国の意図する在韓米地上軍の撤退に関連して、米国が韓国と、また日本とも協議の後に

当半島の平和を損なわないような仕方で、これを進めていくことになろう旨、述べた。大統領は、米国が韓国の防衛についての約束を引き続き守ることを確認した』と述べている。したがって、在韓米地上軍の撤退が、朝鮮半島における安定を損なうような形で行われることはないと考えられるので、このことが大綱が前提としている国際情勢の基調に変化を与えるものとは認められず、情勢の重要な変化にあたるとは考えていない」と、五十二年三月二十五日につくっております。

これは、こんなことで答弁をしております。しかし実際は、内部でどうやって在韓米軍の撤退を食い止めるかというのを、坂田長官以下いろいろと努力をされておりました。で、こういう形に持っていく努力をされていたのを記憶しております。

伊藤　実際に、この時にやったわけではないでしょう？

佐道　だから、最終的にしなかったんです。

宝珠山　潰れたんですよ。

伊藤　潰れたんでしょう？

佐道　できなかったんですね。

伊藤　いまのほうが、もっと深刻じゃないですか。

佐道　いまは、在韓米軍の一部を移動することがもう決まりましたからね。

伊藤　移動するだけではなくて、兵力も少し減らすんでしょう？

宝珠山　もう減らしちゃったですね。これはしかし、この時と違いますのは、盧武鉉さんが「出て行ってくれ」と言ったんでしょう？　だから、うまく利用されていましたね。

伊藤　まあ、そうですね。

宝珠山　かねてから米国としては、休戦ラインから近いところは嫌だと思っていたわけですから、これはどっちに転ぶかですね。

伊藤　韓国の中は、いま大騒ぎなんじゃないかな。

宝珠山　それでもイラクに何千人か派遣するという形で、取り引きというか取り繕おうとしていますね、米韓関係を。

伊藤　危ない綱渡りをしていますね。

宝珠山　ええ。だから、あれも大変ですよね。逆に、そういうことに追い込まれちゃったんですね。話が飛びますけど、横田に米空軍がアジアの中心を持ってくるようになりますと、石原さんの提起した問題は逆用されましたね。やっぱり賢いというか、なかなか容易じゃないですね（笑）。横田、座間に……まあ海軍が陸地に上がるわけではないですけど、この首都圏に米国の四軍が所在する。いちばん危ないところにかなりの部分、中枢部が関東に集まりますよ。佐世保じゃなくて。先を見ないでいろいろ要求をしてみても、なかなか「はい、そうですか」とはいかないですね。

伊藤　いまの質問項目の8番目、そういう取り繕いをなさいましたけど、実際にそれが実現した場合には相当大きなショックが起こるわけですね。

宝珠山　そのときには、大綱の修正問題に発展したでしょうね。

伊藤　やっぱりそうですかね。

宝珠山　はい。

伊藤　これはだけど、実際に昔、朝鮮戦争が始まるときに、アメリカは防衛ラインの外に置いたわけですね。

宝珠山　アチソンさんね。

伊藤　それで、朝鮮戦争が起こったわけですね。このときも、危ないといえば危ないですね。

宝珠山　だから、そのことを持ち出しまして、「誤解を与える行動をしないように」ということを、坂田さんも含めてずいぶん言ったはずです。

伊藤　日本の側から北朝鮮に、誤ったシグナルを送っちゃうと。

宝珠山　北朝鮮のみならず、中国も含めてですけれども、「その時期ではないだろう」ということを、ずいぶん申し上げました。

伊藤　もちろん、アメリカの中でもそういう意見は強くあったわ

けですね。

宝珠山　それを日本だけで言うのではなくて、在日米軍などとの意見交換があったと思います。在日米軍は共和党系でございましたので、カーターさんとはちょっと意見を異にする点がございます。そこはうまく調整しながら日本としての意見を外交ルートを通じて流すというか。

伊藤　この時は、外務省もかなりやったでしょうね。

宝珠山　それは、同じだと思いますが。

佐道　カーターさんおよびカーターさんの周辺以外は、みんな反対ですよね。どう考えたって。

伊藤　何で、こんなことを。

宝珠山　これは選挙の時の人気取りでやっている面があるんでしょうね。その点は、いまのケリーさんのほうが賢いというか、実現しないことについては約束をしないで、おそらくイラク派遣は続けるでしょうから。

伊藤　そうですね。撤退するなんてことは言ってないですね。

宝珠山　だからそのあたり、やっぱりカーターさんというのは、当時のご認識はどうだったかは別にしまして、それが選挙の票に有利だという読みがあったんでしょうね。

伊藤　そうかもしれませんね。

■「大綱」決定後の主要テーマ

宝珠山　質問項目の「防衛計画の大綱」決定後は何をしたかということですが、これは先ほどのF-15とかPXLの選定作業というのがかなり大きくございます。あとは、先ほど申し上げたような内容充実というのが……。

伊藤　それだって、ずいぶん……。

宝珠山　それは以前にも申しあげたので。その中で触れてないものとしてF-15、P-3Cの選定作業というのにかなり関わらされます。

佐道　もう四時半になりましたので、P-3Cの問題から次回ということに。そこから、また改めて質問をつくらせていただきます。

宝珠山　そのあたりは大したことないと思いますけれども、それが主要な問題ですね。

伊藤　分かりました。しかし、答弁資料なんていうものがちゃんとあるものですね。

宝珠山　これは、たまたま何かの中に入っていました。いずれ差し上げてもいいんですけれども。

伊藤　くださいよ。「あら、こんなものがありました」とか（笑）。だいたいこういうのは普通、捨てるんでしょう?

宝珠山　二、三年後には捨てると思います。しかし、つくった人間としては、自分が手掛けたものは一応ポンと入れておく……。

伊藤　持っておきたいですよね。

宝珠山　そういうのが残っていたということです。

伊藤　いってみれば、自分の作品ですからね。

宝珠山　そうなんです。自分だけの作品ではありませんけれども、いろいろの思い出があります。防衛協力委員会も、この中に入っていますけれども。

伊藤　それでは、次回は八月二十五日（水）の二時からということで、よろしくお願いいたします。

（終了）

平成16年度　文部科学省研究費補助金〔特別推進研究（COE）〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2005年3月25日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト
〒162-8677　東京都新宿区若松町2－2
Tel：03（3341）0458　　Fax：03（3341）0446